秋田県文化財調査報告書第186集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ

（補遺）

——上ノ山（うえのやま）Ⅱ遺跡——

1989・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ

（補遺）

——上ノ山（うえのやま）Ⅱ遺跡——

1989・3

秋田県教育委員会

SI171　大型住居跡

序

東北横断自動車道秋田線は、高速交通体系の根幹をなすもので、秋田県発展の礎となるものです。建設工事はすでに昭和61年度から着工されており、平成３年度に予定されている完成が待たれています。

昭和61年度には協和インターチェンジ予定地内に位置する上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡・館野遺跡の発掘調査を実施し、その調査成果を東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱとして昭和62年度に報告いたしました。しかし、残念ながらこの報告書に上ノ山Ⅱ遺跡の総ての遺構・遺物を網羅するまでには至りませんでした。

そこで本年度は未報告分を本報告書に掲載し、上ノ山Ⅱ遺跡の調査成果報告を完結いたしました。この調査成果によって、上ノ山Ⅱ遺跡は秋田県を代表する縄文時代前期の集落遺跡として、県内はもとより県外の多方面の研究に寄与するところ大なるものと思います。

最後に本書を刊行するにあたりご指導・ご協力くださいました、専門指導員、日本道路公団、協和町、西仙北町ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成元年３月25日

秋田県教育委員会
教育長　斎藤　長

例　　言

1　本書は、東北横断自動車道秋田線の建設工事に係る既刊の上ノ山Ⅱ遺跡の報告書を補遺するものである。

2　本書の執筆は文化財主事山崎文幸が担当した。

3　第５章自然科学的分析の「残存脂肪の分析」は㈱北海道測量図工社に分析を委託した。

4　土色の記載は、農林省水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。

5　調査ならびに本書を刊行するにあたり、専門指導員をはじめ次の諸氏から指導と助言を賜った。記して謝意を表します。

加藤邦雄・小林達雄・瀬川裕市郎・長山幹丸・野尻　侃　　（敬称略、五十音順）

凡　　例

1　遺構図面は竪穴住居跡・溝状遺構１／80、土坑・その他の遺構は１／40で収載し、それぞれにスケールを付した。また遺物実測図は主として土器１／４、土器拓影図１／2.5、石器は器種に応じて１／２～１／3で収載し、それぞれにスケールを付した。報告書中の遺物番号は一連番号とし、写真図版には挿図と対応する番号を付した。

2　遺構番号は、昭和61年度調査時の空き番号である044～099、245～262を使用し、検出順に若い番号から付した。また085・086は欠番である。

ＳＤ……溝状遺構	ＳＩ……竪穴住居跡	ＳＫ……土　　坑
ＳＫＦ……フラスコ状土坑	ＳＮ……焼土遺構	ＳＱ……配石遺構
ＳＲ……土器埋設遺構	ＲＰ……土　　器	ＲＱ……石　　器

4　遺構・遺物挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。

……遺構（地山）　……遺構（焼土）　……遺構（炭化物）

……遺物（磨り）　……遺物（擦り）　……遺物（敲き）

……遺物（擦り切り）

目　　次

例　言 …… ii
凡　例 …… ii
目　次 …… iii

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至るまで …… 1
　第２節　調査の組織と構成 …… 2
第２章　遺跡の立地と環境 …… 3
　第１節　遺跡の立地と環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　発掘調査の概要 …… 6
　第１節　遺跡の概観 …… 6
　第２節　調査の経過 …… 8
第４章　調査の記録 …… 10
　第１節　検出遺構 …… 10
　　１．竪穴住居跡 …… 10
　　２．土坑・その他の遺構 …… 24
　第２節　遺構内出土遺物 …… 55
　　１．遺構内出土土器 …… 55
　　２．遺構内出土石器 …… 58
　第３節　遺構外出土遺物 …… 62
　　１．遺構外出土土器 …… 86
　　２．遺構外出土石器 …… 88
　　３．ドングリ圧痕土器 …… 114
第５章　自然科学的分析 …… 120
　第１節　残存脂肪の分析 …… 120
第６章　まとめ …… 126

図　版 …… 133

付　図

図　版　目　次

巻首図版　ＳＩ171大型住居跡 ……

図版１　上・下、調査前の状況…… 133

図版２　上・ＳＩ044完掘状況、下・ＳＩ044遺物出土状況…… 134

図版３　上・ＳＩ064完掘状況、下・ＳＩ084完掘状況…… 135

図版４　上・ＳＩ090・214完掘状況、下・ＳＩ099・262完掘状況…… 136

図版５　上・ＳＩ171・255プラン確認状況、下・ＳＩ171・255完掘状況…… 137

図版６　上・ＳＩ171・255完掘状況、下・ＳＩ171完掘状況 …… 138

図版７　上・下、ＳＩ171フラスコ状土坑との位置関係 …… 139

図版８　上・ＳＩ171玦状耳飾出土状況、
下・ＳＩ171プラン確認面遺物出土状況 …… 140

図版９　上・ＳＩ200完掘状況、下・ＳＩ239完掘状況…… 141

図版10　上・ＳＫ045完掘状況、下・ＳＫ049・050・ＳＫＦ261完掘状況…… 142

図版11　上・ＳＫ051完掘状況、下・ＳＫ052完掘状況…… 143

図版12　上・ＳＫ061完掘状況、下・ＳＫ097・257完掘状況 …… 144

図版13　上・ＳＫ098・248・249・256完掘状況、下・ＳＫ258完掘状況 …… 145

図版14　上・ＳＫＦ047完掘状況、下・ＳＫＦ047石錘一括出土状況…… 146

図版15　上・ＳＫＦ048完掘状況、下・ＳＫＦ057調査状況…… 147

図版16　上・ＳＫＦ059完掘状況、下・ＳＫＦ060調査状況…… 148

図版17　上・ＳＫＦ065・082完掘状況、下・ＳＫＦ065調査状況 …… 149

図版18　上・ＳＫＦ082完掘状況、下・ＳＫＦ060・065・071完掘状況…… 150

図版19　上・ＳＫＦ060・069～071完掘状況、
下・ＳＫＦ070底面ピット完掘状況 …… 151

図版20　上・ＳＫＦ060・071完掘状況、下・ＳＫＦ071完掘状況 …… 152

図版21　上・ＳＫＦ076完掘状況、下・ＳＫＦ094完掘状況…… 153

図版22　上・下、ＳＲ252土器埋設遺構 …… 154

図版23　上・下、ＳＱ251集石遺構 …… 155

図版24　上・ＳＱ251集石遺構、下・ＳＤ216完掘状況…… 156

図版25　遺構内出土土器(1)…… 157

図版26　遺構内出土土器(2)…… 158
図版27　遺構内出土土器(3)…… 159
図版28　遺構内出土土器(4)…… 160
図版29　遺構内出土土器(5)…… 161
図版30　遺構内出土土器(6)…… 162
図版31　遺構外出土土器(1)…… 163
図版32　遺構外出土土器(2)…… 164
図版33　遺構外出土土器(3)…… 165
図版34　遺構外出土土器(4)…… 166
図版35　遺構外出土土器(5)…… 167
図版36　遺構内出土石器(1)…… 168
図版37　遺構内出土石器(2)…… 169
図版38　遺構内出土石器(3)…… 170
図版39　遺構内出土石器(4)…… 171
図版40　遺構内出土石器(5)…… 172
図版41　遺構内出土石器(6)…… 173
図版42　遺構内出土石器(7)…… 174
図版43　遺構内出土石器(8)…… 175
図版44　遺構外出土石器(1)…… 176
図版45　遺構外出土石器(2)…… 177
図版46　遺構外出土石器(3)…… 178
図版47　遺構外出土石器(4)…… 179
図版48　遺構外出土石器(5)…… 180
図版49　遺構外出土石器(6)…… 181
図版50　遺構外出土石器(7)…… 182
図版51　遺構外出土石器(8)…… 183
図版52　遺構外出土石器(9)…… 184
図版53　上・玦状耳飾、下・燕尾形石製品…… 185
図版54　ドングリ圧痕土器(1)…… 186
図版55　ドングリ圧痕土器(2)…… 187
図版56　ドングリ圧痕土器(3)…… 188

図版57　ドングリ圧痕土器(4)…… 189
図版58　ドングリ圧痕土器(5)…… 190
図版59　ドングリ圧痕土器(6)…… 191
図版60　炭化遺物…… 192

挿　図　目　次

第１図　上ノ山Ⅱ遺跡の立地…… 3
第２図　周辺の遺跡…… 4
第３図　遺跡の基本土層…… 6
第４図　遺跡周辺の地形と調査区…… 7
第５図　遺構配置図…… 9
第６図　ＳＩ044・054・064竪穴住居跡 …… 11
第７図　ＳＩ084大型住居跡 …… 12
第８図　ＳＩ090竪穴住居跡・ＳＩ214大型住居跡……13・14
第９図　ＳＩ099大型住居跡・ＳＩ262竪穴住居跡…… 15
第10図　ＳＩ171・255大型住居跡……17・18
第11図　ＳＩ200大型住居跡 ……19・20
第12図　ＳＩ239大型住居跡 …… 22
第13図　ＳＫ045・051～053・055・056・058・061土坑 …… 25
第14図　ＳＫ049・050・063・080・095土坑、ＳＫＦ261フラスコ状土坑……27・28
第15図　ＳＫ062・067・072・073・075・077～079・081・088土坑 ……31・32
第16図　ＳＫ089・091・092・097・098・
103・248・249・256・257・260土坑……35・36
第17図　ＳＫ245～247・250・253・254・258・259土坑 ……39・40
第18図　ＳＫＦ046～048・065・082フラスコ状土坑…… 42
第19図　ＳＫＦ057・059・060・066・069～071・261フラスコ状土坑 ……45・46
第20図　ＳＫＦ074・076・083・093・
094・096フラスコ状土坑、ＳＫ087土坑 ……49・50
第21図　ＳＲ252土器埋設遺構 …… 52
第22図　ＳＮ068焼土遺構、ＳＱ251集石遺構…… 52

第23図　ＳＤ216溝状遺構 ……53・54
第24図　遺構内出土土器(1)…… 63
第25図　遺構内出土土器(2)…… 64
第26図　遺構内出土土器(3)…… 65
第27図　遺構内出土土器(4)…… 66
第28図　遺構内出土土器(5)…… 67
第29図　遺構内出土土器(6)…… 68
第30図　遺構内出土土器(7)…… 69
第31図　遺構内出土石器(1)…… 70
第32図　遺構内出土石器(2)…… 71
第33図　遺構内出土石器(3)…… 72
第34図　遺構内出土石器(4)…… 73
第35図　遺構内出土石器(5)…… 74
第36図　遺構内出土石器(6)…… 75
第37図　遺構内出土石器(7)…… 76
第38図　遺構内出土石器(8)…… 77
第39図　遺構内出土石器(9)…… 78
第40図　遺構内出土石器(10)…… 79
第41図　遺構内出土石器(11)…… 80
第42図　遺構内出土石器(12)…… 81
第43図　遺構内出土石器(13)…… 82
第44図　遺構内出土石器(14)…… 83
第45図　遺構内出土石器(15)…… 84
第46図　遺構内出土石器(16)…… 84
第47図　遺構内出土石器(17)…… 85
第48図　遺構外出土土器(1)…… 94
第49図　遺構外出土土器(2)…… 95
第50図　遺構外出土土器(3)…… 96
第51図　遺構外出土土器(4)…… 97
第52図　遺構外出土土器(5)…… 98
第53図　遺構外出土土器(6)…… 99

第54図　遺構外出土土器(7)…… 100
第55図　遺構外出土石器(1)…… 101
第56図　遺構外出土石器(2)…… 102
第57図　遺構外出土石器(3)…… 103
第58図　遺構外出土石器(4)…… 104
第59図　遺構外出土石器(5)…… 105
第60図　遺構外出土石器(6)…… 106
第61図　遺構外出土石器(7)…… 107
第62図　遺構外出土石器(8)…… 108
第63図　遺構外出土石器(9)…… 109
第64図　遺構外出土石器(10)…… 110
第65図　遺構外出土石器(11)…… 111
第66図　遺構外出土石器(12)…… 112
第67図　遺構外出土石器(13)…… 113
第68図　ドングリ圧痕土器片出土地点位置図…… 115
第69図　ドングリ圧痕土器(1)…… 118
第70図　ドングリ圧痕土器(2)…… 119
第71図　自然科学分析(1)…… 124
第72図　自然科学分析(2)…… 125
第73図　住居跡長軸法量分布図・分類図…… 127
第74図　大型住居跡変遷図…… 129

表　目　次

第１表　上ノ山Ⅱ遺跡の周辺遺跡一覧表…… 5
第２表　ドングリ圧痕の認められる部位…… 115
第３表　ドングリの圧痕状態…… 115
第４表　上ノ山Ⅱ遺跡出土の炭化物の残存脂肪抽出量…… 123
第５表　炭化物資料に残存する
脂肪酸組成から算出した動植物油脂の分布割合…… 123

第１章　は　じ　め　に

第１節　調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、秋田市―横手市―岩手県北上市間を結ぶ秋田県期待の高速交通体系の根幹をなす道路である。昭和53年11月に秋田市―横手市間57.4kmについての第８次施行命令が下され、昭和54年11月には日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和55・56年の２ケ年にわたって第１次遺跡分布調査(註１・２)を行い、同昭和58年にこれら遺跡の詳細分布調査を行って、路線内における調査の必要な遺跡(註３)が37であることを(註４)報告した。

その後、路線内におけるこれら37遺跡の保存について、日本道路公団と秋田県教育委員会との間で協議されたが、最終的には記録保存の処置をとることで合意し、昭和60年度から河辺郡河辺町七曲地区より調査が開始された(註５)。翌61年には、仙北郡協和町中淀川地内の上ノ山Ⅰ・上ノ山Ⅱ・館野遺跡の３遺跡と同町峰吉川地区に所在する半仙遺跡の一部調査が実施(註６)され、昭和62年には、半仙遺跡の未調査分と、仙北郡西仙北町の寺沢・上野台遺跡、仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅲ・小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の一部、大曲市と大森町の下田遺跡、横手市の手取清水遺跡の調査が行われた。

本年度は同事業関連として、小出Ⅰ～Ⅳ遺跡、北田山田ケ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡、下田谷地遺跡、太田遺跡、竹原遺跡、上猪岡遺跡、石神遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡(補遺)の調査が実施された。

註１　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第79集　1981（昭和56年）

註２　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集　1982（昭和57年）

註３　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第116集　1984（昭和58年）

註４　37の遺跡のうち、その後の範囲確認調査などで遺跡の範囲が路線内に及んでいないものがあり、実際に調査を必要とする遺跡は、24遺跡である。

註５　秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第150集　1986（昭和61年）

註６　秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第166集　1988（昭和63年）

第2節　調査の組織と構成

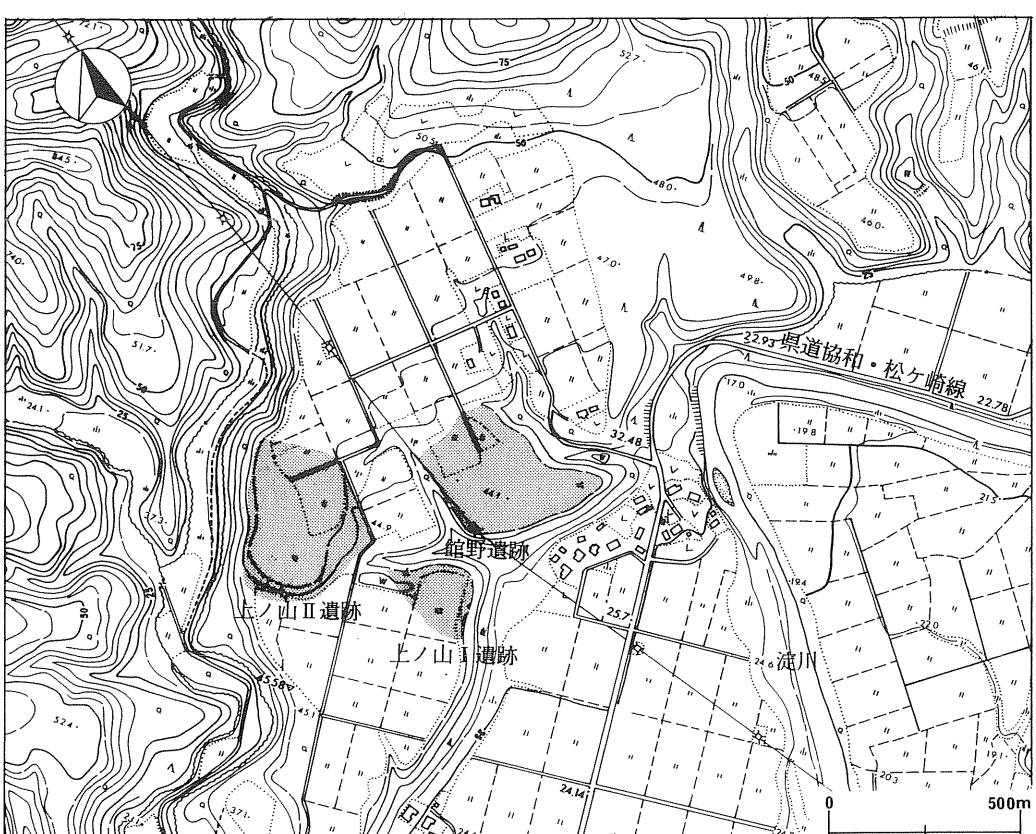
遺　跡　名	上ノ山Ⅱ遺跡
遺跡番号	No,30
遺跡所在地	秋田県仙北郡協和町中淀川字千着上ノ山2―1・18―1
調査面積	1,250㎡
調査期間	昭和63年5月9日～7月9日
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	山崎文幸（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事） 能登谷宣康（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
専門指導員	戸沢充則（明治大学文学部教授） 吉岡康暢（国立歴史民俗博物館教授） 白石建雄（秋田大学教育学部助教授） 渡辺　誠（名古屋大学文学部助教授） 林　謙作（北海道大学文学部助教授）
総務担当	加藤　進（秋田県埋蔵文化財センター主査） 高橋忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事）
調査協力機関	協和町・西仙北町

第２章　遺跡の立地と環境

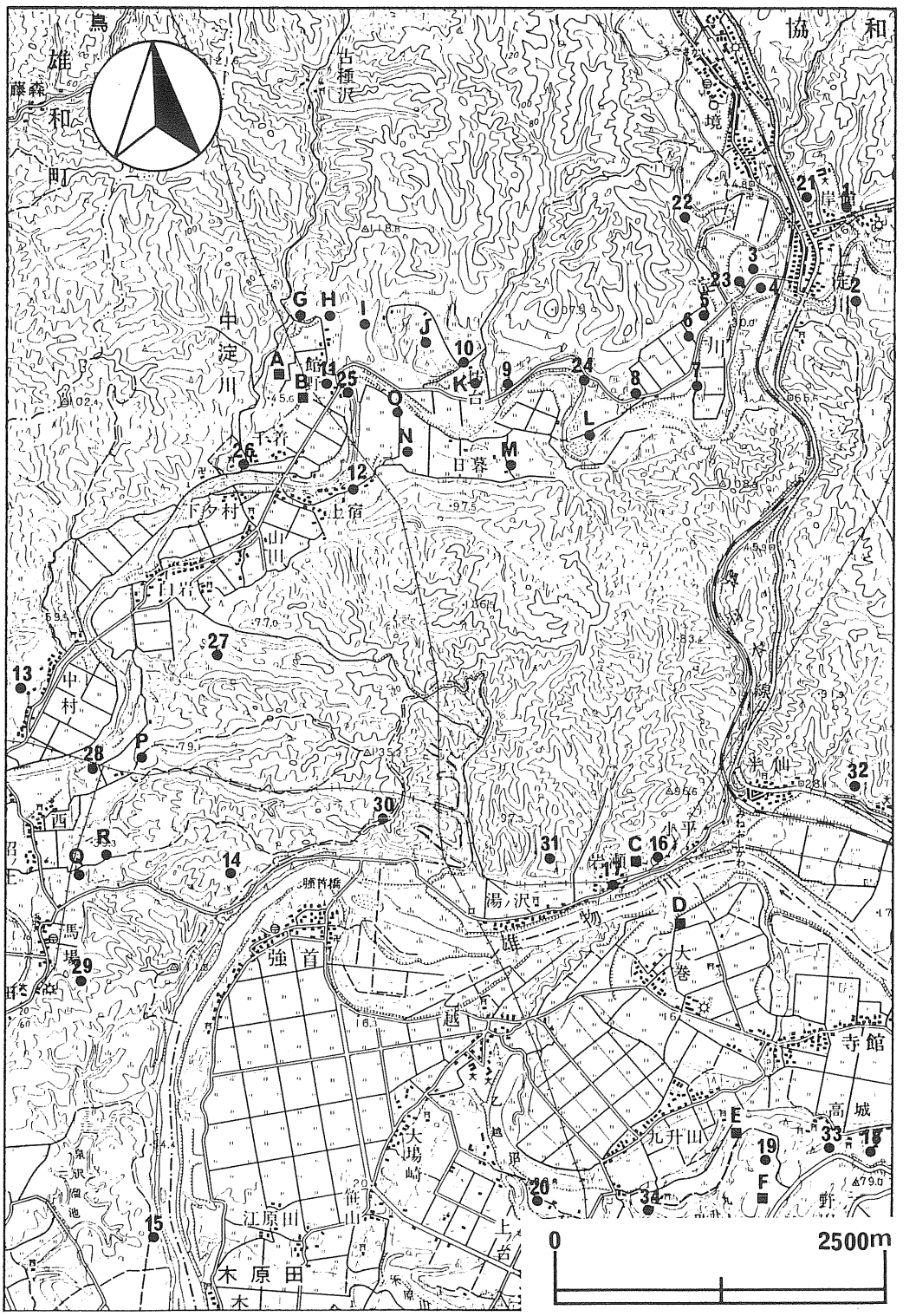
第１節　遺跡の位置と立地

上ノ山Ⅱ遺跡が位置する東北横断自動車道秋田線協和インターチェンジ予定地は、ＪＲ奥羽線羽後境駅から南西４㎞の地点にある。また国道13号からは協和町上淀川地区より主要地方道協和・松ケ崎線に入り、本荘市方向に約５㎞の協和町中淀川地区内にある。

上ノ山Ⅱ遺跡は、淀川によって形成された８段の河岸段丘面の内、中位のⅡ段丘上に立地し、標高約50ｍである。本年度調査区域はインターチェンジのランプ部分の設計変更による拡幅部分で、舌状台地先端部の大半を占める昭和61年度調査区の西～南に接し、弧状にわずかに残された台地の縁辺部にあたる。西側は古種沢川の下刻によって形成された深い谷となっており、南側はゆるい斜面を経て平坦な段丘面となっている。



第１図　上ノ山Ⅱ遺跡の立地


鳥雄
和
藤森
町
古種沢
中淀川
館
下宿
上宿
日暮
下夕村
山田
白岩
中村
西
馬場
強首
越
湯沢
雄物川
大巻
寺館
高城
九升山
大場崎
笹山
上岩
江原田
木原田
泉沢
半仙
平
協和
境
岸
淀川
0
2500m

第２図　周辺の遺跡

第２節　歴史的環境

上ノ山Ⅱ遺跡周辺の遺跡は、第１表に示した通りである。歴史的環境の詳細については秋田県教育委員会文化財報告書第166集『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ　上　』第３章を参照していただきたい。

第１表　上ノ山Ⅱ遺跡の周辺遺跡一覧表

記号・番号	遺跡名	時代・時期	記号・番号	遺跡名	時代・時期
1	岸館	旧石器・縄文中期・中世	27	石神館	中世
2	鷺ノ巣	縄文	28	西台館	中世
3	中島	縄文後期	29	馬場城	中世
4	西町後	縄文中～晩期	30	白岩城	中世
5	和田の台Ａ	縄文中期	31	湯ノ沢城	中世
6	和田の台Ｂ	縄文前～中期・平安	32	馬館	中世
7	川又	縄文前～後期	33	高館	中世
8	和田の台Ｃ	縄文後期	34	称宣館	中世
9	五百刈田	縄文	Ａ	上ノ山Ⅱ	縄文前期
10	坊台	旧石器・縄文晩期	Ｂ	上ノ山Ⅰ	縄文前～晩期
11	館野	縄文	Ｃ	半仙	縄文前期・弥生
12	日暮	縄文晩期	Ｄ	大巻野	縄文
13	中村	縄文	Ｅ	寺沢	縄文・平安
14	小俤	縄文	Ｆ	上野台Ⅱ	縄文
15	太平山	縄文	Ｇ	未命名の遺跡	縄文
16	小平	縄文	Ｈ	未命名の遺跡	縄文
17	岩瀬	縄文後～晩期	Ｉ	未命名の遺跡	（旧石器）・縄文
18	高城	縄文晩期	Ｊ	未命名の遺跡	縄文
19	上野山Ⅰ	旧石器・縄文中～後期	Ｋ	未命名の遺跡	縄文
20	上の台	縄文	Ｌ	未命名の遺跡	縄文
21	岸館城	中世	Ｍ	未命名の遺跡	縄文
22	唐松城	中世	Ｎ	未命名の遺跡	縄文
23	唐松林館	中世	Ｏ	未命名の遺跡	縄文
24	館の沢城	中世	Ｐ	未命名の遺跡	縄文
25	長者森館	中世	Ｑ	未命名の遺跡	縄文
26	上総介館	中世	Ｒ	未命名の遺跡	縄文

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

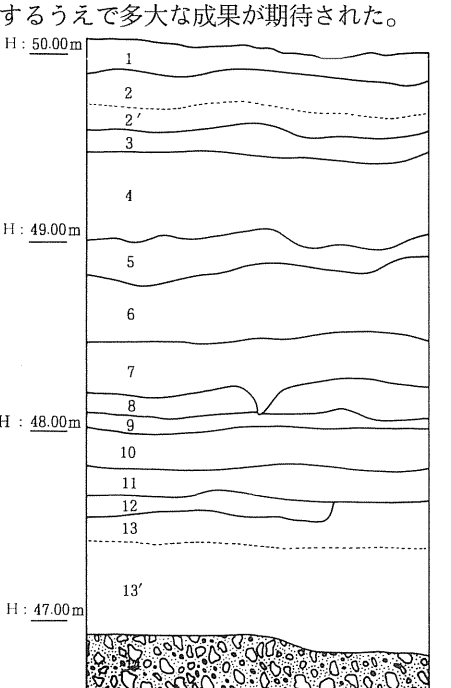
１　遺跡の概観　（第４図）

上ノ山Ⅱ遺跡は前回の調査結果によって、大型住居跡の検出数が他の遺跡と比較して突出して多いこと、大型住居跡の配置も放射状配列を呈するなど特異な要素を持つことが知られている。また出土遺物においても15,000点に及ぶ膨大な量の石器や50点の玦状耳飾り、燕尾形石製品、カツオブシ形石製品、有撮石器などを有し、土器においても円筒系と大木系、両者の様式が融合した土器が出土するなど、県内の他の集落遺跡と明らかに一線を画する集落遺跡としてとらえられている。

本年度の調査は、東北横断自動車道秋田線協和インターチェンジのランプ部分の設計変更による拡幅部分を対象として実施した。調査区は舌状台地先端部の大半を占める昭和61年度調査区の西～南に接し、前回の「西部遺構群」、南側斜面の「捨場Ａ－１」・「捨場Ａ－２」の各延長部にあたる。ＳＩ171・ＳＩ200・ＳＩ214・ＳＤ216など前回の調査で全体を把握できなかった遺構も含まれており、上ノ山Ⅱ遺跡の集落を把握するうえで多大な成果が期待された。

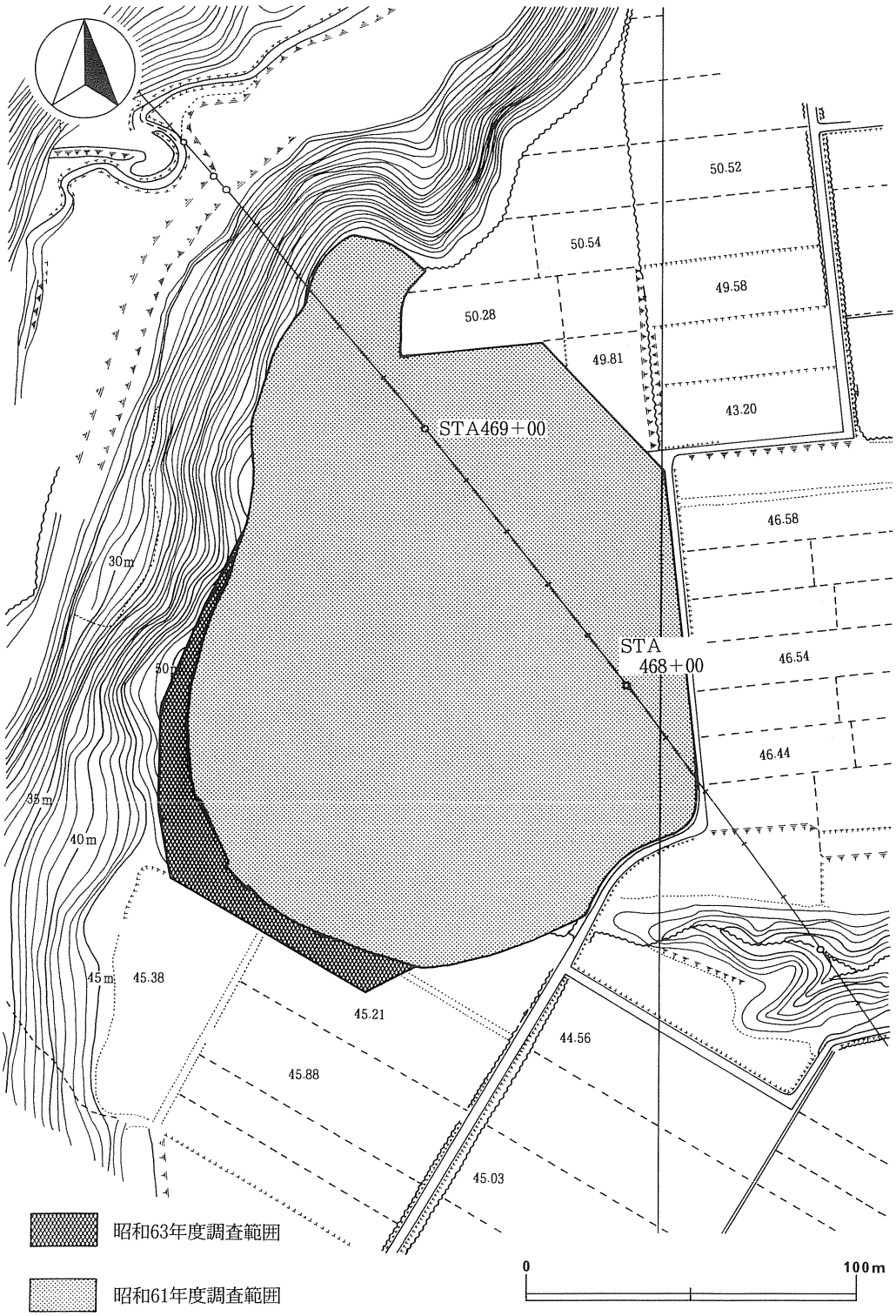
２　遺跡の基本層序　（第３図）

第３図は前回調査区中央部分の土層断面図である。今回の調査区は前回調査区の西～南側に隣接する部分であり、基本層序は同一である。第１～２′層が黒～黒褐色の腐植土で、第３層が漸移層、第４～６層が褐～黄褐色粘質土、第７～13′層が灰白色粘質土と灰白色か灰黄色の砂質土の互層、第14層が段丘砂礫層である。縄文時代の遺物は２～２′層に大半が包含されており、この層中に生活面があったものと考えられる。(註１)



第３図　遺跡の基本土層

註１　地形・地質についての詳細は秋田県埋蔵文化財報告書第166集「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ」上　第２章調査地域の地形と地質を参照していただきたい。



第４図　遺跡周辺の地形と調査区

第２節　調査の経過

調査は、東北横断自動車道秋田線協和インターチェンジ予定地区内の路線計画変更による路線拡幅に伴うものである。

昭和63年５月９日より調査に入り、同日、発掘器材を搬入後、調査区北側より表土剝ぎを開始した。また便宜上、調査区をほぼ３等分して北から北部・西部・南部と呼称することにした。同16日、調査区北部の遺構プラン確認を行い、竪穴住居跡１軒・土坑３基を確認した。18日、調査区北部の表土剝ぎを終了した。調査区西～南部に進むに連れて、遺物出土量が増加してくる。24日、第Ⅱ～Ⅱ′層中にて前回の調査でその一部を確認しているＳＩ171大型住居跡プランを確認した。またＳＩ171大型住居跡の褐色プランを切るＳＩ255大型住居跡の黒色プランを始めとして、他にもＳＩ171プランを切る黒色プランが数ケ所に認められ、ＳＩ171以降の遺構の存在が予想された。ＳＩ171はプラン確認時で約30ｍあり、長軸方向での重複が無ければ上ノ山Ⅱ遺跡最大の大型住居跡である可能性が生じてきた。26日、調査区南部からの出土遺物が多く、前回調査区から捨場がさらに延びていることを確認した。６月１日、前回調査で一部を確認しているＳＩ200・ＳＩ214・ＳＤ216のプランを確認した。３日、ＳＩ171床面より玦状耳飾りの未製品が出土した。８日、ＳＩ214から燕尾形石製品が出土した。10日、調査区南部において竪穴住居跡・土坑など約20遺構を確認した。当初、南部は捨場の延長にあたるため遺構の存在する可能性は極めて低いものと考えていたが、竪穴住居跡・土坑などが検出されたことにより、捨場までと考えていた遺跡の広がりが調査区南方の開墾田まであったことが判明した。13日、ＳＩ171壁際にフラスコ状土坑が集中する傾向を見出だし、これらのフラスコ状土坑をＳＩ171と関連させて調査を進めることにした。22日、ＳＩ171・255の精査を行い、ＳＩ255がＳＩ171より新しいことを再確認した。またＳＩ171大型住居跡壁際にまとまるフラスコ状土坑は、住居の柱穴との位置関係から住居内に取り込まれ、ＳＩ171大型住居跡に伴うものであることが判明した。25日、空梅雨のおかげで調査の方は順調に進み、予定面積のほぼ半分の精査を終了する。30日、大型住居跡の床面精査を残し、土坑・その他の遺構の精査を終了した。７月４～７日、遺跡全景写真撮影を行う。８日、大型住居跡の床面精査および各遺構間の位置関係調査等を終了し、全遺構の精査を終了した。９日、発掘器材等を撤収し、調査を終了した。

第５図　遺構配置図

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構

今回の上ノ山Ⅱ遺跡発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡12軒（大型住居跡７軒含む）・土坑43基・フラスコ状土坑19基・土器埋設遺構１基・集石遺構１基・焼土遺構１基・溝状遺構１条の計78遺構である。これらの遺構は、出土土器が大木４・５式ないし円筒下層ｂ式に比定されるものであることから縄文時代前期に属し、昭和61年度調査時の検出遺構と時期を同じくするものである。これらの遺構の説明にあたっては、大きく竪穴住居跡と竪穴住居跡以外の遺構に分けて行うことにする。以下、竪穴住居跡より順を追って説明する。

１　竪穴住居跡　（第６～12図、図版２～９）

12軒の竪穴住居跡には、住居跡プランを確認しその全容を把握できたものと、住居跡プランは不明確だが、焼土の位置と配列、柱穴配置からその規模と存在を推定したものとがある。また、極めて浅い掘り込みあるいは掘り込みを全く検出できなかった住居跡の場合は、竪穴住居跡とするよりも平地式住居跡とすべきものも含まれているかもしれない。したがって、これらを同一レベルで扱うことに問題がない訳ではないが、現時点では明確な分類基準を持たないため一括して竪穴住居跡として扱うことにした。

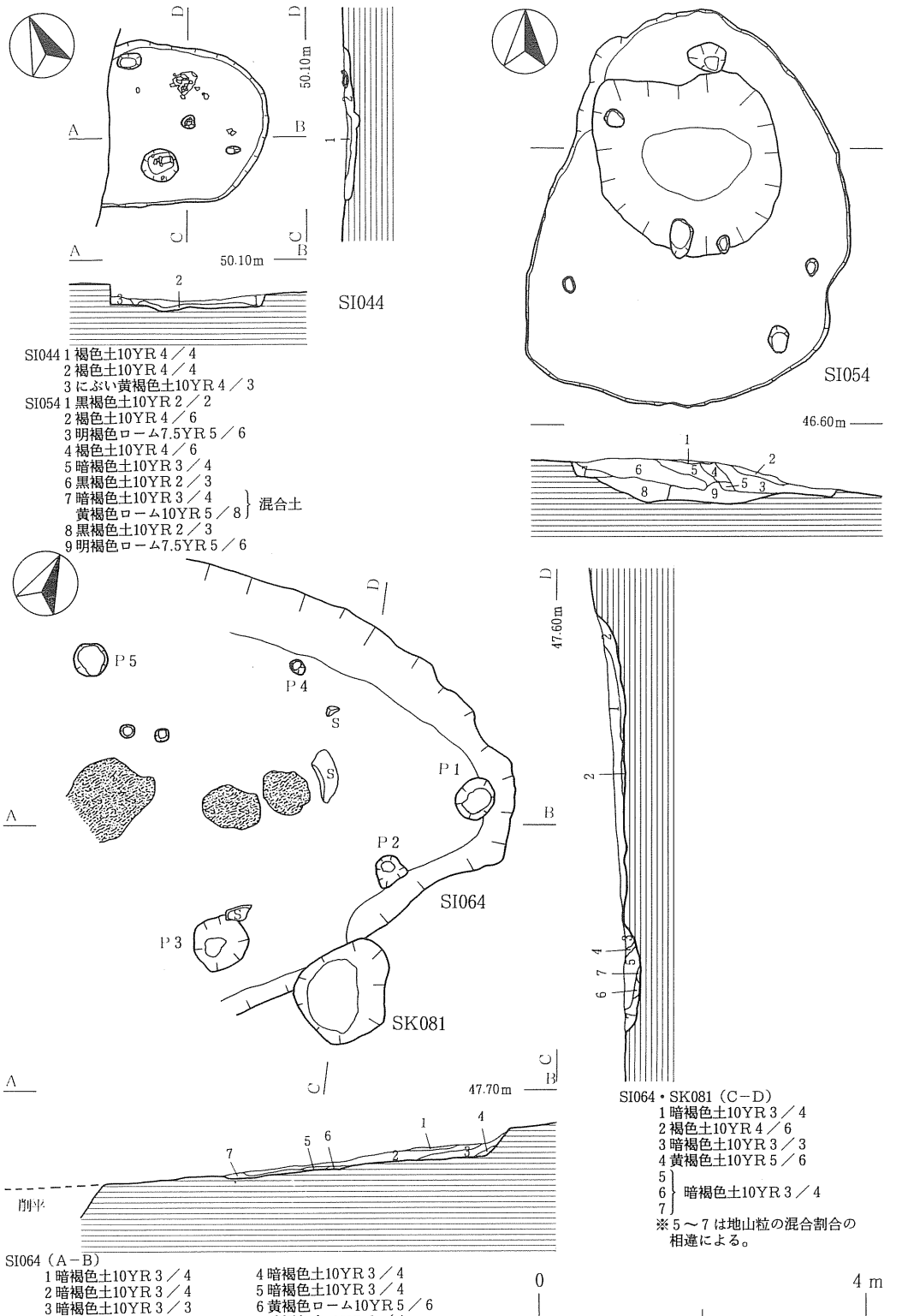
以下、各竪穴住居跡については遺構番号順に順次説明を加える。

ＳＩ044　（第６図、図版２）

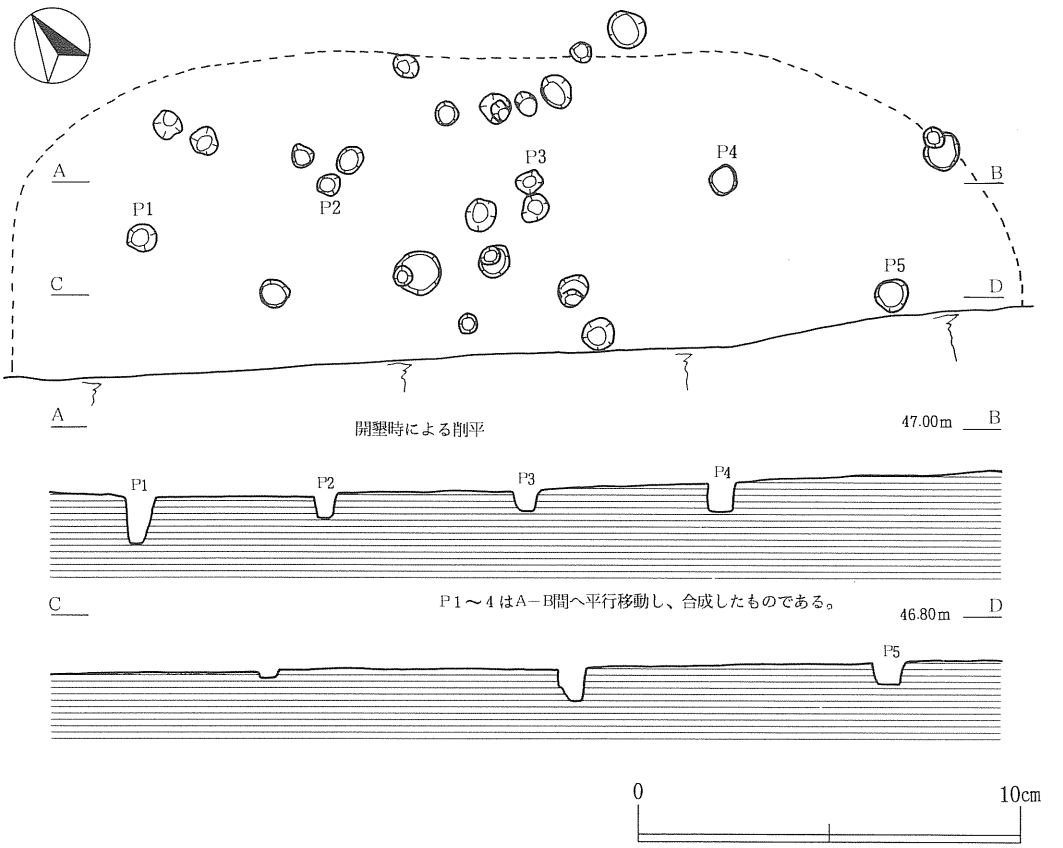
ＮＧ44、ＮＨ44に位置する住居跡である。西側部分は調査区外にあり全容を知り得ないが、平面形はわずかに東西に長い楕円形を呈すると考えられる。規模は、確認できる部分で東西1.95ｍ、南北1.95ｍである。覆土は褐色土を主体とし、炭化物細片をわずかに含んでいる。壁はやや外に傾いており、壁高は10～20㎝である。床面は平坦で、締まりがある。床面の４ケ所にピットを認めたが、住居跡の柱穴と特定するまでにはいたらなかった。炉は検出されなかった。遺物は縄文土器・石器・フレイクが出土している。

ＳＩ054　（第６図）

ＭＭ19・20の南へ下る緩斜面に位置する住居跡である。平面形は楕円形を呈し、長軸方向を北一南にとるものである。規模は、長軸4.9ｍ、短軸3.78ｍである。覆土は大半の層に炭化物



第6図　SI044・054・064竪穴住居跡

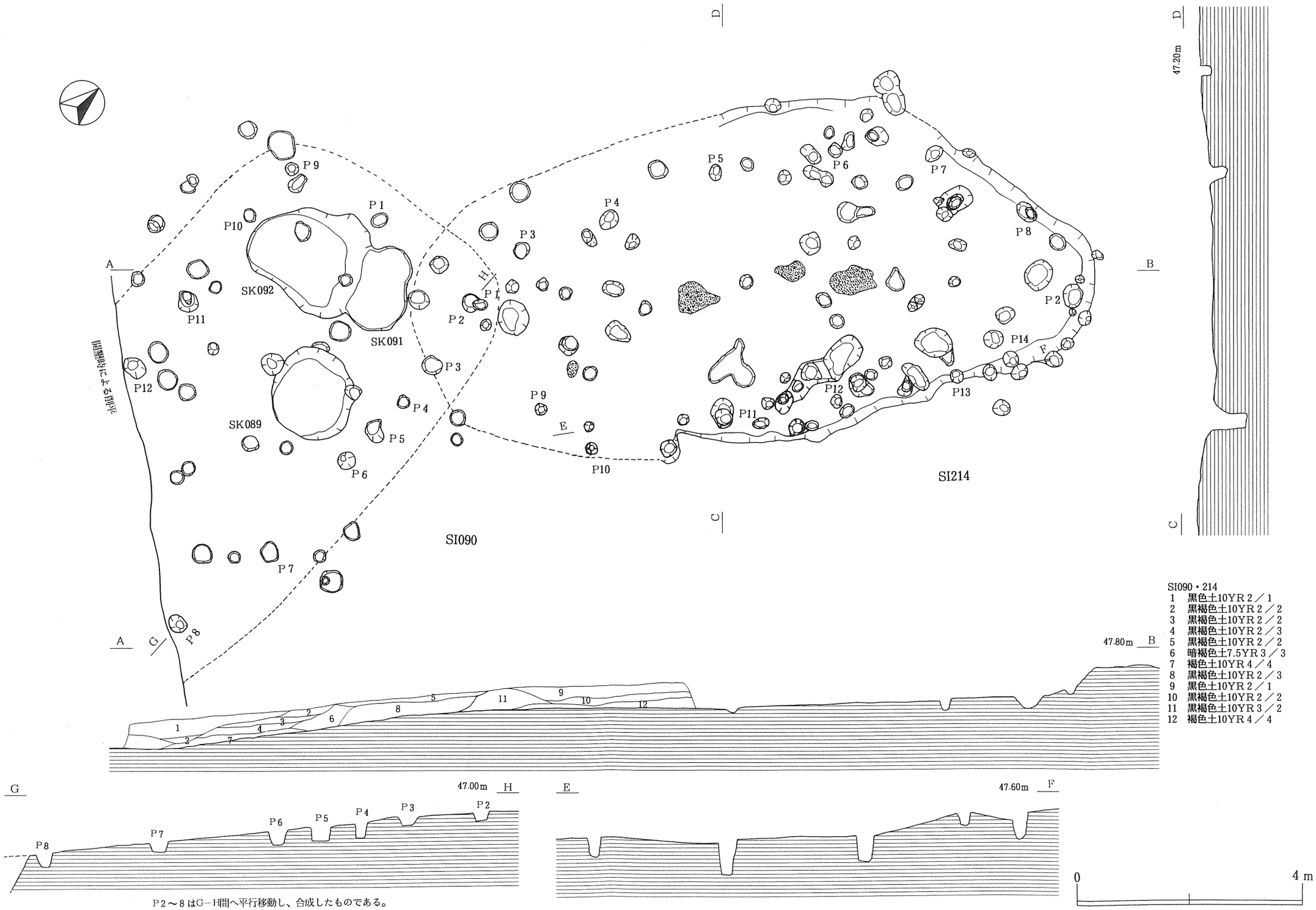


第７図　SI084大型住居跡

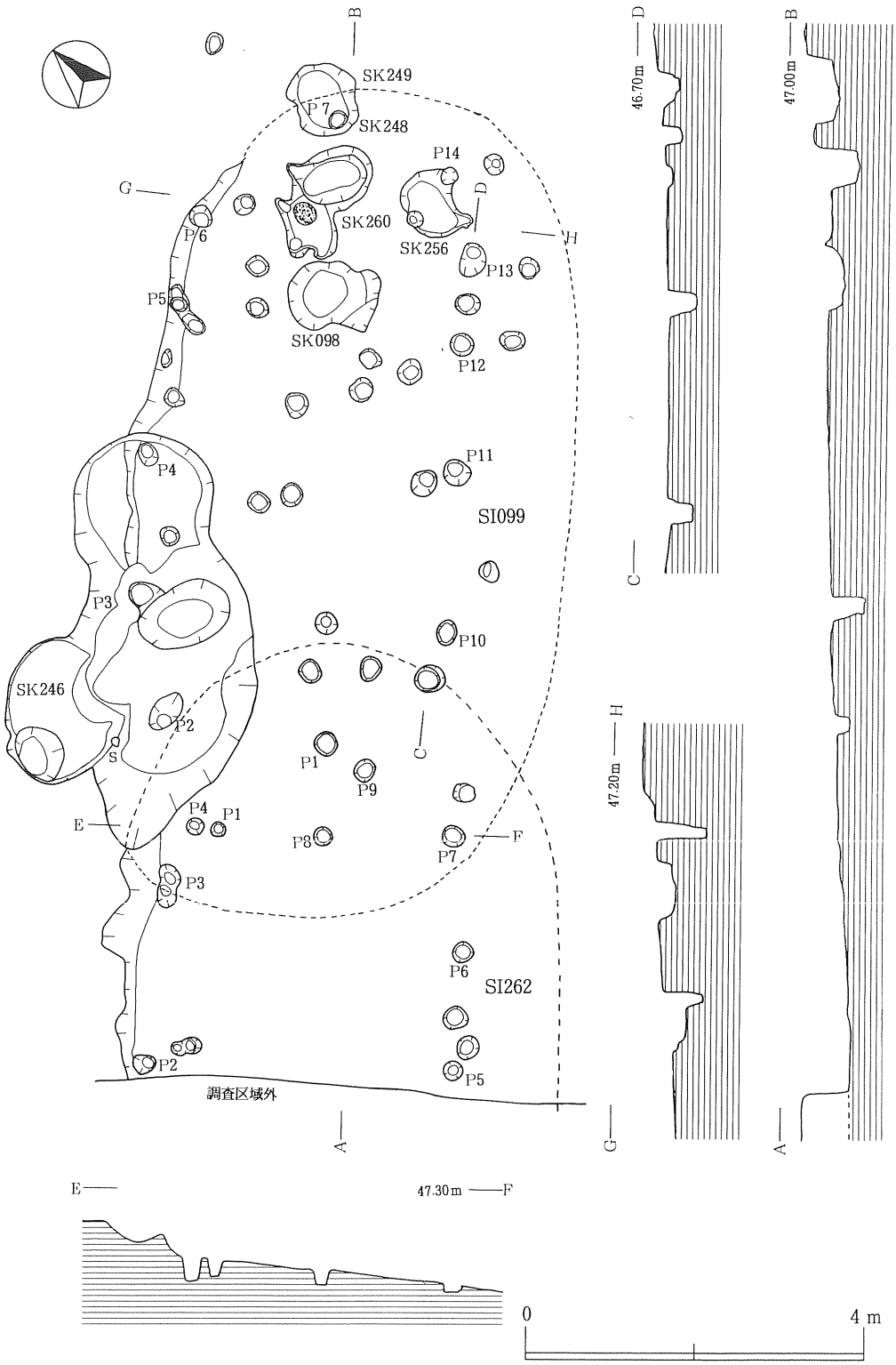
が混入しているものの、砂利を含む地山土が上位層に多量に混入するなど風倒木による攪乱が著しい。壁は高さ10～15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は中央に風倒木による大きな攪乱があり他の部分もその影響を受けているため凹凸があり、北壁際は一段高くなっている。住居内に７個のピットを検出したが、柱穴と特定できるものはない。炉は検出されなかった。遺物は縄文土器・石器・フレイクが多数出土している。

ＳＩ064　（第６図、図版３）

ＭＱ20～22、ＭＲ20～22に位置する竪穴住居跡である。西半部が調査区外になるため全容を知り得ないが、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。規模は確認できる部分で長軸5.49ｍ、短軸5.47ｍである。覆土は暗褐色土を主体とし、炭化物細片をわずかに含んでいる。堆積状態は、壁際から順次堆積した様相を示しており自然堆積と考えられる。壁は比較的ゆるやかに立ち上がり、高さは18～39cmである。床面は平坦を意識したと考えられるが、礫混じりの地山を掘り込んでいるため、随所に凹凸が見られる。柱穴は中軸線上に位置するＰ１、中軸線を



第8図　SI090竪穴住居跡・SI214大型住居跡



第９図　SI099大型住居跡・SI262竪穴住居跡

中心として相対する位置にＰ２・３、Ｐ４・５がある。炉は中軸線上に３ケ所認められる。遺物は多数の縄文土器・石器・フレイクが出土している。

ＳＩ084　（第７図）

ＭＳ21・22、ＭＴ22・23、ＮＡ22・23の南に下る緩斜面に位置する大型住居跡である。南半部を開墾時の削平によって失われておりその全容を知り得ないが、長軸方向を北西―南東にとり、平面形が楕円形を呈するものであったと考えられる。規模は確認できる部分で長軸10.59ｍ、短軸3.1ｍである。覆土は、地山面にて柱穴を確認した時点で住居跡としたため、その状態を明確に把握できないが、おおよそ褐色土を主体としたものであったと思う。壁は検出できなかった。床面は凹凸がないものの南へやや傾斜している。ピットは住居内外に多数認められたが、柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ５で、ほぼ等間隔に配置されている。炉は検出されなかったが、他の住居跡の例を見ると中軸線上に位置するものが大半であることから、ＳＩ084の場合は削平により失われた南半部に炉があった可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＩ090　（第８図、図版４）

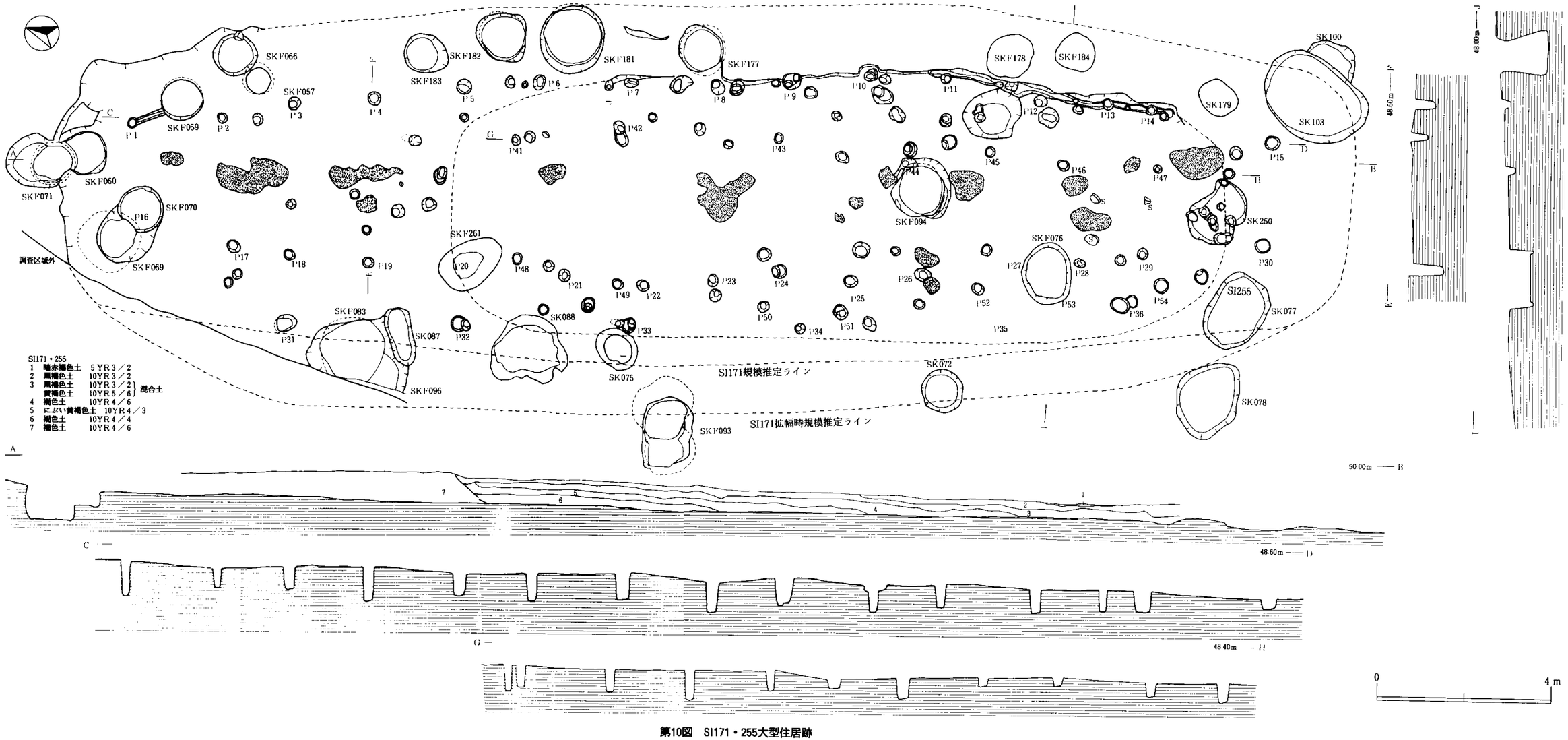
ＮＰ24～26、ＮＥ24～26、ＮＦ25・26の南へ下る緩斜面に位置し、ＳＩ214と重複する竪穴住居跡である。南西部を開墾時の削平で失われているため全容を知り得ないが、長軸方向を北西―南東にとり、平面形が隅丸方形を呈するものであったと考えられる。規模は確認できる部分で長軸7.84ｍ、短軸5.83ｍである。覆土はほぼ水平に堆積し、炭化物細片をわずかに含む黒褐色土を主体としている。壁の立ち上がりは認められず、柱穴位置から全体規模を推定するのみである。床面は凹凸がないものの全体に南へ傾斜している。ピットは住居跡の内外に多数認められるが、柱穴と認められるのは中軸線上に位置するＰ１、中軸線を中心として相対する位置にあるＰ２～８、Ｐ９～12である。炉は検出されなかった。遺物は石器のみ出土している。

ＳＩ099　（第９図、図版４）

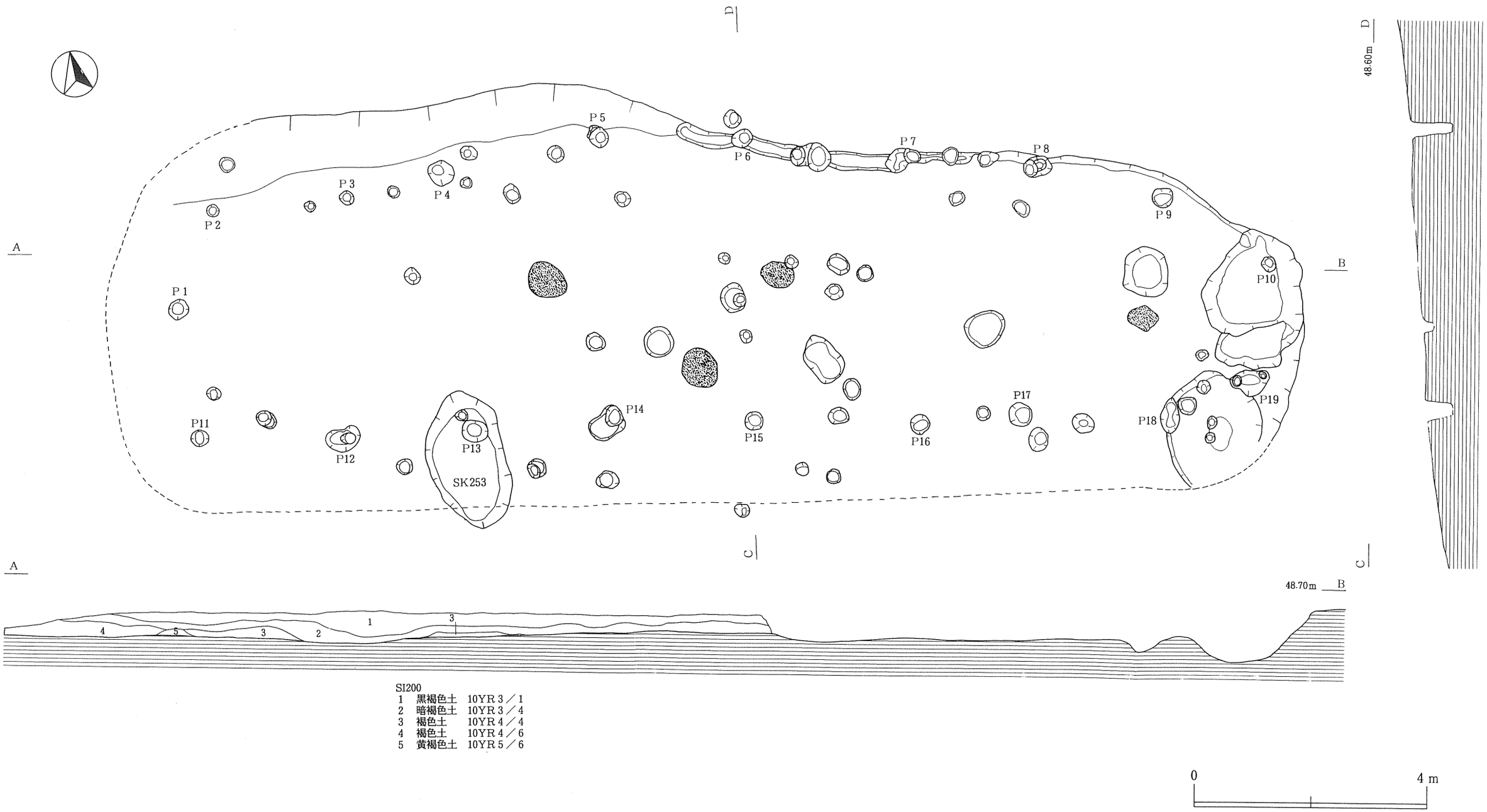
ＮＦ29・30、ＮＧ28～30、ＮＨ28～30、ＮＩ29に位置し、ＳＩ262と重複する大型住居跡である。ＳＩ262との新旧関係については両住居跡の覆土が似通っているうえ礫を多量に含むことから特定できなかった。住居跡は長軸方向を東―西にとり、平面形が楕円形を呈するものである。規模は推定で長軸10.03ｍ、短軸5.29ｍである。覆土は礫混じりの褐色土を主体としている。床は南に下る緩斜面を削って平坦面を造りだしているため、北壁は明瞭に残っているが、南壁は柱穴位置から推定するのみである。北壁東部での壁の高さは21～23㎝である。床面は平坦で、柱穴は中軸線を中心として相対する位置にＰ１～７とＰ８～14がある。炉は地床炉が中軸線上に１ケ所検出された。遺物は縄文土器・石器・フレイクが少量出土している。

ＳＩ171　（第10図、図版５～８）

ＮＧ33～40、ＮＨ33～40、ＮＩ33～40の台地西縁辺部に位置する大型住居跡である。重複す

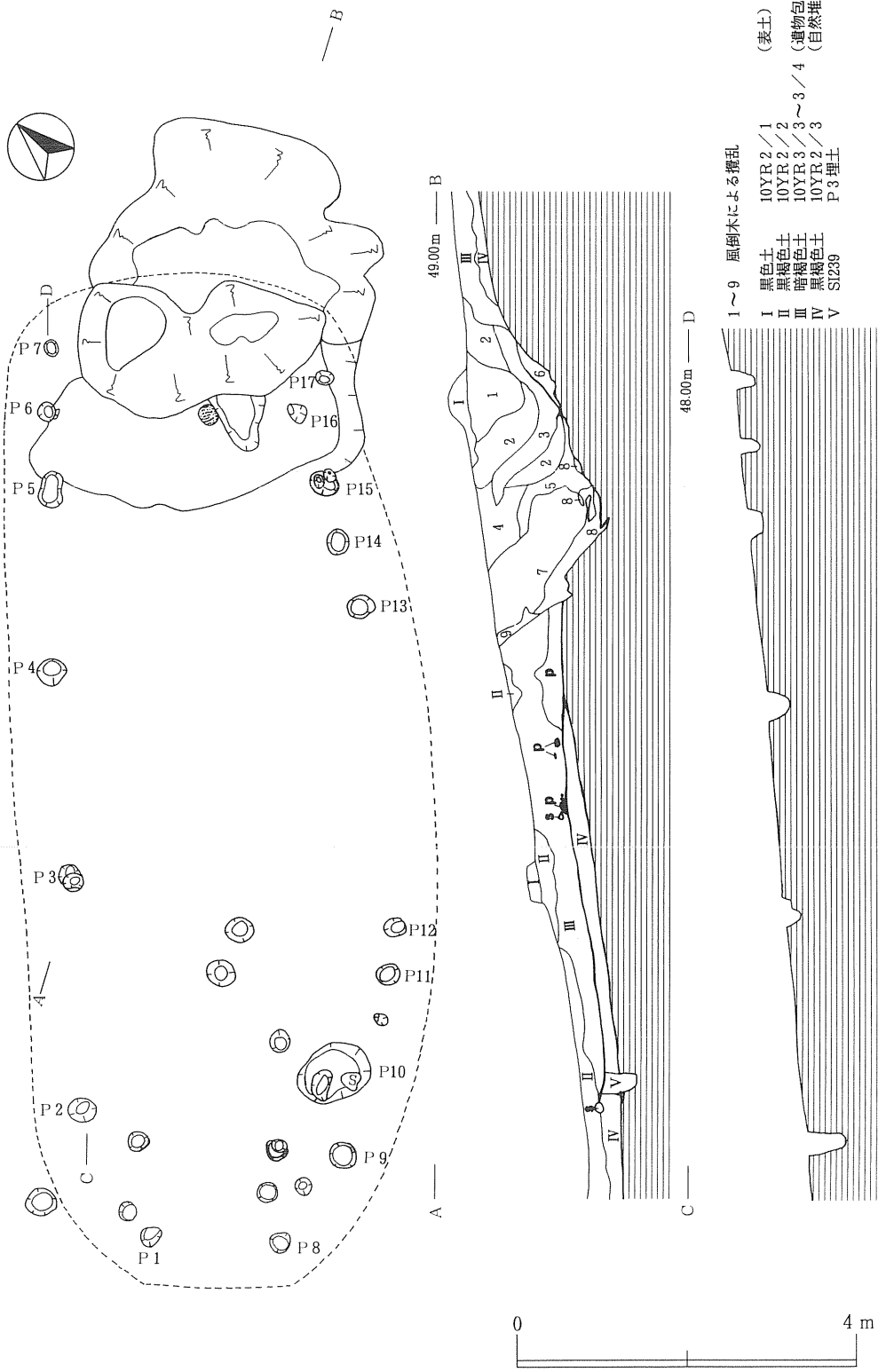


第10図 SI171・255大型住居跡



第11図 SI200大型住居跡

る遺構との新旧関係は、プラン確認時の状況においてＳＩ171プランを明確に切る黒色土プランであったＳＩ255・ＳＫ049・050・052・053がＳＩ171より新しく、その後に検出した遺構であるＳＫＦ057・059・060・065・066・069・070・071・076・081・094・177・178・181・182・183・184・261、ＳＫ075・250がＳＩ171と同時期か古いものである。住居跡は長軸方向をほぼ南―北にとり、平面形は楕円形を呈するものである。規模は柱穴位置で長軸26.4ｍ、短軸4.7ｍである。全体の規模は北壁を唯一の拠り所として推定せざるを得ないが、北端の柱穴から壁までの距離が1.8ｍであることから柱穴から1.8ｍの位置を壁と仮定すれば、ＳＩ171の全体規模は長軸30.2ｍ、短軸8.3ｍとなり、想定床面積は219㎡となる。覆土は、地山土がわずかに汚れた程度の土色でしまりのよい土のため地山との判別が難行し、最終的には締まりのある床を手掛かりとして全体を確認した。壁は北壁のほんの一部を確認できただけで、確認された壁は明確な立ち上がりを示し、壁高は43㎝であった。Ｐ１―２間、Ｐ７～14にかけて壁溝と思われる溝があり、住居跡東側にベット状の高まりが見られる。床面は平坦で、堅く締まっている。柱穴は中軸線に相対する位置にＰ１～15とＰ16～30がある。Ｐ16・20・27は他の遺構との切り合いにより確認できないが、便宜上柱穴番号を付した。これらの柱穴は焼土との位置関係からＰ１・３・５・７・９・11・12・14・15・16・18・20・22・24・26・27・29・30が主柱穴としてほぼ等間隔に配置され、残りのＰ２・４・６・８・10・13・17・19・21・23・25・28は主柱穴間に配置されていたのであろう。この柱配置からこの大型住居跡は15対30個の柱穴によって構築されていたものと復元できよう。またＳＩ171の主柱穴であるＰ３―８、Ｐ５―20、Ｐ７―22、Ｐ９―24、Ｐ14―29柱筋の西延長線上にＰ31～36がある。Ｐ１～30との新旧関係は不明だが、位置関係からＰ１～30柱との関連性が強いと考えられる。とすれば、これらの柱穴はＳＩ171の住居規模の拡張ないし縮小やＰ１～30にＰ31～36を加えて住居の一部のみ改築し規模の拡張を計った際の柱穴とも考えられる。現状では、炉の位置が変わっていないことから、従来の住居の中軸線を移動することなく住居規模の拡張を計ったと考える後者の立場をとって、ＳＩ171は拡幅されたものと考えたい。この場合の住居規模は長軸30.2ｍ、短軸9.4ｍ、床面積247㎡と想定される。炉は、中軸線上の８ケ所に地床炉が等間隔に配されている。またＳＩ171周囲に位置するフラスコ状土坑は、ＳＩ171住居規模推定ラインの内側に取り込まれることや覆土がＳＩ171と共通すること、ＳＩ171床面でプラン確認がなされ貼り床の痕跡などが認められないことなどからＳＩ171と同時期と見なし、ＳＩ171付属施設として位置付けたい。これらのフラスコ状土坑を他の遺跡でよく見られる台地縁辺部に集中するフラスコ状土坑群としてＳＩ171と時期を異にする遺構群としてとらえるには遺構の位置関係、検出状況などあまりにもＳＩ171との結び付きが強く、加えて６ケ所でほぼ同一位置にてフラスコ状土坑が重複しており、位置的制約があったことを窺わせる。遺物は縄文土器・石器・フレイクが大量に出土している。



第12図　SI239大型住居跡

ＳＩ200　（第11図、図版９）

ＮＤ30～32、ＮＥ30～32、ＮＦ30～32、ＮＧ30～32、ＮＨ31・32、ＮＩ31・32に位置する大型住居跡である。平面形は楕円形を呈するもので、長軸方向を東―西にとるものである。規模は推定で長軸20.8ｍ、短軸6.28ｍである。覆土はほぼ水平に堆積する黒褐色土～暗褐色土が主体を占め、炭化物細片をわずかに含んでいる。壁は北壁と東壁の一部を認めるのみで、高さは12～32㎝でゆるやかに立ち上がる。床面はほぼ平坦で締まりがある。柱穴は中軸線上に位置するＰ１、中軸線を中心として相対する位置にあるＰ２～10、Ｐ11～19がある。炉は地床炉が中軸線上に４ケ所認められる。遺物は縄文土器・石器・フレイクが多数出土している。

ＳＩ214　（第８図、図版４）

ＮＢ27・28、ＮＣ26～29、ＮＤ26～28、ＭＥ26・27の南に下る緩斜面に位置し、ＳＩ090と重複する大型住居跡である。ＳＩ090との新旧関係は土層の堆積状態の観察からＳＩ214の覆土をＳＩ090覆土が切っており、ＳＩ090のほうが新しいものである。住居跡は長軸方向を北東―南西にとり、平面形が楕円形を呈するものである。規模は推定で長軸12.27ｍ、短軸5.97ｍである。覆土はほぼ水平に堆積し、上位層から黒色土・黒褐色土・褐色土である。全ての層に炭化物を若干含み、９・11・12層には焼土を若干含んでいる。壁は北半部が確認できるのみで南半部は柱穴位置からその規模を推定するにすぎない。壁の高さは５～48㎝で、やや外傾して立ち上がる。床面は凹凸がないものの全体に南へ傾斜している。柱穴は中軸線上に位置するＰ１―２、と中軸線を中心として相対する位置にあるＰ３～８、Ｐ９～14がある。炉は地床炉が中軸線上に３ケ所検出された。遺物は縄文土器・石器・フレイクが多数出土している。

ＳＩ239　（第12図、図版９）

ＭＲ24～26、ＭＳ23～26、ＭＴ23～25、ＮＡ23・24の南に下る緩斜面に位置する大型住居跡である。住居跡は長軸方向を北東―南西にとり、平面形が楕円形を呈するものである。規模は推定で長軸12.12ｍ、短軸4.96ｍである。(註１) 壁は東壁の一部を確認し、高さは33㎝である。床面は北部に締まりのよい平坦な部分があるものの、他は緩やかに南へ下っている。北部の平坦で締まりのよい部分は地山で、他は自然堆積した黒色土上であることが床面状態の相違の起因であろうか。柱穴は中軸線を中心として相対する位置にＰ１～７とＰ８～17がある。Ｐ２とＰ10には根固め石と思われる縦長の石が入っている。炉は地床炉を中軸線上に１ケ所認めたのみである。床面を捨て場の暗褐色土と土器が覆っており、住居跡に属する遺物は出土しなかった。

ＳＩ255　（第10図、図版５・６・８）

ＮＧ33～39、ＮＨ33～39、ＮＩ33～39の台地西縁辺部に位置する大型住居跡である。重複する遺構との新旧関係は、プラン確認時の状況においてＳＩ255プランはＳＩ171プランを明確に切る黒色土プランで、ＳＫ049・050・052・053とともにＳＩ171より新しい。住居跡は長軸方向を

ほぼ南―北にとり、平面形は楕円形を呈するものである。住居跡の規模は柱穴位置からの推定で長軸17.4ｍ、短軸6.3ｍである。覆土は褐色土に微量の炭化物細片と遺物を含んでおり、ほぼ水平堆積である。壁は、東側に一部立ち上がりを認めるがＳＩ171壁溝と思われ、ＳＩ255固有の壁は認められない。床面はほぼ平坦で、堅く締まっている。柱穴は中軸線を中心として相対する位置にＰ41～47、Ｐ48～54がある。Ｐ53は他の遺構との切り合いにより確認できないが、便宜上想定位置に柱穴番号を付した。柱穴はＰ45―52を除く12本が主柱穴としてほぼ等間隔に配置されており、Ｐ44―46とＰ51―53間に支柱穴としてＰ45・52がある。炉は中軸線上の３ケ所に地床炉がほぼ等間隔に配されている。遺物は多量の土器・石器・フレイクが出土している。

ＳＩ262（第９図、図版４）

ＮＨ28～30、ＮＩ28～30に位置し、ＳＩ099と重複する竪穴住居跡である。西半部は調査区外となるため全容を知り得ないが、長軸方向を東―西にとり楕円形を呈するものと考えられる。規模は現存長で長軸5.26ｍ、短軸5.14ｍである。ＳＩ099との新旧関係については両住居跡の覆土が似通っているうえ礫を多量に含むことから特定できなかった。覆土は礫混じりの褐色土を主体としている。床は南に下る緩斜面を削って平坦面を造りだしているため北壁は明瞭に残っているが、南壁は柱穴位置から推定するのみである。北壁は高さ22～26㎝で、やや外傾して立ち上がっている。床面は平坦面を確保しているものの、地山が礫混じりのため小さな凹凸がある。柱穴は中軸線上に位置するＰ１と中軸線を中心として相対する位置にあるＰ２―５、Ｐ３―６、Ｐ４―７がある。炉は検出されなかった。遺物は出土しなかった。

註１　ＳＩ239の柱穴配置を上ノ山Ⅱ遺跡の他の住居跡と比較すると、中軸線を中心として相対する位置に柱穴を持つ平面形が楕円形を呈する大型住居跡のものと同様であり、また断面図から平坦で締まりのある床面から延びる面に床を想定できるため本報告ではＳＩ239を大型住居跡とした。しかし、床面に比高差がありすぎる（80㎝前後）ことや平坦で締まりのある床以外は床面として認めがたいとする異論もあり、この場合は明確な床面の認められる部分から推定されるＰ４～７、Ｐ13～17を柱穴とする径約５ｍの円形の住居跡となる。

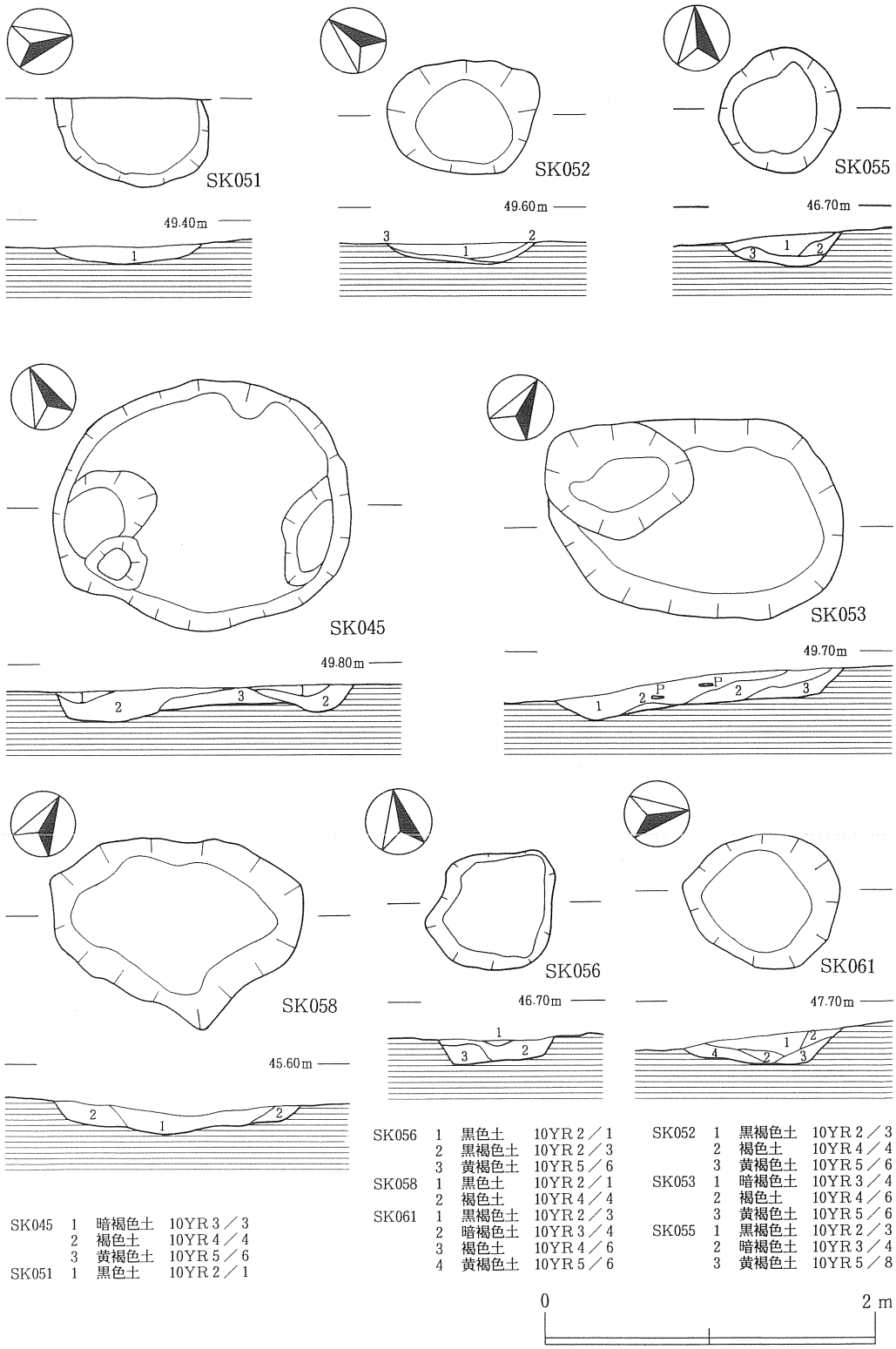
２　土坑・その他の遺構

①　土坑（第13～17・20図、図版10～13）

43基の土坑は調査区西部にその大半が集中している。多くは他の遺構と重複しており、遺物が一括して出土したものもある。以下、遺構番号順に順次説明を加える。

ＳＫ045　（第13図、図版10）

調査区北部のＮＦ46・ＮＧ46に位置する土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規



SK045	1	暗褐色土	10YR 3／3
	2	褐色土	10YR 4／4
	3	黄褐色土	10YR 5／6
SK051	1	黒色土	10YR 2／1

SK056	1	黒色土	10YR 2／1
	2	黒褐色土	10YR 2／3
	3	黄褐色土	10YR 5／6
SK058	1	黒色土	10YR 2／1
	2	褐色土	10YR 4／4
SK061	1	黒褐色土	10YR 2／3
	2	暗褐色土	10YR 3／4
	3	褐色土	10YR 4／6
	4	黄褐色土	10YR 5／6

SK052	1	黒褐色土	10YR 2／3
	2	褐色土	10YR 4／4
	3	黄褐色土	10YR 5／6
SK053	1	暗褐色土	10YR 3／4
	2	褐色土	10YR 4／6
	3	黄褐色土	10YR 5／6
SK055	1	黒褐色土	10YR 2／3
	2	暗褐色土	10YR 3／4
	3	黄褐色土	10YR 5／8

第13図　SK045・051～053・055・056・058・061　土抗

模は長径1.8ｍ、短径1.55ｍ、深さ15cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。東西の壁際に深さ５～８cmの浅いくぼみ状を呈する40×70cm大のピットがあり、西側ピットの南には高さ10cmほどの高まりが見られる。また西壁の一部が内側に張り出している。覆土中には、遺物・炭化物等一切含まれていなかった。

ＳＫ049　（第14図、図版10）

調査区西部のＮＨ38・ＮＩ38に位置し、ＳＩ171プラン確認面にてプランを確認した土坑である。新旧関係は、プラン確認状態からＳＫ049のほうがＳＩ171より新しいものである。またＳＫ049底面にてＳＫＦ261を検出したことから、ＳＫＦ261よりもまた新しいものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径3.2ｍ、短径2.67ｍ、深さ61cmである。底面は中央に最深部がある鍋底状で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、縄文土器片・石器・フレイク・炭化物細片が含まれている。遺物は縄文土器・石器が多数出土している。

ＳＫ050　（第14図、図版10）

調査区西部のＮＨ37に位置し、ＳＩ171プラン確認面にてプランを確認したことからＳＩ171より新しい土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径3.8ｍ、短径2.32ｍ、深さ44cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、縄文土器片・石器・炭化物細片が含まれている。遺物は縄文土器・石器が多数出土している。

ＳＫ051　（第13図、図版11）

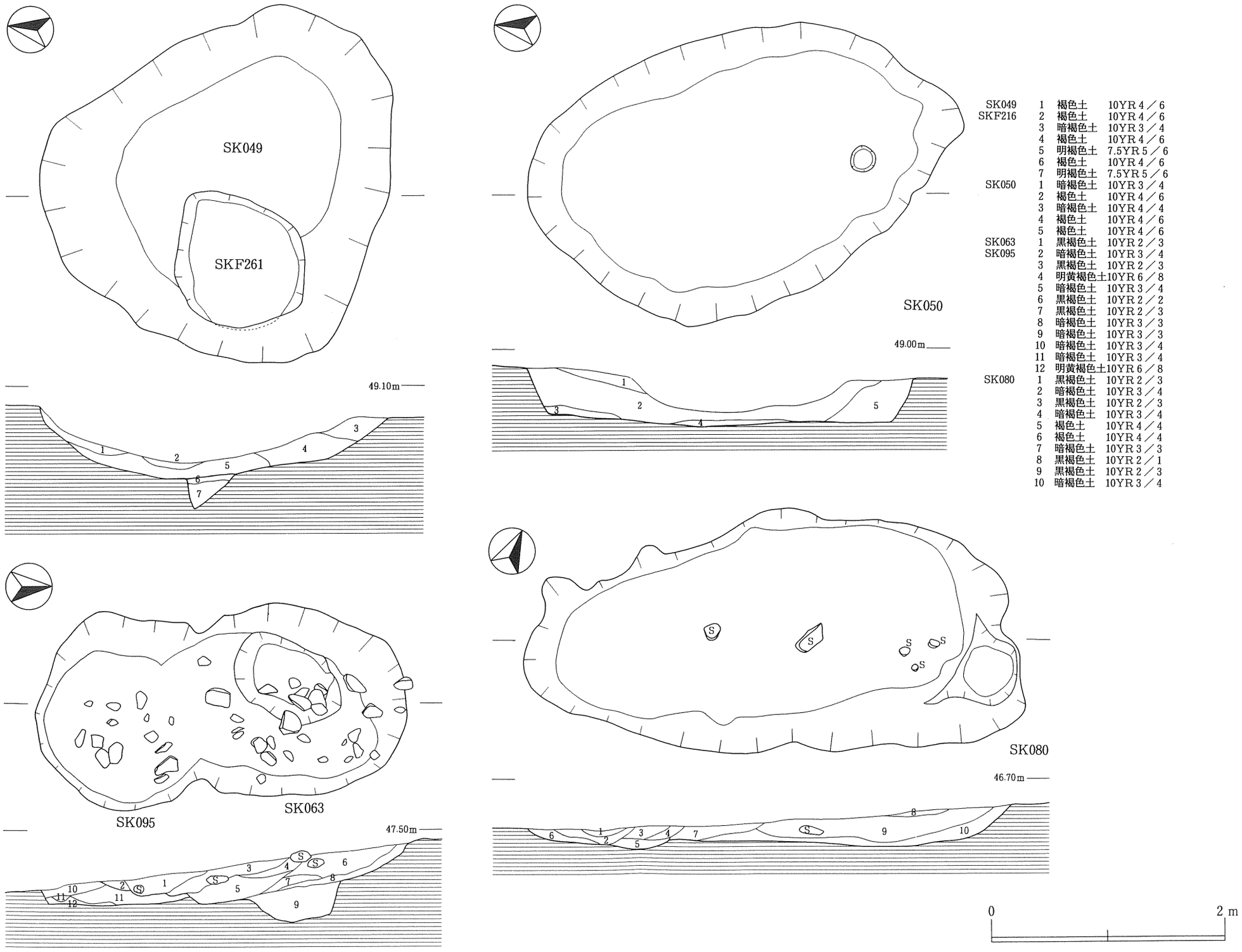
調査区西部のＮＩ39～40に位置する土坑である。平面形は一部調査区外に延びているため全体を把握することはできないが、不整円形を呈していたと考えられる。規模は径92cm、深さ13cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器片が１点出土したのみである。

ＳＫ052　（第13図、図版11）

調査区西部のＮＩ39に位置し、ＳＩ171プラン確認面にてプランを確認したことからＳＩ171より新しい土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径90cm、短径69cm、深さ16cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、１層下部に集中して炭化物細片が含まれている。遺物は縄文土器片のみ出土している。

ＳＫ053　（第13図）

調査区西部のＮＨ40・ＮＩ40に位置し、ＳＩ171プラン確認面にてプランを確認したことからＳＩ171より新しい土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.78ｍ、短径1.21ｍ、深さ17cmである。底面はほぼ平坦だが南西壁際に70×90cm大で深さ31cmのピットがある。壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器・石器が多数出土している。



SK049	1	褐色土	10YR 4／6
SKF216	2	褐色土	10YR 4／6
	3	暗褐色土	10YR 3／4
	4	褐色土	10YR 4／6
	5	明褐色土	7.5YR 5／6
	6	褐色土	10YR 4／6
	7	明褐色土	7.5YR 5／6
SK050	1	暗褐色土	10YR 3／4
	2	褐色土	10YR 4／6
	3	暗褐色土	10YR 4／4
	4	褐色土	10YR 4／6
	5	褐色土	10YR 4／6
SK063	1	黒褐色土	10YR 2／3
SK095	2	暗褐色土	10YR 3／4
	3	黒褐色土	10YR 2／3
	4	明黄褐色土	10YR 6／8
	5	暗褐色土	10YR 3／4
	6	黒褐色土	10YR 2／2
	7	黒褐色土	10YR 2／3
	8	暗褐色土	10YR 3／3
	9	暗褐色土	10YR 3／3
	10	暗褐色土	10YR 3／4
	11	暗褐色土	10YR 3／4
	12	明黄褐色土	10YR 6／8
SK080	1	黒褐色土	10YR 2／3
	2	暗褐色土	10YR 3／4
	3	黒褐色土	10YR 2／3
	4	暗褐色土	10YR 3／4
	5	褐色土	10YR 4／4
	6	褐色土	10YR 4／4
	7	暗褐色土	10YR 3／3
	8	黒褐色土	10YR 2／1
	9	黒褐色土	10YR 2／3
	10	暗褐色土	10YR 3／4

第14図　SK049・050・063・080・095　土抗、SKF261　フラスコ状土抗

ＳＫ055　（第13図）

調査区南部のＭＰ22に位置する土坑である。平面形は円形を呈しており、規模は径75㎝、深さ21㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器のみ少量出土している。

ＳＫ056　（第13図）

調査区南部のＭＰ22・ＭＱ22に位置する土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長軸84㎝、短軸77㎝、深さ18㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器・石器・フレイクが少量出土している。

ＳＫ058　（第13図）

調査区南部のＮＨ27に位置し、ＳＤ216の延長部でプランを確認した土坑である。ＳＤ216との新旧関係は定かではないが、ＳＫ058プランを確認した黒色土はＳＤ216に堆積している土と同一のものと考えられるので、この層上面で確認したＳＫ058はＳＤ216より新しいと考えられる。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.5ｍ、短径1.19ｍ、深さ13㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ061　（第13図、図版12）

調査区南部のＭＰ21～22に位置する土坑である。平面形は不整円形を呈しており、規模は径85㎝、深さ18㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器と石器が少量出土している。

ＳＫ062　（第15図）

調査区南部のＭＰ21に位置する土坑である。平面形はほぼ円形を呈しており、規模は径1.4ｍ、深さ38㎝である。底面はほぼ平坦だが、地山中の礫が多数露出している。壁は北壁が急に立ち上がっており、南壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、10～20㎝大の礫が８個混入しているが、特別な配置等は認められない。また、覆土全体に炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ063　（第14図）

調査区南部のＭＰ21・ＭＱ21～22に位置し、ＳＫ095と重複するプランを確認した土坑である。新旧関係は、土層断面観察によってＳＫ063のほうがＳＫ095を切っていることから、ＳＫ063が新しいものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径2.49ｍ、短径1.66ｍ、深さ30㎝である。底面はほぼ平坦だが、西壁際に60×100㎝大で深さ30㎝のくぼみがある。このくぼみは底がほぼ平らで、壁の立ち上がりはゆるやかである。土層断面観察では他の層と堆

積状態が明確に分離できるため、本来はＳＫ063より古い別遺構として扱うべきものであろう。壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、５～20㎝大の礫が多数混入しているが特別な配置等は認められない。また、覆土全体に炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器・石器・フレイクが多数出土している。

ＳＫ067　（第15図）

調査区南部のＭＱ22に位置する土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.65ｍ、短径1.45ｍ、深さ９㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器・石器・フレイクが出土している。

ＳＫ072　（第15図）

調査区西部のＮＩ35に位置し、ＳＩ171西でプランを確認した土坑である。平面形は不整円形を呈しており、規模は径95㎝、深さ37㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ073　（第15図）

調査区西部のＮＩ36に位置する土坑である。平面形は一部調査区外に延びているため全体を把握することはできないが、不整円形を呈していたと考えられる。規模は径65㎝、深さ25㎝である。底面は中央に最深部がある鍋底状で、壁は急に立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ075　（第15図）

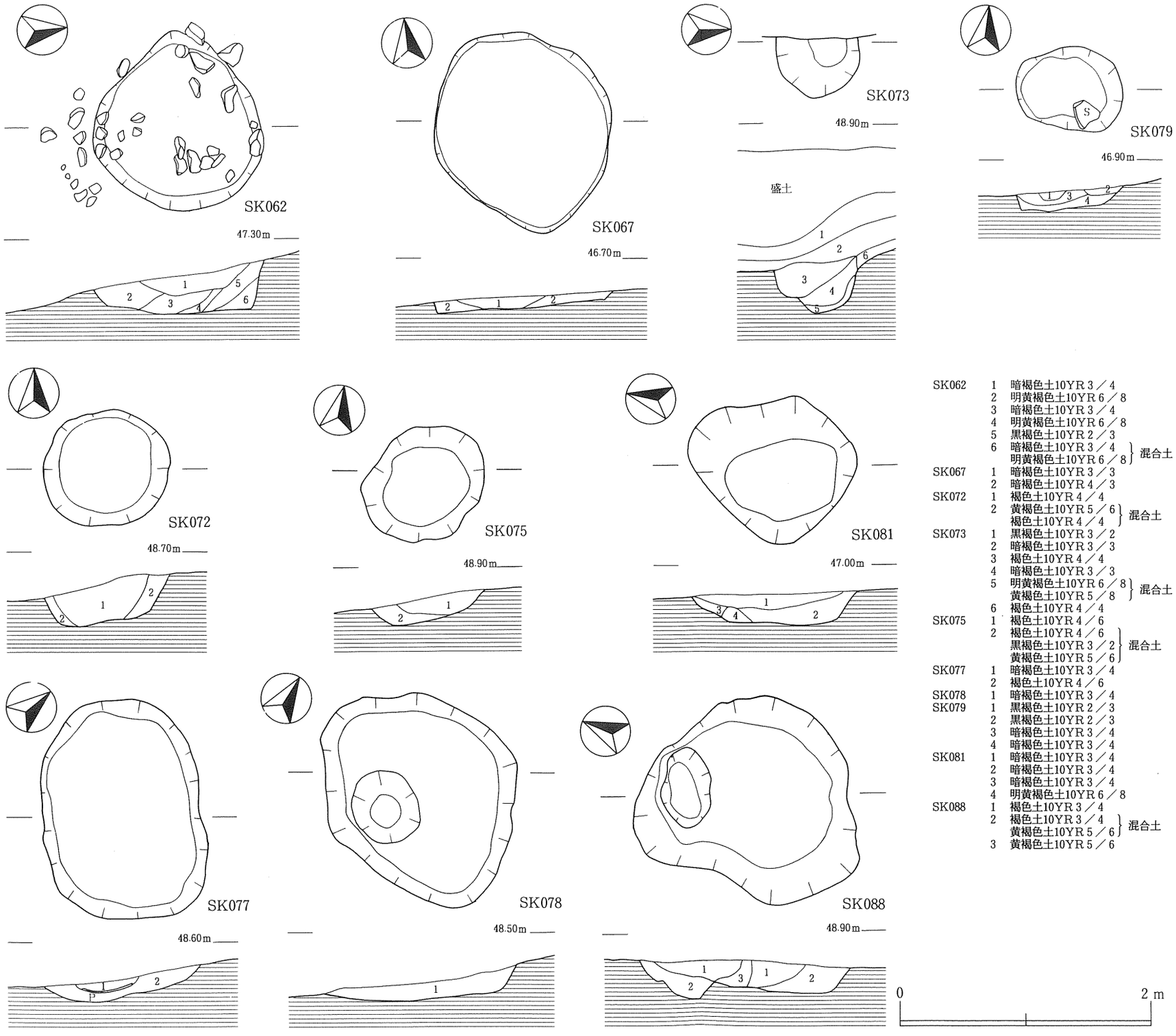
調査区西部のＮＩ37に位置する土坑である。ＳＩ171・255の西辺と重複する位置関係にあるが、新旧関係は不明である。平面形はほぼ円形を呈しており、規模は径95㎝、深さ16㎝である。底面はほぼ平坦だが、全体的に西に傾斜している。壁は、ゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ077　（第15図）

調査区西部のＮＨ33・34に位置する土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.75ｍ、短径1.25ｍ、深さ14㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれており、１～２層間で縄文土器片が一括出土した。遺物は縄文土器と石器が出土した。

ＳＫ078　（第15図）

調査区西部のＮＨ33～34・ＮＩ33～34に位置する土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.87ｍ、短径1.53ｍ、深さ15㎝である。底面はほぼ平坦だが、南西壁際に50×60㎝大で深さ７㎝のくぼみがある。壁は、ゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。



SK062	1	暗褐色土10YR 3／4	
	2	明黄褐色土10YR 6／8	
	3	暗褐色土10YR 3／4	
	4	明黄褐色土10YR 6／8	
	5	黒褐色土10YR 2／3	
	6	暗褐色土10YR 3／4 明黄褐色土10YR 6／8	混合土
SK067	1	暗褐色土10YR 3／3	
	2	暗褐色土10YR 4／3	
SK072	1	褐色土10YR 4／4	
	2	黄褐色土10YR 5／6 褐色土10YR 4／4	混合土
SK073	1	黒褐色土10YR 3／2	
	2	暗褐色土10YR 3／3	
	3	褐色土10YR 4／4	
	4	暗褐色土10YR 3／3	
	5	明黄褐色土10YR 6／8 黄褐色土10YR 5／8	混合土
	6	褐色土10YR 4／4	
SK075	1	褐色土10YR 4／6	
	2	褐色土10YR 4／6 黒褐色土10YR 3／2 黄褐色土10YR 5／6	混合土
SK077	1	暗褐色土10YR 3／4	
	2	褐色土10YR 4／6	
SK078	1	暗褐色土10YR 3／4	
SK079	1	黒褐色土10YR 2／3	
	2	黒褐色土10YR 2／3	
	3	暗褐色土10YR 3／4	
	4	暗褐色土10YR 3／4	
SK081	1	暗褐色土10YR 3／4	
	2	暗褐色土10YR 3／4	
	3	暗褐色土10YR 3／4	
	4	明黄褐色土10YR 6／8	
SK088	1	褐色土10YR 3／4	
	2	褐色土10YR 3／4 黄褐色土10YR 5／6	混合土
	3	黄褐色土10YR 5／6	

第15図　SK062・067・072・073・075・077～079・081・088　土抗

ＳＫ079　（第15図）

調査区南部のＳＩ239内、ＭＴ23・ＭＳ23に位置する土坑である。ＳＩ239との新旧関係は、木の根による攪乱のため不明である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径87㎝、短径67㎝、深さ18㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は東壁がゆるい弧を描いて立ち上がり、西壁は急に立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ080　（第14図）

調査区南部のＭＴ24・ＮＡ23～24に位置する土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径4.29ｍ、短径2.06ｍ、深さ40㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器とフレイクが出土している。

ＳＫ081　（第15図）

調査区南部のＳＩ064に接するＭＱ21～22に位置し、ＳＩ064プラン確認面にてプランを確認した土坑である。新旧関係は、プラン確認状態からＳＫ081のほうがＳＩ064より新しいものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.22ｍ、短径1.1ｍ、深さ37㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ087　（第20図）

調査区西部のＮＩ38に位置し、ＳＩ171西でＳＫＦ083・096と重複するプランを確認した土坑である。新旧関係は、土層断面観察によってＳＫ087がＳＫＦ083を切っていることからＳＫ087が新しく、同時にＳＫＦ083に切られているＳＫＦ096よりも新しいことが判明した。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.37ｍ、短径55㎝、深さ58㎝である。底面は中央に最深部がある鍋底状で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器のみ出土した。

ＳＫ088　（第15図）

調査区西部のＮＩ37～38に位置する土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.82ｍ、短径1.54ｍ、深さ32㎝である。底面はほぼ平坦だが、北壁際に40×65㎝大で深さ15㎝のピットがある。壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ089　（第16図）

調査区南部のＳＩ090内ＮＤ25・ＮＥ25に位置し、ＳＩ090床面にてプランを確認した土坑である。新旧関係は、プラン確認状態からＳＫ089のほうがＳＩ090より古いものである。平面

形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.7ｍ、短径1.49ｍ、深さ18㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器・石器・フレイクが出土している。

ＳＫ091　（第16図）

調査区南部のＳＩ090内ＮＥ26に位置する土坑である。プラン確認状態および新旧関係は、ＳＩ090床面にてプランを確認したことからＳＩ090より古く、ＳＫ092にその一部を切られていることからＳＫ092よりもまた古いものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.56ｍ、短径98㎝（現存長）、深さ９㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ092　（第16図）

調査区南部のＳＩ090内ＮＥ25～26に位置する土坑である。プラン確認状態および新旧関係は、ＳＩ090床面にてプランを確認したことからＳＩ090より古く、ＳＫ091の一部を切っていることからＳＫ091よりも新しいものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径2.08ｍ、短径1.97ｍ、深さ19㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器と石器が出土している。

ＳＫ095　（第14図）

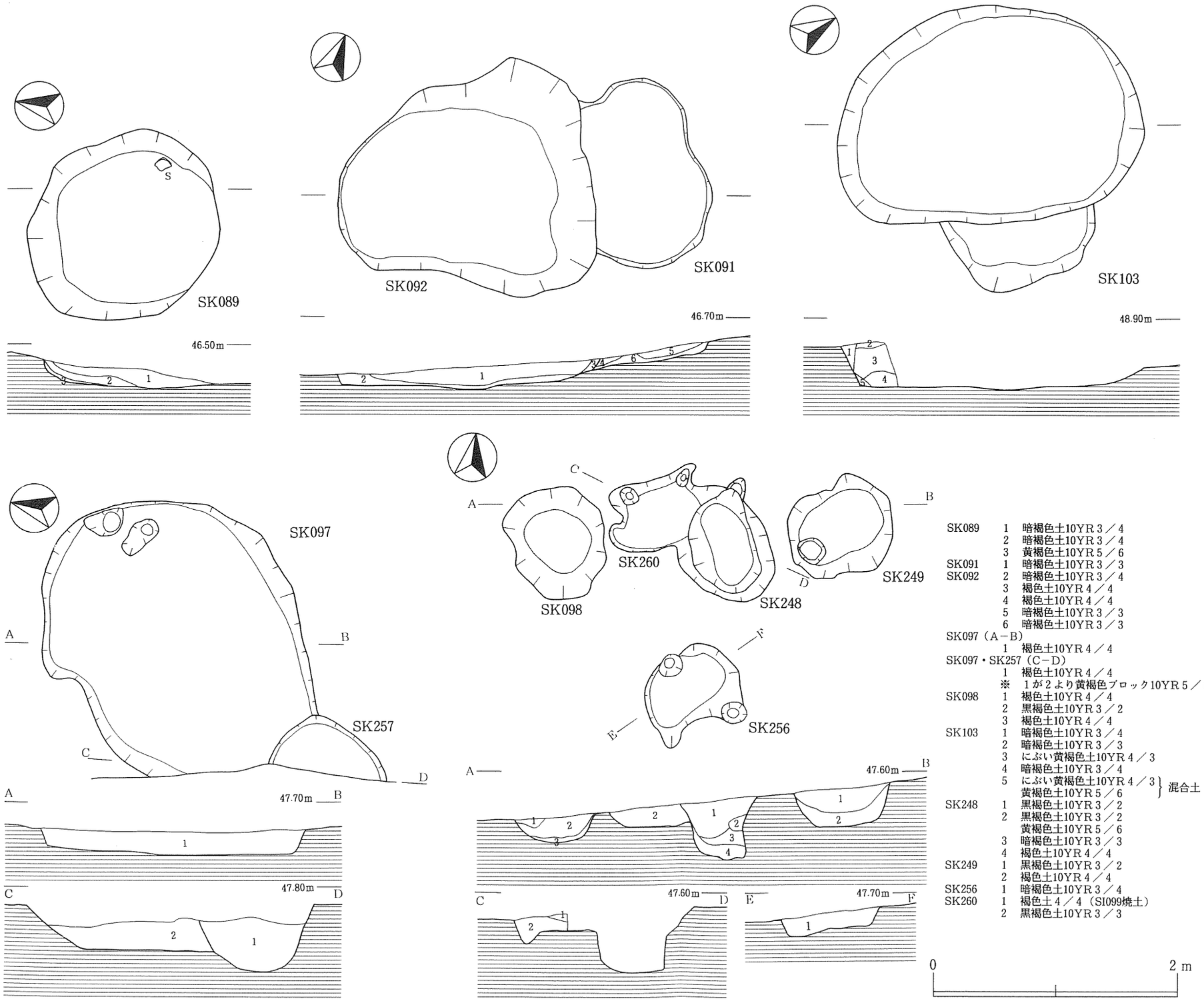
調査区南部のＭＰ21・ＭＱ21に位置し、ＳＫ063と重複するプランを確認した土坑である。新旧関係は、土層断面観察によってＳＫ095がＳＫ063に切られていることからＳＫ095が古いものである。平面形はＳＫ063に切られているため全体を把握することはできないが、不整円形を呈していたと考えられる。規模は径1.7ｍ、深さ22㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は西壁がゆるい弧を描いて立ち上がり、他は急に立ち上がっている。覆土中には、５～22㎝大の礫が多数混入しているが、特別な配置等は認められない。また、覆土全体に炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器・石器・フレイクが出土している。

ＳＫ097　（第16図、図版12）

調査区西部のＮＩ31～32に位置する土坑である。プラン確認状態および新旧関係は、ＳＩ200プラン確認面にてプランを確認したことからＳＩ200より新しく、ＳＫ257に一部を切られていることからＳＫ257よりも古いものである。平面形は一部調査区外となるため全体を把握することはできないが、不整楕円形を呈するものと考えられる。規模は確認できる部分で長径2.59ｍ、短径1.9ｍ、深さ26㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器片１点とフレイク１点のみである。

ＳＫ098　（第16図、図版13）

調査区西部のＳＩ099内ＮＧ29に位置し、ＳＩ099床面にてプランを確認した土坑である。新



SK089　1　暗褐色土10YR３／４
　　2　暗褐色土10YR３／４
　　3　黄褐色土10YR５／６
SK091　1　暗褐色土10YR３／３
SK092　2　暗褐色土10YR３／４
　　3　褐色土10YR４／４
　　4　褐色土10YR４／４
　　5　暗褐色土10YR３／３
　　6　暗褐色土10YR３／３
SK097（A－B）
　　1　褐色土10YR４／４
SK097・SK257（C－D）
　　1　褐色土10YR４／４
　　※　１が２より黄褐色ブロック10YR５／６を多く含む。
SK098　1　褐色土10YR４／４
　　2　黒褐色土10YR３／２
　　3　褐色土10YR４／４
SK103　1　暗褐色土10YR３／４
　　2　暗褐色土10YR３／３
　　3　にぶい黄褐色土10YR４／３
　　4　暗褐色土10YR３／４
　　5　にぶい黄褐色土10YR４／３ } 混合土
　　黄褐色土10YR５／６
SK248　1　黒褐色土10YR３／２
　　2　黒褐色土10YR３／２
　　黄褐色土10YR５／６
　　3　暗褐色土10YR３／３
　　4　褐色土10YR４／４
SK249　1　黒褐色土10YR３／２
　　2　褐色土10YR４／４
SK256　1　暗褐色土10YR３／４
SK260　1　褐色土４／４（SI099焼土）
　　2　黒褐色土10YR３／３

第16図　SK089・091・092・097・098・103・248・249・256・257・260土坑

旧関係は、プラン確認状態からＳＫ098のほうがＳＩ099より古いものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径92cm、短径84cm、深さ19cmである。底面は中央に最深部がある鍋底状で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。周囲にＳＫ098と同規模で、覆土の状態も似通っているＳＫ248・249・256・260があり、何等かの関連があるものと考えられる。遺物はフレイクのみである。

ＳＫ103　（第16図）

調査区西部のＮＧ33に位置する、前回調査でその大半を調査済みの土坑である。他との新旧関係については、ＳＫ100に切られており、ＳＫ100より古いものであることが判明している。平面形は楕円形を呈しており、規模は長径2.48m、短径1.8m、深さ43cmである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は石器１点のみである。

ＳＫ245　（第17図）

調査区西部のＮＩ32〜33・ＮＪ32に位置する土坑である。平面形は一部調査区外となるため全体を把握することはできないが、不整円形を呈するものと考えられる。規模は径1.92m、深さ70cmである。底面は中央に最深部がある鍋底状で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は石器１点のみである。

ＳＫ246　（第17図）

調査区西部のＮＨ29〜30に位置する土坑である。平面形は一部木の根による攪乱を受けているものの楕円形を呈するものと考えられる。規模は長径1.77m、短径1.4m、深さ16cmである。底面はほぼ平坦だが、西にわずかに傾斜している。壁はゆるい弧を描いて立ち上がり、西壁際には50×70cm大で深さ10cmのピットがある。遺物は縄文土器片３点のみである。

ＳＫ247　（第17図）

調査区西部のＮＧ30・ＮＨ30に位置する土坑である。平面形は楕円形を呈しており、規模は長径1.42m、短径47cm、深さ13cmである。底面はほぼ平坦だが、全体的に南に傾斜している。壁はゆるい弧を描いて立ち上り、西壁際には25×35cm大で深さ13cmのピットがある。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ248　（第16図、図版13）

調査区西部のＳＩ099内ＮＦ29に位置し、ＳＩ099床面にてプランを確認した土坑である。新旧関係は、プラン確認状態からＳＫ248のほうがＳＩ099より古いものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径80cm、短径54cm、深さ32cmである。底面はほぼ平坦で、壁は立ち上がり始めが急で、その後ゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。周囲にＳＫ248と同規模で、覆土の状態も似通っているＳＫ098・249・

256・260があり、何等かの関連があるものと考えられる。遺物は縄文土器・石器・フレイクが出土している。

ＳＫ249　（第16図、図版13）

調査区西部のＳＩ099内ＮＦ29に位置し、ＳＩ099床面にてプランを確認した土坑である。新旧関係は、プラン確認状態からＳＫ249のほうがＳＩ099より古く、ＳＫ260の一部を切っていることからＳＫ260よりは新しいものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径92cm、短径78cm、深さ41cmである。底面は中央に最深部がある鍋底状で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。周囲にＳＫ249と同規模で、覆土の状態も似通っているＳＫ098・248・256・260があり、何等かの関連があるものと考えられる。遺物は縄文土器・石器・フレイクが出土している。

ＳＫ250　（第17図）

調査区西部のＳＩ171・255内ＮＧ33～34・ＮＨ33～34に位置し、ＳＩ171・255床面にてプランを確認した土坑である。新旧関係は、プラン確認状態からＳＫ250のほうがＳＩ171・255より古いものである。またＳＩ171・255の柱穴にも切られており、新旧関係は明瞭である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.54m、短径1.16m、深さ15cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ253　（第17図）

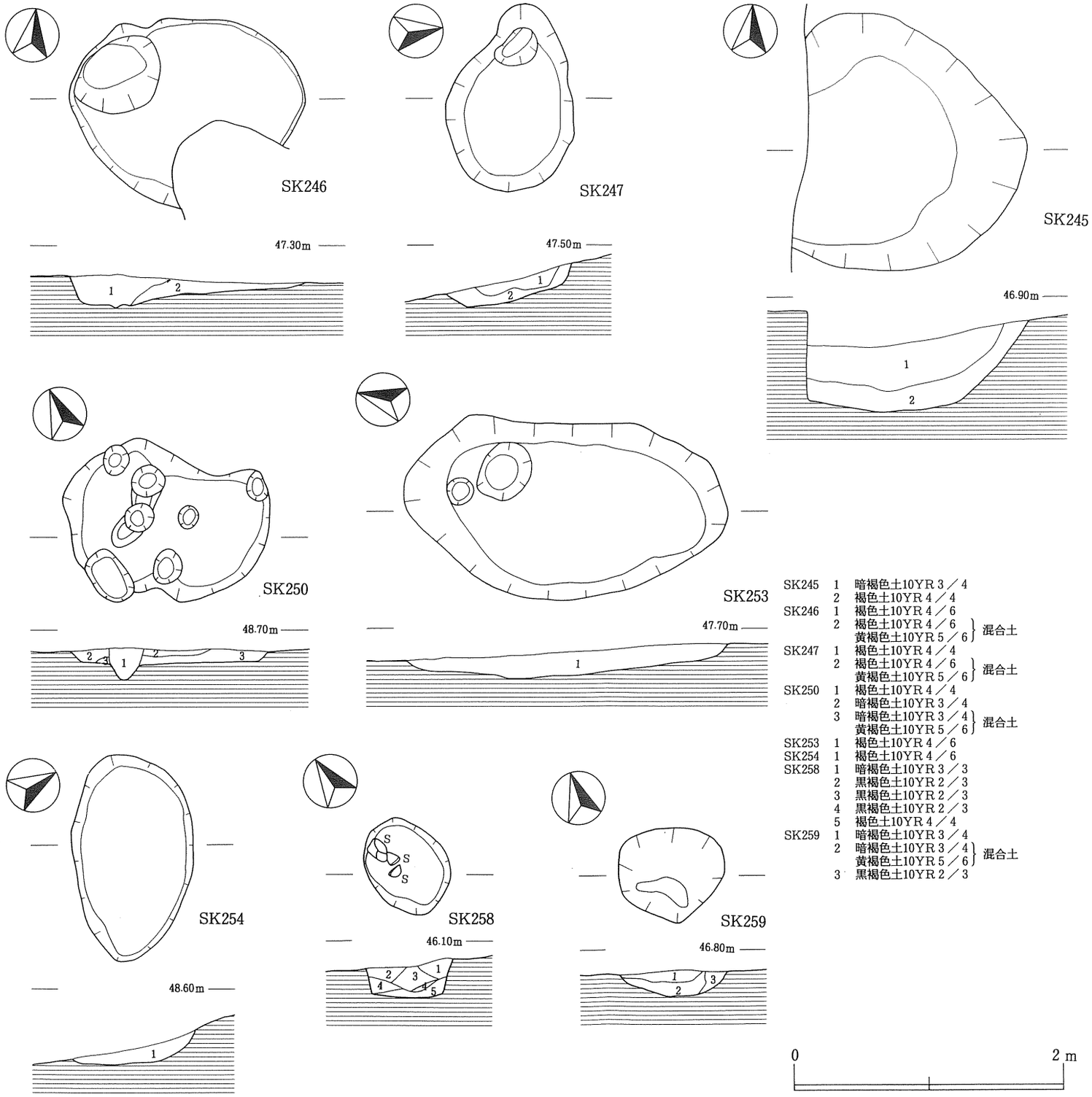
調査区西部のＳＩ200内ＮＨ31に位置し、ＳＩ200プラン確認面にてプランを確認した土坑である。新旧関係は、プラン確認状態からＳＫ253のほうがＳＩ200より新しいものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径2.41m、短径1.33m、深さ21cmである。底面はほぼ平坦で、北壁際にＳＩ200の柱穴がある。壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器と石器が出土している。

ＳＫ254　（第17図）

調査区西部のＮＨ33に位置する土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径1.55m、短径92cm、深さ16cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は石器１点のみである。

ＳＫ256　（第16図、図版13）

調査区西部のＳＩ099内ＮＦ29に位置し、ＳＩ099床面にてプランを確認した土坑である。新旧関係は、プラン確認状態からＳＫ256のほうがＳＩ099より古いものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径81cm、短径55cm、深さ29cmである。底面はほぼ平坦だが、わずかに東から西へ傾斜している。壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物



SK245　1　暗褐色土10YR 3／4
　　2　褐色土10YR 4／4
SK246　1　褐色土10YR 4／6
　　2　褐色土10YR 4／6 } 混合土
　　黄褐色土10YR 5／6
SK247　1　褐色土10YR 4／4
　　2　褐色土10YR 4／6 } 混合土
　　黄褐色土10YR 5／6
SK250　1　褐色土10YR 4／4
　　2　暗褐色土10YR 3／4
　　3　暗褐色土10YR 3／4 } 混合土
　　黄褐色土10YR 5／6
SK253　1　褐色土10YR 4／6
SK254　1　褐色土10YR 4／6
SK258　1　暗褐色土10YR 3／3
　　2　黒褐色土10YR 2／3
　　3　黒褐色土10YR 2／3
　　4　黒褐色土10YR 2／3
　　5　褐色土10YR 4／4
SK259　1　暗褐色土10YR 3／4
　　2　暗褐色土10YR 3／4 } 混合土
　　黄褐色土10YR 5／6
　　3　黒褐色土10YR 2／3

第17図　SK245～247・250・253・254・258・259　土抗

細片がわずかに含まれている。周囲にＳＫ256と同規模で、覆土の状態も似通っているＳＫ098・248・249・260があり、何等かの関連があるものと考えられる。遺物はフレイク２点のみである。

ＳＫ257　（第16図、図版12）

調査区西部のＮＪ31に位置する土坑である。プラン確認状態および新旧関係は、ＳＩ200プラン西でプランを確認し、ＳＫ097の一部を切っていることからＳＫ097よりも新しいものである。平面形は一部調査区外となるため全体を把握することはできないが、不整円形を呈するものと考えられる。規模は径90cm前後と推定され、深さは44cmである。底面は中央に最深部がある鍋底状で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ258　（第17図、図版13）

調査区南部のＮＦ25～26・ＮＧ26に位置する土坑である。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径70cm、短径59cm、深さ23cmである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ259　（第17図）

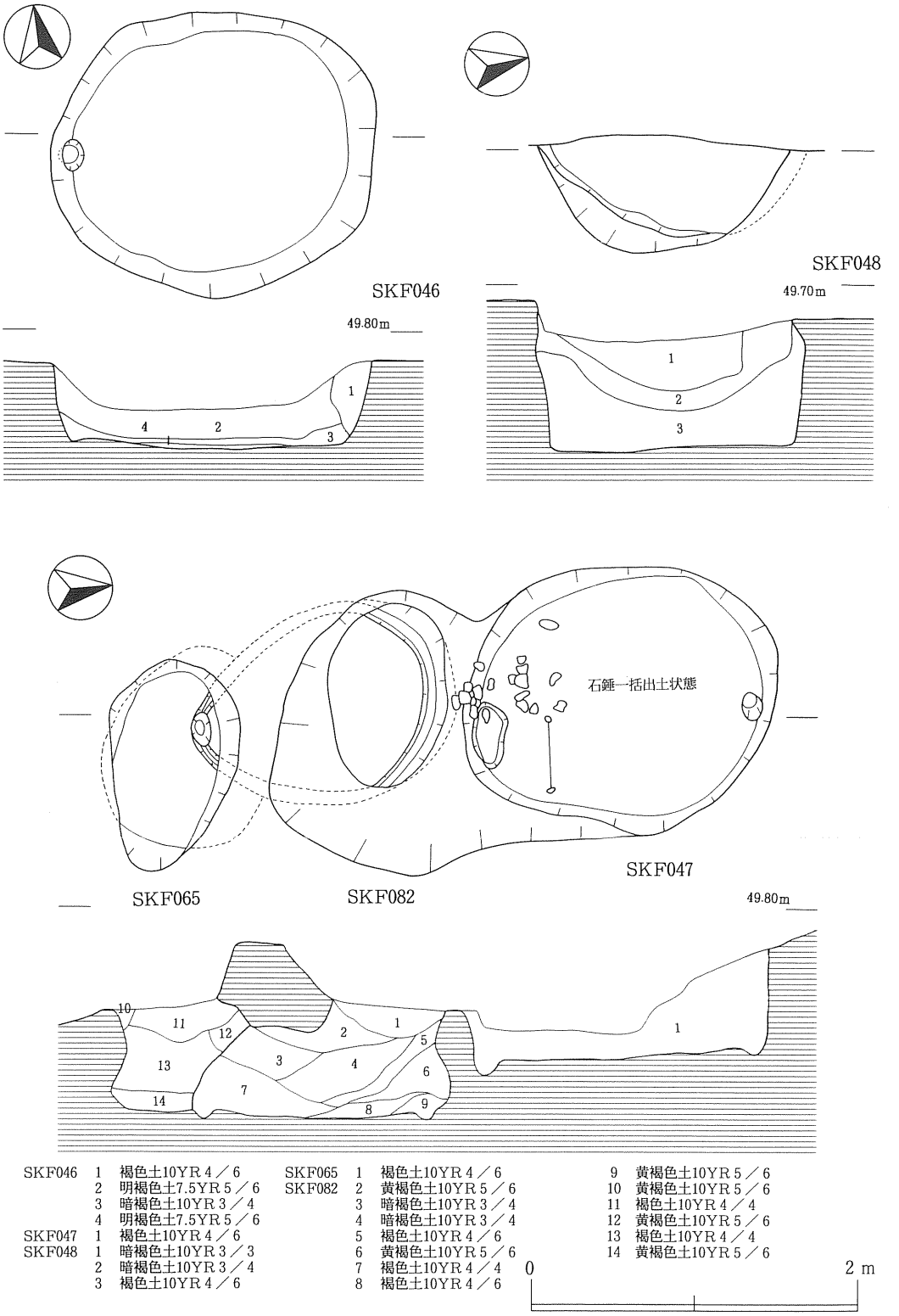
調査区西部のＮＣ25に位置する土坑である。平面形は不整円形を呈しており、規模は径80cm、深さ19cmである。底面は中央に最深部がある鍋底状で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ260　（第16図）

調査区西部のＳＩ099内ＮＦ29～30に位置する土坑である。プラン確認状態および新旧関係は、ＳＫ260覆土上面でＳＩ099焼土を確認し、ＳＫ248に東壁の一部を切られていることから両遺構より古いものである。平面形は不整楕円形を呈しており、規模は長径80cm、短径55cm、深さ17cmである。底面はほぼ平坦だが、わずかに東から西へ傾斜している。壁はゆるい弧を描いて立ち上がっている。覆土中には、炭化物細片がわずかに含まれている。周囲にＳＫ260と同規模で、覆土の状態も似通っているＳＫ098・248・249・256があり、何等かの関連があるものと考えられる。遺物は出土しなかった。

②　フラスコ状土坑（第14・18～20図、図版14～21）

19基のフラスコ状土坑は調査区西部に集中し、特にＳＩ171・255周辺に位置するフラスコ状土坑は住居跡に伴うものとして注目される。ここで扱うフラスコ状土坑とは断面形がフラスコないし袋状を呈するものである。また重複や崩落のため原形を止どめていない場合でも原形の推定が可能であればフラスコ状土坑とした。以下、遺構番号順に順次説明する。



SKF046	1	褐色土10YR 4／6
	2	明褐色土7.5YR 5／6
	3	暗褐色土10YR 3／4
	4	明褐色土7.5YR 5／6
SKF047	1	褐色土10YR 4／6
SKF048	1	暗褐色土10YR 3／3
	2	暗褐色土10YR 3／4
	3	褐色土10YR 4／6
SKF065	1	褐色土10YR 4／6
SKF082	2	黄褐色土10YR 5／6
	3	暗褐色土10YR 3／4
	4	暗褐色土10YR 3／4
	5	褐色土10YR 4／6
	6	黄褐色土10YR 5／6
	7	褐色土10YR 4／4
	8	褐色土10YR 4／6
	9	黄褐色土10YR 5／6
	10	黄褐色土10YR 5／6
	11	褐色土10YR 4／4
	12	黄褐色土10YR 5／6
	13	褐色土10YR 4／4
	14	黄褐色土10YR 5／6

0　2 m

第18図　SKF046～048・065・082　フラスコ状土抗

ＳＫＦ046　（第18図）

調査区西部のＮＧ41～42・ＮＨ41～42に位置するフラスコ状土坑である。平面形は楕円形を呈しており、長径２ｍ、短径1.77ｍ、深さ55cmである。西壁の一部が袋状を呈しており、底面はほぼ平坦で、西壁際に15×20cm大で深さ15cmのピットが１個ある。覆土は、明褐色土ないし褐色土を主体としてレンズ状に堆積しており地山土の混入もほとんど見られないことから、自然堆積と考えられる。また、覆土全体に炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は縄文土器・石器・フレイクが多数出土している。

ＳＫＦ047　（第18図、図版14）

調査区西部のＮＨ41に位置し、ＳＫＦ082と重複しているフラスコ状土坑である。新旧関係は、ＳＫＦ047がＳＫＦ082を切っていることから、ＳＫＦ047がＳＫＦ082より新しいものである。平面形は楕円形を呈しており、開口部長径1.97ｍ、短径1.67ｍ、深さ67cmである。断面形は北壁の一部が袋状を呈しているが、他は壁が垂直に立ち上がっている。最大径は開口部にあり、最小径は底径の1.48ｍである。底面はほぼ平坦で、南北壁際にピットが各一個ずつある。北側のピットは12×17cm大で深さ６cm、南側のピットは20×40cm大で深さ９cmである。覆土は、褐色土に地山土が混入しており、全体に炭化物細片をわずかに含んでいる。上層ほど遺物を多く含んでおり、石錘20点が一括出土している。おそらくは、ＳＫＦ047がある程度埋まった段階のくぼみに廃棄されたものと思われる。遺物は縄文土器・石器・フレイクが多数出土している。

ＳＫＦ048　（第18図、図版15）

調査区西部のＮＩ41に位置するフラスコ状土坑である。平面形は、一部調査区外のため全体を把握することはできないが、円形を呈するものと考えられる。開口部の径は1.56ｍ、深さ1.16ｍである。断面形は袋状を呈しており、最大径は底径の1.6ｍで、最小径は開口部にある。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、暗褐色土ないし褐色土を主体としてレンズ状に堆積して地山土の混入もほとんど見られないことから、自然堆積と考えられる。遺物は縄文土器・石器・フレイクが多数出土している。

ＳＫＦ057　（第19図、図版15）

調査区西部のＮＨ39～40に位置し、ＳＩ171壁際でプランを確認したフラスコ状土坑である。平面形は円形を呈しており、開口部の径は56cm、深さ72cmである。断面形は袋状を呈しており、最大径は底径の86cmで、最小径は開口部にある。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、壁の崩壊土もしくは他の遺構構築時の排土と考えられる地山土が主体で、炭化物細片もわずかに含まれている。１層が非常に堅く締まっており床との判別も難しいことから、ＳＩ171構築時ないしＳＩ171存続期間中に人為的に埋められたものとも考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ059　（第19図、図版16）

調査区西部のＮＨ40に位置し、ＳＩ171壁際床面でプランを確認したフラスコ状土坑である。ＳＩ171床面でのプラン確認、ＳＩ171柱穴から延びる幅15cm、深さ５cmの溝を切っていることなどから、ＳＫＦ059はＳＩ171に伴う貯蔵穴と考えられる。平面形は円形を呈しており、開口部の径は96cm、深さ73cmである。断面形は袋状を呈しており、最大径は底径の１ｍ、最小径は開口部にある。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、褐色土に地山土が混入しており、２層中には炭化物細片が比較的多く含まれている。遺物は縄文土器片１点が出土したのみである。

ＳＫＦ060　（第19図、図版16・18～20）

調査区西部のＮＨ40・ＮＩ40に位置し、ＳＩ171壁際でプランを確認したフラスコ状土坑である。ＳＫＦ071と重複しているがその新旧関係は定かではない。ただし、ＳＫＦ065・082の新旧関係からすれば、底面に溝の巡るＳＫＦ071よりＳＫＦ060のほうが古い可能性がある。平面形は円形を呈しており、開口部の径は1.02ｍ、深さ44cmである。断面形は袋状を呈しており、最大径は開口部、最小径はくびれた部分の97cmである。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、褐色土に地山土が混入しており、全体に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ065　（第18図、図版17・18）

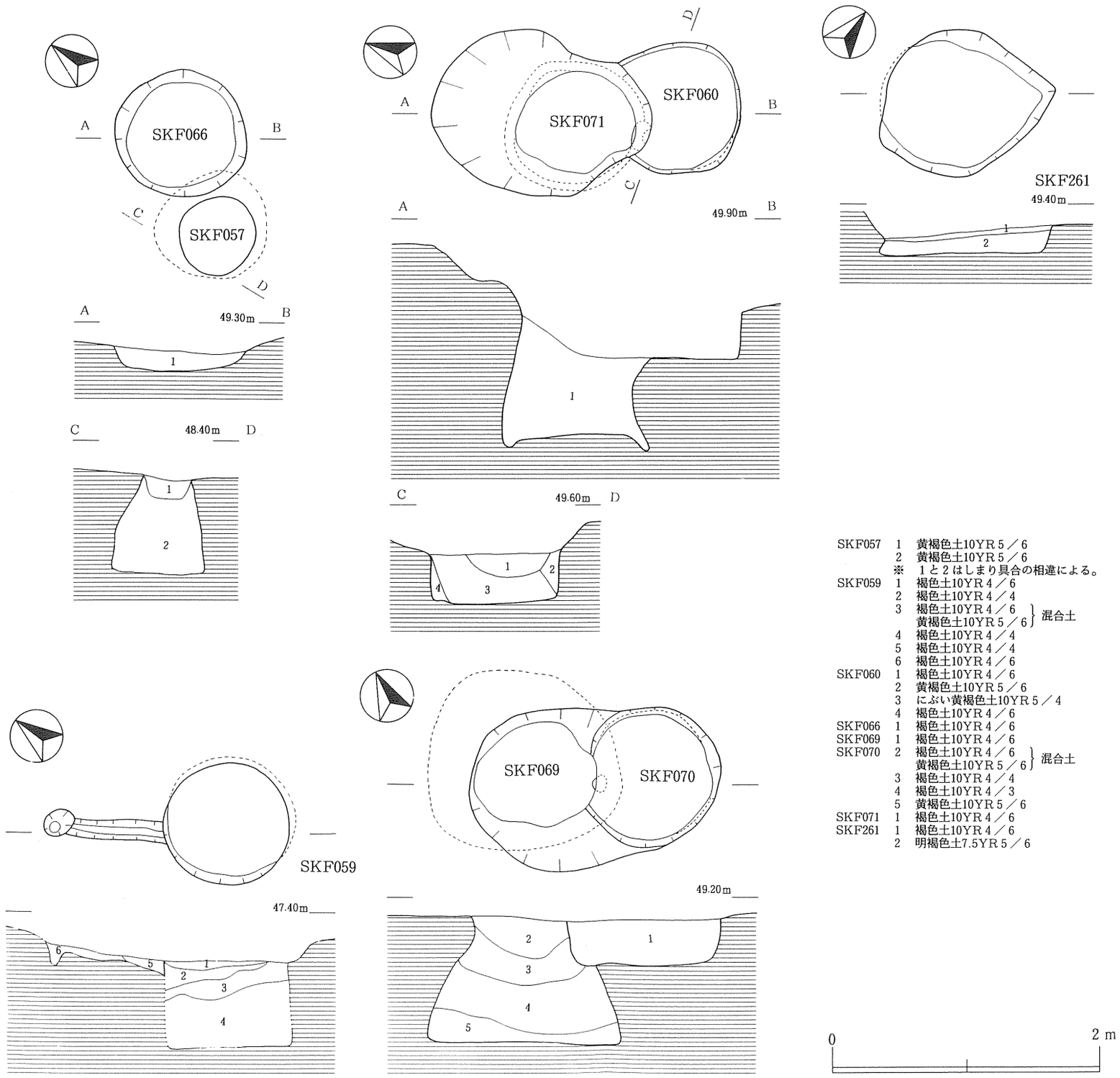
調査区西部のＮＨ40に位置し、ＳＩ171壁際でプランを確認したフラスコ状土坑である。ＳＫＦ082と重複しており、ＳＫＦ065をＳＫＦ082が切っていることから、ＳＫＦ065はＳＫＦ082より古いものである。平面形は楕円形を呈しており、開口部長径1.32ｍ、短径81cm、深さ96cmである。断面形は袋状を呈しており、最大径は底径の1.24ｍで、最小径はくびれた部分の65cmである。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、褐色土と地山土を主体とする層の互層となっており、全体に炭化物細片が含まれている。遺物は石器が１点出土したのみである。

ＳＫＦ066　（第19図）

調査区西部のＮＨ39～40に位置し、ＳＩ171壁際でプランを確認したフラスコ状土坑である。平面形は円形を呈しており、径98cm、深さ21cmである。東壁の一部が袋状を呈しており、底面は、ほぼ平坦である。覆土は、褐色土で堅く締まっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ069　（第19図、図版19）

調査区西部のＮＩ40に位置し、ＳＩ171壁際でプランを確認したフラスコ状土坑である。ＳＫＦ070と重複しており、ＳＫＦ069がＳＫＦ070に切られていることから、ＳＫＦ069はＳＫＦ070より古いものである。平面形は円形を呈しており、開口部の径は1.23ｍ、深さ95cmである。断面形はフラスコ状を呈しており、最大径は底径の1.56ｍ、最小径はくびれた部分の80cmである。底面は、ほぼ平坦である。覆土はほぼ水平堆積で、壁の崩壊土もしくは他の遺構構築時の



SKF057　1　黄褐色土10YR５／６
　　2　黄褐色土10YR５／６
　　※　１と２はしまり具合の相違による。
SKF059　1　褐色土10YR４／６
　　2　褐色土10YR４／４
　　3　褐色土10YR４／６ } 混合土
　　黄褐色土10YR５／６
　　4　褐色土10YR４／４
　　5　褐色土10YR４／４
　　6　褐色土10YR４／６
SKF060　1　褐色土10YR４／６
　　2　黄褐色土10YR５／６
　　3　にぶい黄褐色土10YR５／４
　　4　褐色土10YR４／６
SKF066　1　褐色土10YR４／６
SKF069　1　褐色土10YR４／６
SKF070　2　褐色土10YR４／６ } 混合土
　　黄褐色土10YR５／６
　　3　褐色土10YR４／４
　　4　褐色土10YR４／３
　　5　黄褐色土10YR５／６
SKF071　1　褐色土10YR４／６
SKF261　1　褐色土10YR４／６
　　2　明褐色土7.5YR５／６

第19図　SKF057・059・060・066・069～071・261　フラスコ状土抗

排土と考えられる地山土の混入が多く見られ、人為的に埋められたものとも考えられる。また、覆土全体に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ070　（第19図、図版19）

調査区西部のＮＩ40に位置し、ＳＩ171壁際でプランを確認したフラスコ状土坑である。ＳＫＦ069と重複しており、ＳＫＦ070がＳＫＦ069を切っていることから、ＳＫＦ070はＳＫＦ069より新しいものである。平面形は円形を呈しており、開口部の径は1.06ｍ、深さ57㎝である。断面形は袋状を呈しており、最大径は開口部、最小径はくびれた部分の95㎝である。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、褐色土に地山土が混入しており、全体に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ071　（第19図、図版18～20）

調査区西部のＮＨ40～41・ＮＩ40～41に位置し、ＳＩ171壁際でプランを確認したフラスコ状土坑である。ＳＫＦ060と重複しているがその新旧関係は定かではない。ただし、ＳＫＦ065・082の新旧関係からすれば、底面に溝の巡るＳＫＦ071がＳＫＦ060より新しいものである可能性はある。平面形は開口部で楕円形を呈しているが、くびれた部分や底部は円形を呈している。開口部長径1.67ｍ、短径1.25ｍ、深さ1.16ｍである。断面形はフラスコ状を呈しており、最大径は開口部、最小径はくびれた部分の76㎝である。底面はほぼ平坦で、壁際を幅５～10㎝、深さ５㎝の溝が巡っている。南壁際に12×23㎝大で深さ20㎝のピットが、やや斜めに掘られている。覆土は、褐色土に地山土が混入しており、全体に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ074　（第20図）

調査区西部のＮＩ37に位置し、ＳＫＦ093と重複するフラスコ状土坑である。ＳＫ093との新旧関係は、ＳＫＦ093がＳＫＦ074を切っており、ＳＫ074のほうが古いものである。平面形は円形を呈しており、開口部の径は1.15ｍ、深さ1.43ｍである。断面形はフラスコ状を呈しており、最大径は底径の1.43ｍ、最小径はくびれた部分の92㎝である。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、壁の崩壊土もしくは他の遺構構築時の排土と考えられる地山土の混入が多く見られ、炭化物細片もわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ076　（第20図、図版21）

調査区西部のＮＨ34～35に位置するフラスコ状土坑である。ＳＩ171・255床面にてプランを確認したことから、ＳＩ171・255に伴うか、より古いものと考えられる。平面形は楕円形を呈しており、長径2.42ｍ、短径1.7ｍ、深さ55㎝である。ＳＫＦ076は、断面形がフラスコ状ないし袋状を呈していないことから、当初は土坑として扱っていたが、底面壁際に巡る溝がＳＫＦ071・082に共通するものであり、本遺跡の土坑には同様の例が見られないことからフラスコ状

土坑として扱った。底面は平坦で、壁際を幅15～30㎝、深さ７～22㎝の溝が巡っている。覆土は、褐色土に地山土が混入しており、全体に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は縄文土器・石器・フレイクが出土している。

ＳＫＦ082　（第18図、図版17・18）

調査区西部のＮＨ40～41に位置し、ＳＫＦ047・065と重複するフラスコ状土坑である。３遺構の切り合い関係は、ＳＫＦ065をＳＫＦ082が切り、ＳＫＦ082をＳＫＦ047が切っているので、ＳＫＦ082はＳＫＦ065より新しく、ＳＫＦ047より古いものである。平面形は楕円形を呈しており、開口部長径1.77ｍ、短径１ｍ以上、深さ68㎝である。断面形は、西壁が深く入り込んだ袋状を呈しており、最大径は底径の1.65ｍで、最小径はくびれた部分の73㎝である。底面はほぼ平坦で、壁際を幅10～15㎝、深さ５㎝の溝が巡っている。西壁際に12×20㎝大で深さ10㎝のピットが１個ある。覆土は北壁から流入した様相を呈しており、褐色土と地山土を主体とする層の互層となっており、全体に炭化物細片が含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ083　（第20図）

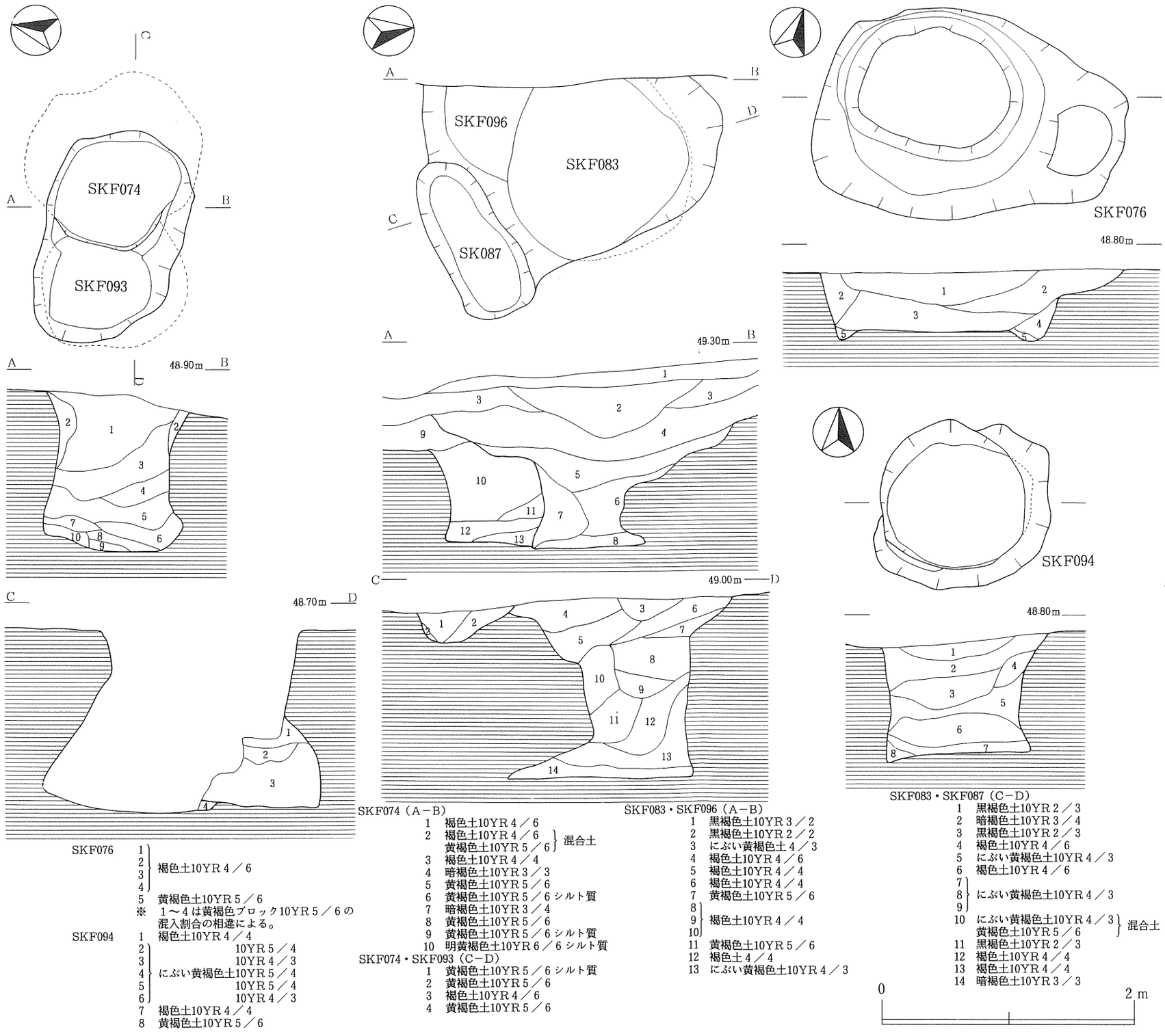
調査区西部のＮＩ38～39に位置し、ＳＫ087・ＳＫＦ096と重複するフラスコ状土坑である。３遺構の切り合い関係は、ＳＫＦ083がＳＫ087に切られ、ＳＫＦ083はＳＫＦ096を切っていることから、ＳＫＦ083はＳＫ086より古くＳＫＦ096より新しいものである。平面形は円形を呈しており、開口部の径は1.95ｍ、深さ1.14ｍである。断面形はフラスコ状を呈しており、最大径は開口部、最小径はくびれた部分の90㎝である。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、壁の崩壊土もしくは他の遺構構築時の排土と考えられる地山土の混入が多く見られ、炭化物細片もわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ093　（第20図）

調査区西部のＮＩ37・ＮＪ37に位置し、ＳＫＦ074と重複するフラスコ状土坑である。ＳＫＦ074との新旧関係は、ＳＫＦ093がＳＫＦ074を切っており、ＳＫＦ093のほうが新しいものである。平面形は円形を呈しており、開口部の径は1.08ｍ、深さ1.42ｍである。断面形はフラスコ状を呈しており、最大径は底径の1.15ｍ、最小径はくびれた部分の78㎝である。底面は、東にやや傾斜している。覆土は、壁の崩壊土もしくは他の遺構構築時の排土と考えられる地山土が主体で、全体に炭化物細片がわずかに含まれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ094　（第20図、図版21）

調査区西部のＮＨ35～36に位置し、ＳＩ171・255床面にてプランを確認したフラスコ状土坑である。ＳＩ171・255との新旧関係は定かではないが、ＳＫＦ094プランをＳＩ171ないしＳＩ255の地床炉の焼土が覆っていたことから、ＳＩ171ないしＳＩ255よりは古いものと考えられる。ＳＩ171はＳＩ255より古いので、焼土がＳＩ255のものとすれば、ＳＫＦ094はＳＩ171に



SKF076
1, 2, 3, 4 褐色土10YR４／６
5 黄褐色土10YR５／６
※ １～４は黄褐色ブロック10YR５／６の混入割合の相違による。

SKF094
1 褐色土10YR４／４
2 10YR５／４
3 10YR４／３
4, 5, 6 にぶい黄褐色土10YR５／４
6 10YR４／３
7 褐色土10YR４／４
8 黄褐色土10YR５／６

SKF074（A－B）
1 褐色土10YR４／６
2 褐色土10YR４／６ 黄褐色土10YR５／６ 混合土
3 褐色土10YR４／４
4 暗褐色土10YR３／３
5 黄褐色土10YR５／６
6 黄褐色土10YR５／６シルト質
7 暗褐色土10YR３／４
8 黄褐色土10YR５／６
9 黄褐色土10YR５／６シルト質
10 明黄褐色土10YR６／６シルト質

SKF074・SKF093（C－D）
1 黄褐色土10YR５／６シルト質
2 黄褐色土10YR５／６
3 褐色土10YR４／６
4 黄褐色土10YR５／６

SKF083・SKF096（A－B）
1 黒褐色土10YR３／２
2 黒褐色土10YR２／２
3 にぶい黄褐色土４／３
4 褐色土10YR４／６
5 褐色土10YR４／４
6 褐色土10YR４／４
7 黄褐色土10YR５／６
8, 9, 10 褐色土10YR４／４
11 黄褐色土10YR５／６
12 褐色土４／４
13 にぶい黄褐色土10YR４／３

SKF083・SKF087（C－D）
1 黒褐色土10YR２／３
2 暗褐色土10YR３／４
3 黒褐色土10YR２／３
4 褐色土10YR４／６
5 にぶい黄褐色土10YR４／３
6 褐色土10YR４／６
7, 8, 9 にぶい黄褐色土10YR４／３
10 にぶい黄褐色土10YR４／３ 黄褐色土10YR５／６ 混合土
11 黒褐色土10YR２／３
12 褐色土10YR４／４
13 褐色土10YR４／４
14 暗褐色土10YR３／３

0 2 m

第20図　SKF074・076・083　093・094・096　フラスコ状土抗、SK087　土抗

伴う可能性も考えられる。平面形は円形を呈しており、開口部の径は1.37ｍ、深さ95㎝である。断面形は袋状を呈しており、最大径は開口部、最小径はくびれた部分の１ｍである。底面はほぼ平坦だが、西壁際がやや下がっている。覆土はほぼ水平堆積で、褐色土と地山土を主体とする層の互層となっており、人為的に埋められたものとも考えられる。また、覆土全体に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は石器が２点出土している。

ＳＫＦ096　（第20図）

調査区西部のＮＩ37・ＮＪ37に位置し、ＳＫ087・ＳＫＦ083と重複するフラスコ状土坑である。３遺構の切り合い関係は、ＳＫ087がＳＫＦ083を切り、ＳＫＦ096はＳＫＦ083に切られていることから、ＳＫＦ096はＳＫ086・ＳＫＦ083より古いものである。平面形は、一部調査区外となるため全体を把握することはできないが、円形を呈していたと考えられ、開口部の径は87㎝以上、深さは1.14ｍである。断面形はフラスコ状を呈しており、最大径は開口部、最小径はくびれた部分であったと思われる。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、褐色土に地山土が混入しており、全体に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ261　（第14・19図、図版10）

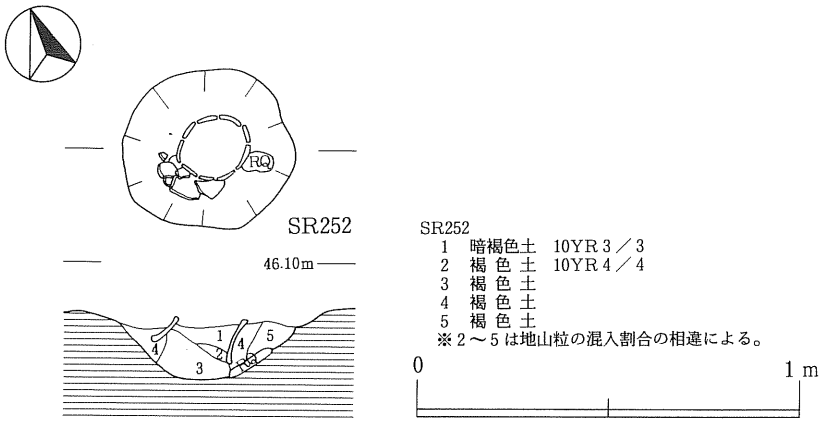
調査区西部のＮＩ38に位置するフラスコ状土坑である。ＳＫ049底面にてプランを確認したため、ＳＫ049より古いものである。平面形は不整円形を呈しており、開口部の径は1.12ｍ、深さ31㎝である。断面形は、西壁のみフラスコ状を呈している。最大径は開口部にあり、最小径は底径の90㎝である。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、明褐色土で堅く締まっており、人為的に埋められたものかもしれない。また、覆土全体に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

③　その他の遺構（第21～23図、図版22～24）

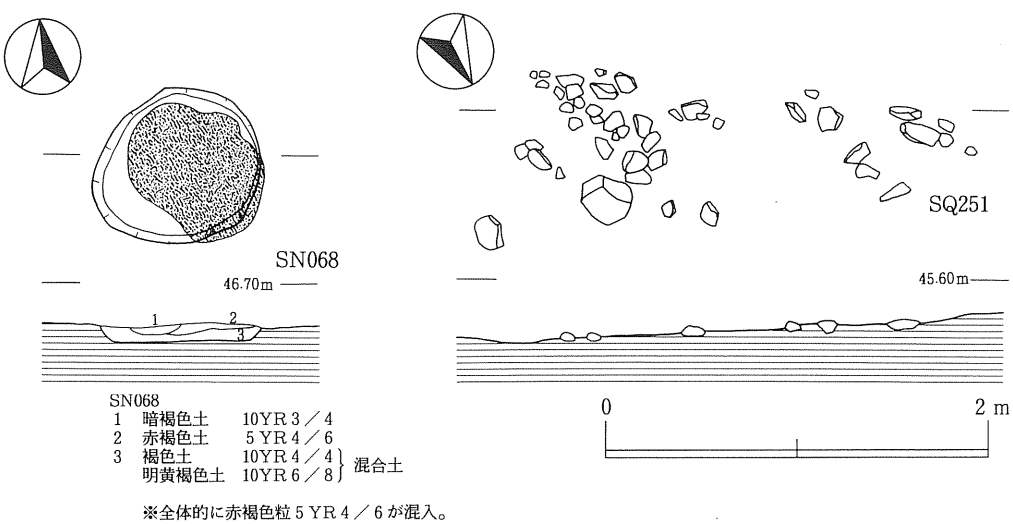
前述以外の遺構として、土器埋設遺構１基、集石遺構１基、焼土遺構１基、溝状遺構１基がある。以下、順次説明する。

ＳＲ252　（第21図、図版22）

調査区南部のＮＦ26に位置する土器埋設遺構である。ＳＩ090内でプランを確認したが、ＳＩ090との新旧関係は不明である。土器埋設のための掘形は、かなりの余裕をもって掘られており、その平面形はほぼ円形を呈し、径90㎝、深さ27㎝である。土器は底部が失われており、胴部から口縁部が倒立して埋設されている。覆土は、土器内部に暗褐色土が充填されており、掘形の埋土は褐色土である。出土遺物は、復元できなかった埋設土器片多数と掘形底面に張り付くようにして半円状扁平打製石器が１点出土している。



第21図　SR252　土器埋設遺構



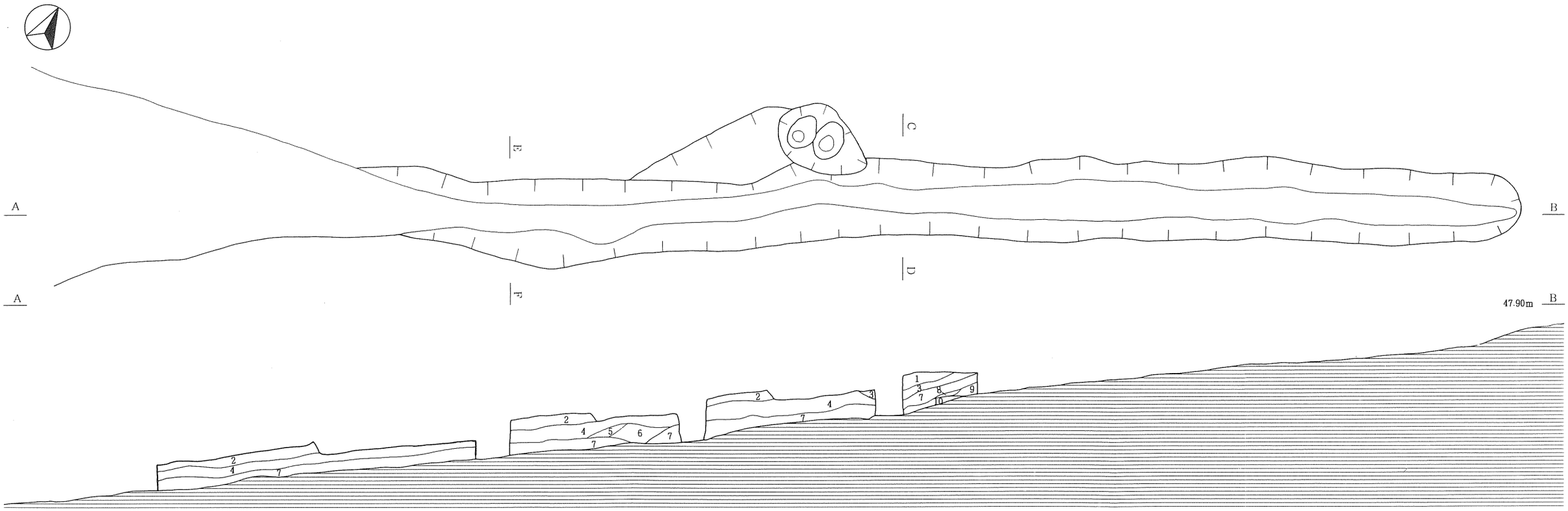
第22図　SN068　焼土遺構・SQ251　集石遺構

ＳＱ251　（第22図、図版23・24）

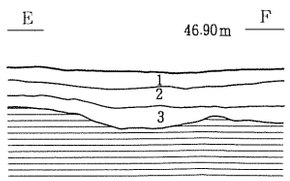
調査区南部のＳＤ216延長線上のＮＨ26・ＮＩ26に位置し、黒色土中でプランを確認した集石遺構である。ＳＤ216との新旧関係は定かではないが、ＳＱ251プランを確認した黒色土はＳＤ216堆積土と同一のものと考えられるので、ＳＱ215はＳＤ216より新しいと考えられる。全体で46個の石から構成されているが、大きく東西２つのグループに分けられる。東グループは11個の石から構成されており、石の大きさは５～20cmである。西グループは35個の石から構成されており、石の大きさは５～25cmである。両グループとも石の検出レベル差がほとんど無い平面的なもので、集石の下に掘り込み等も認められなかった。遺物は凹石が１点出土している。

ＳＮ068　（第22図）

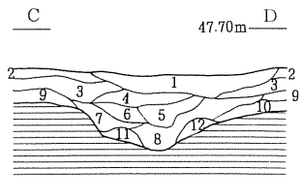
調査区南部のＭＰ22に位置する焼土遺構である。ＳＫ055・056間で、60×80cmの不整楕円形



（A－B）
1　黒褐色土10YR２／２
2　黒褐色土10YR２／２
3　黒褐色土10YR３／２
4　暗褐色土7.5YR３／３
5　褐色土10YR４／４
6　褐色土10YR４／６
7　黒褐色土10YR２／２
8　褐色土10YR４／４
9　黒褐色土10YR３／２
10　褐色土10YR４／４
　　黄褐色土10YR５／６　混合土



（E－F）
1　黒褐色土10YR２／２
2　黒褐色土10YR３／２
3　褐色土10YR４／４



（C－D）
1　黒褐色土10YR２／２
2　黒褐色土10YR２／２
3　黒褐色土10YR２／２
4　黒褐色土10YR３／２
5　暗褐色土7.5YR３／３
6　暗褐色土7.5YR３／３
　　黒褐色土10YR３／２　混合土
7　黒褐色土10YR３／２
8　黒褐色土10YR２／２
9　黒褐色土10YR３／２
10　褐色土10YR４／４
11　黒褐色土10YR３／２
　　黄褐色土10YR５／６　混合土
12　褐色土10YR４／４
　　黄褐色土10YR５／６　混合土

0　4 m

第23図　SD216　溝状遺構

を呈する焼土の広がりを認めたものである。焼土の厚さは１～５㎝で、中央部ほど厚い。下にほぼ円形の掘り込みがあり、規模は86×93㎝、深さ10㎝である。掘り込み覆土は褐色ないし明黄褐色土で、受熱のためかやや赤味がかっている。遺物は出土しなかった。

ＳＤ216　（第23図、図版24）

調査区西部と南部を画するＮＢ30・ＮＣ29～30・ＮＤ29～30・ＮＥ28～29・ＮＦ28～29に位置する溝状遺構である。全長26.2ｍ、上面幅1.2～1.6ｍ、底面幅50～86㎝、深さ10～50㎝で、断面形は浅いＵ字状を呈している。底面は凹凸が無く、緩やかに北東から南西へ下っている。溝の底面レベル差は3.08ｍで、勾配は約７°である。遺構検出密度の高い場所にありながら他の遺構との切り合い関係が無いことから、他とは切り離された機能ないし性格が考えられる。可能性の一つとして、自然の沢を利用した道が挙げられよう。覆土は、黒褐色ないし褐色土を主体としており、地山土ブロックと炭化物細片がわずかに混入している。遺物は縄文土器・石器・フレイクが多数出土している。

第２節　遺構内出土遺物

遺構内出土遺物は、遺構毎に土器・石器の順に説明を加える。土器の分類基準および石器の分類基準は前回報告時の分類基準を原則として踏襲したが、必要に応じて新規に分類を加えたものもある。前回報告時の分類基準はあえて記載しないので、必要に応じて前回の報告書を参照していただきたい。

１　遺構内出土土器　（第24～30図、図版25～30）

ＳＩ044出土土器　（第24図１、第28図24、図版25・28）

１は、全体に斜縄文と横位の綾絡文を施文した深鉢形土器である。口頸部は外反し、体部は底部にむかってすぼんでいる。また、底部周縁部は外方に張り出している。24は沈線文に円形の刺突文が加えられ、口唇部にも円形の刺突が施されるものである。

ＳＩ064出土土器　（第28図25、図版28）

25は、体部に斜縄文と綾絡文を施したものである。

ＳＩ171・255出土土器　（第24図２～５、第25図６、第28図26～35、第29図36～42、図版25・27～29）

２は、指頭圧痕のある隆帯を１条横位に貼付した後、全体に網目状撚糸文を施文した深鉢形土器である。口頸部は外反し、体部は底部にむかってすぼんでいる。３は羽状縄文を横位に施文したもので、口頸部が外反しているものである。４は斜縄文を施文したもので底部周縁部が外方に張り出している。５は同一個体の口頸部と底部と思われるもので、全体に複節斜縄文が

施文されている深鉢形土器である。口頸部は上部がわずかに外反し、体部は底部にむかってすぼみ、底部周縁部が外方にわずかに張り出している。６は、指頭圧痕のある隆帯２条を横位に貼付した後、隆帯間を除いた部分に撚糸文を施文した深鉢形土器である。口頸部は外反し、体部はわずかにふくらんだ後、底部にむかってすぼんでいる。26・32・35は指頭圧痕のある隆帯を貼付したもので、その後26は網目状撚糸文を、32・35は複節斜縄文を施文している。27・30は、外反する口頸部に斜縄文を施文したものである。30は口唇部に指頭圧痕が施されている。28は、体部に組紐を回転施文後、口頸部に綾絡文を施したものである。29は、斜縄文と綾絡文を施したものである。31・34は、三角形を基調とした文様が沈線で描かれているものである。33は、粘土紐による渦巻文が口頸部に突起状に貼付されたものである。36は、粘土紐による波状文が口頸部および口唇部に施されているものである。37・39は、粘土紐の上に刻み目や原体圧痕が施されるもので、ともに後で斜縄文が施文されている。38・40・41は網目状撚糸文が施文されるもので、38は口唇部に指頭圧痕が施されている。42は、撚糸文が縦位に施文されている。

ＳＩ200出土土器　（第29図43・44、図版29）

43は、外反する口頸部に羽状縄文が縦位に施文されている。44は、指頭圧痕のある隆帯を貼付した後、斜縄文を施文したものである。

ＳＩ214出土土器　（第27図21、第29図45～48、図版29）

21は、底面が上げ底のものである。45・46は、外反する口頸部に斜縄文を施文したものである。47は、指頭圧痕のある隆帯を２条貼付した後、沈線で区画し、他の部分に斜縄文を施文したものである。48は、羽状縄文を縦位に施文したもので、口縁部に波状をなす突起がある。

ＳＫ046出土土器　（第29図49・50・52、図版29・30）

49は、斜縄文を施文したもので、口唇部に刺突が施されている。50は、体部に斜縄文と綾絡文を施文したものである。52は、やや外反する口頸部に撚糸文を縦位に施文したものである。

ＳＫ047出土土器　（第25図７、第27図23、第29図51・53、第30図54～61、図版26・30）

７は、撚糸文を縦位に施文した深鉢形土器である。口頸部わずかに外反し、体部は底部にむかってわずかにすぼんでいる。また口唇部には原体圧痕が施されている。23は、底部周縁部が外方に張り出しており、底面はやや上げ底ぎみである。51は、外反する口頸部に撚糸文を縦位に施文したものである。53は斜縄文を施文したもので、口唇部に原体圧痕が施されている。54は鋸歯状の沈線を施文したものである。55・58・59・60は、条線による文様を施したものである。55・58は口唇部に刻みが施されている。56は網目状撚糸文が施文されている。57は指頭圧痕のある隆帯を貼付した後、条線による文様を施している。61は口頸部に縄文原体の圧痕文が施されたものである。

ＳＫ048出土土器　（第27図22、第30図62・64・65、図版30）

22は、底面がやや上げ底となっているものである。62・65は、多軸絡条体を回転施文したものである。64は、条線による文様を施したものである。

ＳＫ049出土土器　（第25図８～12、第26図13・14・16、第27図20、図版27）

８は無節の結束羽状縄文を縦位に施文したもので、口唇部にも同一原体の圧痕が施されている。９は撚糸文を縦位に施文したもので、口唇部に原体圧痕が施されている。10は撚糸文を縦位に施文したものである。11は斜縄文と縦位の綾絡文を施文したものである。12は、羽状縄文を縦位に施文した深鉢形土器である。13は羽状縄文を横位に施文したもので、口唇部に指頭圧痕が施されている。14は全体に斜縄文を施文したもので、口唇部にも斜縄文が施されている。16は、撚糸文を縦位に施文した小型の鉢である。ほぼ直立する口頸部から体部がわずかにふくらみ、底部にむかってすぼんでいる。20は、底部周縁部が外方に張り出している。

ＳＫ050出土土器　（第30図63、図版30）

63は、網目状撚糸文を施したものである。

ＳＫ054出土土器　（第26図17～19、図版26）

17は、羽状縄文を縦位に施文した深鉢形土器である。口頸部はわずかに外反し、体部は底部にむかってすぼんでいる。また口唇部には縄文原体圧痕が施されている。18は、斜縄文を施文したものである。19は、羽状縄文を縦位に施文した深鉢形土器である。

ＳＫ056出土土器　（第26図15、第30図66～68、図版26・30）

15は、羽状縄文を横位に施文した深鉢形土器である。口頸部は外反し、体部はわずかにふくらんだ後、底部にむかってすぼんでいる。また口唇部には刻みが加えられている。66は、沈線によって横位の波状文が施文されたものである。67は撚糸文を縦位に施文したもので、口唇部に原体圧痕が施されている。68は、斜縄文と綾絡文が施文されているものである。

ＳＫ063出土土器　（第30図69、図版30）

69は斜縄文と横位の綾絡文を施文したもので、口縁部分が薄手で無文のものである。

ＳＤ216出土土器　（第30図70、図版30）

70は斜縄文と横位の綾絡文が施文されたものである。

実測土器の１・11は本遺跡分類（以下略）の第18類に属するものである。２・６は第23類、３・８・12・13・15・17・19は第19類、４・14・18は第31類、５は第32類、７・９・10・16は第20類にそれぞれ属するものである。

拓影図の24は第14類、25・29・50・68～70は第18類、26・32・35・44・47・57は第23類、27・30・45・46・49・53は第31類に属するものである。28は第16類に属するものだが、組紐を回転

施文後に綾絡文を施しており、第18類との共通要素をも含んでいる。31・34は第13類、33は第２類、36は第４類、37・39は第６類、38・40・41・56・63は第21類、42・51・52・67は第20類、43・48は第19類、54は第８類、55・58～60・64は第26類、61は第15類、62・65は第33類、66は第７類にそれぞれ属するものである。

２　遺構内出土石器（第31～47図、図版36～43）

ＳＩ044出土石器（第35図127・128、第45図215）

127・128は縦型石匙である。127は全体の形状がゆるい弧を描くもので、128は左側縁に直線的な刃部をもつものである。215は凹石で、棒状の礫の１側面が凹んでいるものである。

ＳＩ054出土石器（第31図71・72、第35図129、第41図166・168、第45図216・217、第47図230・231、図版36・38）

71・72は凹基無茎石鏃で、71は基部の凹部が深く、72は浅いものである。129は縦型石匙である。左側縁に直線的な刃部をもつものである。166・168は半円状扁平打製石器である。166は両側縁に抉りをもつものである。168は刃部以外にも刃部の対辺と１側辺に打ち欠きが加えられているものである。216・217・231は凹石である。216は棒状の礫の２側面が凹んでいるものである。217は円形の礫の２側面が凹んでいるものである。231は磨石からの転用で、磨面を含む２側面が凹んでいるものである。230は磨石で、１側面のみ磨られているものである。

ＳＩ064出土石器（第47図234）

234は石皿の破損品である。

ＳＩ090出土石器（第44図203、第45図218～220）

203は石錘で、長軸の両端に抉りをもつものである。218～220は凹石である。218～220はいずれも２側面が凹んでいるものである。

ＳＩ099出土石器（第38図150、第39図157、図版36）

150は箆状石器である。両側縁がほぼ平行し、平面形が隅丸長方形を呈するものである。157は削器で、剥片に内湾する刃部を作出したものである。

ＳＩ171・255出土石器（第31図73～90、第33図112・113、第34図117・120・126、第35図130～134、第38図151、第39図158、第40図165、第41図167・169～173、第44図204・205・212～214、第45図221・222、第47図232・235、図版37・39・53）

73～74・76～90は凹基無茎石鏃、75は平基無茎石鏃である。75は平面形が二等辺三角形を呈し、基部両端がやや丸みのあるものである。76・79・82・87は基部の凹部が浅く、73・74・77・80・81・84・85・90は深いものである。78・83・86・88・89は基部の凹部が弧状とならずに両端のみ突出しているものである。112・113は尖頭器である。112は尖頭部と基部がともに尖る

もので、113は基部が丸みをもつものである。117は石錐で、剥片の両先端を尖らせているものである。120は有撮石器である。表面は全面に調整が施されているが、裏面は主要剥離面を残している。122は玦状耳飾りの未製品である。緑色凝灰岩を素材として全体を整形後、片面まで研摩した段階のものである。126は石剣ないし石棒の破損品である。130～134は縦型石匙である。130は２側縁が大きく外に膨らむものである。131は左側縁、132～134は右側縁に直線的な刃部をもつものである。151は箆状石器である。基部側より刃部が幅広のものである。158は削器で、剥片に内湾する刃部を作出したものである。165は打製石斧である。素材の礫の大半を打ち欠いて仕上げているが、両側面に礫の自然面が残っている。167・169～173は半円状扁平打製石器である。167・169は刃部の対辺と両側辺、170は刃部の対辺と１側辺、171は１側辺、172は両側辺に抉りをもつもので、173は抉りをもたないものである。さらに171は刃部の対辺と１側辺、172は刃部の対辺に打ち欠きが加えられている。204・205は石錘である。204は長軸の両端と他の１辺、205は短軸の両端に抉りをもつものである。212・214は磨製石斧である。212は基端が斜めになっているもので、受熱による色調の変化から着柄の状態で火を受けたと思われる。柄は磨製石斧に対して直角にではなく、やや斜めに取り付けられていたようである。213は基端が丸いものである。221・222は凹石で、ともに１側面が凹んで対面は磨られている。232は凹石である。磨石からの転用で、磨面のみ凹んでいるものである。235は石皿の破損品である。

ＳＩ200出土石器　（第32図91、第36図135、第39図159、第40図164、第41図174、第44図206、図版36・38）

91は平基無茎石鏃である。135は縦型石匙で、２側縁が大きく外に膨らむものである。159は削器で、剥片に内湾する刃部を作出したものである。164は掻器である。剥片の先端部にゆるい弧を描く刃部をもつものである。174は半円状扁平打製石器で、１側辺に抉りをもつものである。206は石錘で、抉りを４ケ所にもつものである。

ＳＩ214出土石器　（第32図92、第33図115、第34図123、第36図136～138、第38図152・153、第39図160・161、第42図175・176、第44図207・209、図版36・38・53）

92は平基無茎石鏃で、基部両端が丸みのあるものである。115は破損しているが他と照合すれば基部が丸みをもつ尖頭器と思われる。123は燕尾形石製品である。軟質凝灰岩を素材として全体を研磨した後、一端に切り込みを入れたものである。切り込みを除けば形態的にはカツオブシ形石製品に類似している。136・138は縦型石匙、137は斜型石匙である。136・138は全体の形状がゆるい弧を描くものである。137は刃部に対して約45°の角度でつまみが付くものである。152・153は箆状石器である。ともに基部側より刃部側が幅広のもので、152の基端は尖っている。160・161は削器である。160は剥片に内湾する刃部を作出したものである。161は

剝片に弧状の刃部を作出したものである。175・176は半円状扁平打製石器である。175は刃部以外にも刃部の対辺と両側辺に打ち欠きが加えられている。176は両側辺に抉りをもつものである。207・209は石錘で、ともに長軸の両端に抉りをもつものである。

ＳＫ049出土石器　（第32図93～98、第34図125、第36図139～141、第37図142、第38図154・155、第42図177、第44図208、第46図223・224、図版38・41・42）

93～95・98は凹基無茎石鏃、96・97は平基無茎石鏃である。94・95・98は基部の凹部が浅く、93は深いものである。96は基部両端が丸みのあるものである。125は石剣ないし石棒の破損品である。139～142は縦型石匙である。139～141は全体の形状がゆるい弧を描くものである。142は２側縁が大きく外に膨らむものである。154・155は箆状石器である。ともに基部側より刃部側が幅広のものである。177は半円状扁平打製石器で、両側辺に抉りをもつものである。208は石錘で、長軸の両端と他の１辺に抉りをもつものである。223・224は凹石である。223は磨石からの転用で、磨面を含む２側面が凹んでいるものである。224は破損しているが２側面に凹みが認められる。

ＳＫ050出土石器　（第32図99～101、第34図118、第37図143、第40図163、図版40）

99は円基石鏃、100・101は凹基無茎石鏃である。101は基部の凹部が深く、100は基部両端が突出しているものである。118は石錐である。表裏全体に調整を施し、一方を尖らせて錐部としたものである。143は縦型石匙で、右側縁に直線的な刃部をもつものである。163は削器で、剝片に内湾する刃部を作出したものである。

ＳＫ053出土石器　（第42図178、図版42）

178は半円状扁平打製石器である。１側辺に抉りをもつもので、刃部以外にも刃部の対辺と１側辺に打ち欠きが加えられている。

ＳＫ056出土石器　（第32図102、第37図144、第44図210、図版40・42）

102は凹基無茎石鏃で、基部の凹部が浅いものである。144は縦型石匙で、右側縁に直線的な刃部をもつものである。210は石錘で、４ケ所に抉りをもつものである。

ＳＫ061出土石器　（第46図226）

226は凹石で、棒状の礫の２側面が凹んでいるものである。

ＳＫ077出土石器　（第44図211、図版42）

211は石錘で、長軸の両端に抉りをもつものである。

ＳＫ087出土石器　（第33図114、図版40）

114は基部が丸みをもつ尖頭器である。

ＳＫ095出土石器　（第32図103、第42図179、図版42）

103は凹基無茎石鏃で、基部の凹部が浅いものである。179は半円状扁平打製石器で、刃部以

外にも刃部の対辺と両側辺に打ち欠きが加えられている。

ＳＫ245出土石器　（第38図156）

156は箆状石器で、基部側より刃部側が幅広のものである。

ＳＫＦ046出土石器　（第32図104～106、第34図119・121、第37図145、第39図162、第46図225、図版40・42）

104・105は凹基無茎石鏃、106は平基無茎石鏃である。105は基部の凹部が浅く、104は深いものである。106は基部両端が丸みのあるものである。119は石錐である。二等辺三角形の剥片の３辺に調整を施したもので、錐部の断面形は菱形である。121は有撮石器で、縦長の剥片を素材として全体に調整を施したものである。145は縦型石匙で、右側縁に直線的な刃部をもつものである。162は削器である。225は凹石である。棒状の礫の３側面が凹んでいるものである。

ＳＫＦ047出土石器　（第32図107・108、第33図116、第34図124、第37図146～149、第42図180、第43図183～202、第46図227、図版40～43）

107は平基無茎石鏃、108は凹基無茎石鏃である。108は基部の凹部が浅いものである。116は尖頭器で、基部が丸みをもつものである。124は抉りのある石製品である。板状の安山岩の両側縁に抉りを入れたものである。146～149は縦型石匙である。146・149は２側縁が大きく外に膨らむものである。147は右側縁、148は左側縁に直線的な刃部をもつものである。180は半円状扁平打製石器で、刃部以外にも両側辺に打ち欠きが加えられている。183～202は一括して出土した石錘である。いずれも両端に２ケ所の抉りをもつが、長軸の両端に抉りをもつもの(183・185・186・189・191～193・201）と短軸の両端に抉りをもつもの（184・187・190・196～199）とがある。重量は、194の32ｇが最も軽く、189の277ｇが最も重い。全体としてはおおよそ60～110ｇの間にまとまるようである。これらは出土状況から一括廃棄されたものと考えられ、その用途としては編み物用錘や漁網錘が考えられる。227は凹石で、棒状の礫の２側面が凹んでいるものである。

ＳＫＦ048出土石器　（第32図109・110）

109は凹基無茎石鏃、110は平基無茎石鏃である。109は基部の凹部が深いものである。

ＳＫＦ065出土石器　（第46図228）

228は凹石で、楕円形の礫の２側面が凹んでいるものである。

ＳＫＦ076出土石器　（第32図111）

111は平基無茎石鏃である。

ＳＫＦ094出土石器　（第46図229、第47図233、図版42）

229は凹石である。磨石からの転用で、磨面を含む２側面が凹んでいるものである。233は磨石で、１面のみ磨られているものである。

ＳＲ252出土石器　（第42図181、図版42）

181は半円状扁平打製石器で、刃部以外の打ち欠きや抉りなど加えられていないものである。

ＳＤ216出土石器　（第42図182、図版42）

182は半円状扁平打製石器で、刃部以外の打ち欠きや抉りなど加えられていないものである。

以下、実測石器を前回報告時分類に準じて分類する。

石鏃の75・91・92・96・97・106・107・110・111は石鏃分類のＡ―ｂ類、72・76・79・82・87・94・95・98・102・105・108はＢ―ａ類、71・73・74・77・79～81・84・85・90・93・101・104・109はＢ―ｂ類、78・83・86・88・89・110・103はＢ―ｃ類、99はＣ類に属するものである。

尖頭器の112は尖頭器分類のＡ―ｂ類、113～116はＢ―ａ類に属するものである。

石錐の118は石錐分類のＡ類、117はＣ類、119はＤ―ｂ類に属するものである。

有撮石器の121は有撮石器分類のＢ―ａ類、120はＢ―ｂ類に属するものである。

玦状耳飾りの122は、玦状耳飾り分類Ｃ類の製作工程第２段階途中までのものである。

燕尾形石製品の123は燕尾形石製品分類ｂ類に属するものである。

石匙の132・133・134・143～145・147は石匙分類のＡ―ａ―１類、128・129・131・148はＡ―ａ―２類、130・135・142・146・149はＡ―ｂ―２類、138～141はＡ―ｃ―１類、127・136はＡ―ｃ―２類、137はＢ―ａ類に属するものである。

箆状石器の151・153～156は箆状石器分類のＡ―ａ類、152はＡ―ｂ類、150はＢ―ｂ類に属するものである。

削器の157～160・163は削器分類のＡ―ａ類、161はＣ類、162はＤ類に属するものである。

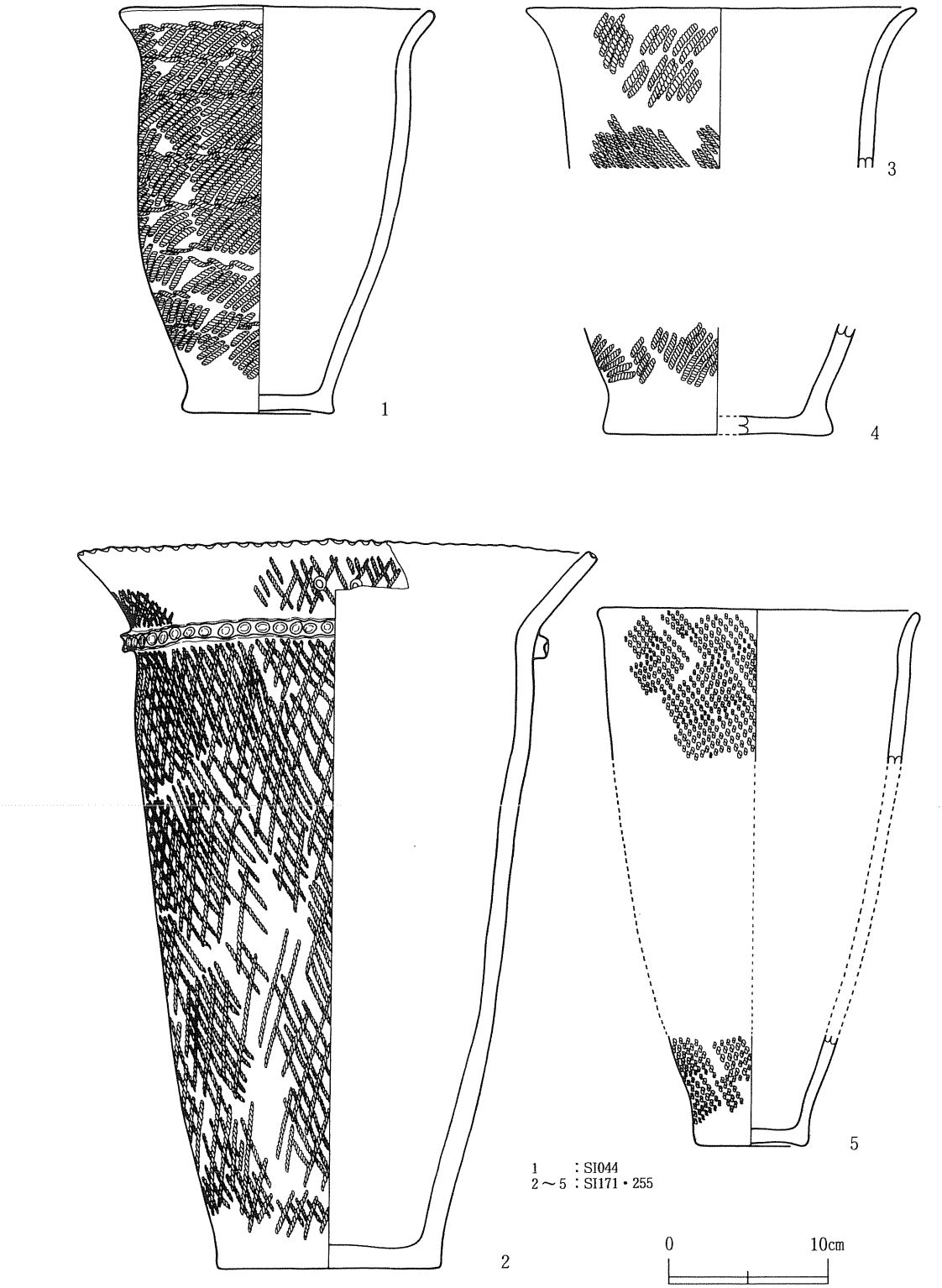
掻器の164は掻器分類のＡ―ａ類に属するものである。

打製石斧の165は打製石斧分類のＡ類に属するものである。

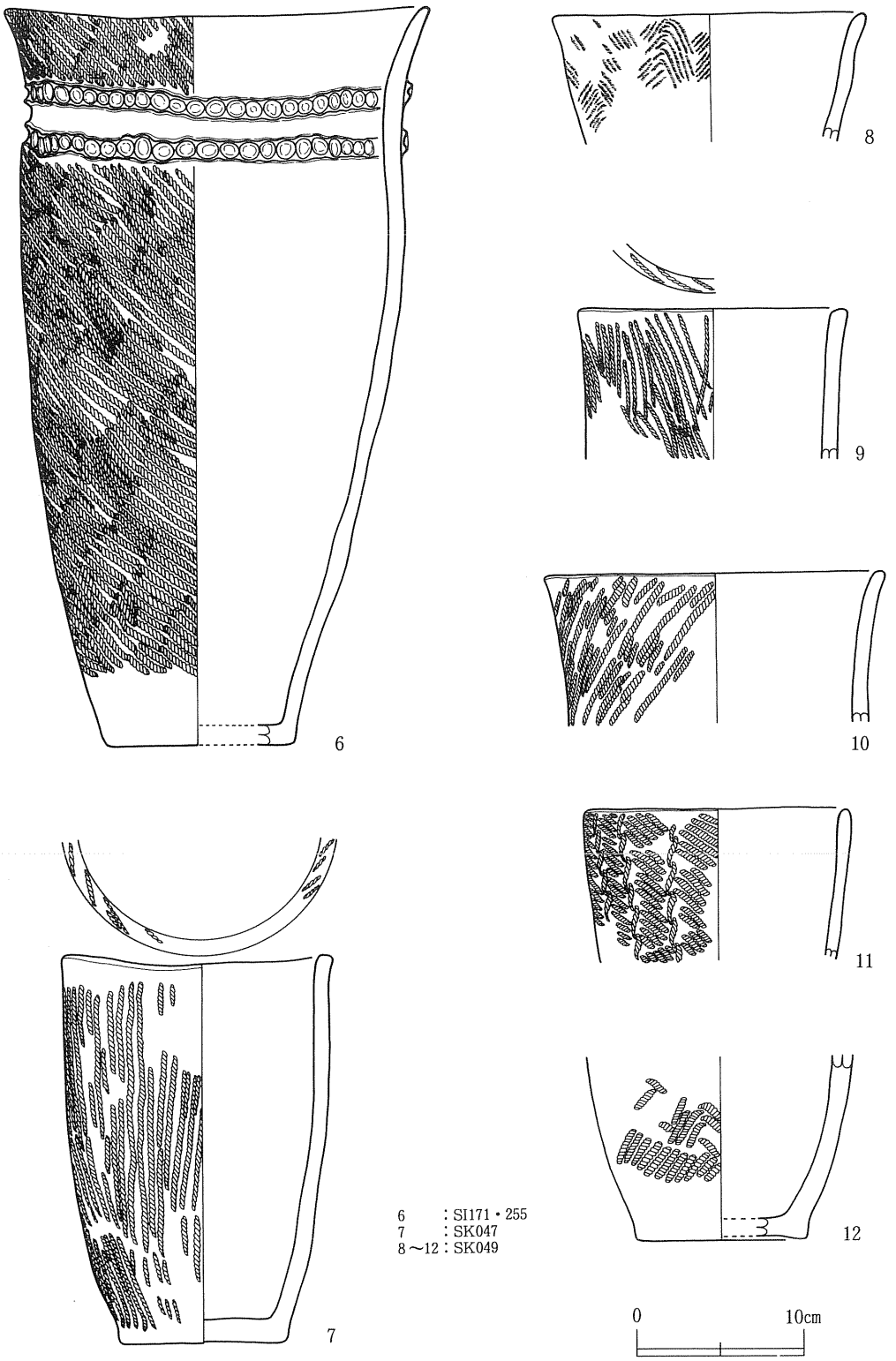
半円状扁平打製石器の173・181・182は半円状扁平打製石器分類のⅠ類、166・176・177はⅡ―１類、174はⅡ―２類、167はⅡ―４類、170はⅡ―５類、180はⅢ―１類、172はⅣ―２類、175・179はⅤ―１類、168はⅤ―２類、171・178はⅤ―３類に属するものである。

第３節　遺構外出土遺物

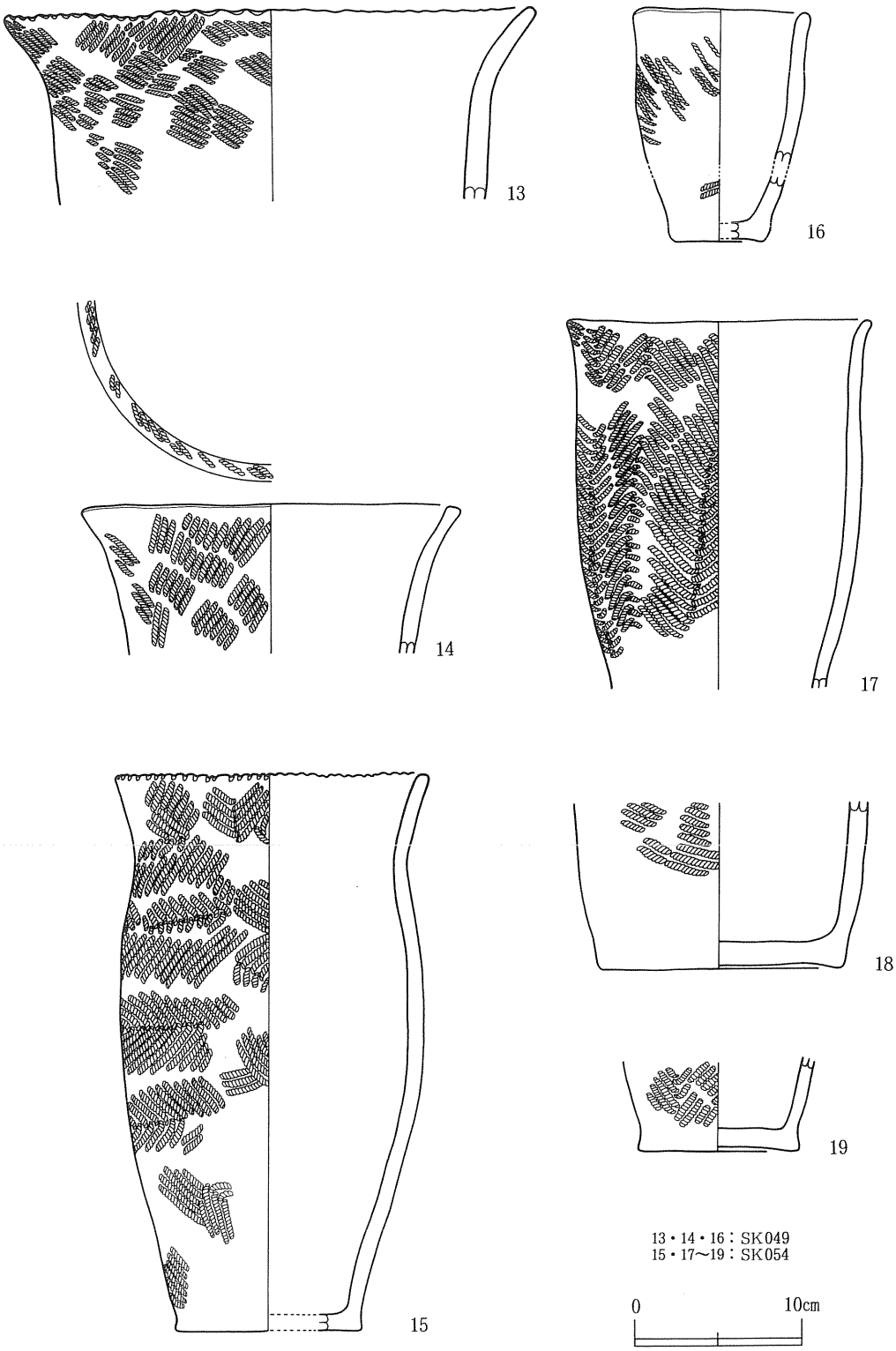
遺構外出土遺物は、土器コンテナ22箱・石器コンテナ22箱の計44箱である。遺構外出土遺物の大部分は前回調査時に捨て場とした箇所の延長部分からで、今回の調査区は捨て場の外れにあたるため前回ほどの遺物出土量はない。土器は縄文時代前期の円筒下層ｂ式・大木４式の深鉢形土器を主体とし、立地的に大木式土器分布圏と円筒式土器分布圏の接点にあたる本遺跡の



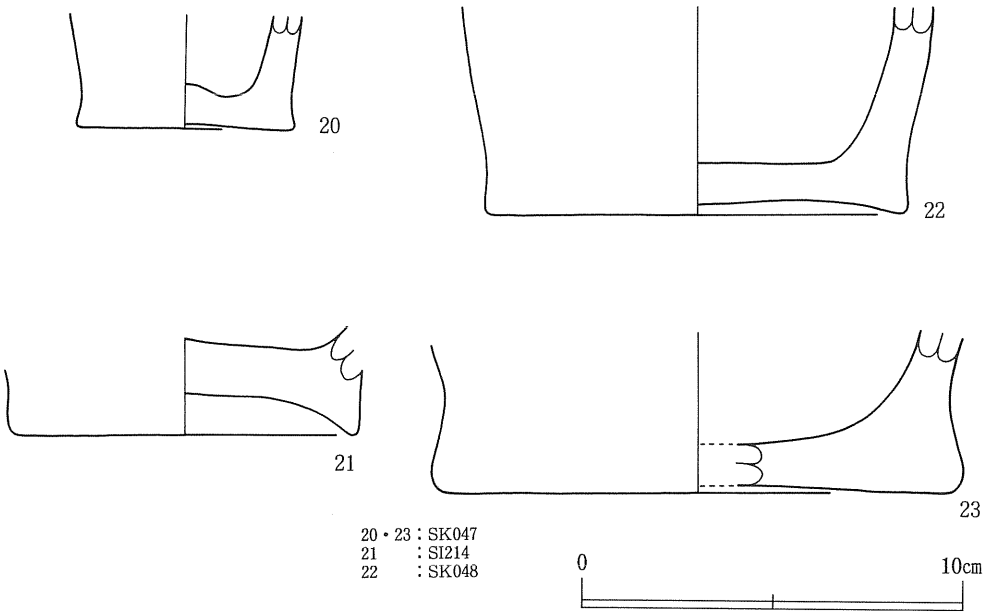
第24図　遺構内出土土器(1)



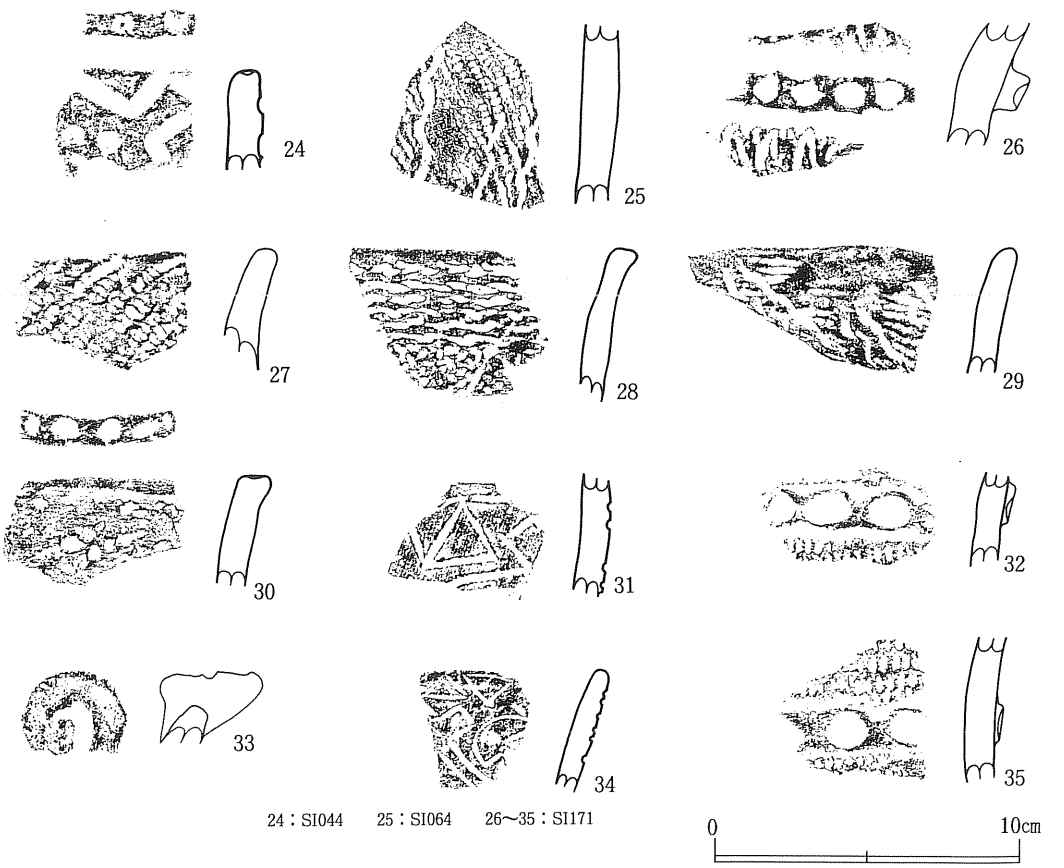
第25図　遺構内出土土器(2)



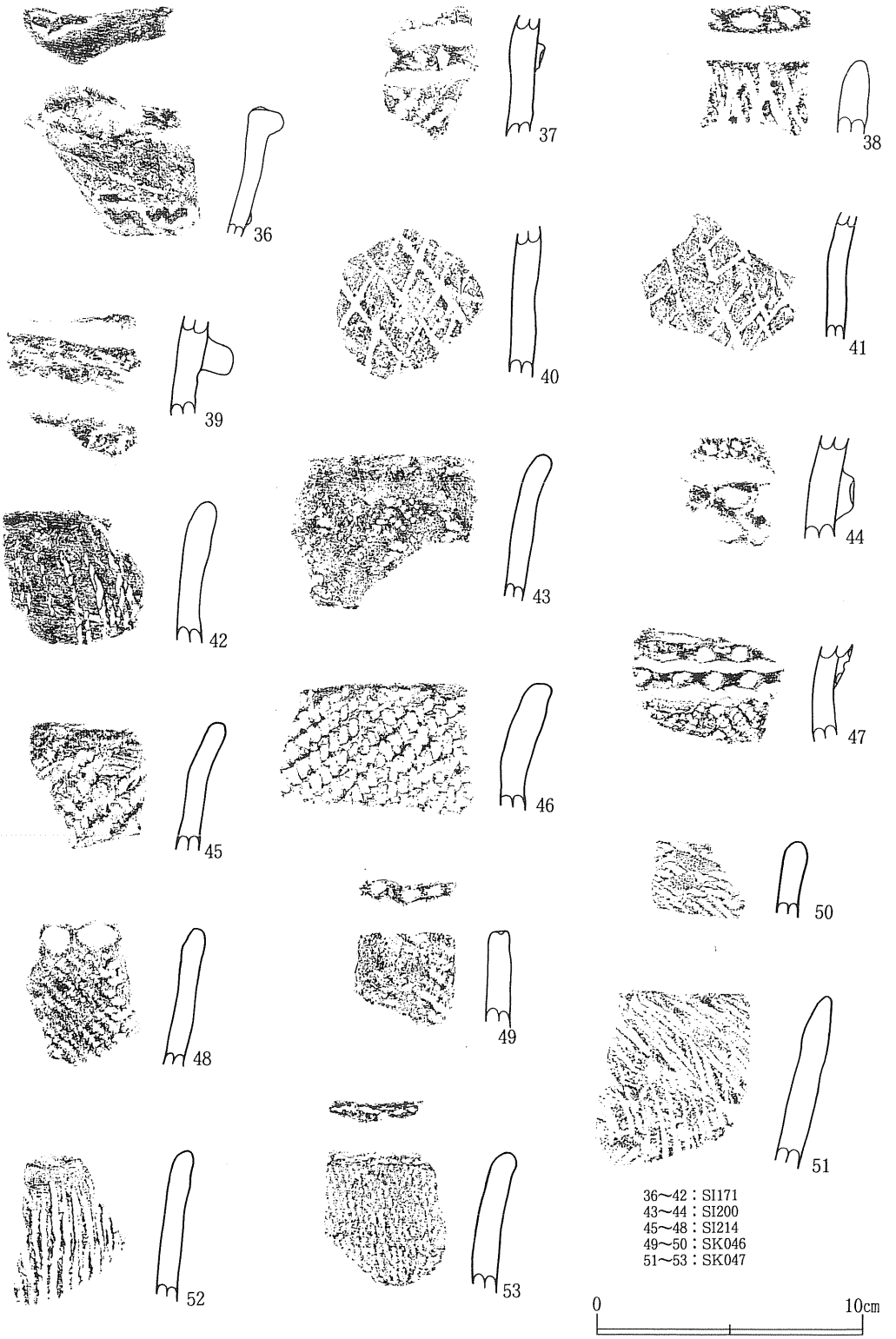
第26図　遺構内出土土器(3)



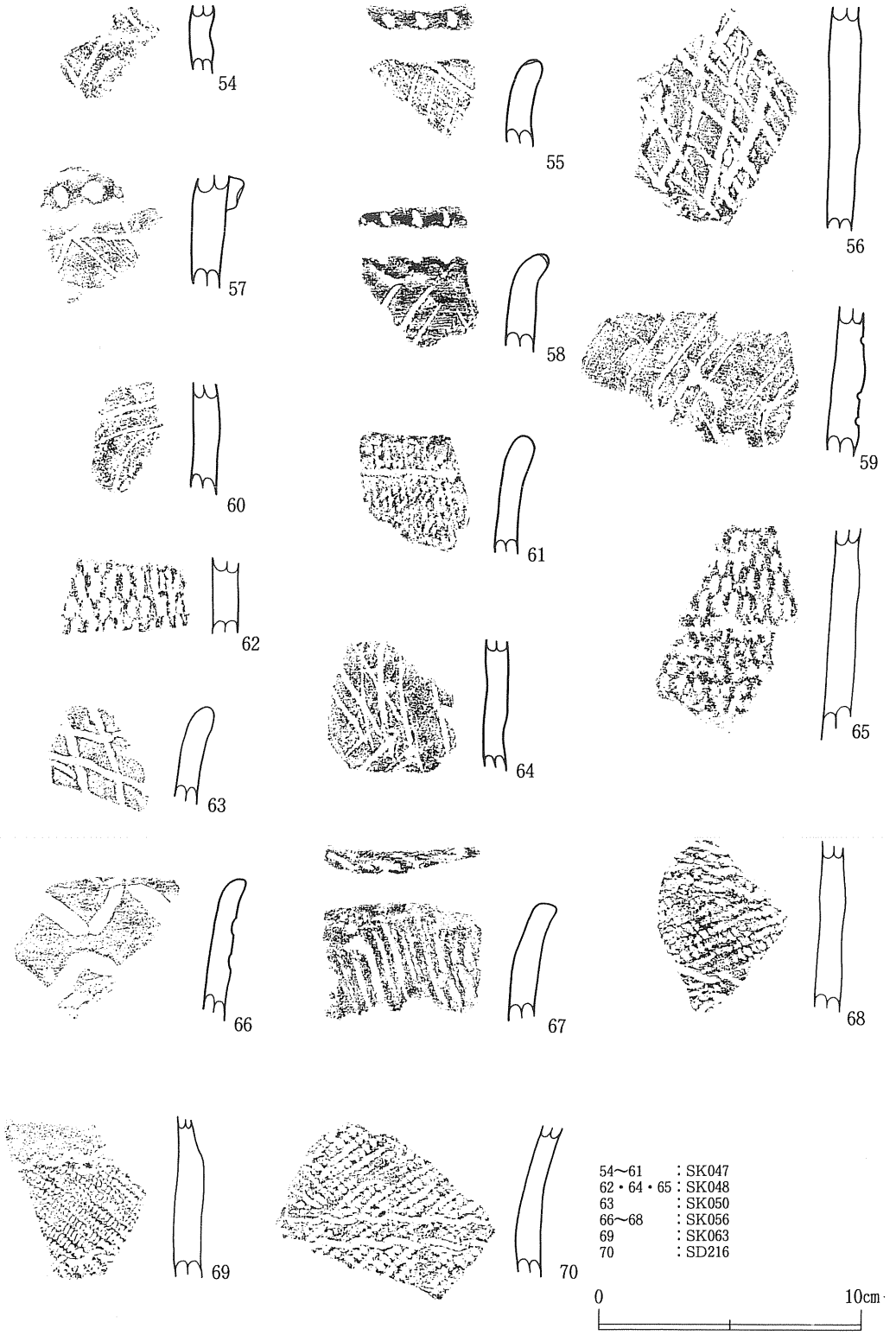
第27図　遺構内出土土器(4)



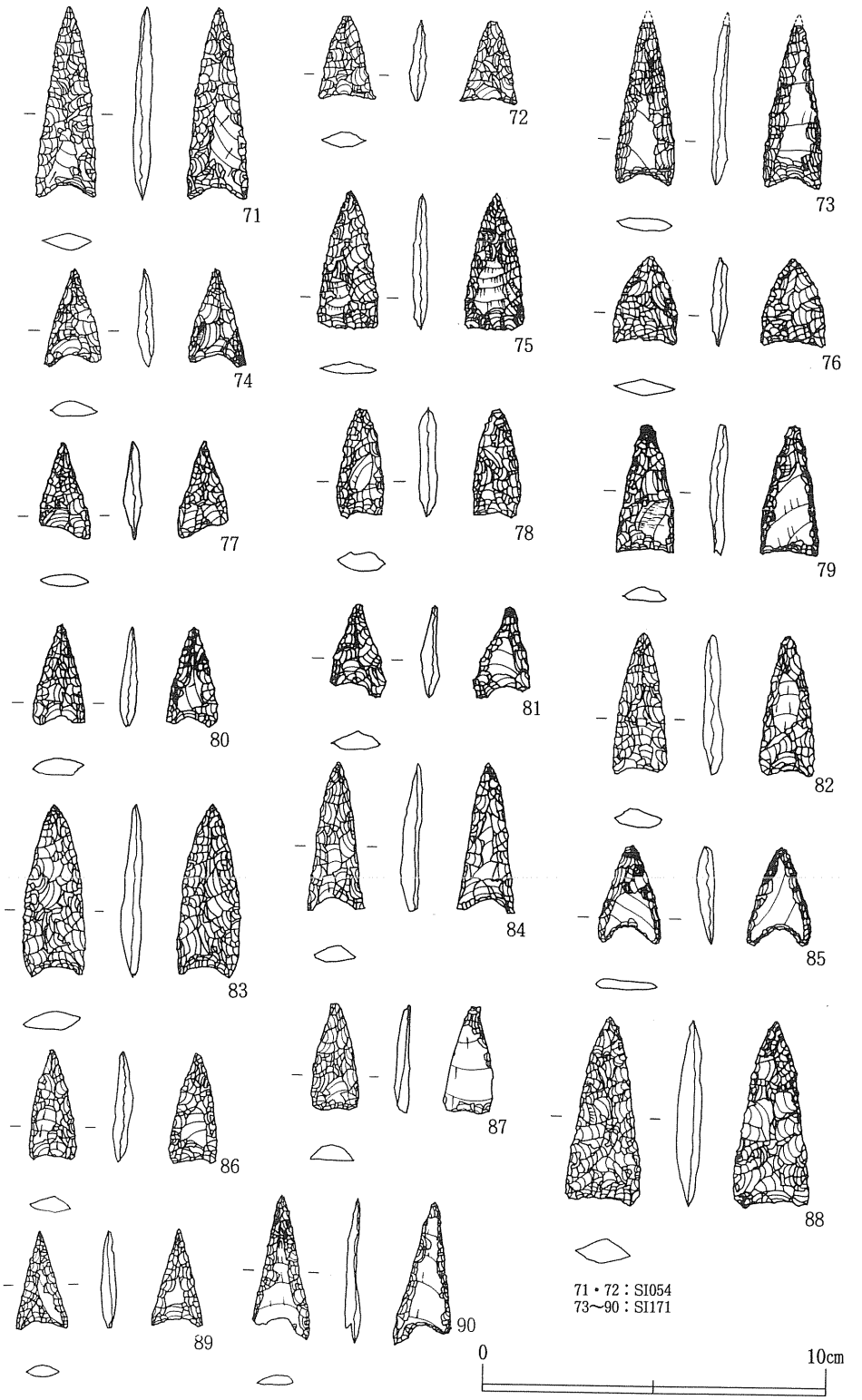
第28図　遺構内出土土器(5)



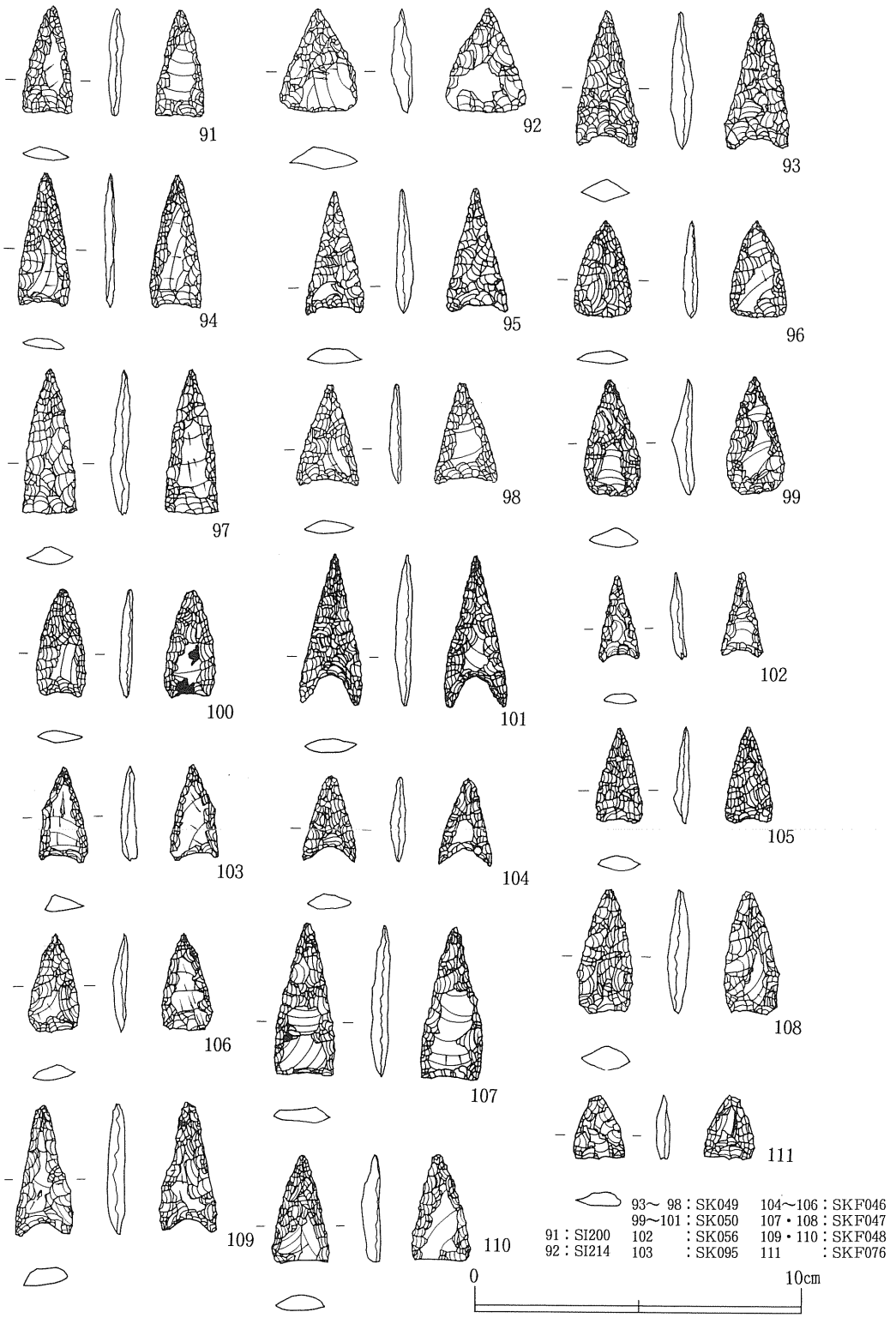
第29図　遺構内出土土器(6)



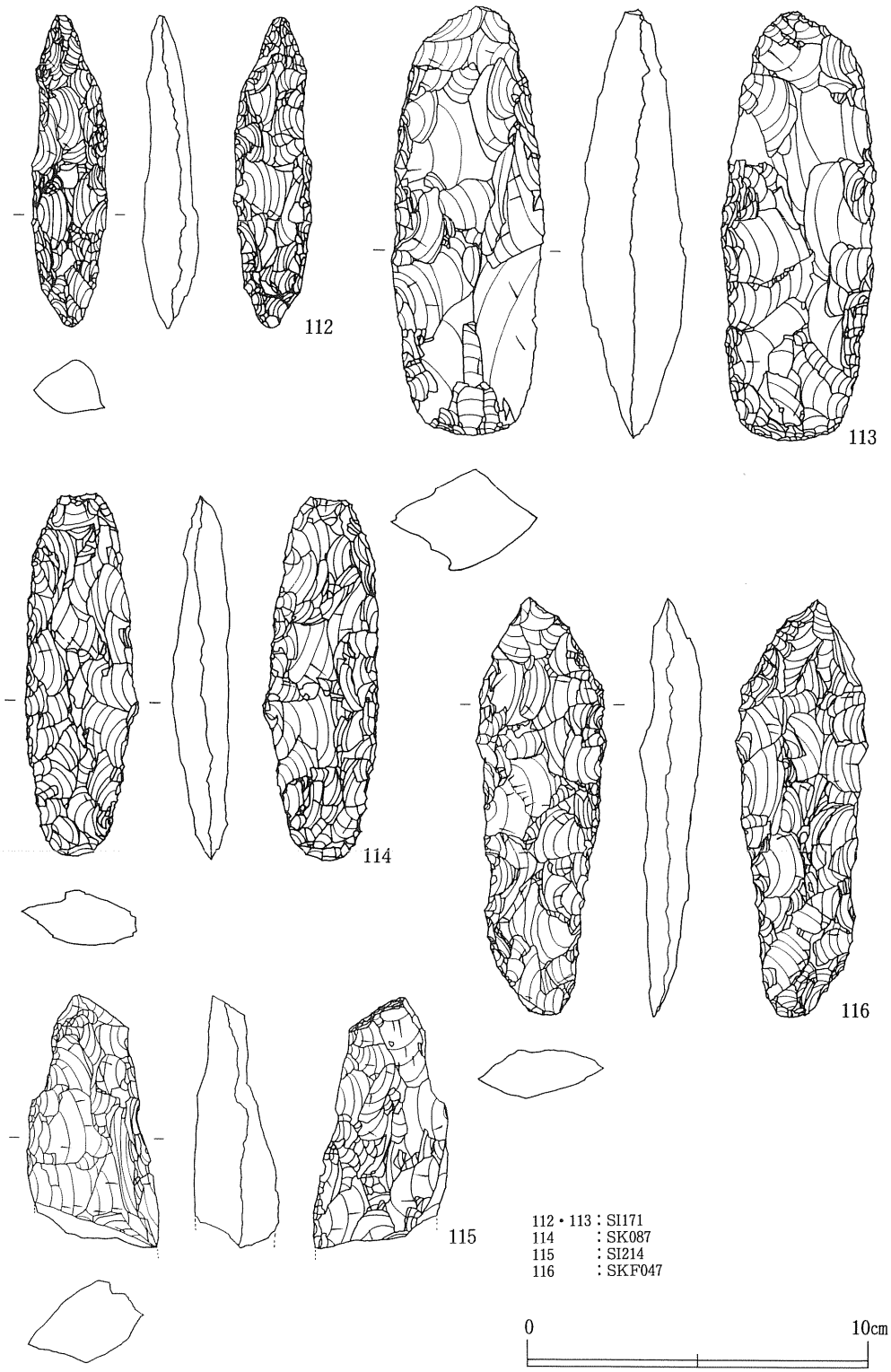
第30図　遺構内出土土器(7)



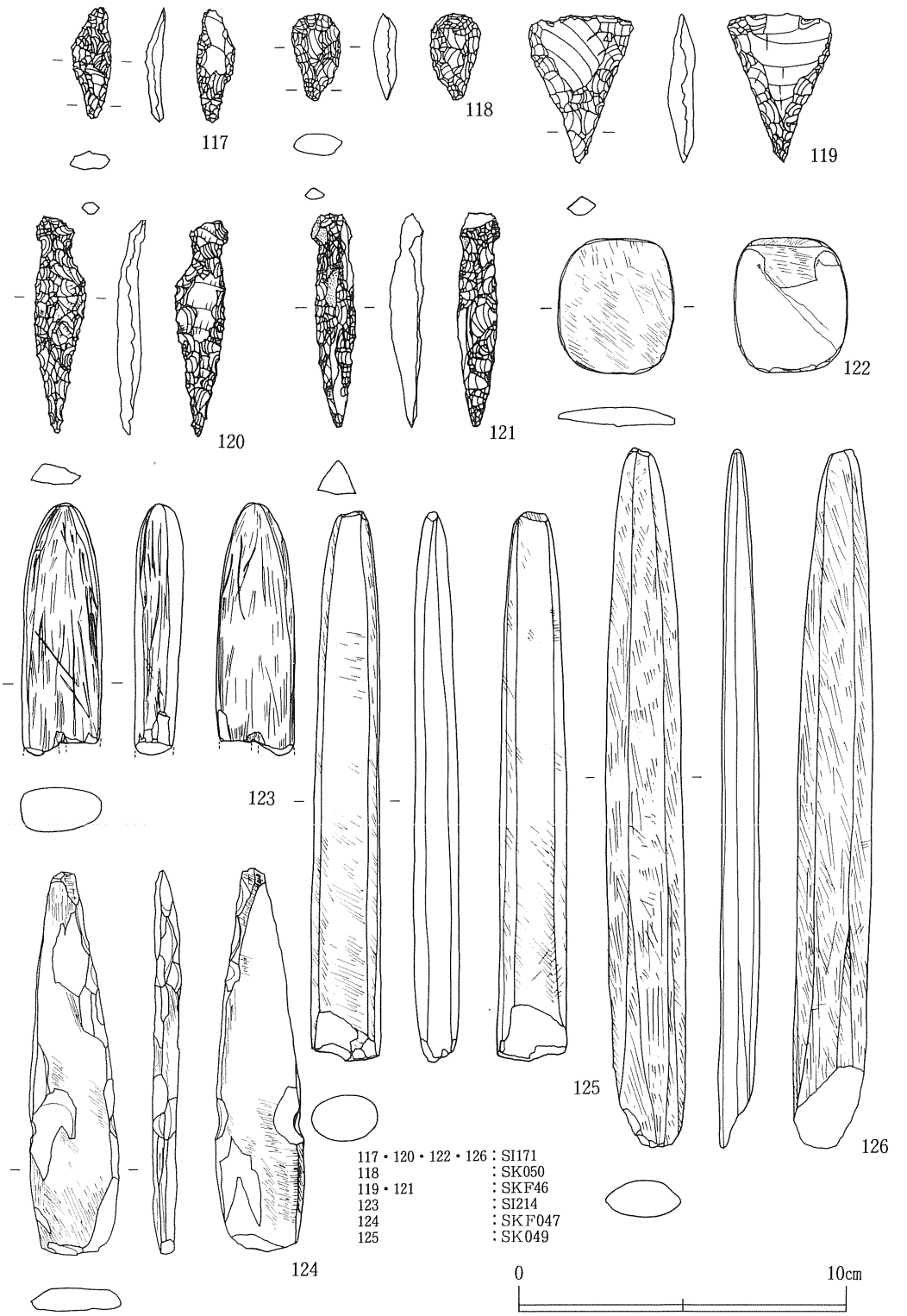
第31図　遺構内出土石器(1)



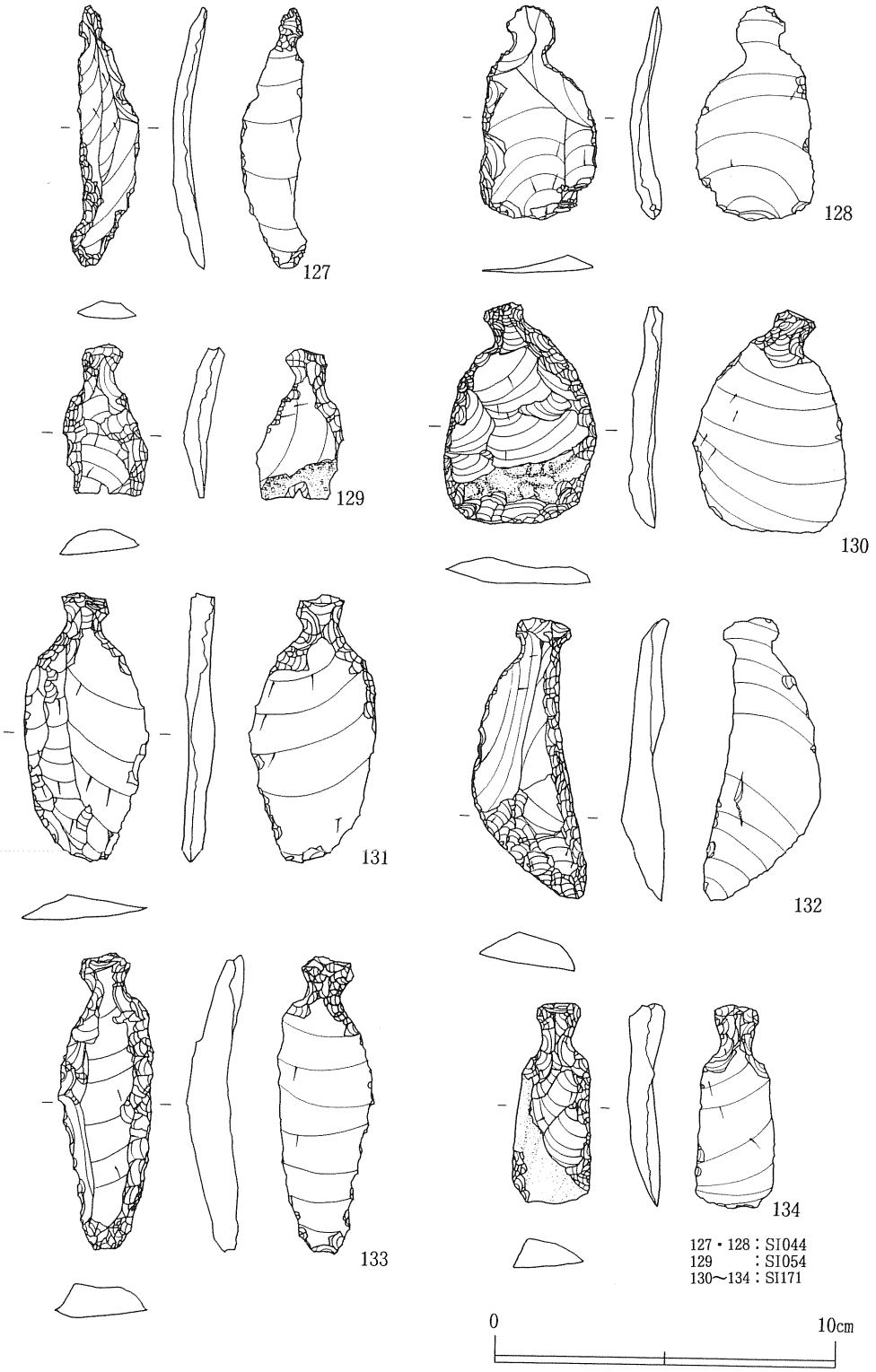
第32図　遺構内出土石器(2)



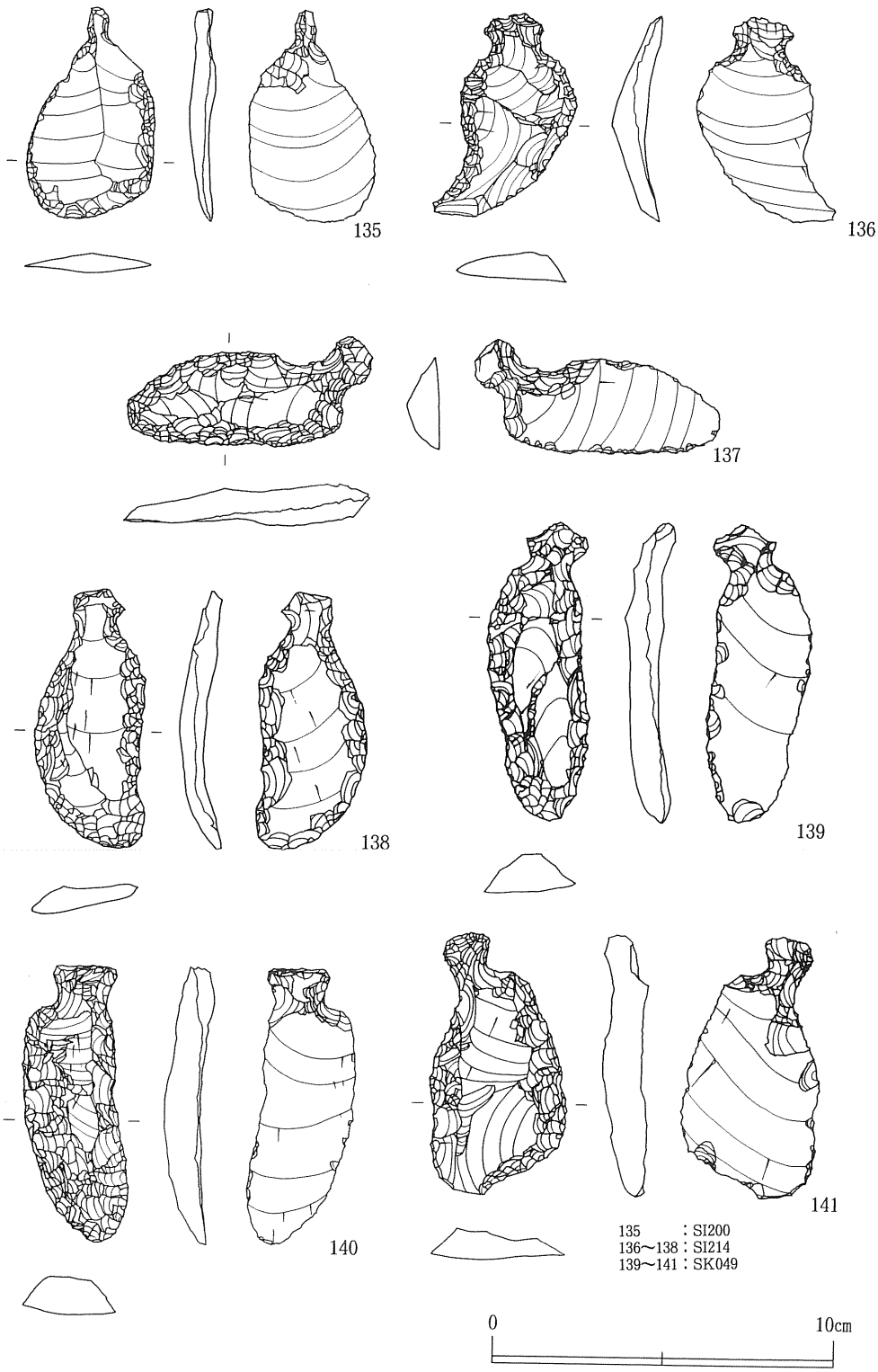
第33図　遺構内出土石器(3)



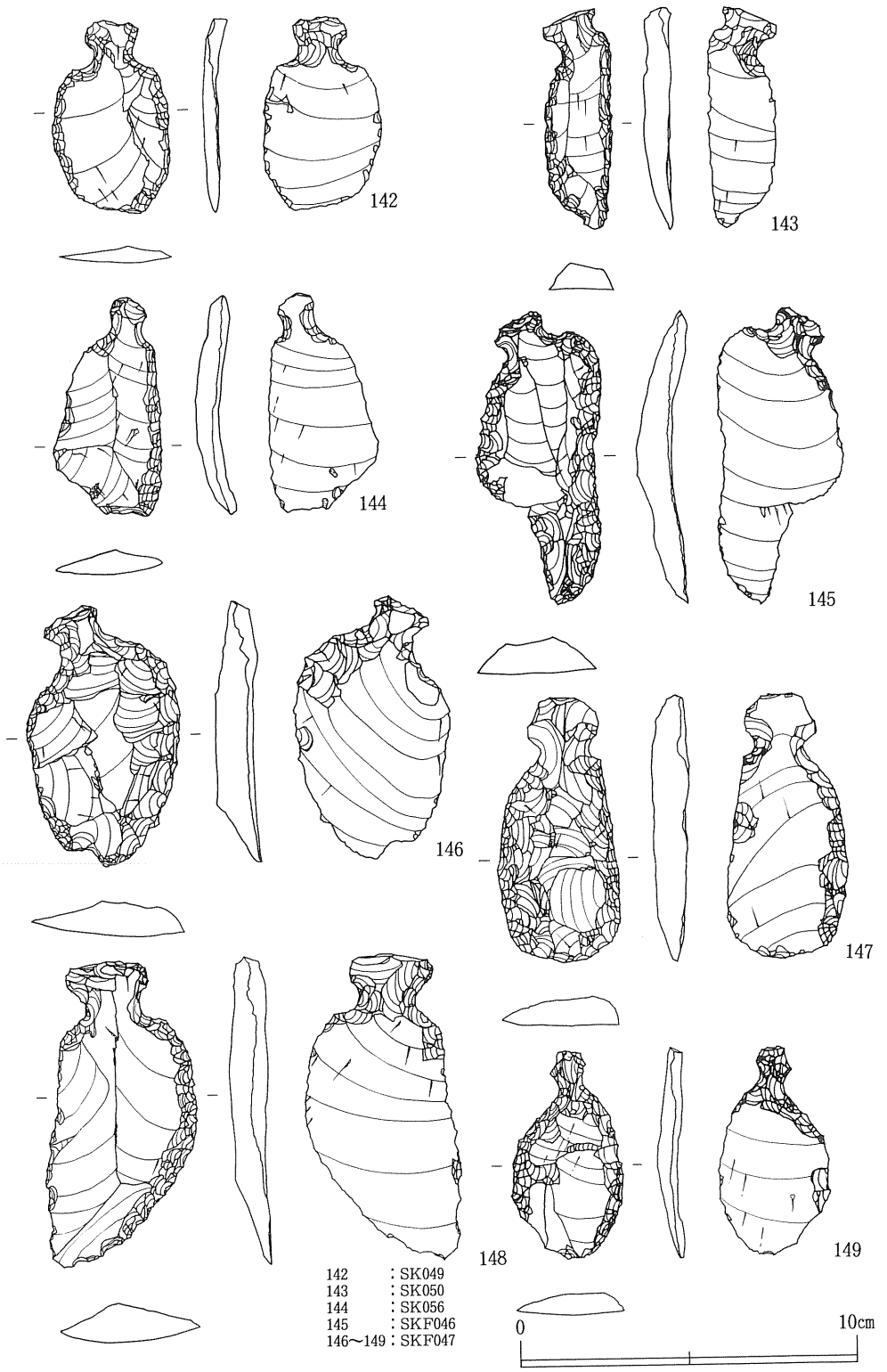
第34図　遺構内出土石器(4)



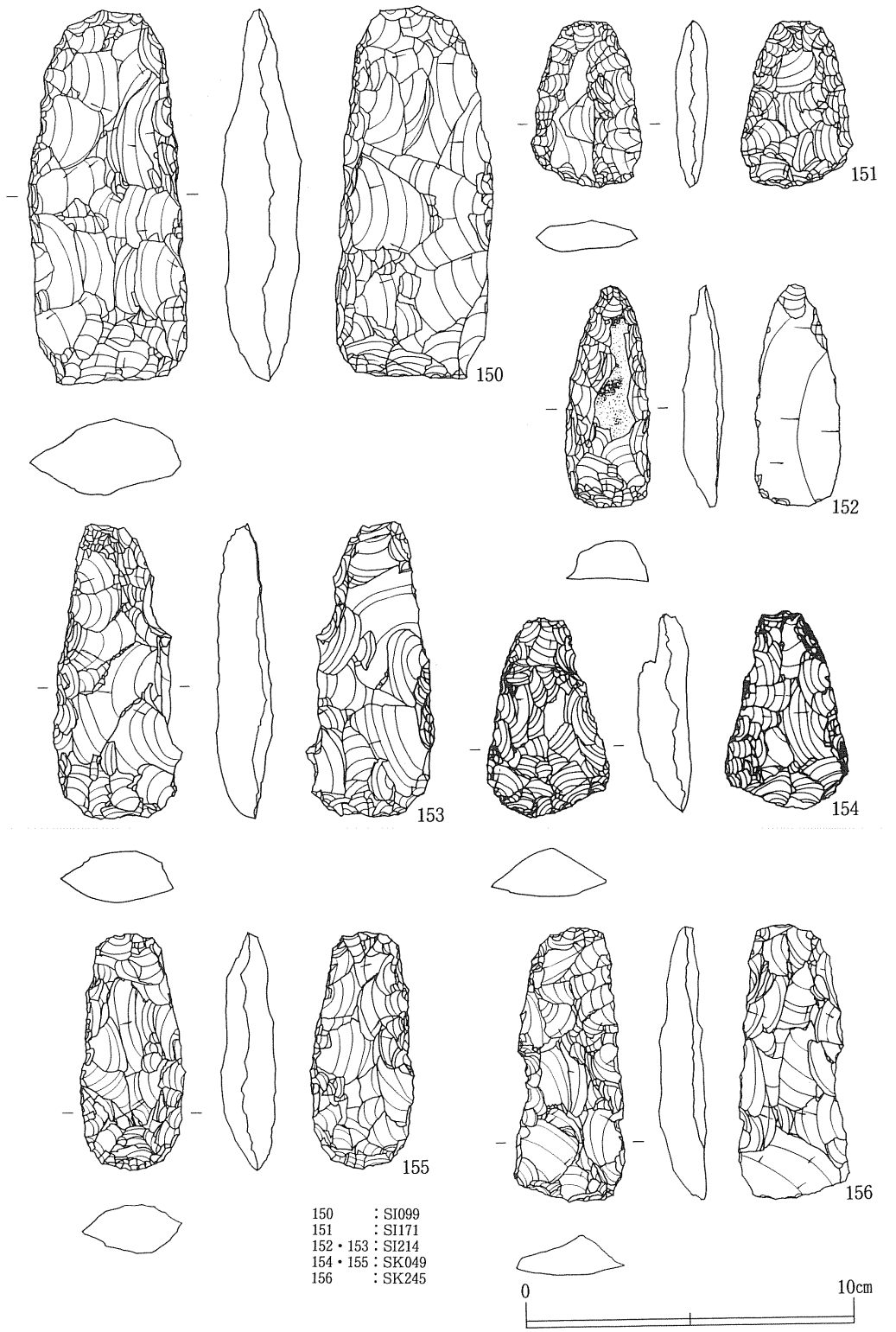
第35図　遺構内出土石器(5)



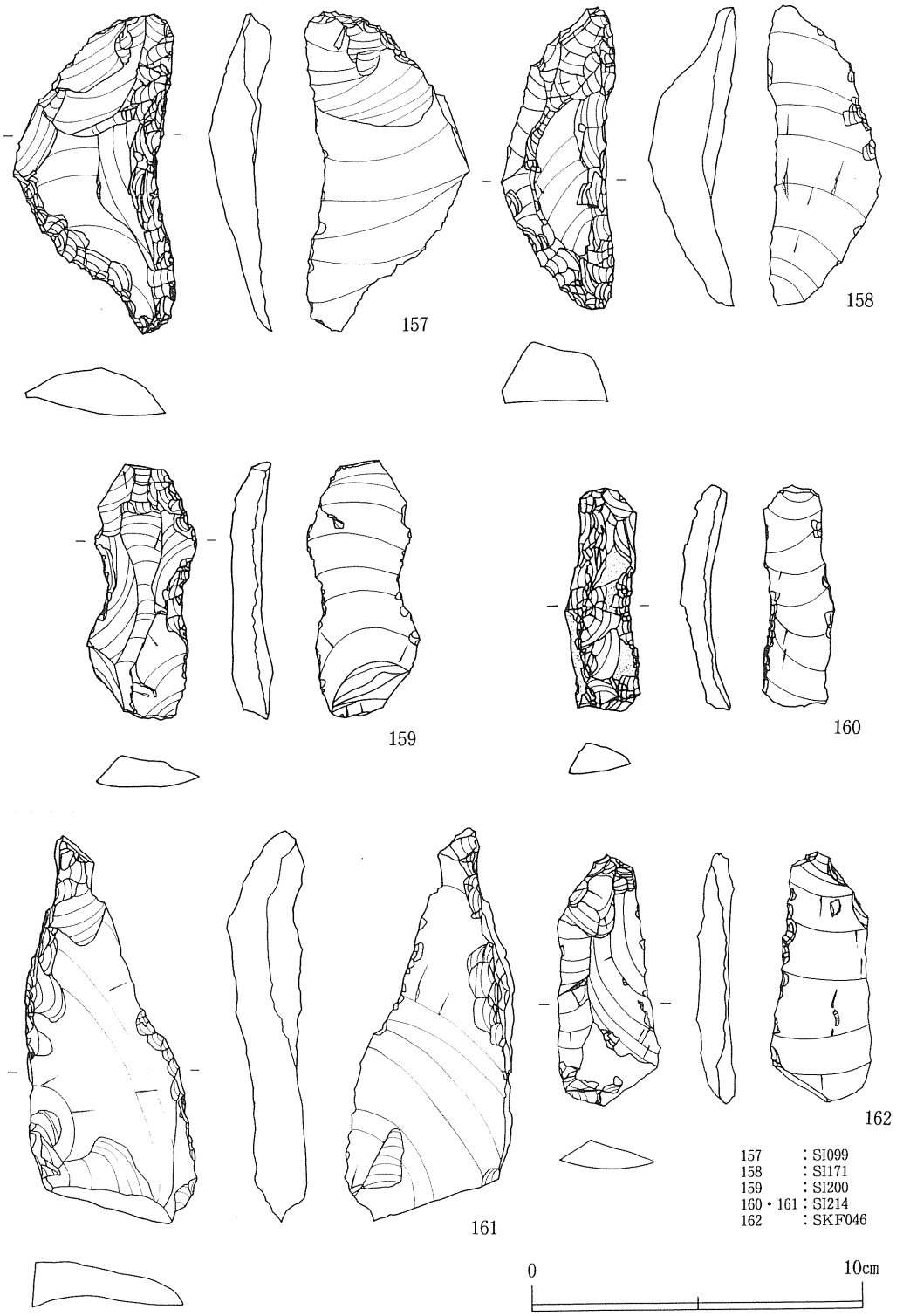
第36図　遺構内出土石器(6)



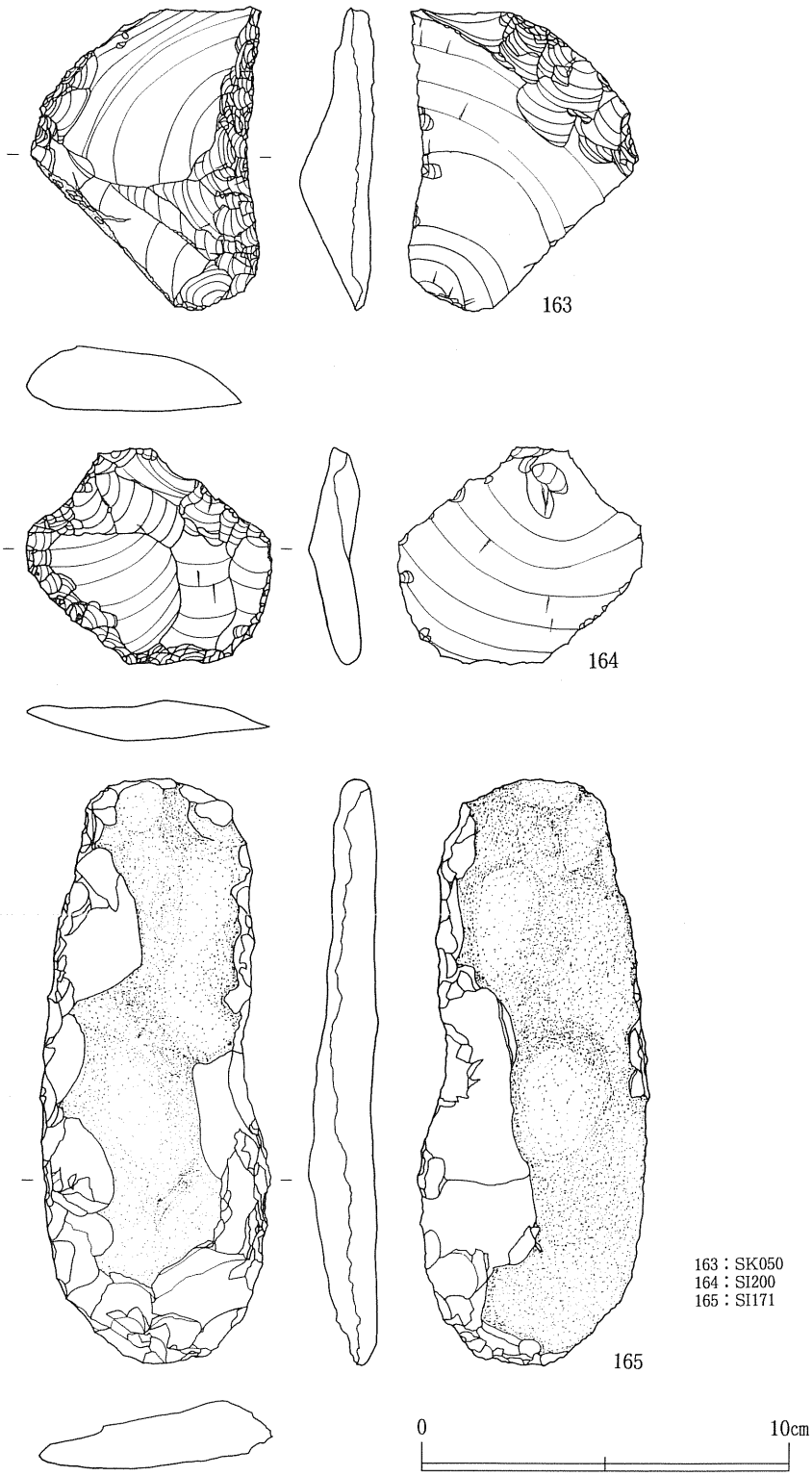
第37図　遺構内出土石器(7)



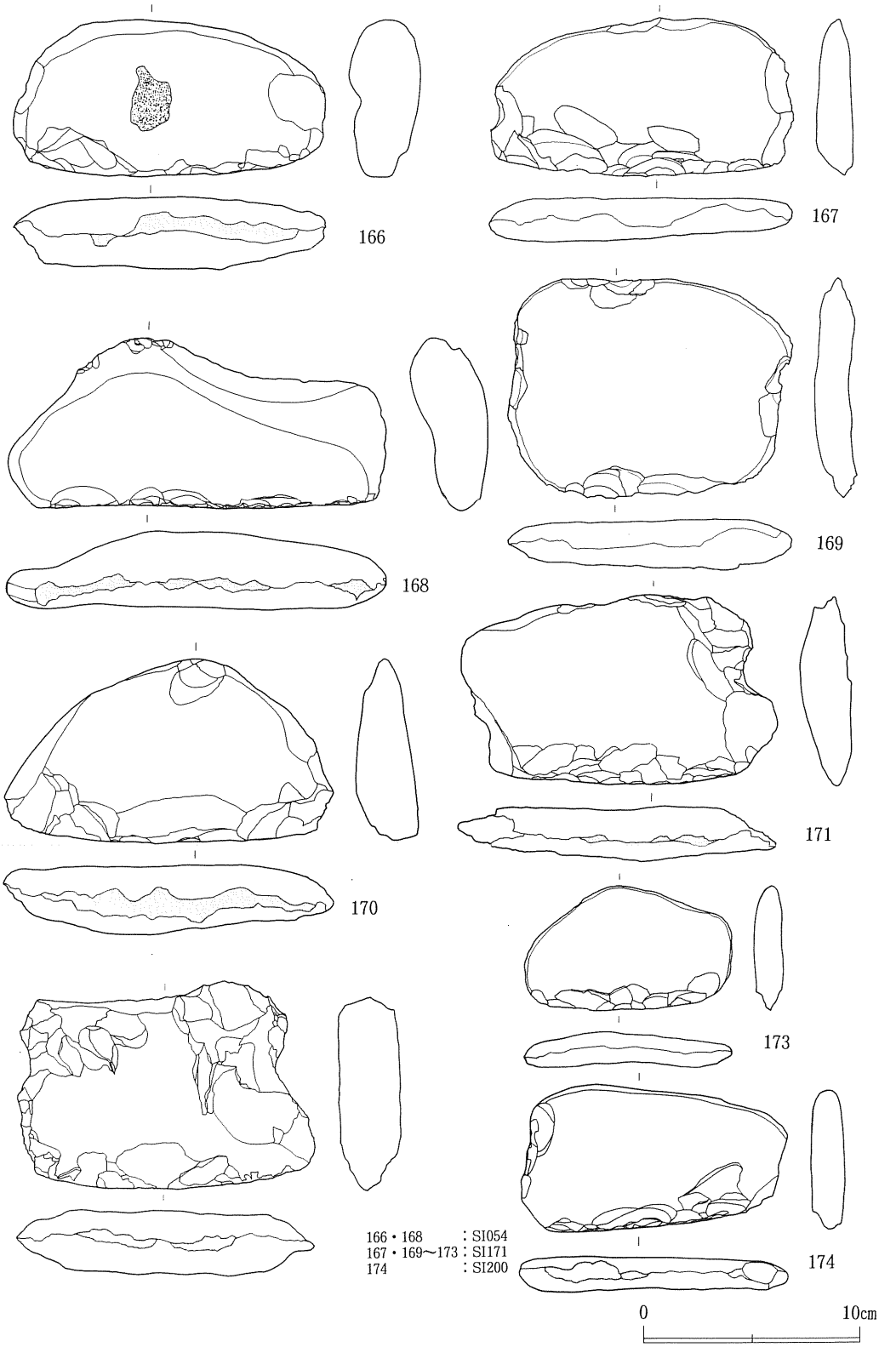
第38図　遺構内出土石器(8)



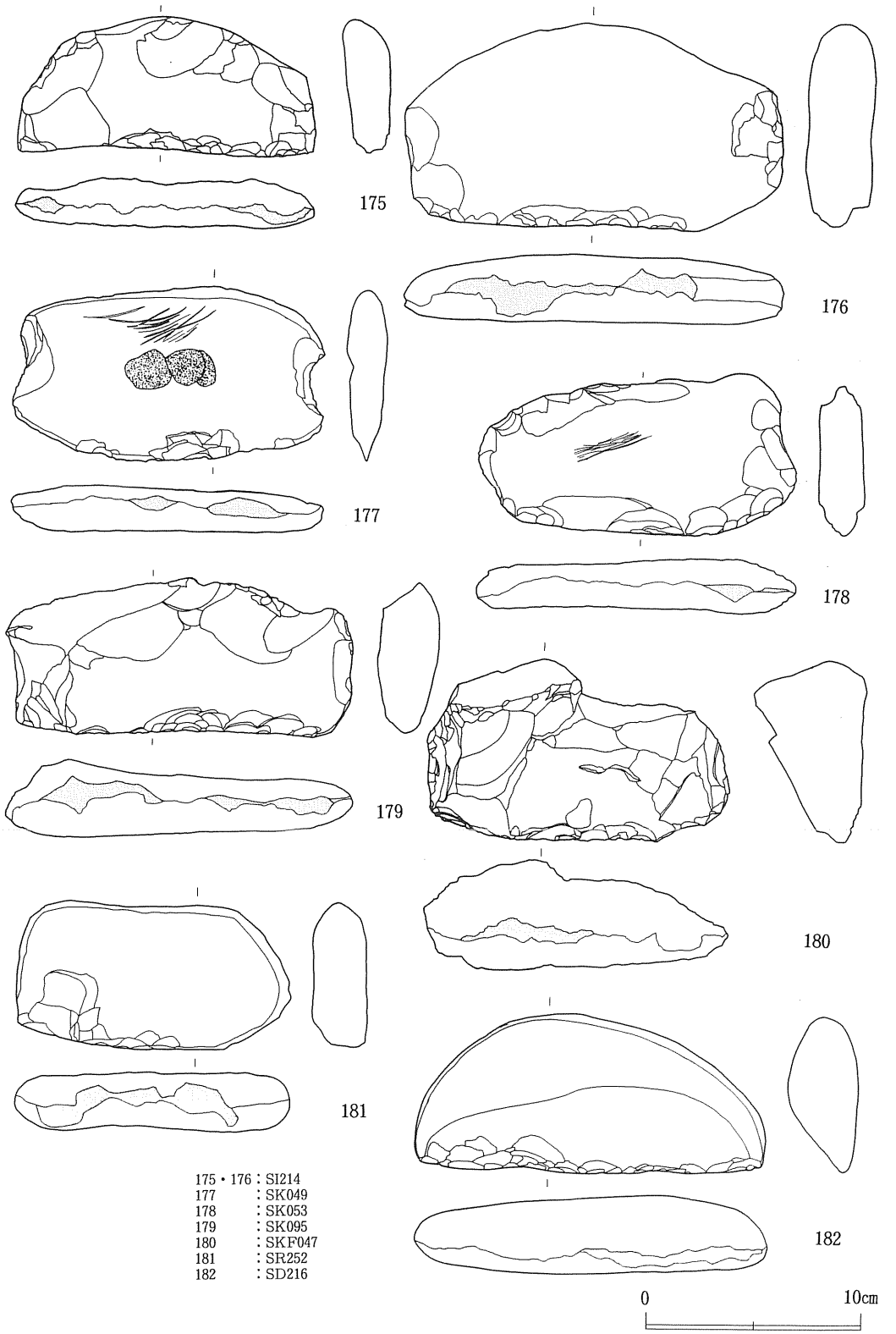
第39図　遺構内出土石器(9)



第40図　遺構内出土石器(10)

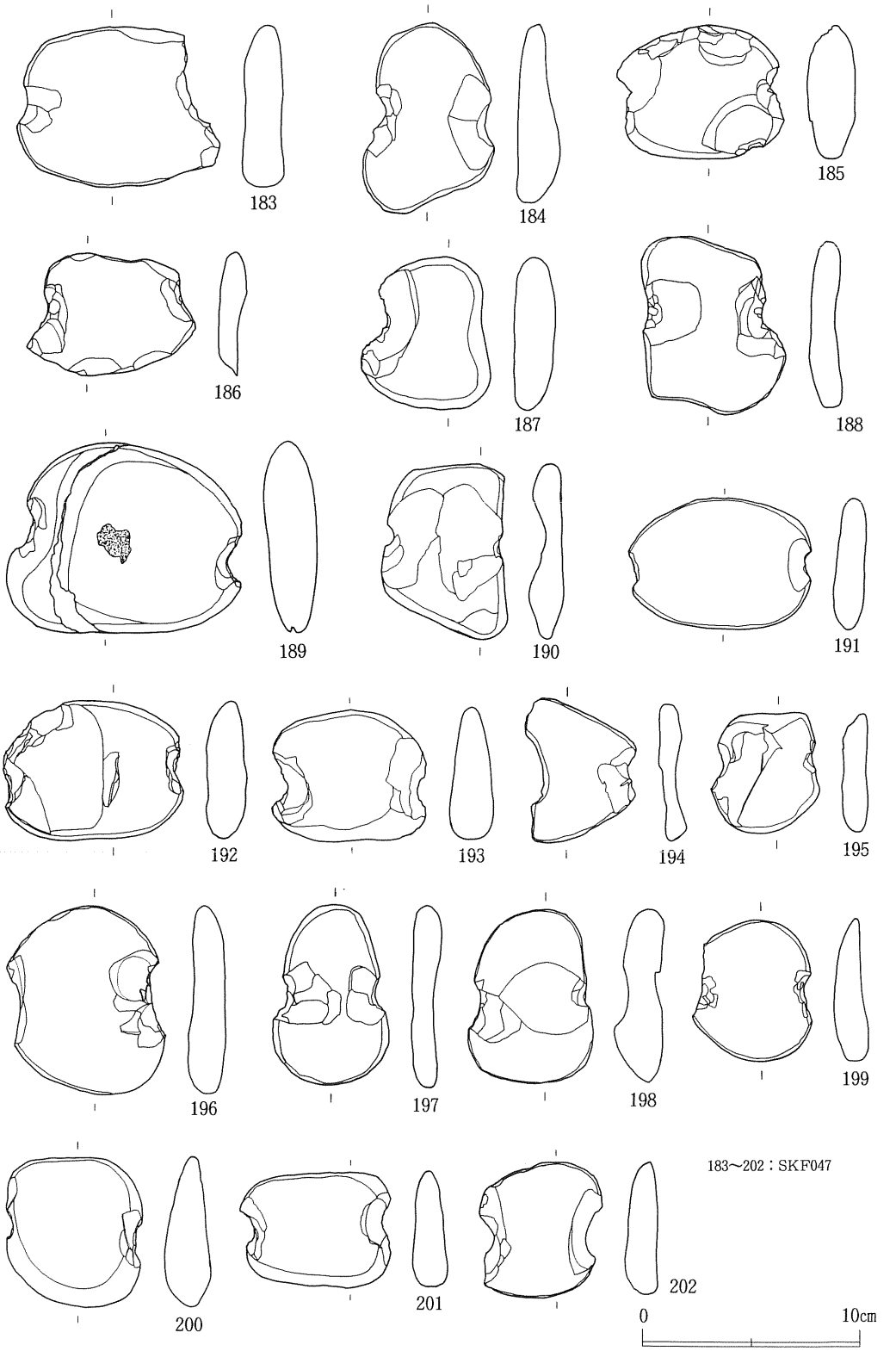


第41図　遺構内出土石器(11)

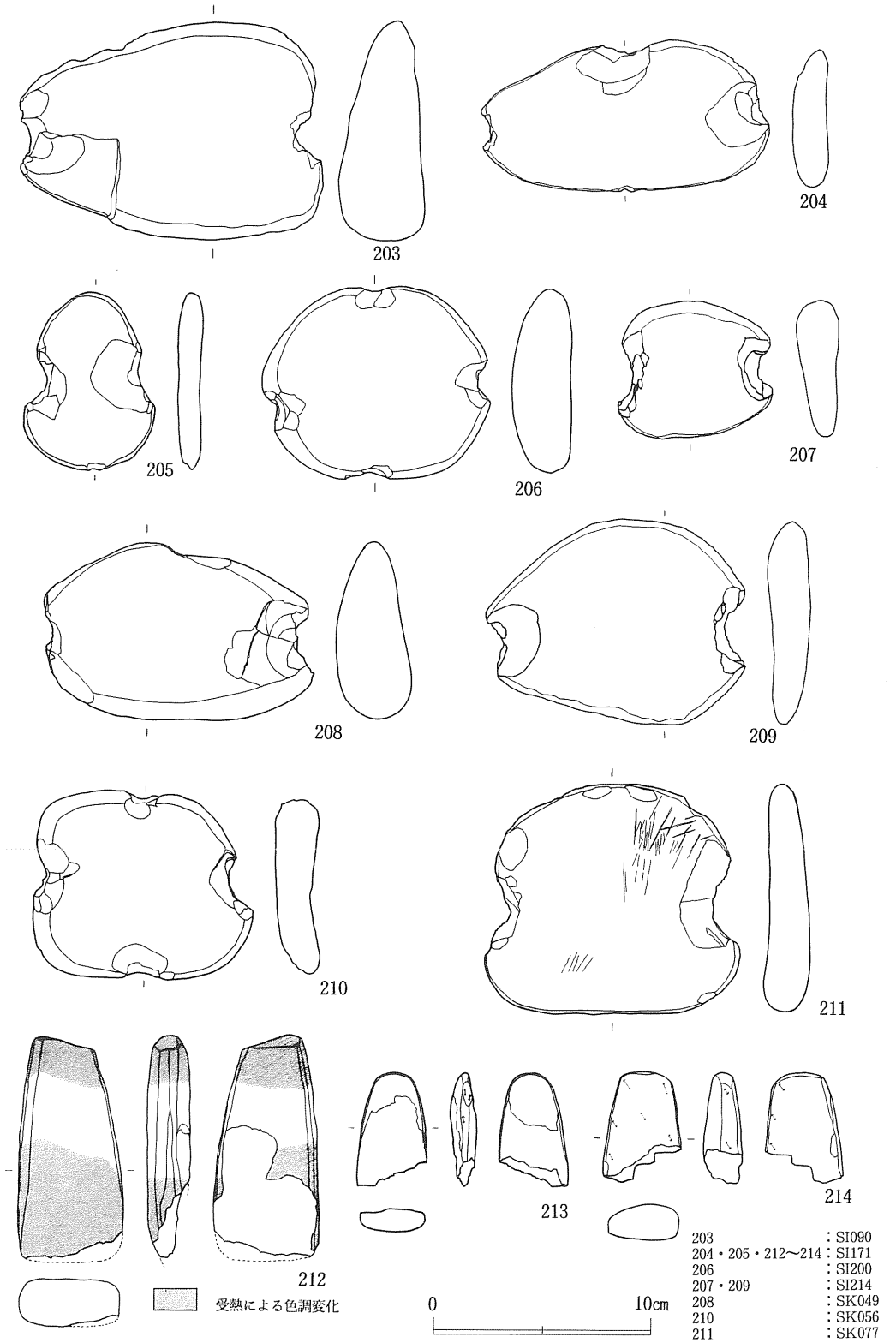


175・176：SI214
177　　：SK049
178　　：SK053
179　　：SK095
180　　：SKF047
181　　：SR252
182　　：SD216

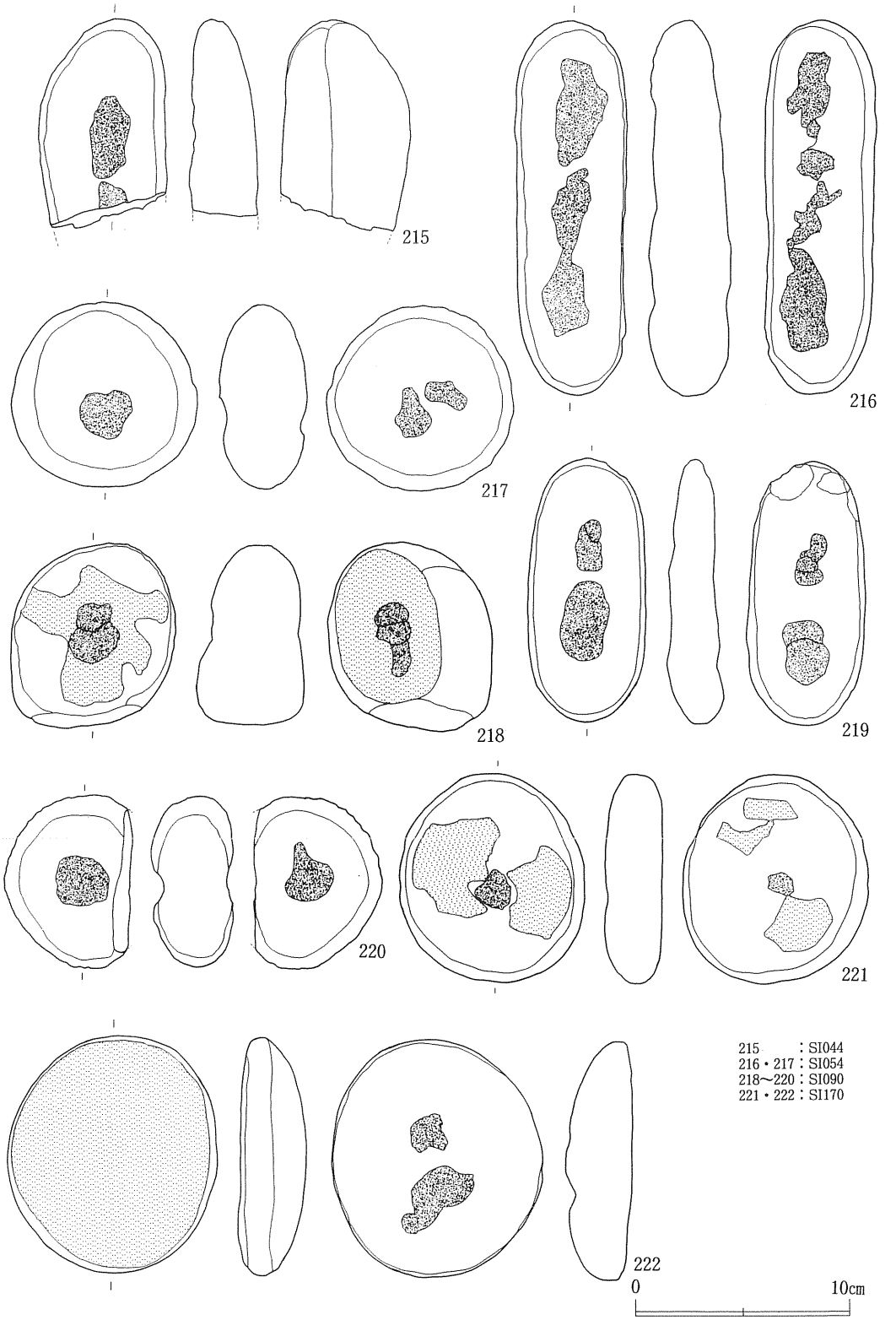
第42図　遺構内出土石器(12)



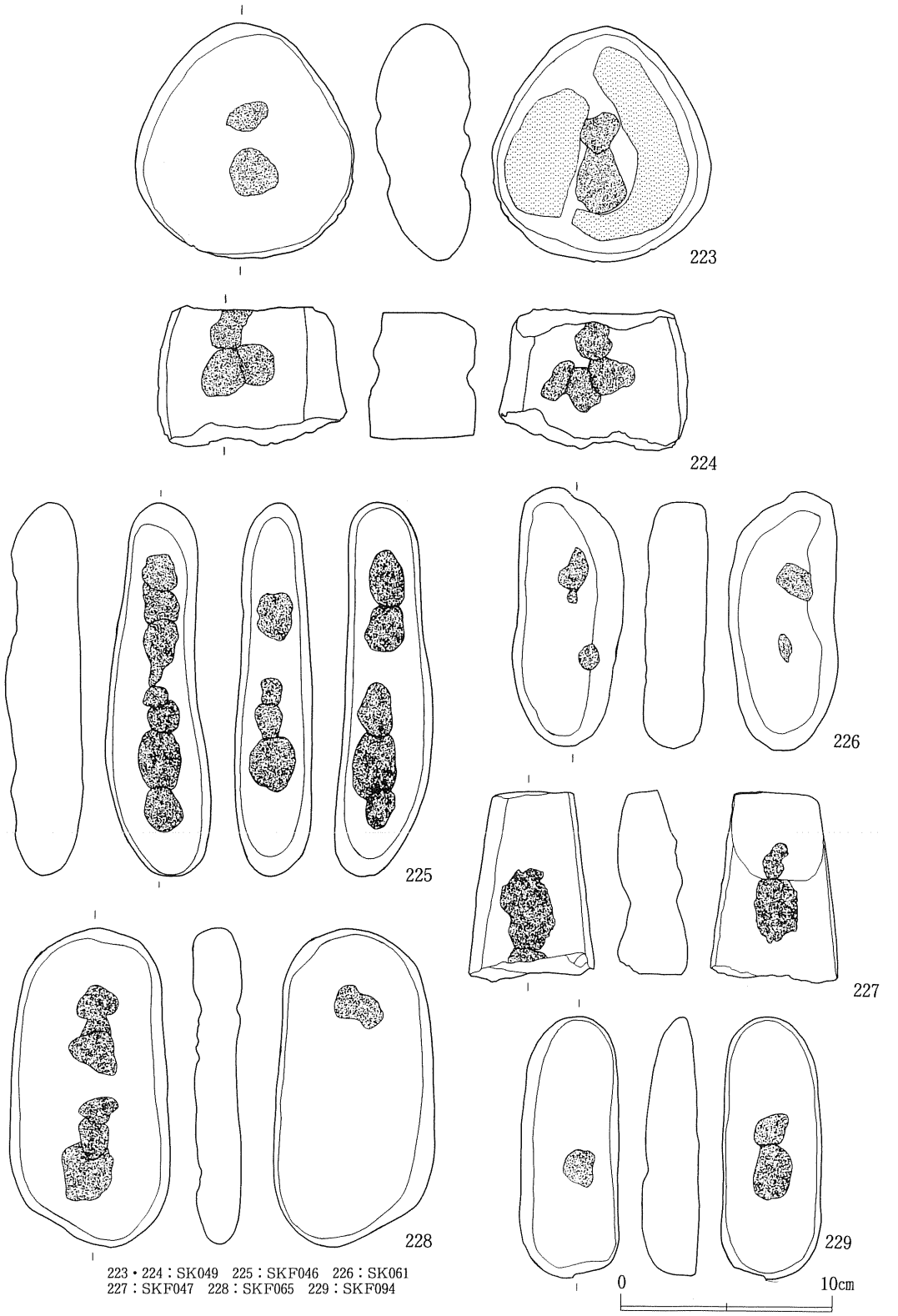
第43図　遺構内出土石器(13)



第44図　遺構内出土石器(14)

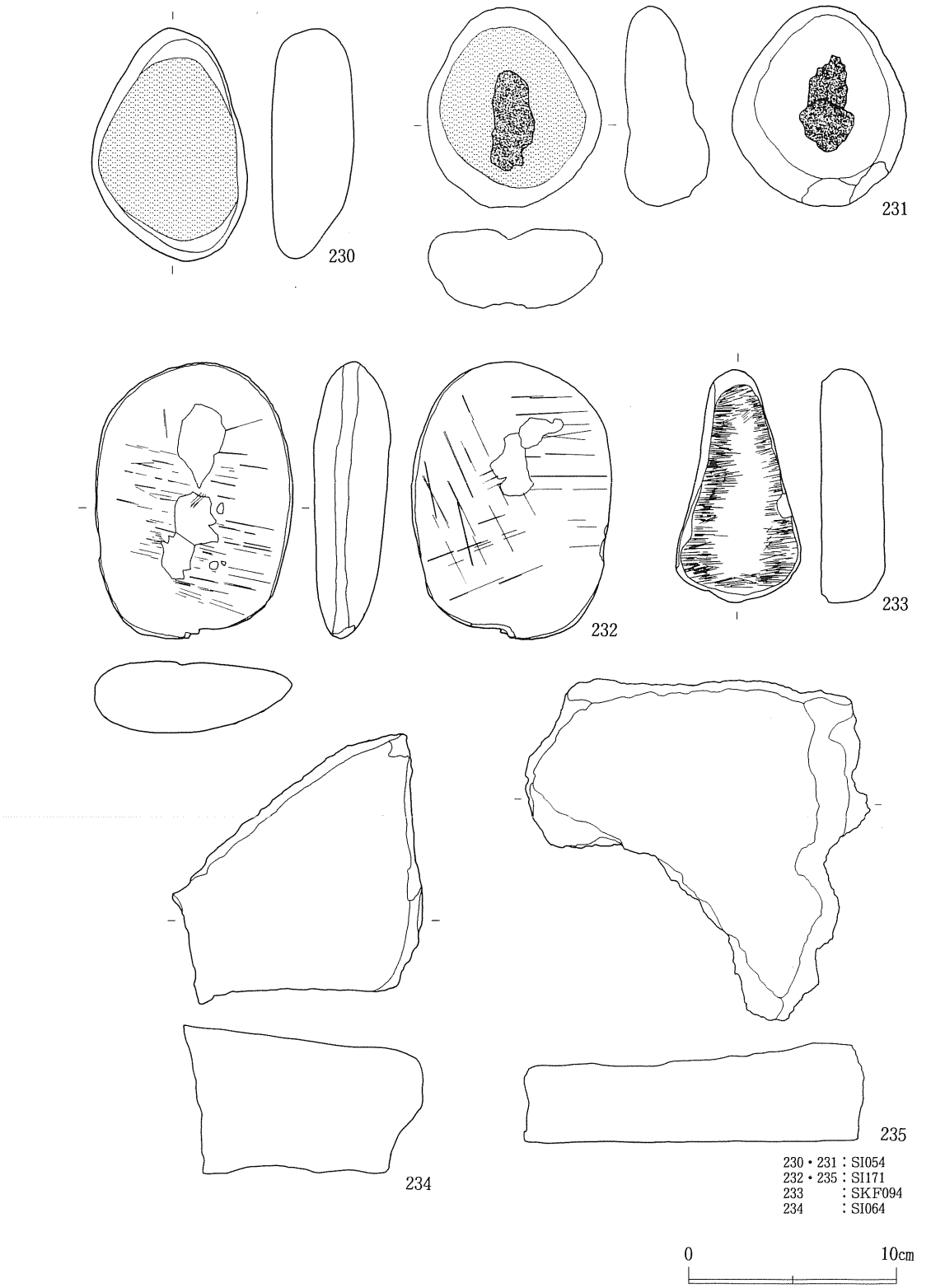


第45図　遺構内出土石器(15)



223・224：SK049　225：SKF046　226：SK061
227：SKF047　228：SKF065　229：SKF094

第46図　遺構内出土石器(16)



第47図　遺構内出土石器(17)

特徴がよく現れている。石器は、尖頭器・石鏃・石錐・有撮石器・石匙・石箆・半円状扁平打製石器・凹石・石錘・石皿・石剣・石棒・玦状耳飾り・燕尾形石製品などが出土している。

１　土器（第48～54図、図版31～35）

上ノ山Ⅱ遺跡から出土した土器の時期は前回調査分も含めると前期後葉から晩期初頭にわたるが、前期の他は極めて微量に出土したのみである。前回の報告において前期の土器をⅠ群・中期・後期・晩期の土器をそれぞれⅡ群・Ⅲ群・Ⅳ群に大別し、主として施文上の特徴によって分類しているため、本報告もこれに準じて説明する。また今回の調査では前期以外のものが出土しなかったので、第Ⅰ群土器についてのみ説明する。尚、前回の第１～30類に当てはまらない土器を新たに第31～33類として説明することにした。

第１類（第50図251・252、図版32）

粘土紐貼付により梯子文、波状文などが描かれているものである。251は口頸部に梯子文と波状文が施されている。252は口頸部に梯子文が施された後、粘土紐が剝落したものである。

第２類（第50図253、図版32）

Ⅰ類同様粘土紐貼付による文様であるが梯子文はなく、渦巻文、波状文が描かれているものである。253は口頸部に渦巻文、口唇部に波状文が施され、平坦口縁部に小突起が付されている。

第６類（第50図254～258、図版32）

粘土紐の上に刺突文、刻み目文が加えられているものである。254・257・258は粘土紐を貼付後、沈線で上下に２分し、個々に竹管状工具による刺突を施したものである。257・258は同一個体と思われる。255は粘土紐貼付後、棒状工具により刺突を施したものである。256は粘土紐を貼付後、縦に刻み目を施したものである。

第７類（第50図259・260、図版32）

沈線による横位の波状文が施されているものである。259・260とも波状文は鋭角の鋸歯状となるもので、同一工具で太く明瞭に沈線が掘り込まれている。また260は上下をさらに沈線で画している。

第８類（第50図261～266、図版32・33）

鋸歯文が斜位または縦位の鋸歯文あるいは沈線文によって連結されているものである。261・262・266は口唇部に原体圧痕が施されている。

第10類（第51図267・268）

沈線文が土器体部下方にまで垂下して施文されているものである。

第11類　（第51図269～272、図版33）

頸部に２条の平行沈線文が施文されているものである。

第13類　（第51図273～275、図版33）

その他の沈線が施されているものを一括した。

第14類　（第48図242、第51図276～278、図版33）

沈線文に円形や爪形の刺突文が加えられているものである。第８類や第10類と共通するモチーフである。242は、沈線文に円形の刺突が加えられたもので、口頸部が外反する。

第15類　（第48図236、第51図279～282、図版31・33）

口頸部に縄文原体の圧痕文が施されているものである。236は、口頸部に４条の原体圧痕を施文した後、体部に半裁竹管工具により垂下する波状文と平行文を施文した深鉢形土器である。口頸部は外反し、体部は底部にむかってすぼんでいる。280・281は１条、279・282は２条の原体圧痕が施されている。

第18類　（第52図284～295、図版33）

体部に斜縄文と綾絡文、頸部に綾絡文を重ねるものである。284・285・290・291は口唇部に刻み目が施されており、284・285は同一の工具によるものである。286と289には指頭圧痕が施されている。

第19類　（第52図296、図版34）

羽条縄文の施文されているものである。297～299は縦位、300は横位に施文されている。

第20類　（第52図297～300、図版34）

撚糸文が縦位または横位に施されているものである。

第21類　（第53図301～306、図版34）

体部に網目状撚糸文が施されているものである。302・305は口頸部がわずかに外反している。

第23類　（第53図307、図版34）

隆帯を貼付後、指頭圧痕を施しているものである。

第24類　（第53図308、図版34）

平織状撚糸文が施文されているものである。

第25類　（第53図309、図版34）

頸部に低い隆帯と縦位の爪形文が巡るものである。

第26類　（第53図310～314、図版34）

条線による文様が施されているものである。

第27類　（第54図315～317、図版35）

口縁部内面に外面と同じ斜縄文が施されているものである。316は口唇部に指頭圧痕が施さ

れている。

第30類　（第54図318、図版35）

無文の土器である。

第31類　（第48図237～241、第54図319～325、図版31・35）

縄文のみの土器である。237は、全体に斜縄文を施文した深鉢形土器である。口頸部は外反し、体部は底部にむかってすぼんでおり、底部周縁部がわずかに外方に張り出している。238は、斜縄文が施文されているもので、口縁は波状口縁である。239・240は、体部下半に斜縄文が施されているものである。241は、体部下半に斜縄文が施されているもので、体部は底部にむかってすぼみ、底部周縁部は外方に張り出している。322は内外面より穿孔され、貫通している。

第32類　（第54図326）

複節斜縄文を施しているものである。

第33類　（第51図283、第54図327、図版33・35）

多軸絡条体を施しているものである。

土器底部　（第49図243～250）

土器底部の周縁部はいずれも外方に張り出しているが、とくに247・249が顕著である。243～248は、底面が上げ底となるものである。243は、小型土器の底部である。以上の底部は、第Ⅰ群に伴う縄文時代前期のものである。

2　石器　（第55～67図、図版44～53）

前回の調査において出土した石器類は、器種ごとに細分がなされ、各々検討が加えられている。また本年度出土石器類は前回の豊富な器種の範囲に含まれるものである。よって前回の細分基準にしたがって分類し、器種別に説明を加える。

石鏃　（第55図328～332、図版44）

Ａ－ｂ類　（第55図328・331、図版44）

平基無茎石鏃で平面形が二等辺三角形を呈するものである。328は基部両端が丸みをもつものである。

Ｂ－ａ類　（第55図329、図版44）

凹基無茎石鏃で、基部の凹部が浅いものである。

Ｂ－ｂ類　（第55図330、図版44）

凹基無茎石鏃で、基部の凹部が深いものである。

Ｃ類　（第55図332、図版44）

円基石鏃で、全体の形状が水滴形を呈するものである。

尖頭器　（第55図333～337、図版46）

Ａ－ｂ類　（第55図334、図版46）

尖頭部・基部ともに尖るもので、石器の長さがおよそ12㎝以下のものである。

Ｂ－ａ類　（第55図336・337、図版46）

基部が丸みをもつものである。

Ｂ－ｂ類　（第55図335、図版46）

両側縁が基部側ほど膨らみ、基部が丸みをもつものである。

Ｃ類　（第55図333、図版46）

大型で幅広の尖頭器と考えられるものである。

Ｄ類　（第56図343、図版46）

前回の分類中に含まれないもので、押圧剥離による両面調整が施され、基部がやや細く抉ぐられているものの柳葉形を呈するものである。

石錐　（第56図338～342、図版44）

Ａ類　（第56図338、図版44）

表裏全面に調整が及び、一方の先端に鋭い錐部、その反対側につまみ部が作出されたものである。

Ｂ類　（第56図339、図版44）

全体の形状が棒状のものである。錐部側がわずかに細く尖るものである。

Ｃ類　（第56図340、図版44）

小型で厚手の剥片の両先端を尖らせたものである。

Ｄ－ｂ類　（第56図341、図版44）

二等辺三角形状の剥片の２辺に二次調整を施したものである。

Ｄ－ｃ類　（第56図342、図版44）

一端が細くなる剥片の両側辺にのみ二次調整を施して錐部としたものである。

有撮石器　（第56図344～348、図版44）

Ａ－ａ類　（第56図344、図版44）

尖頭器の基部側につまみがつくもので押圧剥離による両面調整が施され、中央部に最大幅をもつものである。

Ｂ－ａ類　（第56図345～348、図版44）

ほぼ一直線で屈曲のない縦長剥片を使用したものである。

石匙　（第57・58図、図版44・45）

Ａ－ａ－１類　（第57図349、図版44）

縦型石匙で、器表面の右側縁に直線的な刃部をもつものである。

Ａ－ａ－２類　（第57図353、第58図359、図版44）

縦型石匙で、器表面の左側縁に直線的な刃部を持つものである。

Ａ－ａ－３類　（第57図351、図版44）

縦型石匙で、ほぼ平行する直線的な２つの側縁を持つものである。

Ａ－ｂ－１類　（第57図350、図版45）

縦型石匙で、外側にふくらむ左右対称な２側縁を持つものである。

Ａ－ｂ－２類　（第57図352、図版45）

縦型石匙で、２側縁が外側に大きくふくらむものである。

Ａ－ｂ－３類　（第57図356、図版45）

縦型石匙で、２側縁が先端部で尖るものである。

Ａ－ｃ－１類　（第58図362、図版45）

縦型石匙で、側縁がゆるい勾配の曲線を描くものである。

Ａ－ｃ－２類　（第57図354、図版45）

縦型石匙で、２側辺が同方向に曲がり全体の形状が弧を描くものである。

Ａ－ｃ－３類　（第58図357、図版45）

縦型石匙で、側辺の中に抉状の部分を持つものである。

Ｂ－ａ類　（第57図355、図版45）

斜型石匙で、刃部に対して約45°の角度でつまみが右側につくものである。

Ｂ－ｂ類　（第58図363、図版45）

斜型石匙で、刃部に対して約45°の角度でつまみが左側につくものである。

Ｃ－ａ－１類　（第58図358、図版45）

横型石匙で、２側辺の交わる部分が鋭く尖っているものである。

Ｃ－ａ－２類　（第58図361、図版45）

横型石匙で、２側辺の交わる部分が弧状になるものである。

Ｃ－ａ－３類　（第58図360・365、図版45）

横型石匙で、最も長い側辺と他の側辺とがほぼ直角に交わるものである。

Ｃ－ｂ－１類　（第58図364、図版45）

横型石匙で、つまみ部の位置が器中軸線からずれているものである。

箆状石器（第59図、図版47）

Ａ－ａ類（第59図366、図版47）

平面形が撥形を呈するもので、基部側より刃部が幅広のものである。

Ｂ－ａ類（第59図367、図版47）

両側縁が平行し、平面形が長方形を呈するものである。

Ｂ－ｂ類（第59図370、図版47）

両側縁が平行し、平面形が隅丸長方形を呈するものである。

Ｃ－ａ類（第59図368、図版47）

基部・刃部ともに弧を描き、平面形が長楕円形を呈するものである。

Ｃ－ｃ類（第59図371、図版47）

基部・刃部ともに弧を描き、基部よりも刃部の幅がせまいものである。

削器（第59図369、第60図372・373、図版47）

Ａ－ａ類（第60図372、図版47）

大型の剥片に内湾する刃部をもつものである。

Ａ－ｂ類（第60図373、図版47）

大型の剥片に直線的な刃部をもつものである。

Ｂ類（第59図369、図版47）

大型の剥片の１側縁に直線的な刃部を作出したものである。

掻器（第60図374～376、第61図377・378、図版46）

Ａ－ａ類（第60図374、図版46）

刃部の平面形がゆるい弧を描くものである。

Ａ－ｂ類（第60図376、第61図377、図版46）

刃部の平面形が直線的なものである。

Ａ－ｃ類（第60図375、第61図378、図版47）

刃部の平面形が急な弧を描くものである。

磨製石斧（第66図414～417、図版52）

Ａ類（第66図414、図版52）

乳棒状磨製石斧で、断面は楕円形を呈するものである。基端に面を有するか否かで２細分されるが、破損品のため不明である。

Ｂ－ｂ類（第66図412、図版52）

河原石を擦切技法によらずに仕上げた定角式磨製石斧である。

Ｄ－ａ類　（第66図416、図版52）

製作手法が擦切技法であり、明瞭な基端面と側面を持つものである。

Ｅ－ｃ類　（第66図417、図版52）

細身で両側縁が平行するものである。側面には擦切痕が残っている。

半円状扁平打製石器　（第64図394～401、第65図402・403、図版49）

Ⅰ類　（第64図394・397、図版49）

素材の下辺部を打ち欠いて刃部としたものである。

Ⅲ－１類　（第64図395・400、図版49）

Ⅰ類の両端に打ち欠きが加えらているものである。

Ⅲ－２類　（第64図398、図版49）

Ⅰ類のいずれか一方に打ち欠きが加えらているものである。

Ⅳ－１類　（第65図402、図版49）

Ⅰ類の対辺に両面から「打ち欠き」が加えられているものである。

Ⅳ－２類　（第64図396・399・401、第65図403、図版49）

Ⅰ類の側辺の両端に抉りをもつものである。

石錘　（第65図404～413、図版50）

Ⅰ－Ａ類　（第65図404・406・409、図版50）

長軸の両端に抉りをもつものである。

Ⅰ－Ｂ類　（第65図407・408、図版50）

短軸の両端に抉りをもつものである。

Ⅱ類　（第65図410・411、図版50）

抉りを４箇所にもつものである。

Ⅲ類　（第65図412、図版50）

Ⅱ類のうち１箇所に抉りの入らないものである。

凹石　（第66図418～421、図版51）

Ⅰ類　（第66図419、図版51）

円形の礫に凹みを有するものである。

Ⅱ類　（第66図420、図版51）

楕円形の礫に凹みを有するものである。

Ⅲ類　（第66図418、図版51）

棒状の礫に凹みを有するものである。

Ⅳ類　（第66図421、図版51）

球形の礫に凹みを有するものである。

磨石　（第67図422・423、図版51）

Ａ類　（第67図422、図版51）

磨面を片面のみに有するものである。

Ｂ類　（第67図423、図版51）

磨面を両面に有するものである。

敲石　（第67図424、図版51）

石材の両端部に敲打剥離痕をもつものである。

石皿　（第67図425、図版51）

欠損しており形状は定かではないが、隅丸長方形ないし楕円形を呈するものである。明確な縁部は認められず、磨痕をもつ使用面は平坦である。

玦状耳飾　（第63図390、図版48・53）

ｃ類　（第63図390、図版48・53）

凝灰岩を材質とするもので、破損品である。

燕尾形石製品　（第63図389・393、図版48・53）

ｂ類　（第63図389、図版48・53）

長軸の一端のみに切り込みがあるものである。燕尾部を作出する切り込みは比較的短く、全体の成形は粗い。

ｃ類　（第63図393、図版48）

両端に切り込みがあるものである。

カツオブシ形石製品　（第63図392、図版48）

d類　転石の形状と自然面を残しており、一端を鋭くしたものである。

石剣・石棒　（第61図379～381・第63図387、図版48）

381は完形品で、他はいずれも破損品である。

線刻礫　（第62図382～386、図版52）

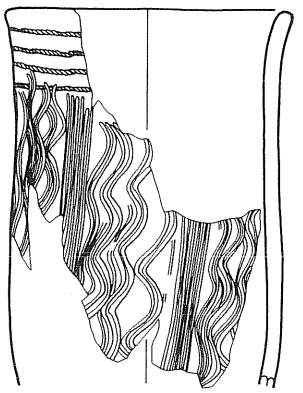
自然礫に383・384は両面に、他は１面に細い沈線が多数刻まれているものである。

異形石器　（第63図391、図版48）

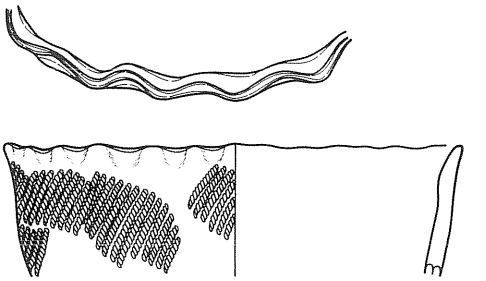
前述の剥片石器類の各器種には含まれない特殊な石器である。剥片の４ケ所に抉りを入れて、４つの尖部を作出しているものである。

その他の石製品　（第63図388、図版48）

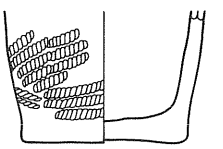
板状に研摩した後、両端に穿孔を施したものである。



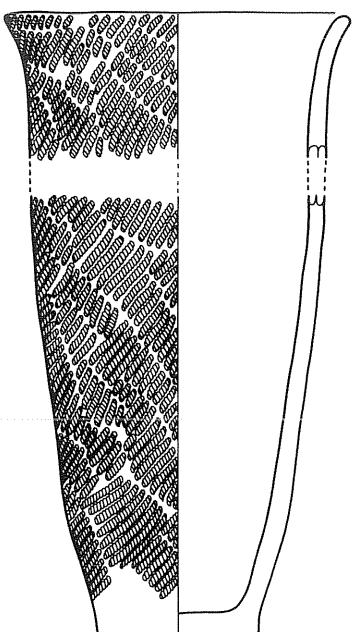
236



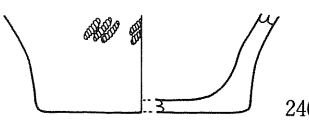
238



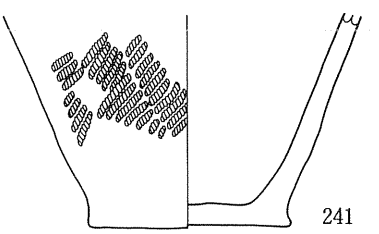
239



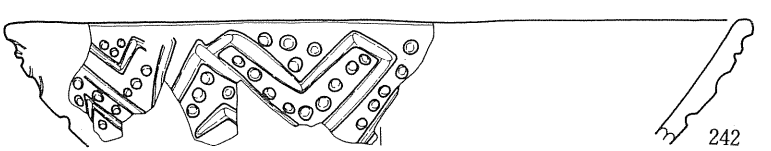
237



240



241

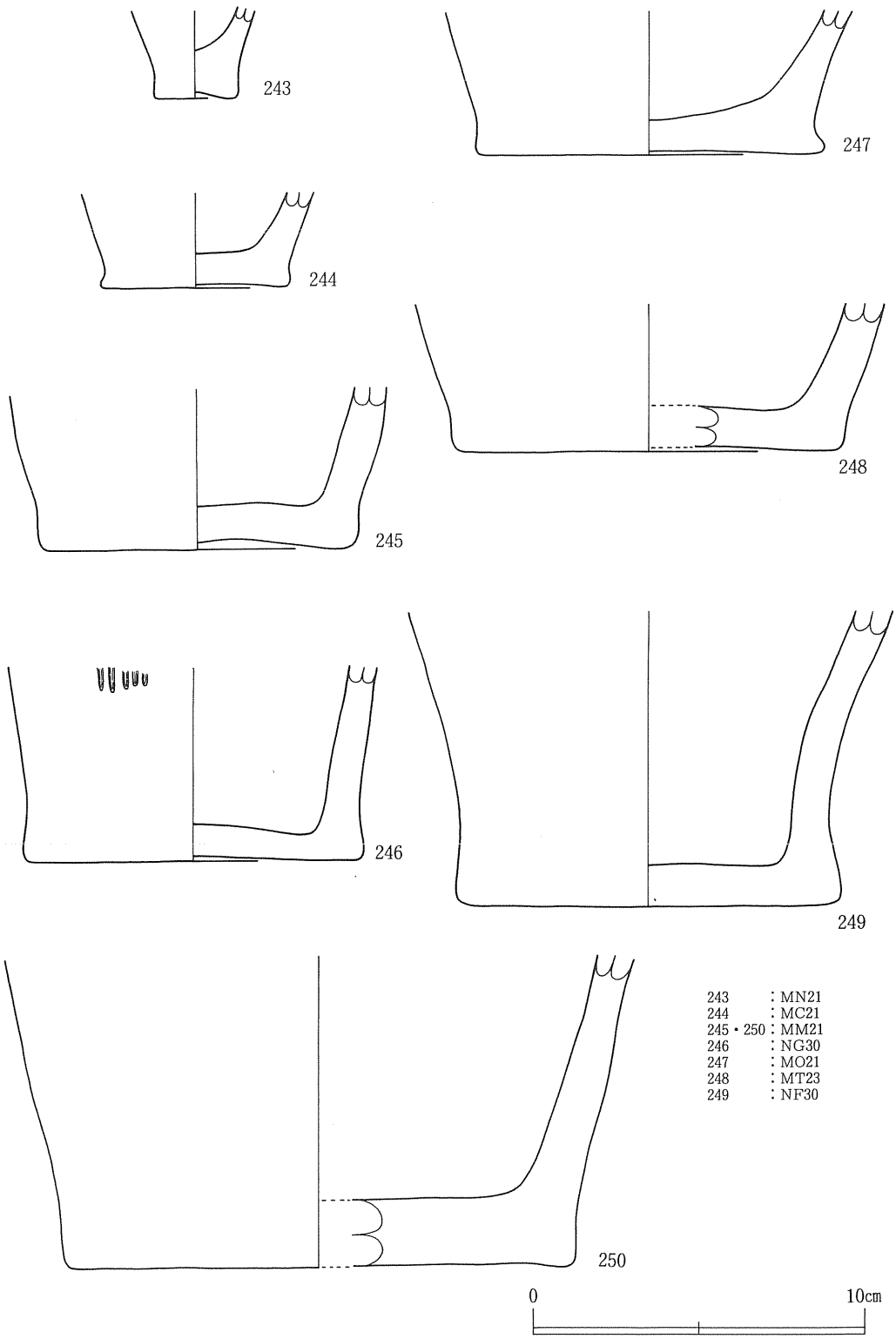


242

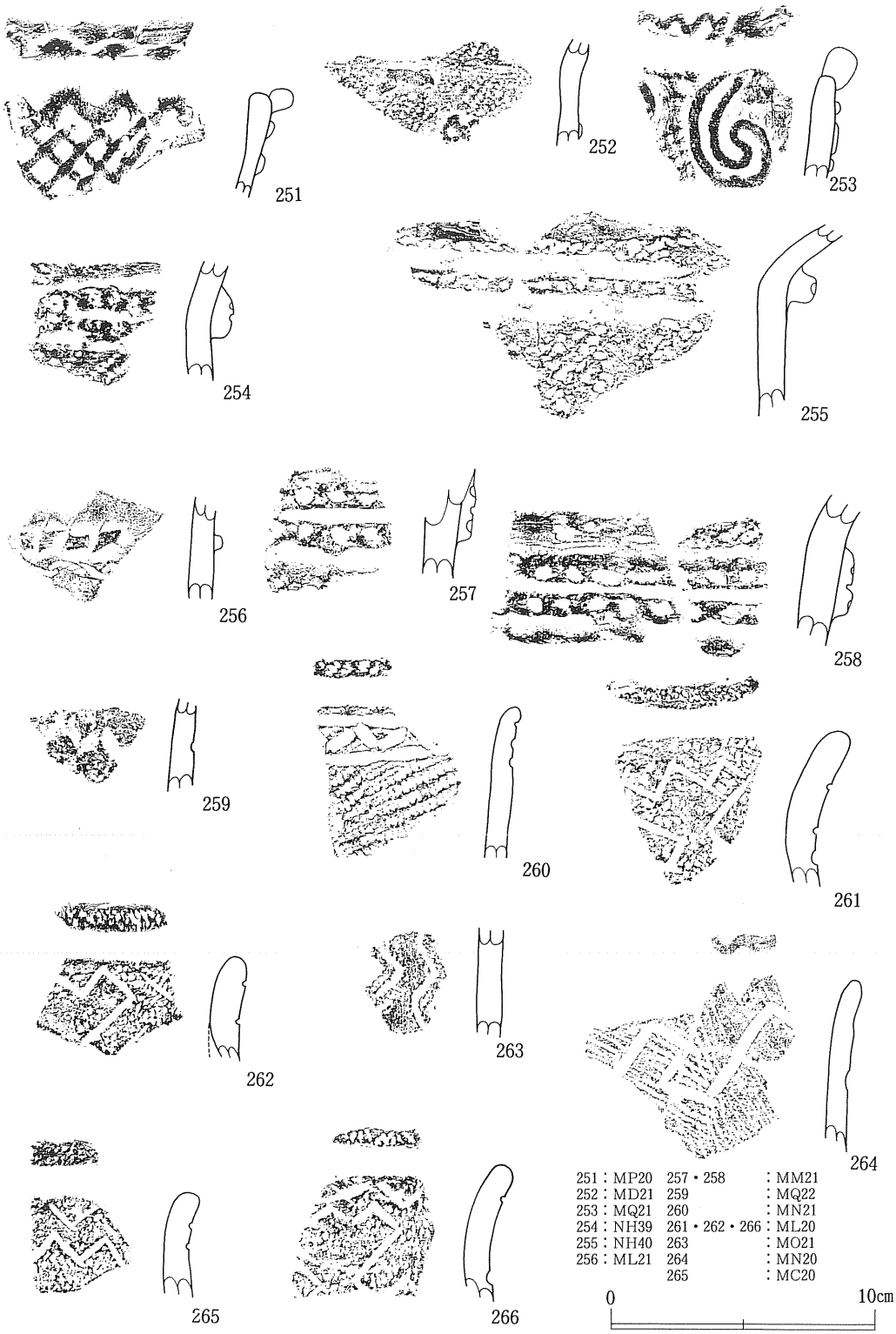
236：NG30　237・242：MM21　238：NF30　239・240：ML21
241：MO21

0　10cm

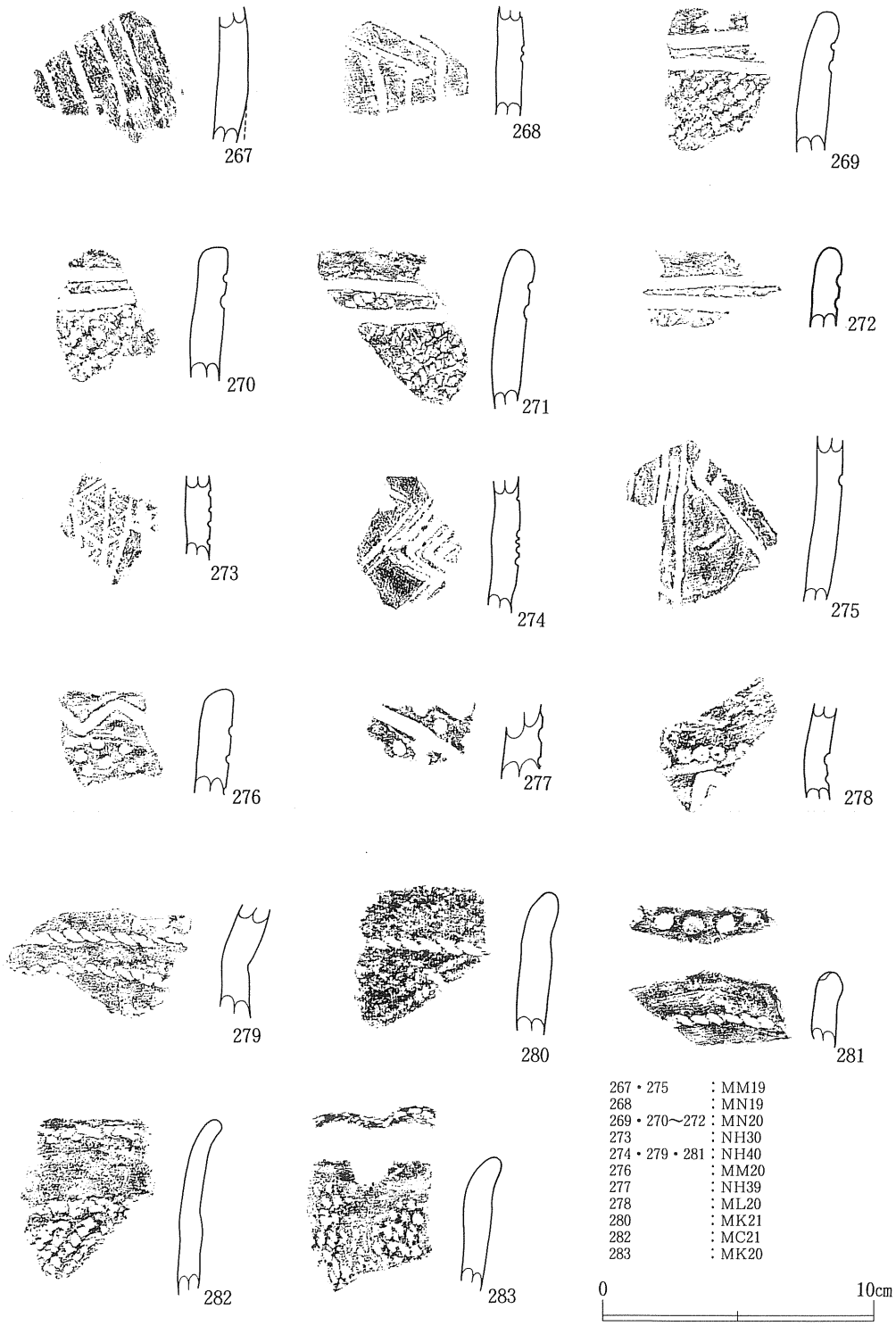
第48図　遺構外出土土器(1)



第49図　遺構外出土土器(2)

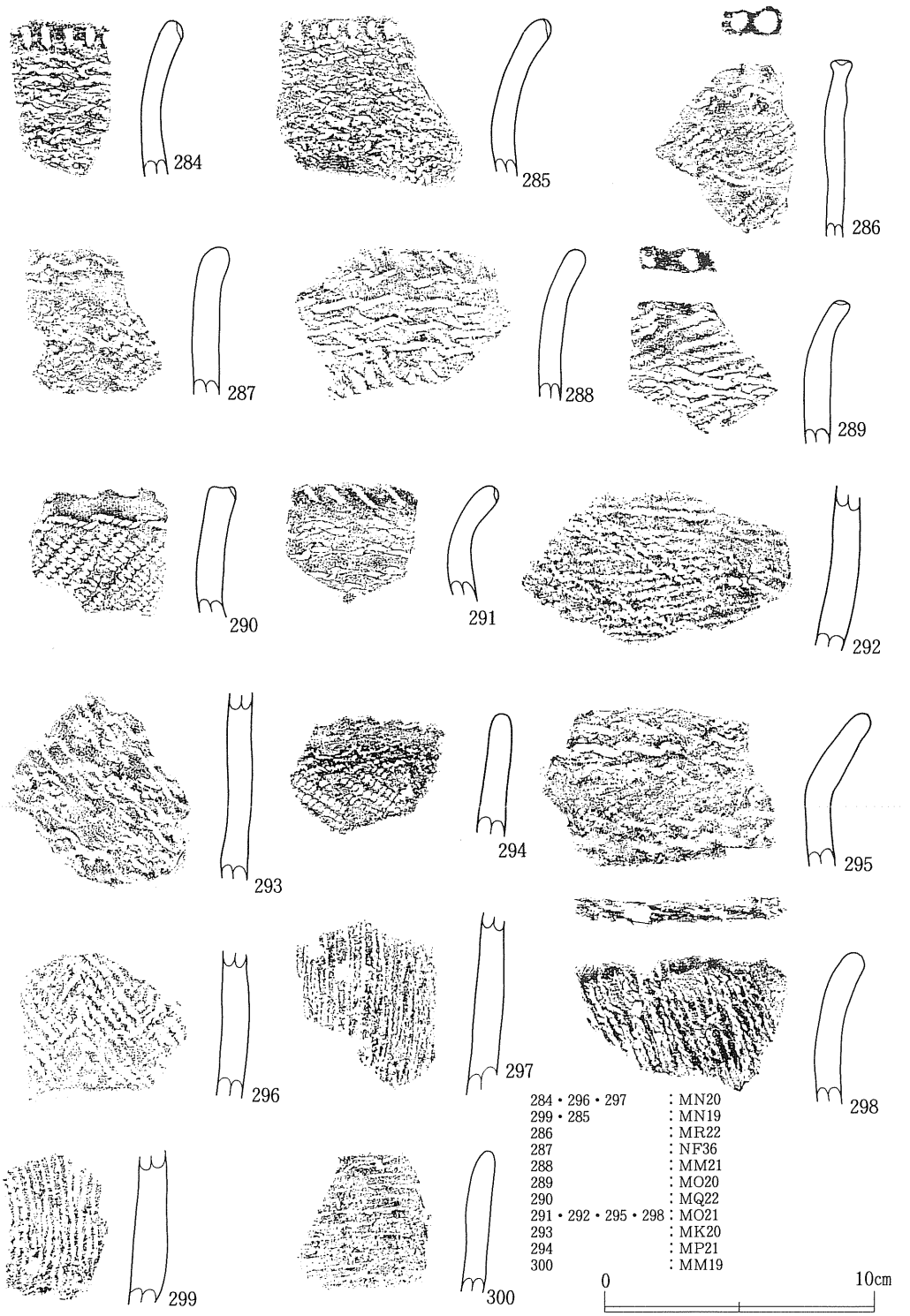


第50図　遺構外出土土器(3)

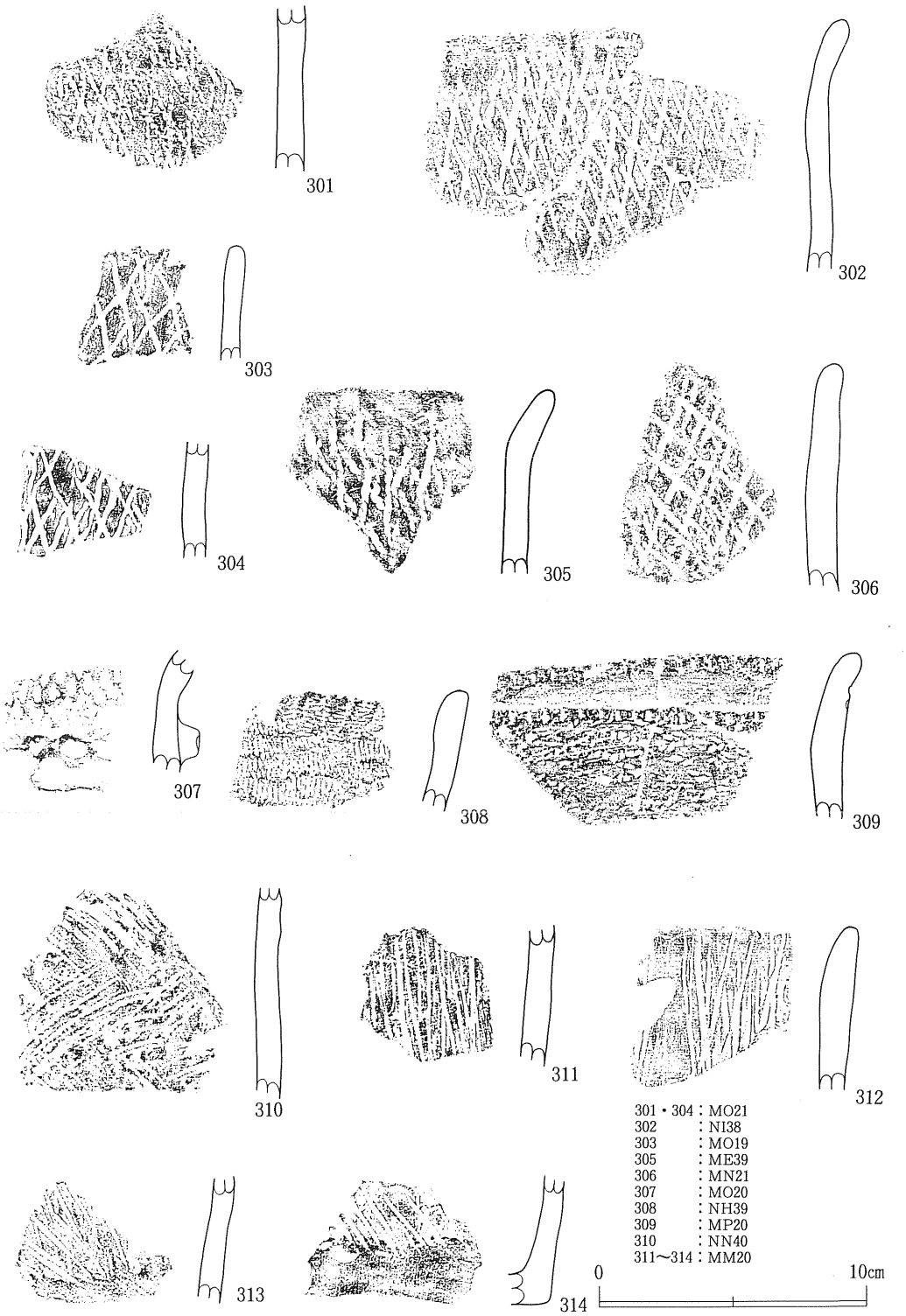


267・275	：MM19
268	：MN19
269・270～272	：MN20
273	：NH30
274・279・281	：NH40
276	：MM20
277	：NH39
278	：ML20
280	：MK21
282	：MC21
283	：MK20

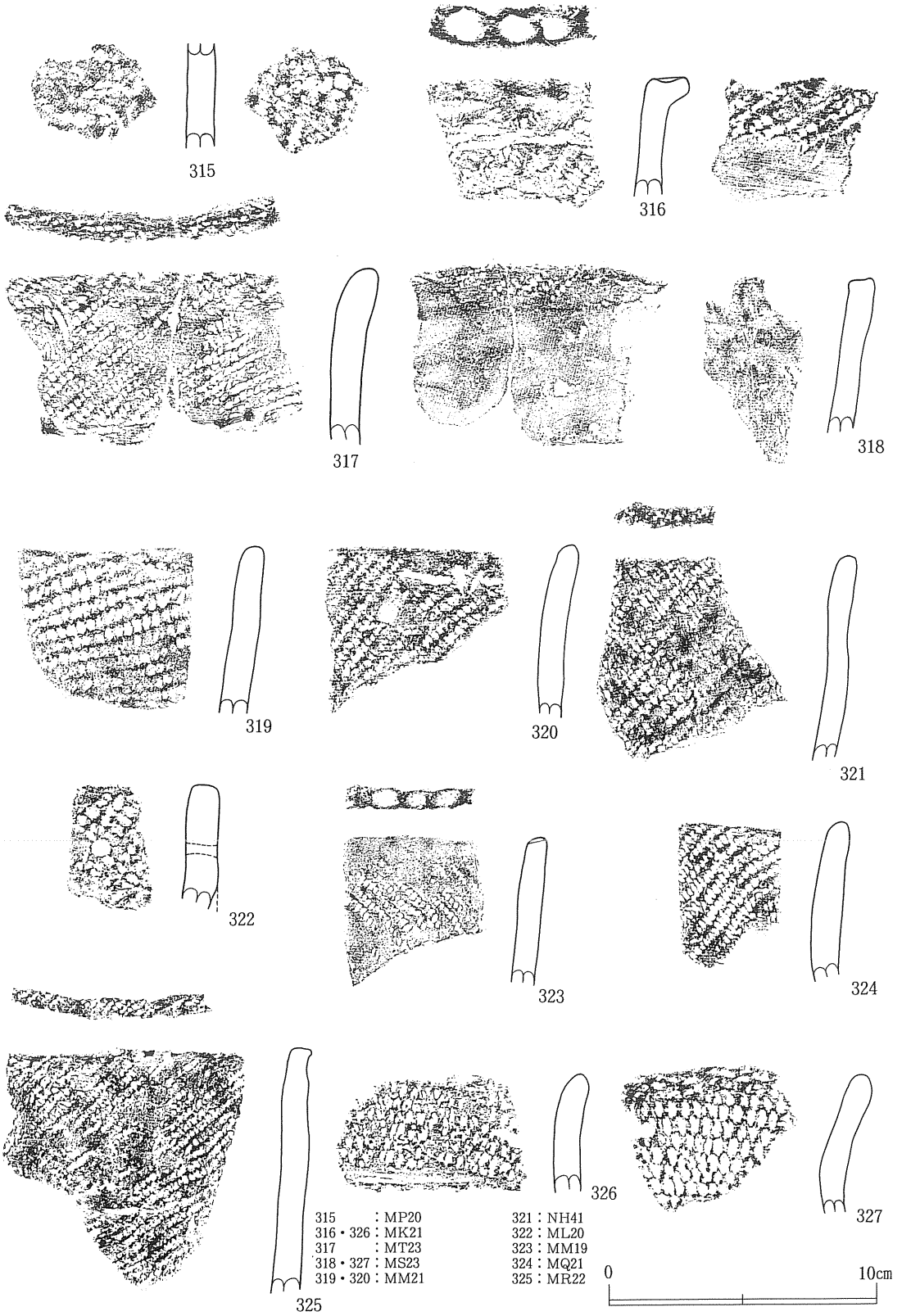
第51図　遺構外出土土器(4)



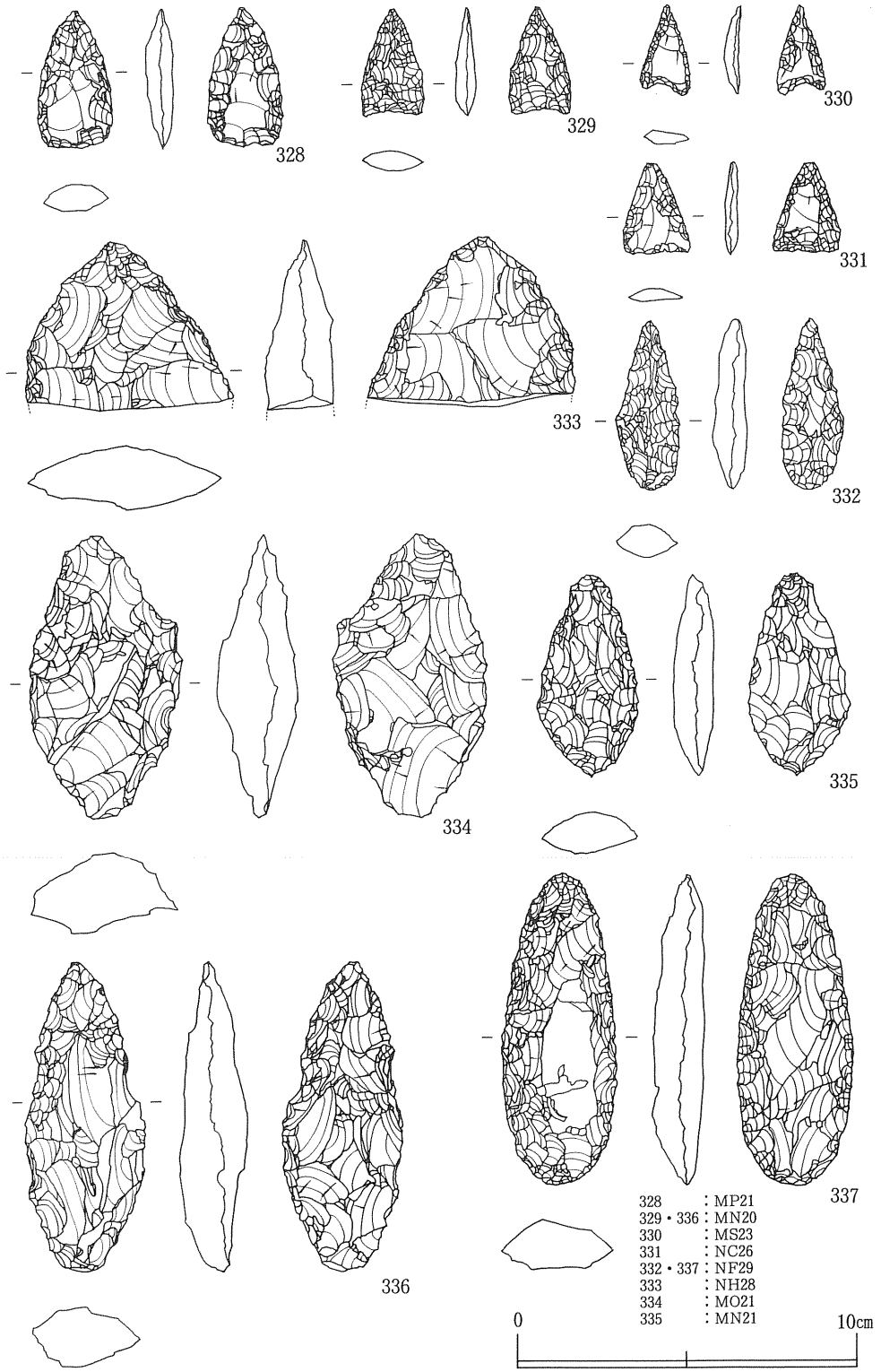
第52図　遺構外出土土器(5)



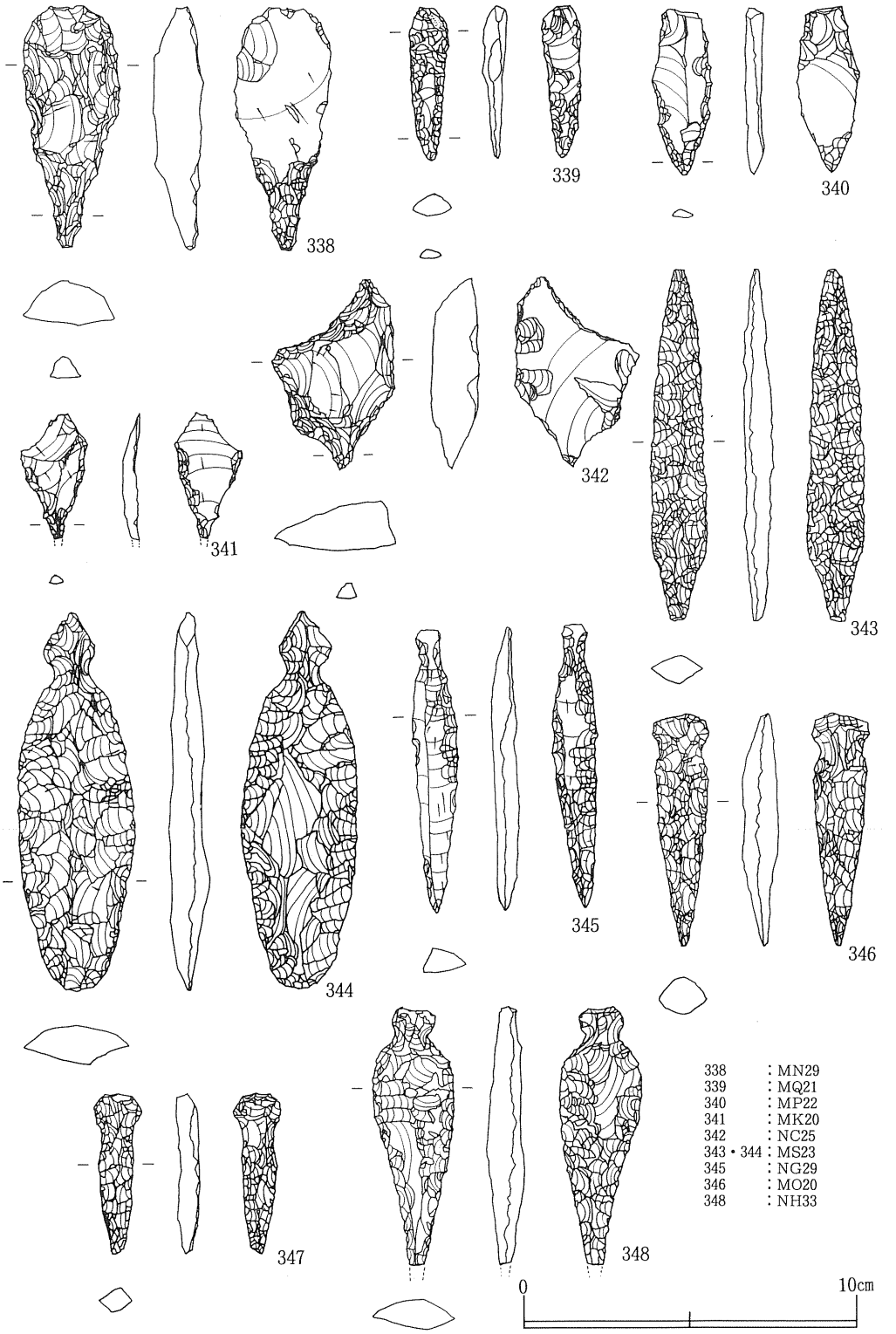
第53図　遺構外出土土器(6)



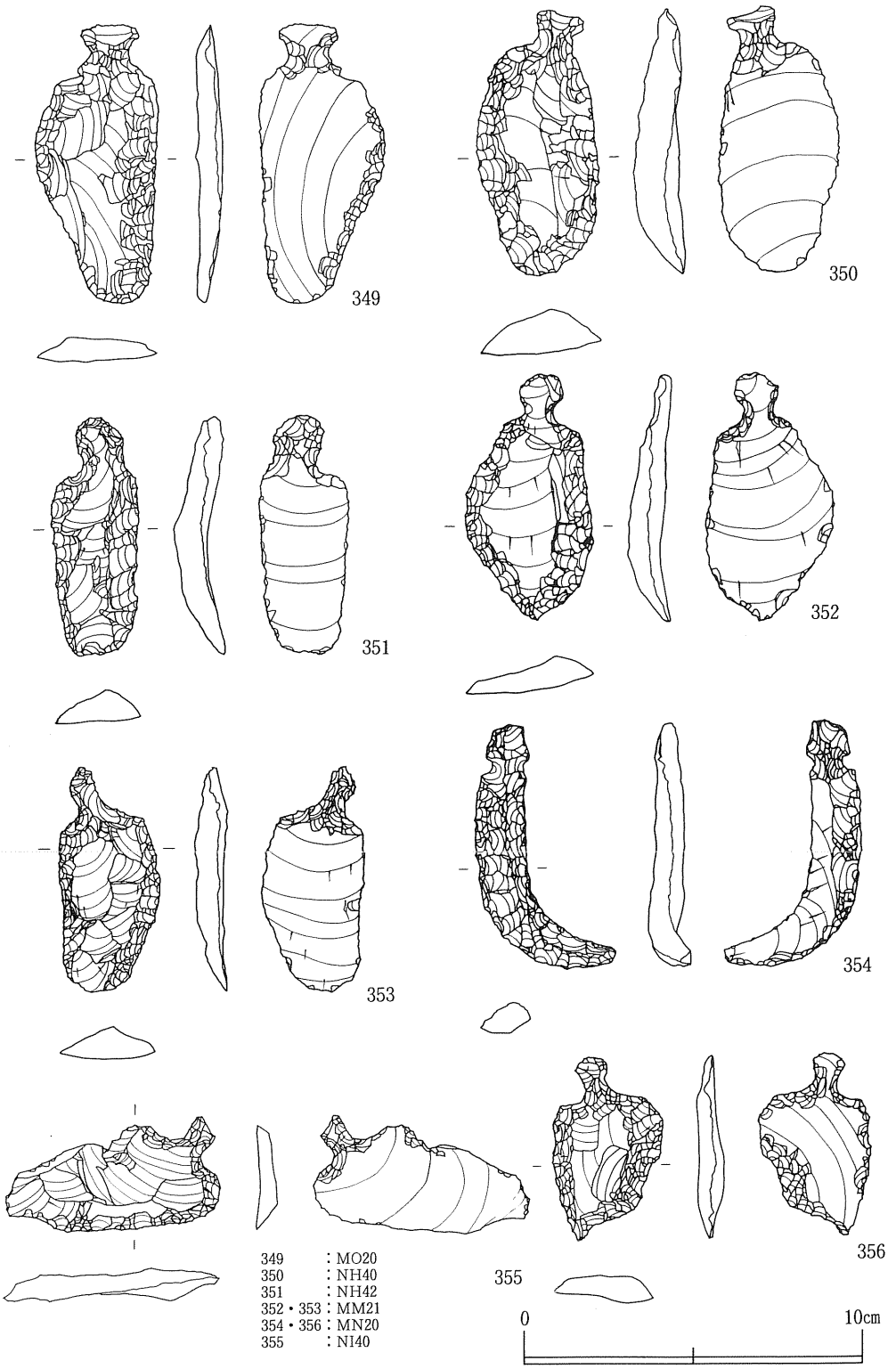
第54図　遺構外出土土器(7)



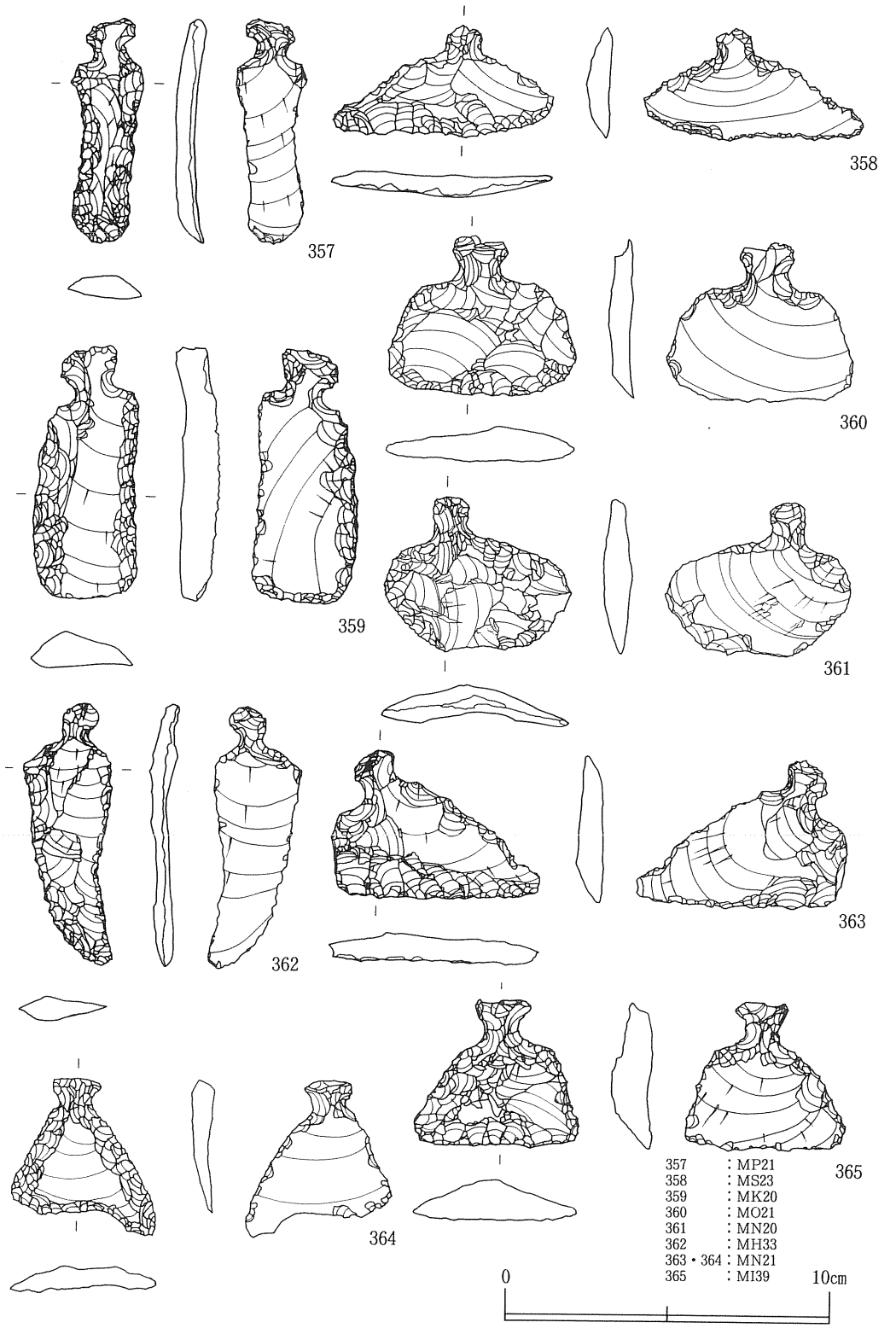
第55図　遺構外出土石器(1)



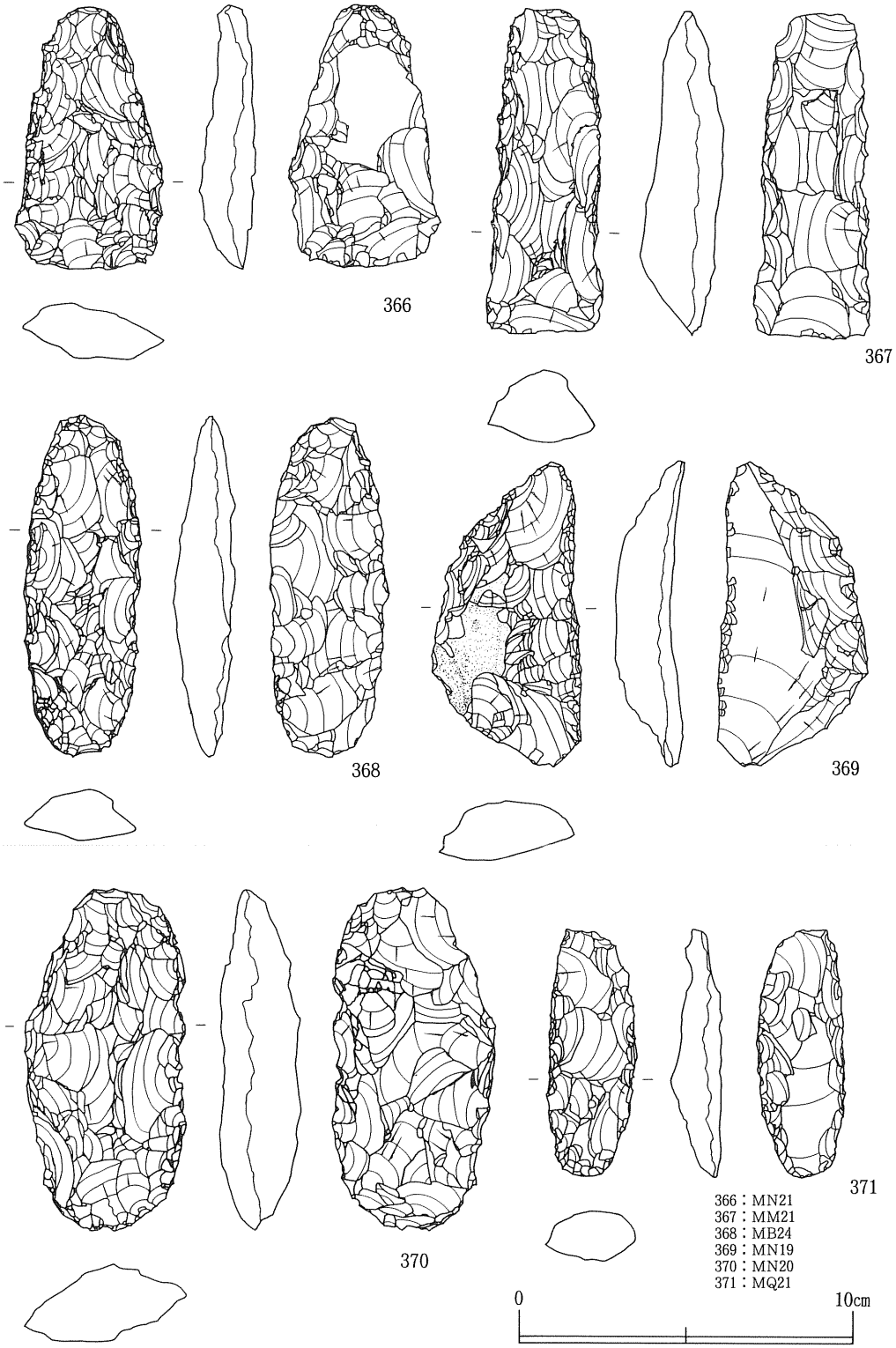
第56図　遺構外出土石器(2)



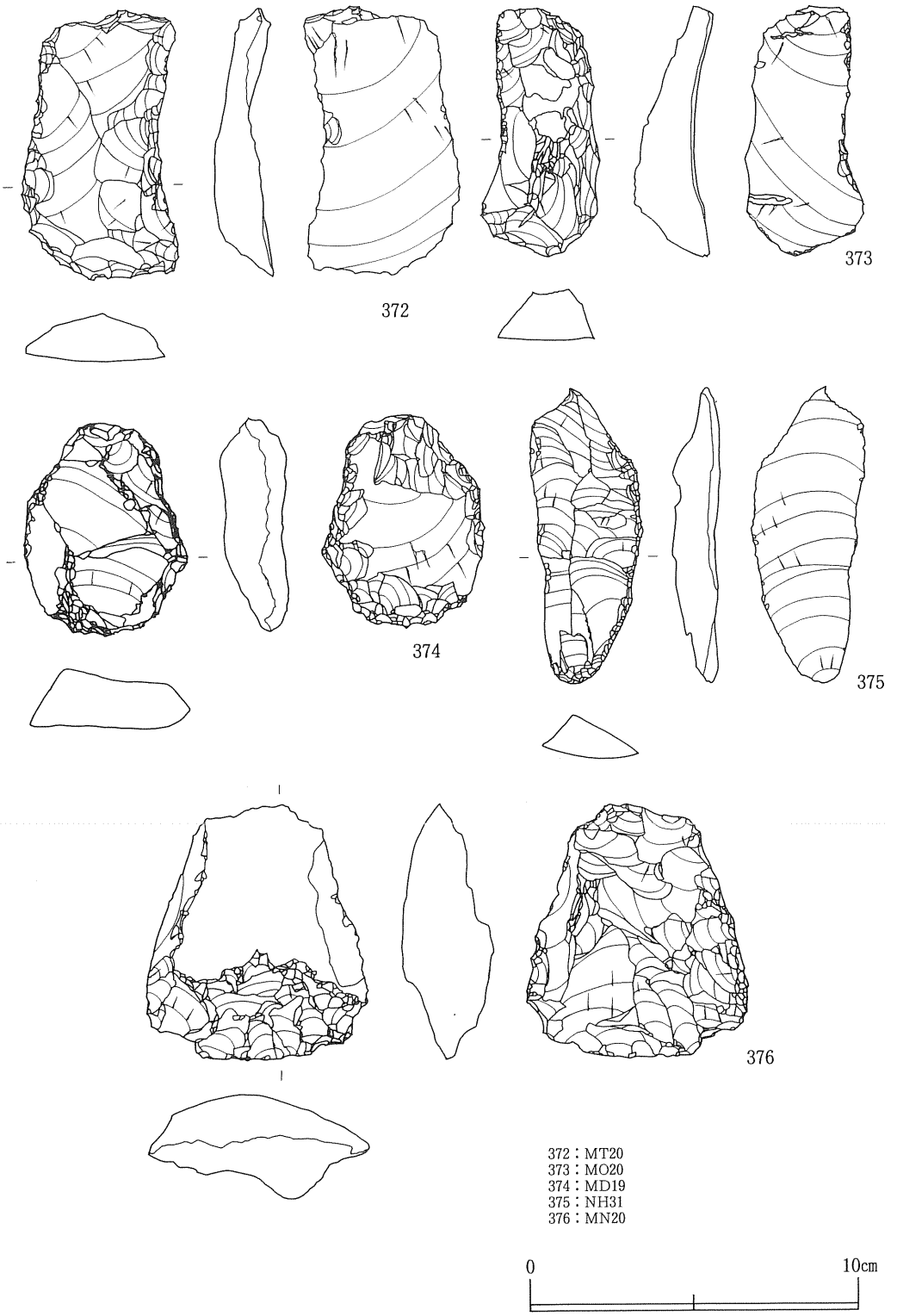
第57図　遺構外出土石器(3)



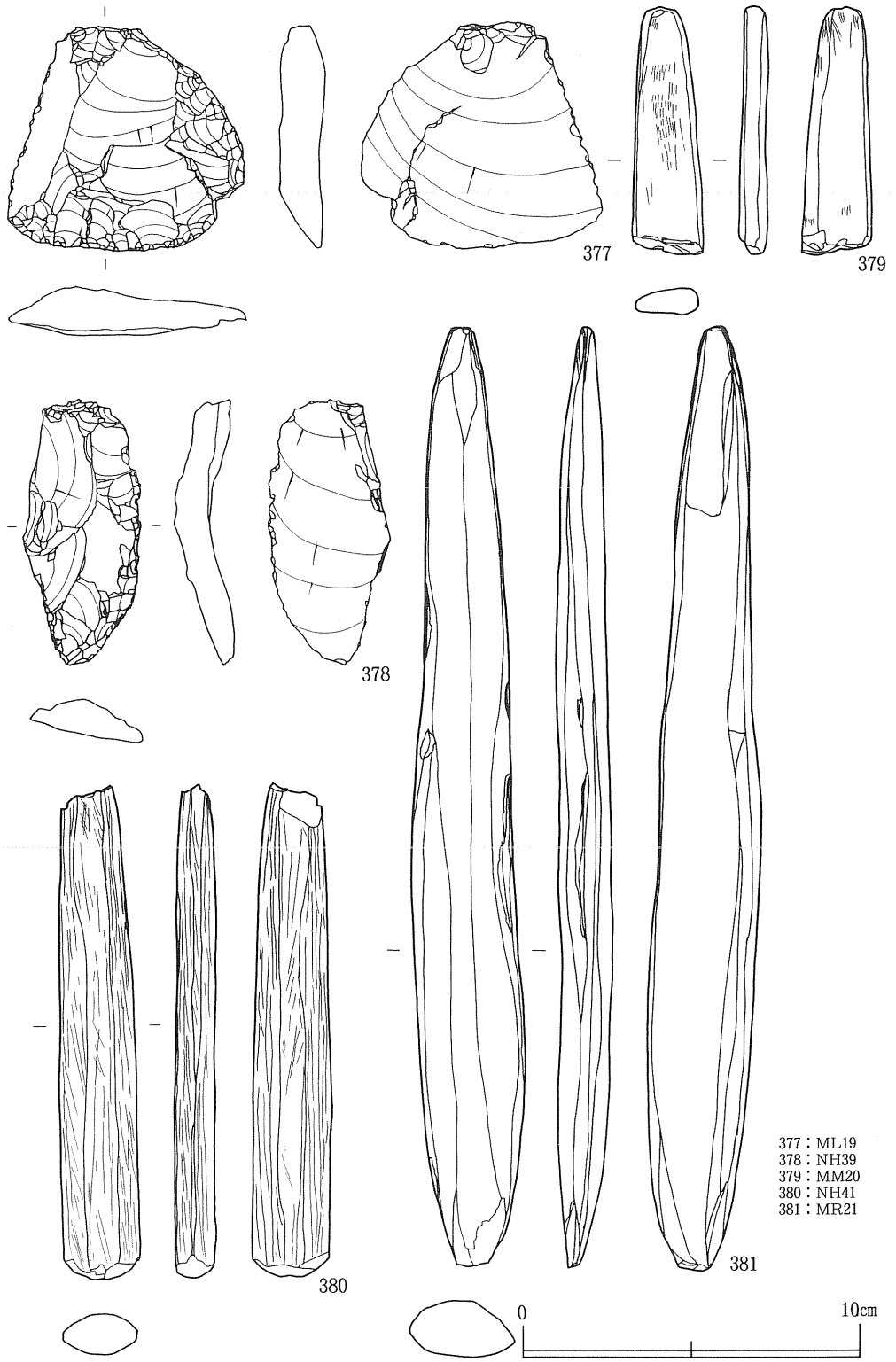
第58図　遺構外出土石器(4)



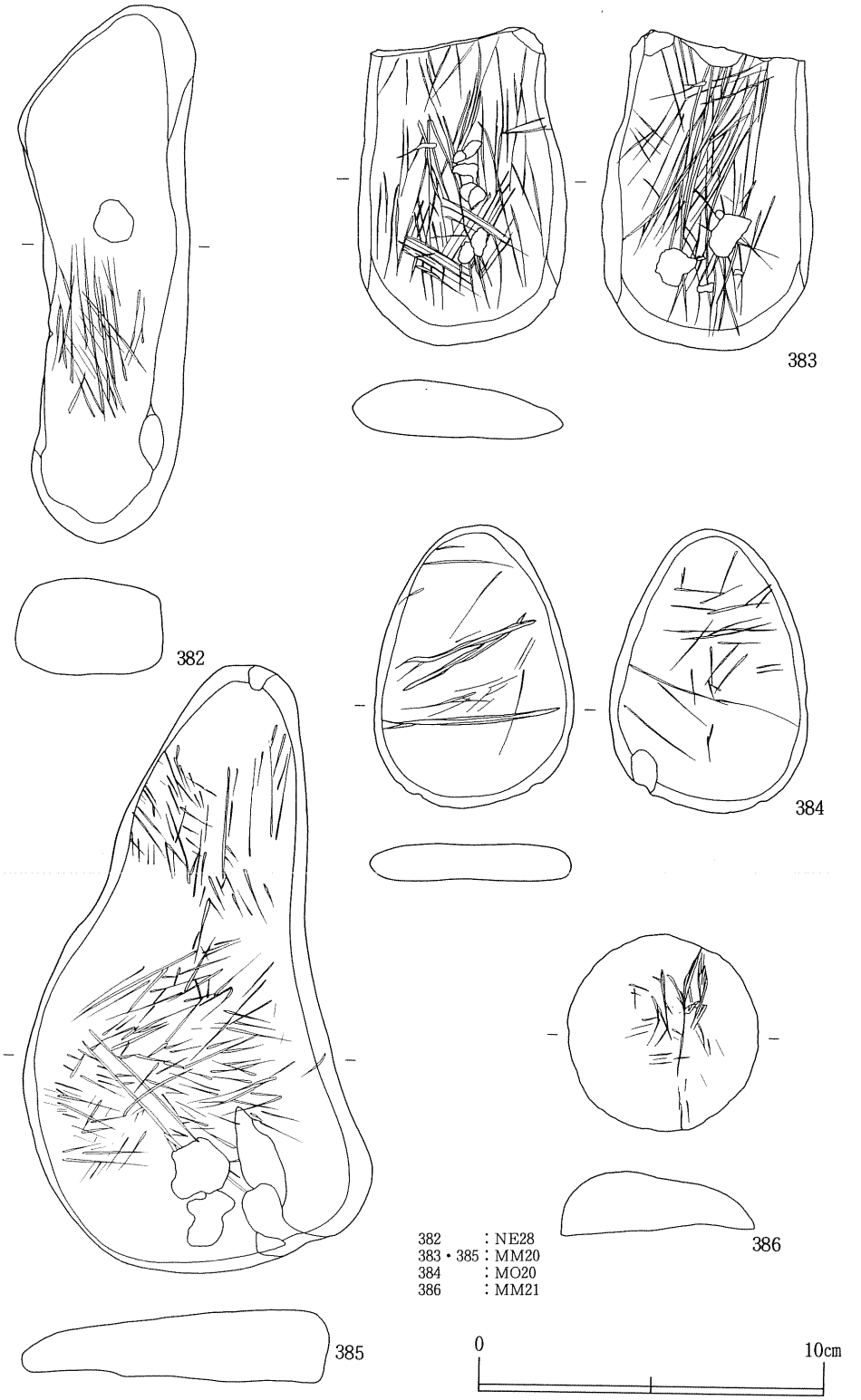
第59図　遺構外出土石器(5)



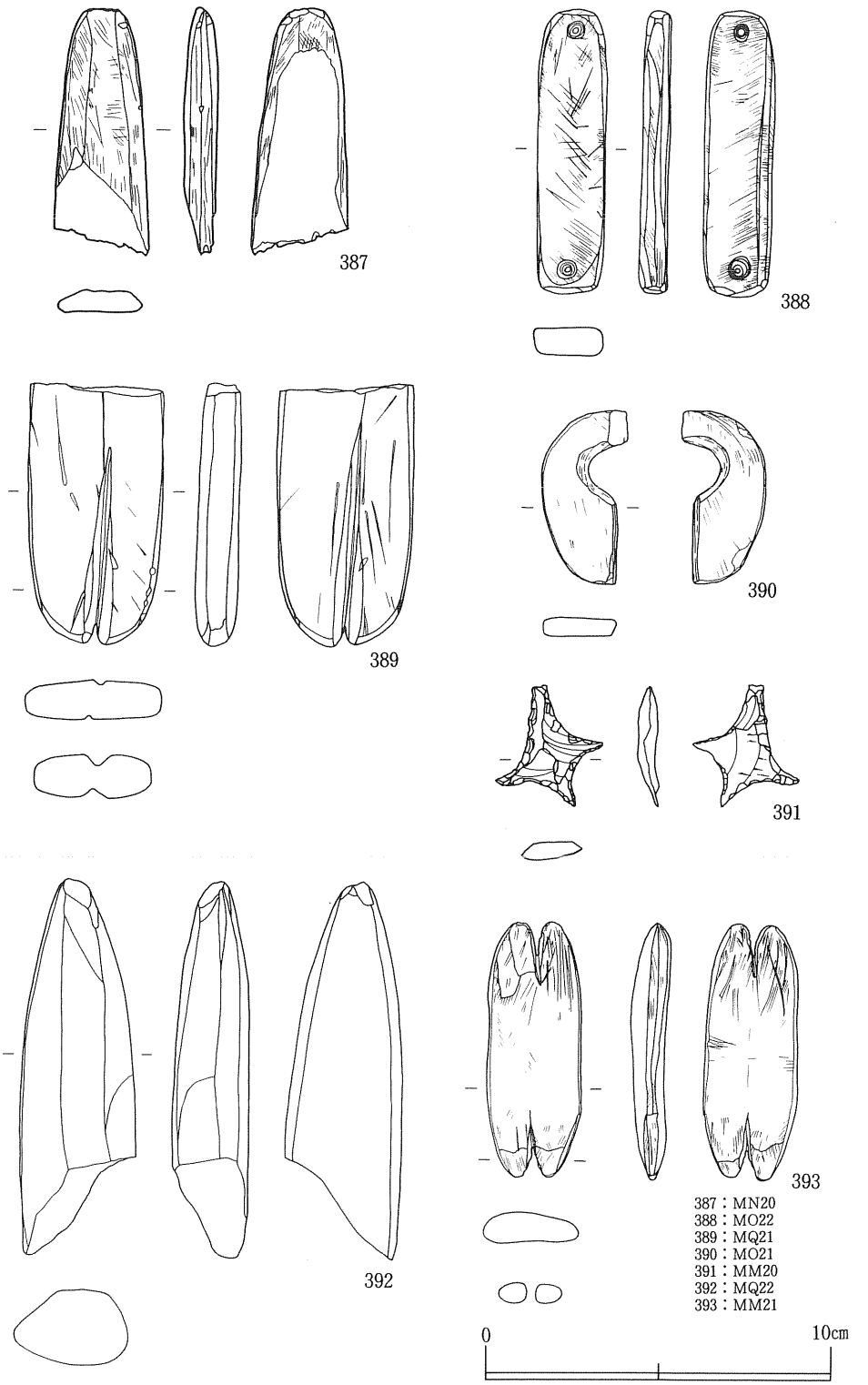
第60図　遺構外出土石器(6)



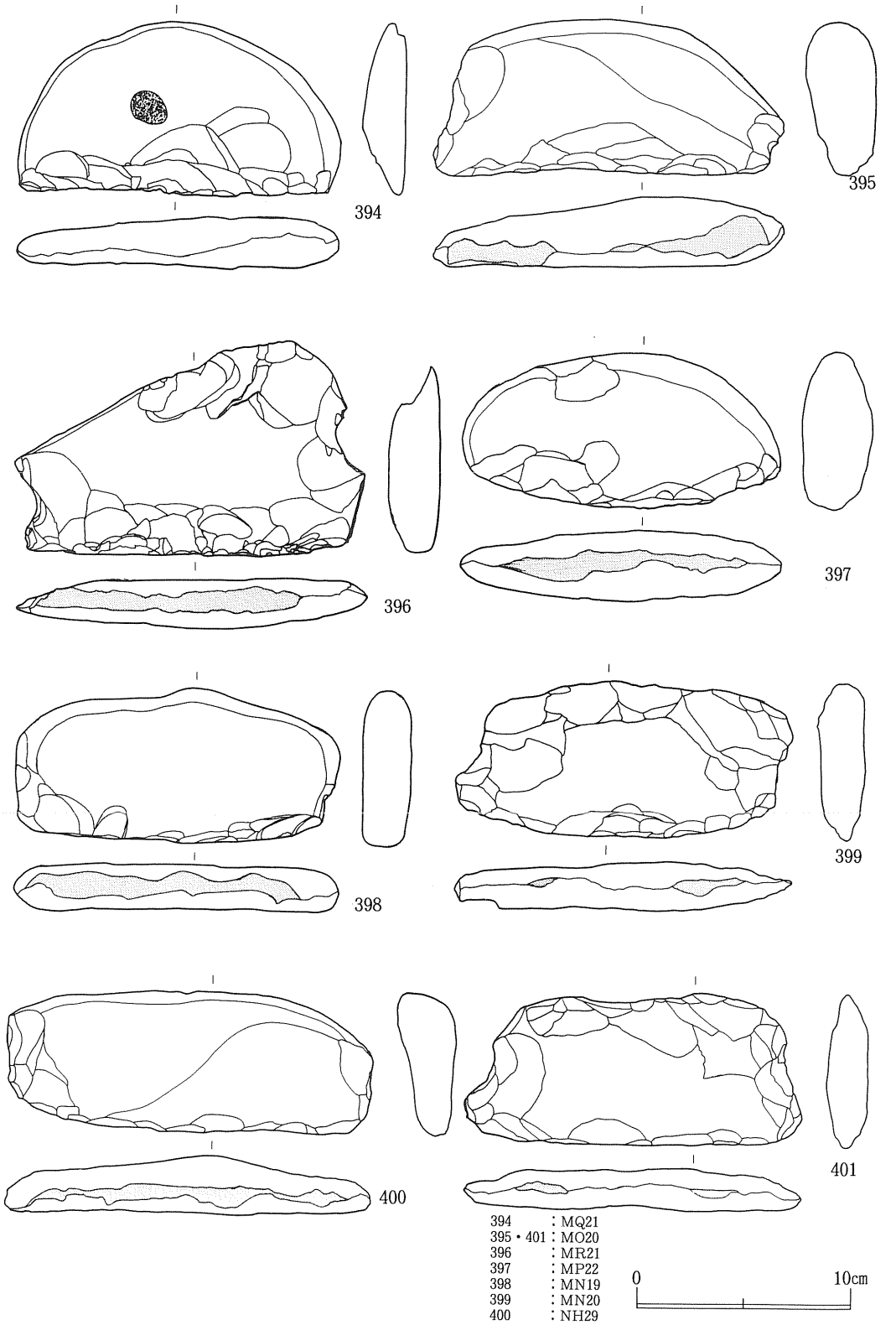
第61図　遺構外出土石器(7)



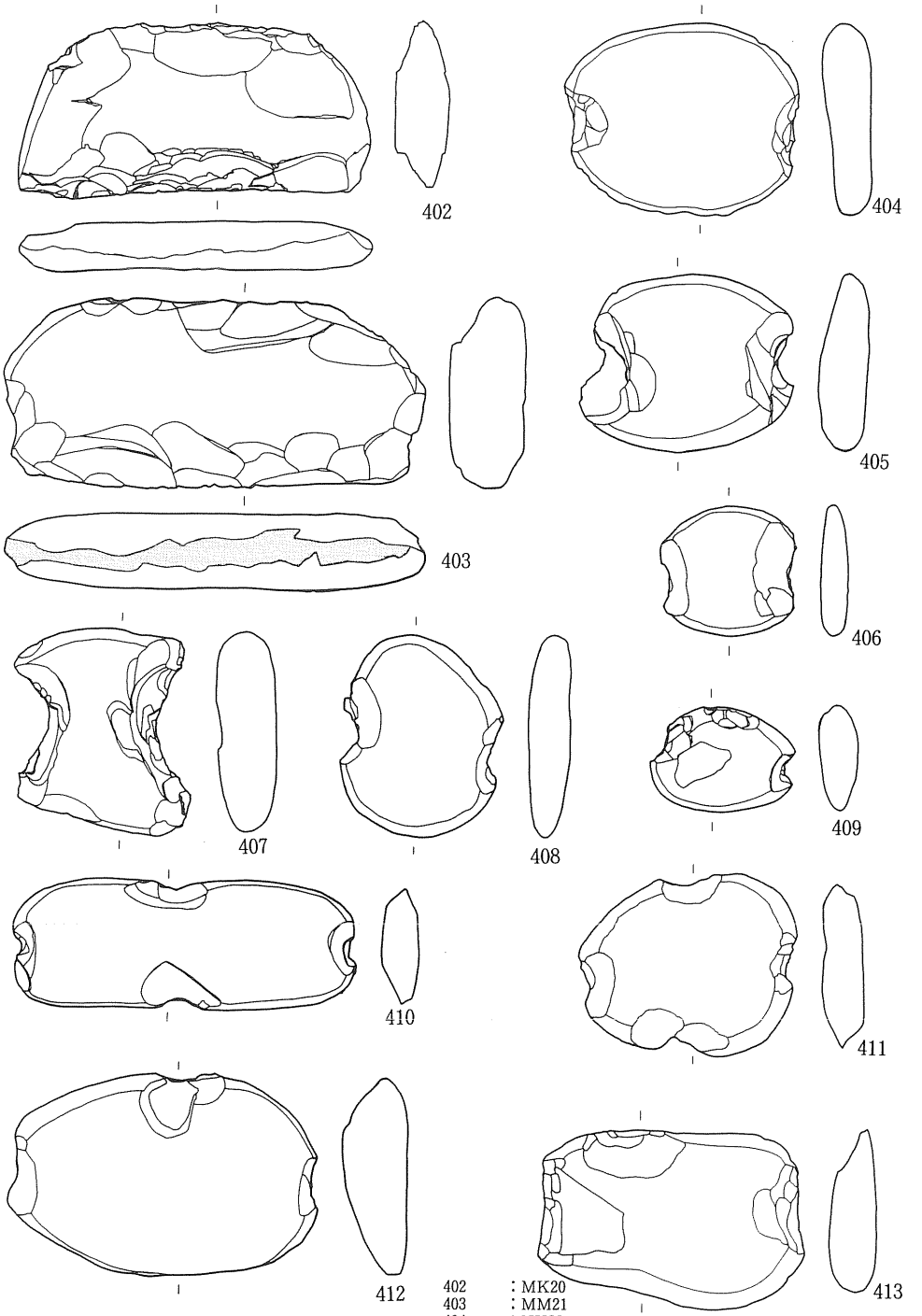
第62図　遺構外出土石器(8)



第63図　遺構外出土石器(9)

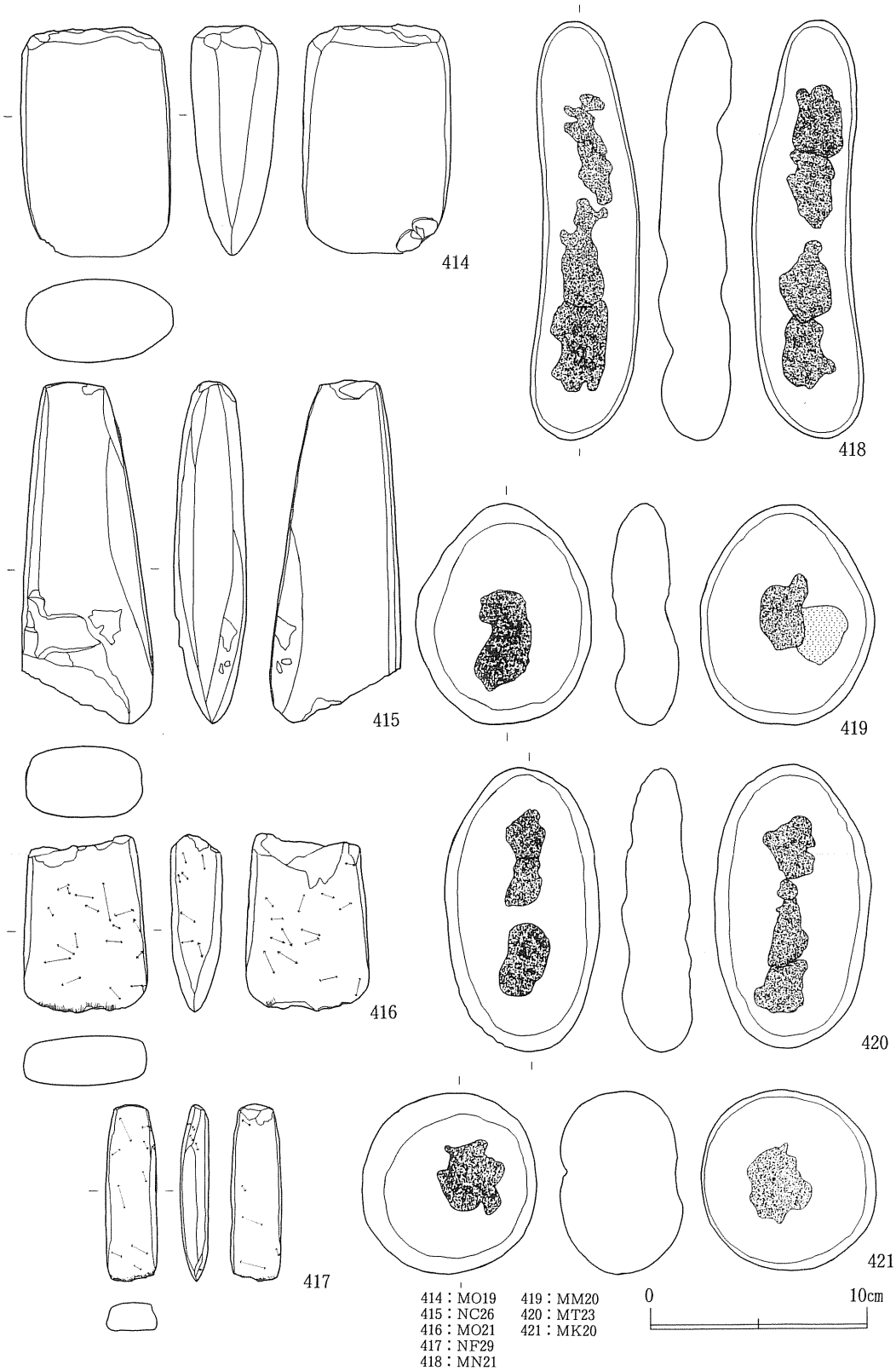


第64図　遺構外出土石器(10)

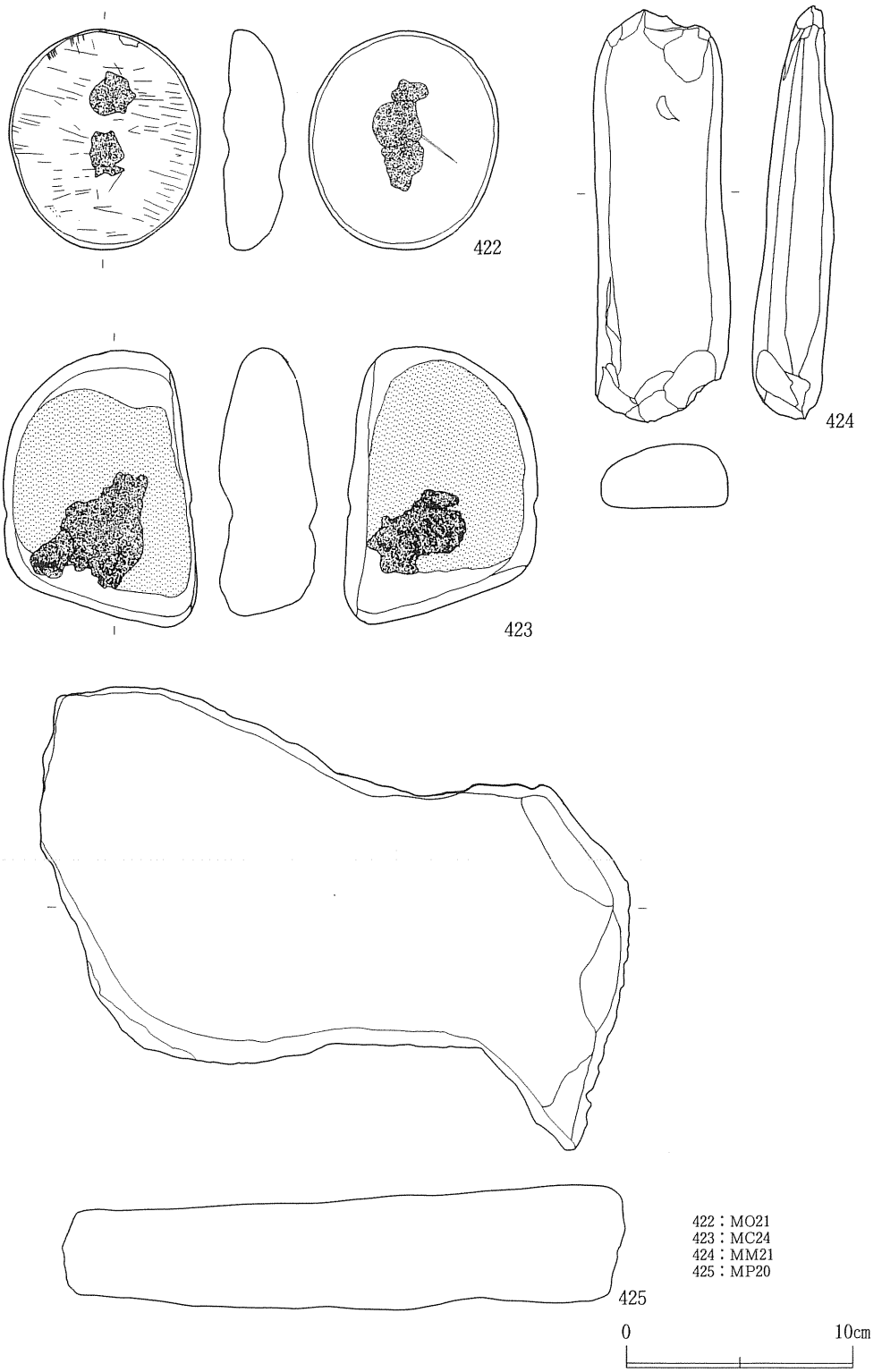


402　：MK20
403　：MM21
404　：NH39
405　：NE28
406　：NO24
407・409：NH31
408　：NC24
410　：MN21
411　：MM21
412　：MS23
413　：NF28

第65図　遺構外出土石器(11)



第66図　遺構外出土石器(12)



第67図　遺構外出土石器(13)

3　ドングリ圧痕土器

これまでに土器・石器について述べてきたが、まとまった資料としては他に例を見ないドングリ圧痕土器を別項としてここで扱いたい。土器に何等かの圧痕を認めることがあるが、圧痕の原体を確定できるものは極めて希であり、より以上に情報を引き出すのは難しいのが実情である。他の遺跡の例を見るとドングリ・クルミなどの木の実や植物の葉(註1)、籾の圧痕(註2)、小生物の圧痕(註3)などの確認が報告されている。形態に特徴のある木の実や植物、小生物の確認が中心となっているのも圧痕の原体特定の難しさを物語っているものであろう。

上ノ山Ⅱ遺跡の調査で確認した122点の圧痕土器片は、その形態や大きさからドングリ圧痕と考えられる。同様の圧痕土器出土遺跡としては、岡山県・高島黒土遺跡(註4)、福井県・破入遺跡(註5)、同・古宮遺跡(註6)、富山県・極楽寺遺跡(註7)、静岡県・清水柳遺跡(註8)、北海道札幌市・S239遺跡(註9)、秋田県・根羽子沢遺跡(註10)があり、おおよそ縄文時代早期から中期を中心とする遺跡から確認されているようである。特に清水柳遺跡出土の圧痕土器片には、圧痕原体であるドングリが土器焼成段階で燃え尽きず土器胎土中に残っており、圧痕原体が明確に判明している好資料である。これらの遺跡は資料点数のばらつきもあり、同一観点での比較対象とすることに懸念も残るが、本報告ではとりあえず同一観点の資料として扱って、比較検討していきたい。これらの遺跡は立地等を比較した場合、西日本から北海道に至るまで分布しており地域的な偏りは特に認められないように思えるが、清水柳遺跡を除けば他の遺跡は日本海側に位置しており留意する必要があろう。近年、日本海側の文化を見直そうとする動き(註11)のある中でどのような位置付けとなるのかは今後に譲るとしても、資料点数で他の遺跡を圧倒する上ノ山Ⅱ遺跡の場合、30を越える大型住居跡との関連を避けることはできないであろうと思われる。

以下、ドングリ圧痕土器に若干の分類を試み、検討したい。

(1)　ドングリ圧痕の認められる土器とその部位について　（第2表）

ドングリ圧痕の認められる土器片はいずれも細片のため土器の器形を十分に推定しえるものではないが、おおよそ深鉢形土器に限られるようである。また圧痕の認められる部位については一様でないものの、第2表に見るとおり土器胴部が主で口縁部・底部にもわずかだが認められる。さらにドングリ圧痕の圧痕状態を細分すると土器の内・外面に圧痕が認められるものが大半を占めるが、器壁を突き抜けて貫通しているものや胎土中に埋め込まれたものも少数ながら認められる。また、1資料に数個体分のドングリ圧痕が認められるものもあり、従来の偶然性の産物としてとらえる説には疑問の残るものもある。

(2)　ドングリとドングリの圧痕状態　（第3表）

ドングリの圧痕状態は器面に平行しているもの、直交するもの、斜めのものと3分類され、第3表のとおりである。器面に平行するものの割合が低く、直交するものと斜めのものが主流

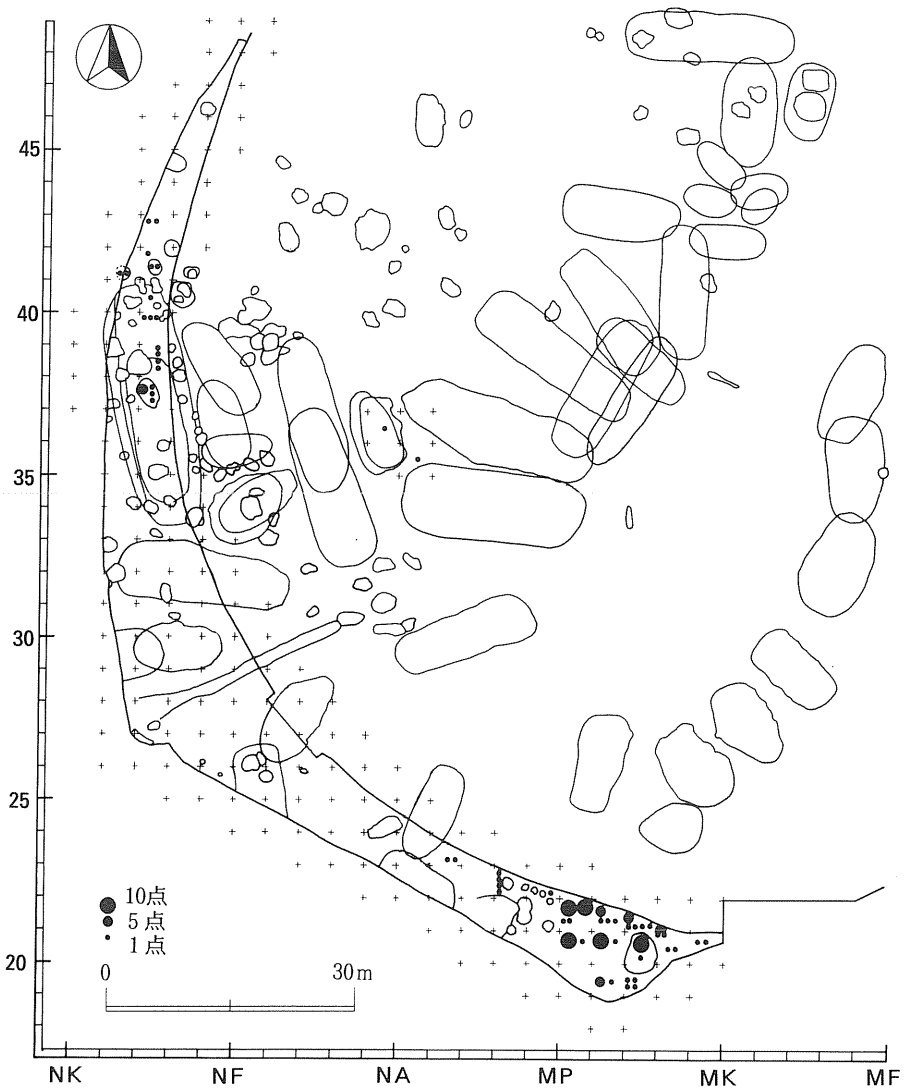
第２表　ドングリ圧痕の認められる部位

	口縁部	胴部	底部	合計
内面	1	28	2	31（23%）
外面	5	46	5	56（41%）
貫通	0	36	3	39（29%）
胎土中	0	8	2	10（ 7%）
合計	6(4%)	118(87%)	12(9%)	136(100%)

第３表　ドングリの圧痕状態

土器面に平行	11（ 8%）
土器面に直交	50（37%）
土器面に斜め	65（48%）
胎土中	10（ 7%）
合計	136(100%)

（圧痕複数資料は個々に分類）



第68図　ドングリ圧痕土器片出土地点位置図

のようである。圧痕から推定されるドングリの大きさは、焼成時の土器の収縮を考慮すれば、長さ1.4～２㎝、最大径1.1～1.9㎝で、おおよそ長さ２㎝、最大径1.5㎝位のドングリが主体のようである。細長く先細りの圧痕形態や落葉広葉樹林帯に位置する植生から推測すると、上ノ山Ⅱ遺跡におけるドングリ圧痕は東北日本に広く分布するナラの木の実のものと考えられる。

(3)　ドングリ圧痕土器片の分類　（第69・70図、図版54～59）

第69図426・427は粘土紐の上に刺突が施されているもので、本遺跡分類（以下略）のⅠ－６類に属するものである。428は沈線によって横位の波状文が施されているもので、Ⅰ－７類に属するものである。429は沈線によって渦巻文が施されているもので、Ⅰ－９類に属するものである。430は沈線文が垂下して施文されているもので、Ⅰ－10類に属するものである。431は沈線が施されているもので、Ⅰ－13類に属するものである。432は斜縄文と綾絡文が施文されているもので、Ⅰ－18類に属するものである。433・434は羽状縄文が施されているもので、Ⅰ－19類に属するものである。435・436は撚糸文が縦位に施されるもので、Ⅰ－20類に属するものである。437・438は網目状撚糸文が施されているもので、Ⅰ－21類に属するものである。439は平織状撚糸文が施されているもので、Ⅰ－24類に属するものである。440～442は条線による文様を施すもので、Ⅰ－26類に属するものである。第70図443・444は土器口縁部にドングリ圧痕があるもので、443は土器外面に、444は土器内面に認められる。445～448は土器底部にドングリ圧痕があるもので、圧痕の位置から土器は耐久性・耐用性に乏しい非実用的なものであったと考えられる。449～451は胴部外面に、452～454は胴部内面にドングリ圧痕が認められるものである。455～457はドングリ圧痕が器壁を突き破って貫通しているもので、体部下半の破片とすれば液体容器としての用途は考えにくいものである。458～460は胎土中にドングリが埋め込まれているもので、事後の混入は考えにくく、製作段階での意図的な混入と思われる。

以上の分類を踏まえてドングリ圧痕の圧痕時期と性格について触れてみる。

始めにドングリ圧痕の圧痕時期であるが、従来この類いの圧痕は偶然性の産物として認識されており、意図的なものとは考えられていないのが現状である。実際の出土例を見ても圧痕が印され易い底部資料が多く、口縁部～胴部資料は少数例に止どまっている。また、１遺跡あたりの出土例も１点から多くて10点以内で、偶然性の産物としての圧痕を裏付けている。

しかし、上ノ山Ⅱ遺跡の場合は前述の条件に合致しない部分が多く、むしろ意図的な圧痕としてとらえたほうが至当と思われる。その理由として次のことが考えられる。

①　圧痕資料数が今回の調査に限っても120点と多く、さらに今回検討できなかった前回調査分にも最低２点が確認されており、遺跡全体ではかなりまとまった数が予想され、他の遺跡と比較して突出していること。

② 1資料に数個体分のドングリ圧痕が認められるものも数資料あり、偶然性における単一性とは考えにくいこと。

③ 偶然性の産物で圧痕確率の高い底部資料は少なく、胴部への圧痕資料が大部分であること。

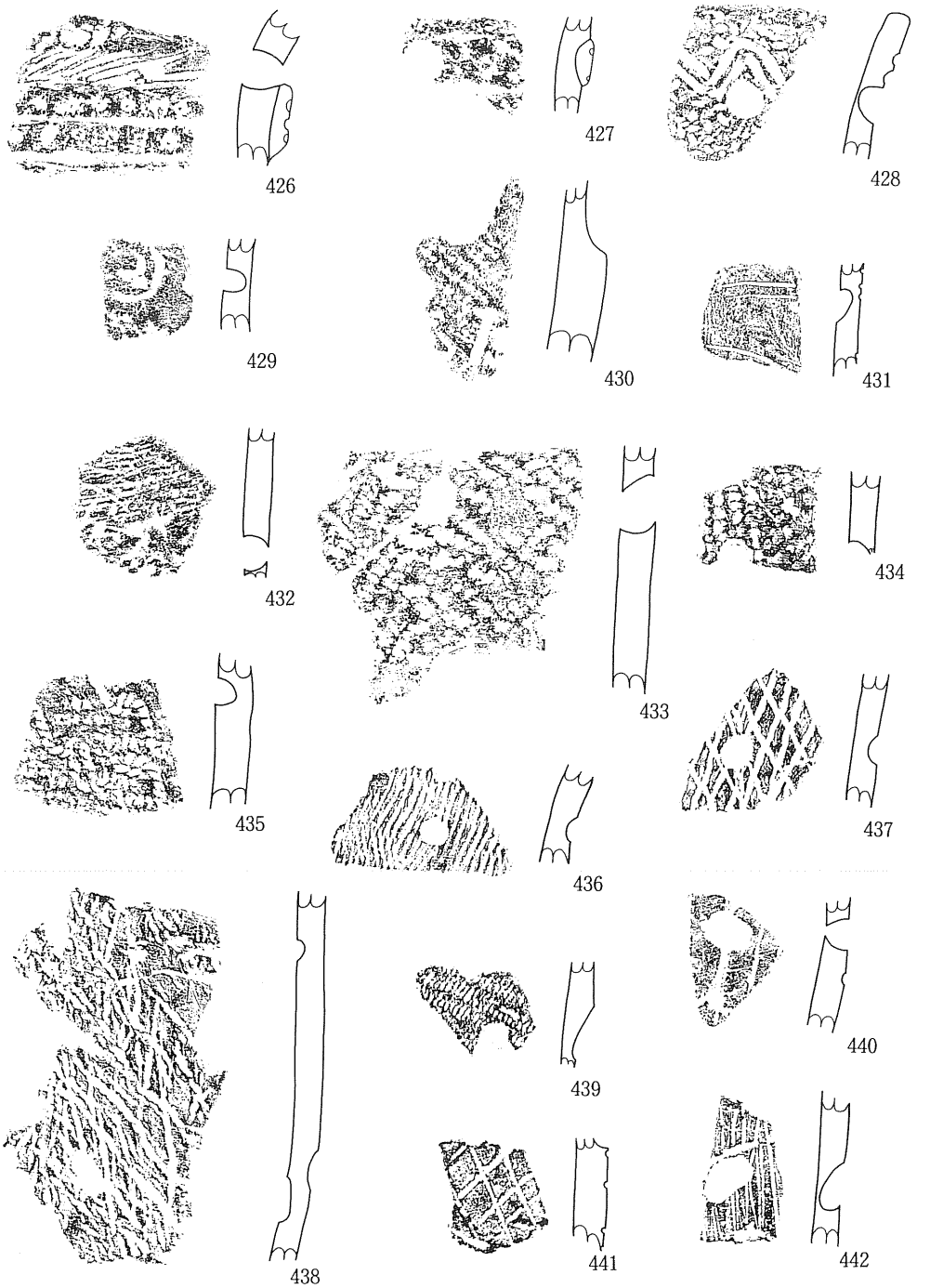
④ ドングリ圧痕を偶然性の産物としてとらえた場合、器面に平行する状態での圧痕確率が高いと考えられるが、器面に直交ないし斜めのものが大半を占めることから故意の可能性が高いと思われる。

⑤ 偶然性の産物として考えれば土器製作が主目的であるはずで、土器の耐用性・耐久性を著しく損なうであろう圧痕（土器の胎土中に埋め込まれたものや器壁を突き抜けているもの）は、焼成以前に気付き取り去るか圧痕を埋めるなどの処置ができたと考えられること。

以上から、ドングリ圧痕には製作者の意図が反映されていると考えられる。

もし、ドングリ圧痕が製作者の意図を反映しているものとすれば、ドングリ圧痕は先に述べた理由からおおよそ次のように想定される。ドングリは特定の深鉢形土器製作段階から意図的に胎土中に埋め込まれ、土器の耐用性・耐久性は問題にしていない。おそらくはドングリを埋め込むこと自体に意義があったのであろう。土器製作後には、ドングリを土器内外に飾るがごとく貼り付けたか押し付けて、ドングリもしくはドングリ圧痕を強調している。そしてこれらの土器は、第68図のドングリ圧痕土器片出土地点の示すとおり特定の場所で使用もしくは特定の場所に廃棄されたと考えられるのである。(註12) もしさらに論を進めるならば、これらの土器は実用性のない祭祀用具と考えられ、ドングリの収穫時期と合わせ考えれば、秋にドングリ等の収穫を祝った際のものなのであろうか。この場合、ドングリの収穫時期に土器の製作がなされたことも併せて言えるであろう。

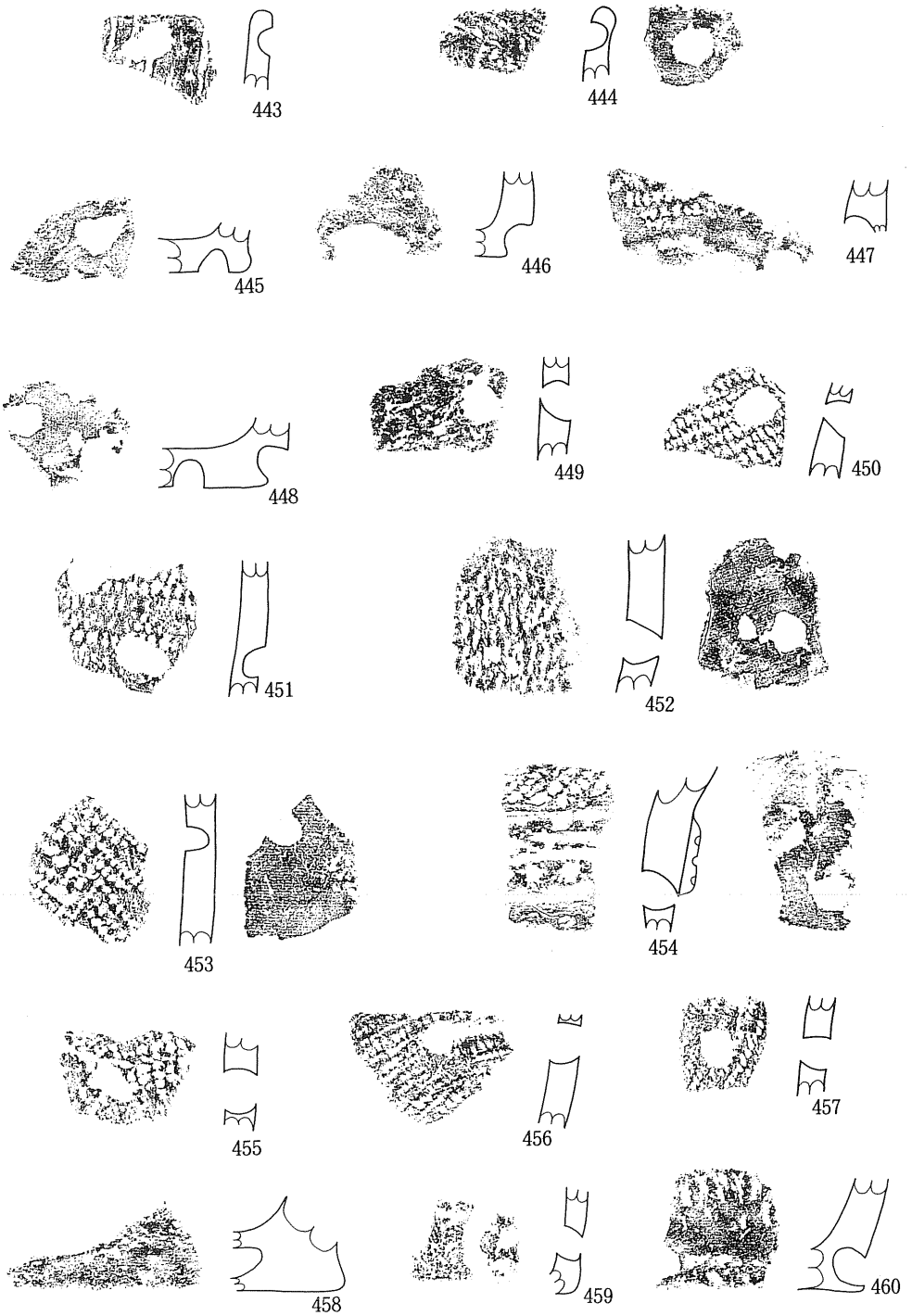
註1　小林達雄 「縄文土器の世界」『日本原始美術大系　1』 講談社　1977（昭和52年）
註2　秋田県内では若美町・横長根Ａ遺跡に代表される。
註3　註1に同じ
註4　山内清男 「縄文時代研究の現段階」『先史考古学論文集・新第五集』 1972（昭和47年）
註5　勝山市教育委員会 『破入遺跡』 勝山市文化財報告書第2集　1977（昭和52年）
註6　勝山市教育委員会 『古宮遺跡発掘調査報告書』 勝山市文化財報告書第3集　1978（昭和53年）
註7　富山県教育委員会 『極楽寺遺跡発掘調査報告書』 1965（昭和40年）
註8　沼津市教育委員会 『沼津市清水柳遺跡発掘調査概報』 1966（昭和41年）
註9　札幌市教育委員会 『Ｓ239遺跡』 札幌市文化財調査報告書Ⅸ　1975（昭和50年）
註10　秋田県教育委員会 『根羽子沢遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第176集　1988（昭和63年）
註11　日本海文化を考える富山シンポジウムが、各会毎にテーマを変えながら過去6回開催されている。
註12　2カ所に集中した分布の特徴は今回の調査区内のもので、検討できなかった前回調査分も含めた場合、顕著な特徴として見い出だせない可能性や別の特徴が見出だされる可能性もありえよう。



426・433　：MM21
427　：NH39
428　：NA36
429・442　：MO20
430・437・441：MO21
432・443　：MN21
434・436：MN20
435　：SK049
438　：MS23
439　：NH40

0　10cm

第69図　ドングリ圧痕土器(1)



底面拓影図　底面拓影図

443・444	：SK046	450	：MQ22
445・449・451・460	：MQ21	452・453・455	：MO20
446	：MP22	454	：MM21
447	：MM20	457	：SK047
448・456	：MN20	458	：MN21
		459	：MS23

第70図　ドングリ圧痕土器(2)

第５章　自然科学的分析

第１節　炭化物に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学畜産環境学科　　中野益男
北海道測量図工社総合科学研究所　福島道広、中野寛子、長田正宏

すべての動植物は体内に脂肪を持っており、それを構成する脂肪酸とステロールの化学組成は種によって異なる。最近、この脂肪は千年・万年と云う長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した[1、2]。原始古代の遺物や土壌に残った脂肪を抽出、分析し、現世の動植物の脂肪酸組成、ステロール組成と比較することで“脂肪の持主”を特定しようとするのが残存脂肪分析法である。この「残存脂肪分析法」を用いて、上ノ山Ⅱ遺跡出土の炭化物の性格、用途を解明しようとした。

１　炭化物試料　（第71・72図、図版60）

上ノ山Ⅱ遺跡ＳＩ190大型竪穴住居跡から出土した炭化物は縄文時代前期のものと推定される。その竪穴住居跡配置図および炭化物実測図を第71図中の図１および図２に示す。試料として炭化物をＳＩ190大型竪穴住居跡床面より採取した。

２　残存脂肪の抽出　（表４）

炭化物試料に３倍量のベンゼン－メタノール（１：１）混液を加え、超音波浴槽中で３分間処理後10分間静置を３回繰り返し、次にクロロホルム－メタノール（２：１）混液を加え超音波浴槽中で３分間処理後10分間静置を３回繰り返して残存脂肪を非破壊抽出法で抽出した。

残存脂肪の抽出量を表４に示す。残存脂肪抽出量は0.0143％で、山形県高畠町縄文時代前期の押出遺跡から出土したクッキー状炭化物の抽出量0.0284～1.7408％、平均0.7577％[3]と比較して低かったが、分析には十分量であった。

分析脂肪をヘキサン－エーテル－酢酸（80：30：１）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した。脂肪種は遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリグリセリド、ステロールおよび炭化水素の順に検出された。リンおよび糖を持った複合脂質は少なかった。

3　残存脂肪の脂肪酸組成　（第72図）

試料の残存脂肪に５％メタノール性塩酸を加え、125℃で２時間封管中でメタノール分解し、生成した脂肪酸メチルエステルをヘキサン－エーテル(85：15)を展開溶媒とする薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。(4)

試料の残存脂肪の脂肪酸組成を第72図中の図３に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸(Ｃ16：０)、パルミトレイン酸(Ｃ16：１)、ステアリン酸(Ｃ18：０)、オレイン酸(Ｃ18：１)、リノール酸(Ｃ18：２)、アラキジン酸(Ｃ20：０)、エイコサモノエン酸(Ｃ20：１)、ベヘン酸(Ｃ22：０)、エルシン酸(Ｃ22：１)、リグノセリン酸(Ｃ24：０)など10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。油脂は一般に加熱していくと250～300℃で変化がみられ、相対的にオレイン酸の減少とともに、パルミチン酸が急激に増加する。(3) 炭化物試料についてもパルチミン酸が約39％を占めることから加熱処理された可能性が高い。また脂肪酸組成は主成分のパルチミン酸の他に、オレイン酸も多く検出された。これは植物起源の油脂、とくに、トチ・クリ等の木の実と動物種の油脂および骨油に多く分布している。高等動物の脳、血液、内臓に多く見られるベヘン酸およびリグノセリン酸等の高級飽和脂肪酸についても約14％含まれていた。

4　残存脂肪のステロール組成　（第72図）

試料に残存する脂肪からステロールを先に述べた溶媒等を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーにより分離・精製後、アセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィー質量分析計により分析した。

試料の残存ステロール組成を第72図中の図４に示す。残存脂肪から７～11種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど７種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。炭化物試料のステロール組成(第72図中の図４)を見ると、動物由来のコレステロールが約22％と高い割合で分布し、植物に特徴的なシトステロールは約５％と低いところから、澱粉質は木の実類に由来していると推測される。先の脂肪酸組成の結果と合わせると、炭化遺物は植物質のもののほかに、動物質のものも含まれていると推測された。通常土壌中に５～10％分布している微生物由来のエルゴステロールは約17％含まれていた。山形県押出遺跡出土クッキー状炭化物と比べてその割合は低い。(3) 従って、炭化遺物は積極的に発酵させて加工したものでなく投棄等によって自然発酵した可能性が高い。

５　脂肪酸組成からの数理解析　（第72図、表５）

炭化物試料の脂肪酸組成とファイルされている現世基準資料の動植物種の脂肪酸組成を加熱変動後の組成に換算[3]して重回帰分析にかけ、相関行列距離を基にした群平均法によるクラスター分析の結果を第72図中の図５に示す。樹状構造図に見られるように、炭化物はツグミ、モズ、アカハラ等の野鳥および野鳥の卵の他にニホンジカ、イノシシと相関行列距離0.2以下と類縁関係の深いコロニーを形成した。特に野鳥との相関行列距離は短かった。また植物等ではアラカシ、クリおよびトチなどの木の実と近い距離にあり、クルミとは遠い距離にあった。その他の基準資料は、相関行列距離は0.5以上となった。

上ノ山Ⅱ遺跡の炭化遺物の場合、クラスター分析の成績から数種の動植物脂肪の混入が推測された。そこでクラスター分析から導き出された数種の動植物種のうち、行列距離の短いアカハラ、ツグミ、野鳥の卵(この場合はウズラの卵)、イノシシ、ニホンジカ、アラカシ、クリ、トチと炭化遺物の脂肪酸分析結果との誤差の２剰和で最も小さくなるような動植物種の組合わせをラグランジュの未定係数法を用いて算出した[3、5]。表５に炭化遺物と動植物種の混合割合を示す。表に見られるように、炭化遺物試料の残存脂肪にはアカハラ、ツグミ等の野鳥の脂肪43.8％、ウズラ等野鳥の卵の脂肪20.1％、アラカシ油脂18.1％、イノシシ油脂7.1％、ニホンジカ油脂6.0％、クリ油脂3.0％、トチ油脂1.9％の順になる。動物油脂が約77.0％となり、植物油脂と比較して圧倒的に多かった。この成績は炭化遺物に動物油脂、とくに野鳥油脂が多く含まれていることを明確に示している。

６　総　　括

上ノ山Ⅱ遺跡から採取した炭化遺物試料の油脂は、アラカシ、トチ、クリ等の植物質が23％とアカハラ、モズ、ツグミ等の野鳥および野鳥の卵等の動物油脂が63.9％存在することがわかった。炭化物の性格、用途について炭化物１試料だけで、対照区としての周辺土壌との比較ができず、この分析結果だけから判定するのは困難である。しかし、山形県押出遺跡から出土したクッキー状炭化物と比較すると発酵食品の可能性は低いが、野鳥および野鳥の卵等の動物性油脂を主体として、木の実を混合させて加熱処理した食品の可能性は極めて高いと推測される。

参　考　文　献

(1)　R. C. A. Rottlander and H. Schichtherle ;「Food Identification of Samples from Archaeological Sites」, ARCHAEOPHSIKA , 10　pp260

(2)　中野益男「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻(6)　pp124. 1984（昭和59年）

(3)　中野益男、福島道広、中野寛子、中岡利泰、根岸　孝：「残存脂肪分析法による原始古代の生活環境復原－とくに東北地方の縄文時代前期遺跡から出土したクッキー状炭化物の栄養化学的同定（第7報）」『日本農芸化学会東北支部北海道支部合同秋期大会講演要旨』　pp15. 1987（昭和62年）

(4)　M. Nakano and W. Fischer：「The Glycolipids of Lacdobacillus casei DSM 20021」『Hoppe－Seyler's Z. Pysiol. Chem.』358巻　pp1,439　1977（昭和52年）

(5)　中野益男、根岸　孝、長田正宏、福島道広、中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の焼石に残存する脂肪の分析」『ヘロカルウス遺跡』北海道文化財研究所調査報告書、第3集、pp191　1987（昭和62年）

表4　上ノ山Ⅱ遺跡出土の炭化物の残存脂肪抽出量

出　土　地　点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
SI 190床面	9.7846	14.0	0.0143

表5　炭化物試料に残存する脂肪酸組成から算出した動植物油脂の分布割合

脂肪酸	炭化物	イノシシ加熱	ウズラ卵加熱	ツグミ加熱	アカハラ加熱	ニホンジカ加熱	クリ加熱	トチ加熱	アラカシ加熱	計算値
c16：0	39.00	52.66	39.18	31.21	30.16	42.07	35.09	20.26	31.89	40.545
c16：1	16.58	－	3.50	3.39	4.22	6.56	2.08	－	－	7.771
c18：0	9.85	15.17	12.45	17.67	13.48	25.95	1.10	2.61	1.70	－1.569
c18：1	13.79	6.83	23.27	11.41	12.13	14.15	10.21	32.93	24.28	－0.658
c18：2	1.22	5.35	16.26	10.36	12.84	4.65	44.15	28.14	35.71	0.839
c18：3	－	－	0.28	－	－	－	10.60	－	－	－4.056
c20：0	1.61	1.72	－	1.58	6.72	2.81	－	6.50	5.07	－2.693
c20：1	0.27	0.97	0.07	0.34	0.35	0.36	－	7.80	0.46	－0.216
c20：2	0.55	－	0.62	－	－	0.24	－	0.10	0.10	－0.468
c20：4	－	－	－	－	6.82	0.05	－	－	－	－1.867
c20：5	－	－	－	7.46	1.41	0.04	－	－	－	－0.052
c22：0	5.18	7.70	1.87	1.69	－	1.10	－	1.46	0.25	0.889
c22：1	0.15	2.05	－	－	0.02	0.38	－	－	0.08	－1.893
c22：2	3.04	6.70	0.06	0.01	－	0.38	－	－	0.08	5.565
c22：5	－	5.25	－	－	6.12	0.15	－	－	－	0.964
c24：0	8.75	3.65	0.02	10.92	0.48	1.57	－	0.19	0.16	4.428
c24：1	－	－	0.09	0.46	－	0.41	－	－	－	0.071
分布割合(%)		3.6	20.1	19.7	24.1	6.0	3.0	1.9	18.1	

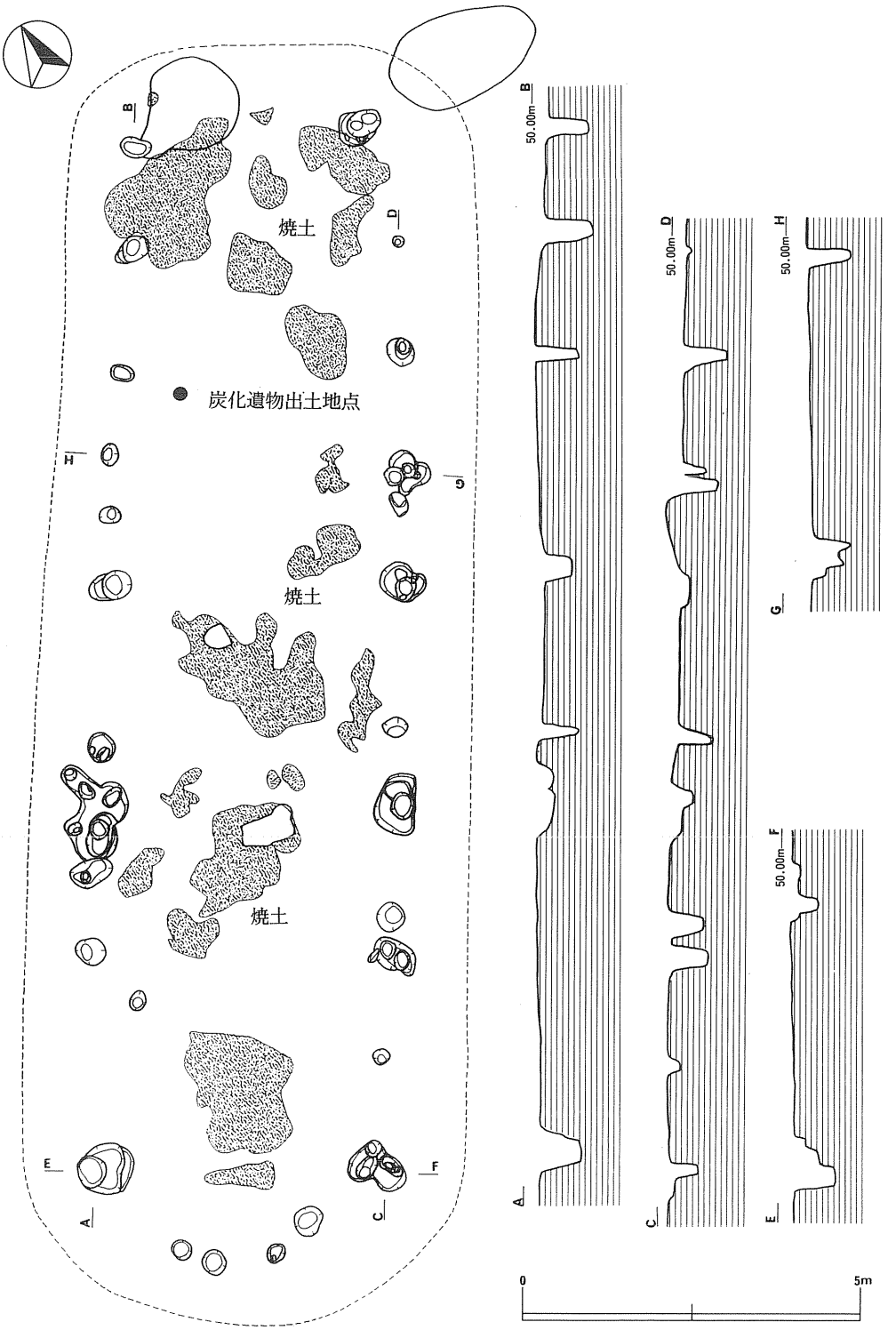


図１　SI190大型竪穴住居跡配置図

第71図　自然科学的分析(1)

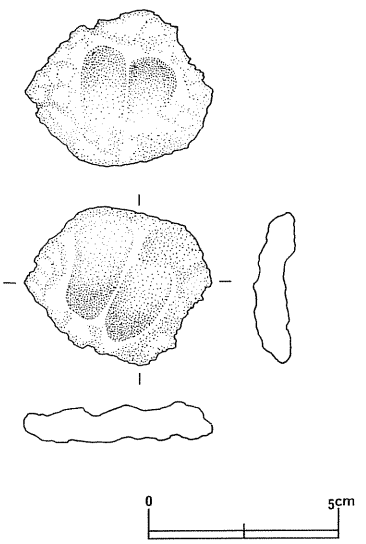


図2　炭化物実測図

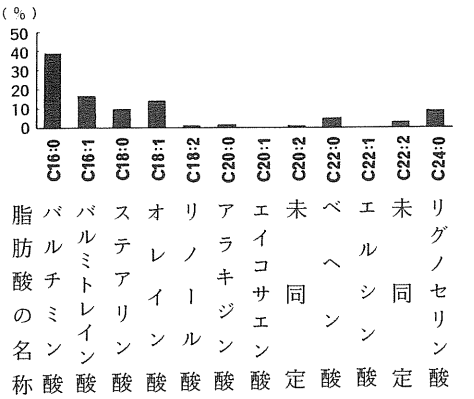


図3　炭化物試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

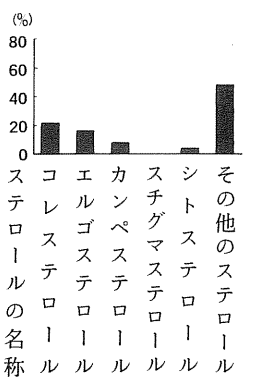


図4　炭化物試料に残存する脂肪のステロール組成

相関行列距離

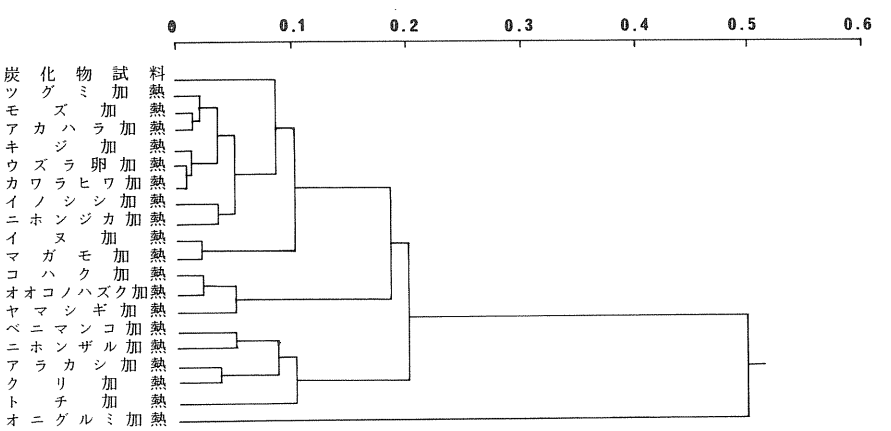


図5　炭化物および現生動植物油脂の加熱変動後の脂肪酸組成樹状構造図

第72図　自然科学的分析(2)

第6章　まとめ

本年度の上ノ山Ⅱ遺跡発掘調査の結果、大型住居跡7軒を含む竪穴住居跡12軒、土坑43基、フラスコ状土坑19基、土器埋設遺構1基、集石遺構1基、焼土遺構1基、溝状遺構1条の計78遺構を検出した。昭和61・63年度調査における検出遺構を合わせると総検出遺構は、竪穴住居跡72軒（大型住居跡33軒を含む）、土坑156基、フラスコ状土坑35基、陥し穴状遺構6基、土器埋設遺構6基、配石・集石遺構4基、溝状遺構1条の計280遺構となる。

上ノ山Ⅱ遺跡は、前回の調査で他の遺跡と比較して突出して大型住居跡が多く、またその大型住居跡配置も放射状配列を呈するなど特異な要素を持つことが知られていた。また出土遺物においても、15,000点におよぶ膨大な量の石器や50点もの玦状耳飾り、燕尾形石製品・カツオブシ形石製品・有撮石器など他に例を見ない上ノ山Ⅱ遺跡独特の石器などを有し、土器では東北北半の円筒系と東北南半の大木系の土器、そして両者の様式が融合した土器を出土するなど県内の他の集落遺跡と明らかに一線を画する集落遺跡としてとらえられてきた。この傾向は、今回の調査結果において、より一層明確になったと言える。

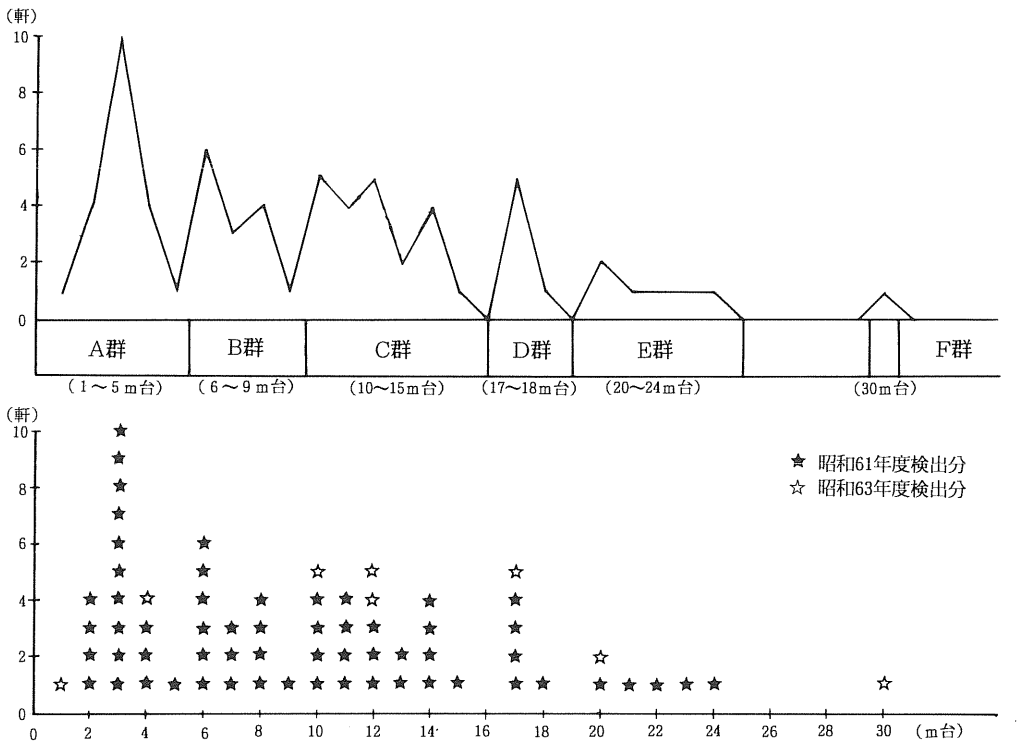
本稿では前回の報告を踏まえつつ、今回の調査結果に基づいて遺構相互の関係、大型住居跡の変遷と性格、遺物について若干の検討と考察を付け加えてまとめとする。

1　上ノ山Ⅱ遺跡遺構群について

先の報告で上ノ山Ⅱ遺跡の遺構をそのまとまりから「中央部遺構群」、「西部遺構群」、「北東部遺構群」の3遺構群に分けたが、今回の調査結果から4遺構群としたい。理由は、中央部遺構群の南斜面に予想数以上の遺構があり、しかもさらに南へ広がることが推測されたからである。南斜面の遺構群は、明らかに「西部遺構群」の域をでるものであり、区分の必要がある。区分としては、周囲と比較して遺構検出密度が低く、当時もなんらかの区画ないし区分の目安となっていたであろうＳＤ216溝状遺構を境として、北を「西部遺構群」、南を「南部遺構群」として全体を4遺構群に分けたい。

2　大型住居跡の配置と変遷について　（第73・74図）

上ノ山Ⅱ遺跡の住居跡の長軸法量による分布は第73図にあるように、3ｍ台をピークとするＡ群、6～8ｍ台を中心とするＢ群、10～14ｍ台を中心とするＣ群、17ｍ台をピークとするＤ群、20～24ｍ台を中心とするＥ群、30ｍ台のＦ群の6つに分類できる。それぞれの群における



第73図　住居跡長軸法量分布図・分類図

住居跡の数は、A群20軒、B群14軒、C群21軒、D群6軒、E群6軒、F群1軒である。先に上ノ山Ⅱ遺跡では、大型の目安として住居跡の長軸が10mを超えるものを大型住居跡として(註1)いるので、本報告においても規模が10m以上のC～F群を大型住居跡として扱うことにする。

大型住居跡の変遷を出土遺物から導くことは、個々の遺物に明確な前後関係を見出だせるほどの時代差が無いために無理である。前報告では大型住居跡の長軸方位による分類と変遷を試み、前半「放射状配列」、後半「平行配列」の変遷を掲げている。本報告では多角的に検討する意味で、変遷の可能性の一つとして前述の規模分類を基にした大型住居跡の変遷の想定を試みたい。規模分類による各群が次に説明する①～⑧によって時期差である可能性が考えられるので、ここでは各群が時期差であり同一群の大型住居跡は同時期と仮定した場合の大型住居跡の変遷の想定を試みたい。大型住居跡間の新旧関係で明確なのは次のものである。

① ＳＩ171（Ｆ群）は、ＳＩ255（Ｄ群）より古い。

② ＳＩ126（Ｅ群）は、ＳＩ156（Ｄ群）より古い。

③ ＳＩ148（Ｃ群）は、ＳＩ118（Ｃ群）より古い。

④ ＳＩ147（Ｃ群）は、ＳＩ123（Ｃ群）より古い。

⑤ ＳＩ315（Ｃ群）は、ＳＩ195（Ｃ群）より古い。

⑥ ＳＩ180（Ｄ群）はＳＩ326（Ｃ群）より古く、ＳＩ326（Ｃ群）はＳＩ190（Ｄ群）・199（Ｄ群）・327（Ｄ群）より古い。

⑦ ＳＩ170（Ｅ群）・150（Ｅ群）は、ＳＩ190（Ｄ群）・327（Ｄ群）より古い。

⑧ ＳＩ328（Ｃ群）は、ＳＩ199（Ｄ群）より古い。

この新旧関係から、Ｃ・Ｅ・Ｆ群よりＤ群が新しく、Ｄ群が他の大型住居跡より新しい位置を占めていることがわかる。Ｃ群とＤ群の新旧関係については⑥において交差するが、全体の傾向からＣ群からＤ群へ移行すると考えて差し支えないと思われる。また、Ｃ群とＥ・Ｆ群の関係は、覆土のあるＳＩ312（Ｅ群）が地山面で確認されたＳＩ311（Ｃ群）より新しいと考えられることから、両群の新旧関係はＣ群よりＥ群が新しい。Ｆ群はＤ群以外と重複関係をもたないので定かではないが、30ｍ台という規模の大きさと１軒だけであることから、20ｍ以上の規模であるＥ群の延長と見なしてＥ・Ｆ群は同時期と考えたい。以上を総合するとＣ群→Ｅ・Ｆ群→Ｄ群の３段階の変遷が考えられる。以下、３段階の概略を説明する。

第１段階（Ｃ群）

直径約70ｍの広場の南半に大型住居跡が半円状に配置され、住居跡の長軸方向は広場の中央を指している。住居跡の位置・重複状況・形状などからいくつかの構成単位が想定できる。例えば広場の東側のＳＩ230・220Ａ・220Ｂ、南東部に位置するＳＩ217・218・229・215、西側のＳＩ118・148・123・147の３構成単位である。また広場南西部に位置するＳＩ099・214・239、広場北側のＳＩ015・311・195・315・318をそれぞれ１単位とすると５構成単位が想定される。Ｃ群間に重複が見られることから、この構成単位の中で建て替えが行なわれたのであろうか。これらの大型住居跡は、一定期間において明らかに広場を意識して構築され続けていたが、次第にその規制力が衰えてきたのか配置に対する意識が薄れたことにより大型住居跡の配置構成が崩れ、一部捨て場になっていったと思われる。

第２段階（Ｅ・Ｆ群）

第１段階のＣ群と比較して大型住居跡の規模は約２倍となるが、明解な配置構成は認められない。大型住居跡の分布は第１段階より西に寄り、おおよそ半分の占地となる。分布の南東部と北西部に広い空間があるが、これらを空間として意識されたものと見なすには確たる根拠に乏しい。第２段階では住居跡の位置・重複状況・形状などから、ＳＩ312、ＳＩ170・150・314、ＳＩ126・200[註２]、ＳＩ171の４構成単位が想定される。大型住居跡に特別の配置は認められないが、長軸方向が東西ないし南北を指すものが大半であることから配置とは別に何か意識されたものがあったのだろうか。

第74図　大型住居跡変遷図

第3段階（D群）

第2段階のE群より住居跡の規模はやや小さくなり、分布の占地も第2段階よりさらに小さくなる。明解な配置構成は、第2段階と同様に認められない。しかしＳＩ255・156は、先の第2段階のＳＩ171・126とほぼ同位置に構築されており、第2段階の位置構成を一部引き継いでいるものと思われる。住居跡の位置・重複状況・形状などから、ＳＩ255、ＳＩ156、ＳＩ213、ＳＩ180・326・328の4構成単位が想定される。

前述のような変遷が遺構相互の新旧関係から考えられ、これを大型住居跡の規模分類からの変遷の可能性としたい。

さらに大型住居跡と他の住居跡との関連をも併せて追及するとすれば、次のように考えられる。第1段階では、意識された聖域である広場に構築されるものもあるB群との共存は考えにくく、また大型住居跡は他の住居跡と明らかに区別されるものとの観点から規模格差の小さいB群よりもA群との組み合わせが主体と考えるのが妥当であろう。第2段階以降では、大型住居跡の規模がC群より大型化することから、A群より大きいB群との組み合わせが主体であったと考えられる。

3　大型住居跡の性格について

上ノ山Ⅱ遺跡の大型住居跡の性格を考えるうえで、留意したいのはＳＩ171の存在である。ここではＳＩ171大型住居跡を取り上げて、大型住居跡の性格について触れてみたい。

ＳＩ171の性格を推定する資料としては下記がある。

①　ＳＩ171は上ノ山Ⅱ遺跡最大の大型住居跡で、規模は長軸30.2m、短軸8.3m、床面積が219㎡である。柱間距離は26.5mで、国内最大の大型住居跡である能代市杉沢台遺跡のＳ107の柱間距離25.6mを超えるものである。平面形は楕円形を呈し、西側に拡幅が認められる。床面は平坦で堅くしまっており、8基の地床炉と付属施設としてフラスコ状土坑を持つものである。

②　付属施設としたフラスコ状土坑(註3)は、遺跡の他の部分にはほとんど見られず、他の住居跡に伴うものもないことから、ＳＩ171が集落全体の貯蔵を一手に引き受けていた可能性も考えられる。またフラスコ状土坑間に重複が見られることから、ＳＩ171拡幅時にフラスコ状土坑を再構築した可能性も考えられる。

③　床面から玦状耳飾りの未製品が出土しており、上ノ山Ⅱ遺跡で確実に遺構に伴うのはこの1点のみである。

④　ドングリ圧痕土器片の遺構内出土がＳＩ171周辺に集中することから、ドングリ圧痕土器との関連が考えられる。ドングリ圧痕土器が祭祀関係のものとすればＳＩ171も儀式の場かそ

れに類似した性格を合わせ持つことが考えられる。

以上から、ＳＩ171は、集落内の共同施設として中心的な役目や祭祀等の場として特殊な役割を果たしていたと考えられる。論がやや飛躍する観もあるが、言い替えればＳＩ171には集落機能の集約がなされていたのではないのだろうか。ＳＩ171を冬期間における、共同作業・祭祀など集落内で行なわれる行為全般の拠点として捕らえ、その背景に雪国での積雪時における集落機能の低下を防ぐための集落機能保持施設として位置付けできないものだろうか。これを確固たる論とするにはさらに十分な資料の整理と検討が必要であり、ここではその想定を述べるに過ぎないが、大型住居跡の性格解明の手掛かりとして今後に期待したい。

4　遺物について

本年度調査で出土した遺物は、土器が大木４・５ａ式、円筒下層ａ・ｂ式に比定されるもので、石器は前回出土器種と同様である。これらは前報告時における見解の範疇に収まるものであり、今回は新規資料および新事実の判明した遺物についてのみ取り上げたい。

ドングリ圧痕土器

上ノ山Ⅱ遺跡からは、122点のドングリ圧痕土器資料が出土している。そして、これらのドングリ圧痕土器の観察・分類から、ドングリ圧痕土器は偶然の産物ではなく製作者の意図的産物と考えられる。今後、同類の資料が増加すれば、ドングリ圧痕土器は当時の環境の一部、食生活・祭祀・土器製作の一端などを知る手掛かりとなるであろう。類例資料の増加に期待したい。

炭化遺物

ＳＩ190から出土した２点の炭化遺物のうち１点について残存脂肪酸分析を行った結果、野鳥43.8%、野鳥の卵20.1%、植物（ドングリ[註4]・クリ・トチ）23%・動物13.1%の割合を示す発酵させていない加熱食品であることが判明した。この資料から炭化遺物の正体を復元するとすれば、第１に問題となるのは加熱処理の仕方であろう。加熱処理には煮る、蒸す、焼くの方法があるが、偏平な炭化遺物の形状から推定すれば、煮る・蒸すの加熱方法よりも焼く加熱方法が妥当のようである。次に調理方法であるが、炭化遺物に小さな凹凸があることから、野鳥の肉と動物の肉は、細かく切って用いたと考えられる。木の実は、クリを除いてアクが強いことから水さらしなどによりアク抜きをして粉にしたものを使用したと考えられる。これらの材料を先の分析結果に基づいて調理するとすれば、この炭化遺物は現代のハンバーグを思わせるものがある。蛇足ながら、炭化遺物の表裏に指の跡があるのも、現代のハンバーグの調理法に通じるものがありおもしろい。おそらく、この「縄文ハンバーグ」は焼いた石の上で加熱調理され、食されたものなのであろう。

註1　法量分布で他の住居跡と区別される法量となれば、上ノ山Ⅱ遺跡の場合は長軸が17m以上のD～F群がそれに該当するものであろう。住居跡の構造によって柱と壁の位置は一様ではないと考えられるが、試みに上ノ山Ⅱ遺跡の大型住居跡32軒について柱間距離の計測を行ってみた。その結果、半数の16軒が柱間が8～10m台に集中し、他の住居跡と区別される法量は柱間距離が11m以上のものであった。

註2　SI200は、位置的にSI171かSI126との関連が考えられたが、SI171が30m台の際立って大きい住居跡であることや拡幅が見られることから、SI126と1単位となるものと考えた。

註3　大型住居跡にフラスコ状土坑が伴う例として、岩手県・鳩岡崎遺跡があり大型住居跡の側面にフラスコ状土坑が1列に並んでいる。

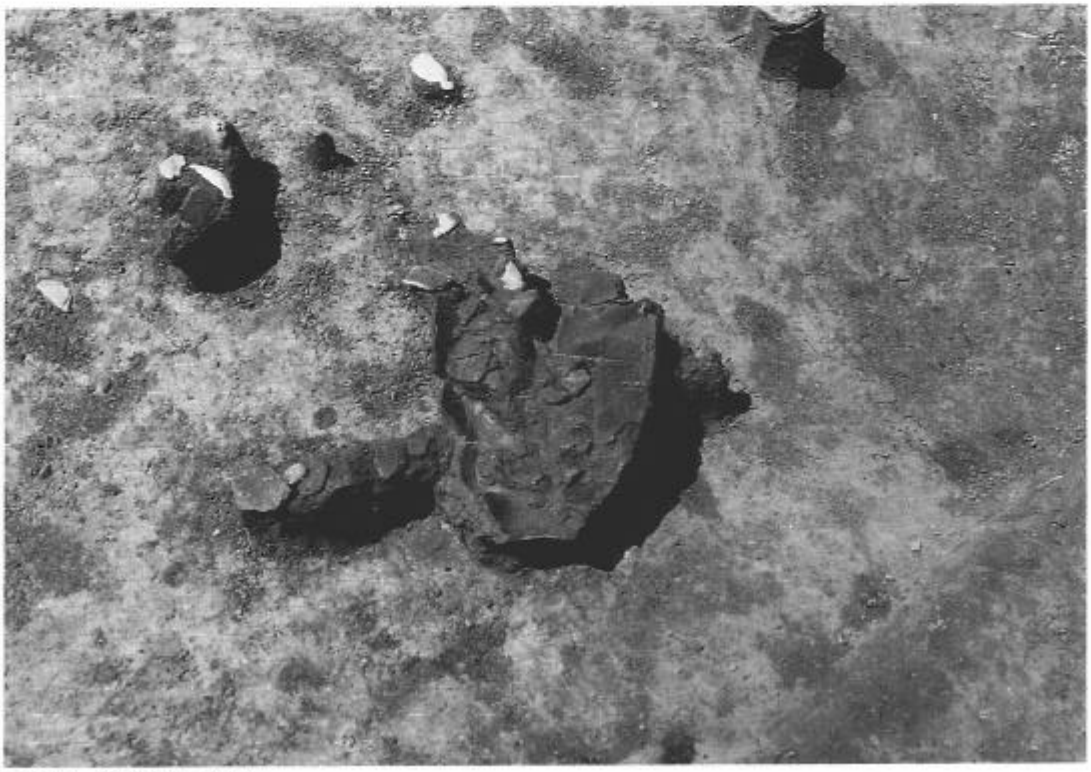
註4　分析結果ではアラカシと報告されているが、上ノ山Ⅱ遺跡周辺の植生を考慮すればナラの木の実と考えるのが妥当であり、分析担当者の了解を得て本報告ではナラの木の実として扱った。

調査前の状況　（北▷南）

調査前の状況　（東▷西）

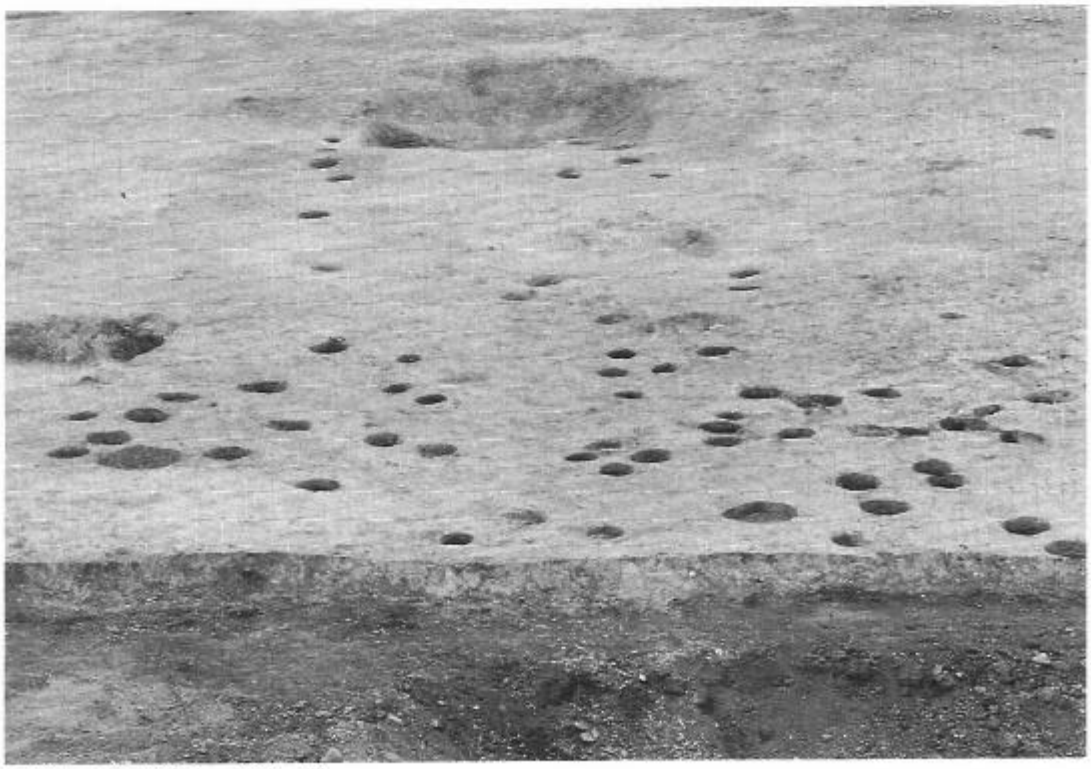
図版2

SI044　完掘状況　（東▷西）



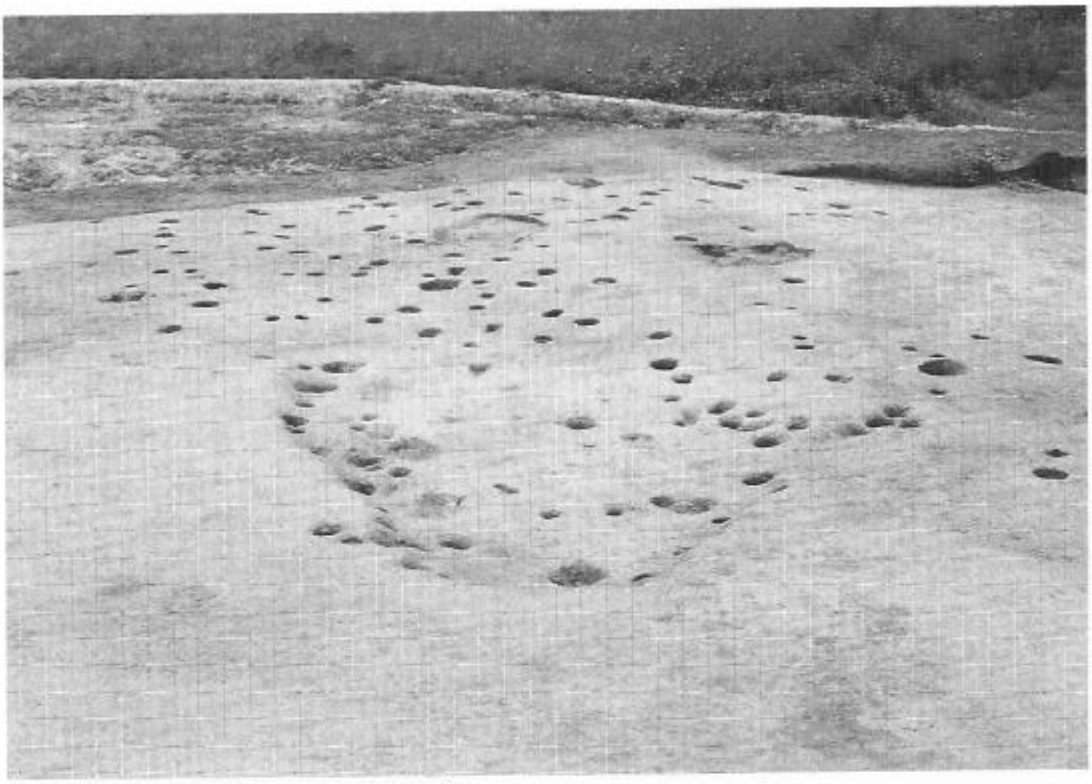
SI044　遺物出土状況

SI064　完掘状況　（北東▷南西）



SI084　完掘状況　（南▷北）

図版4



SI090・214　完掘状況　（北東▷南西）

SI099・262　完掘状況　（南▷北）

SI171・255　プラン確認状況　（北▷南）

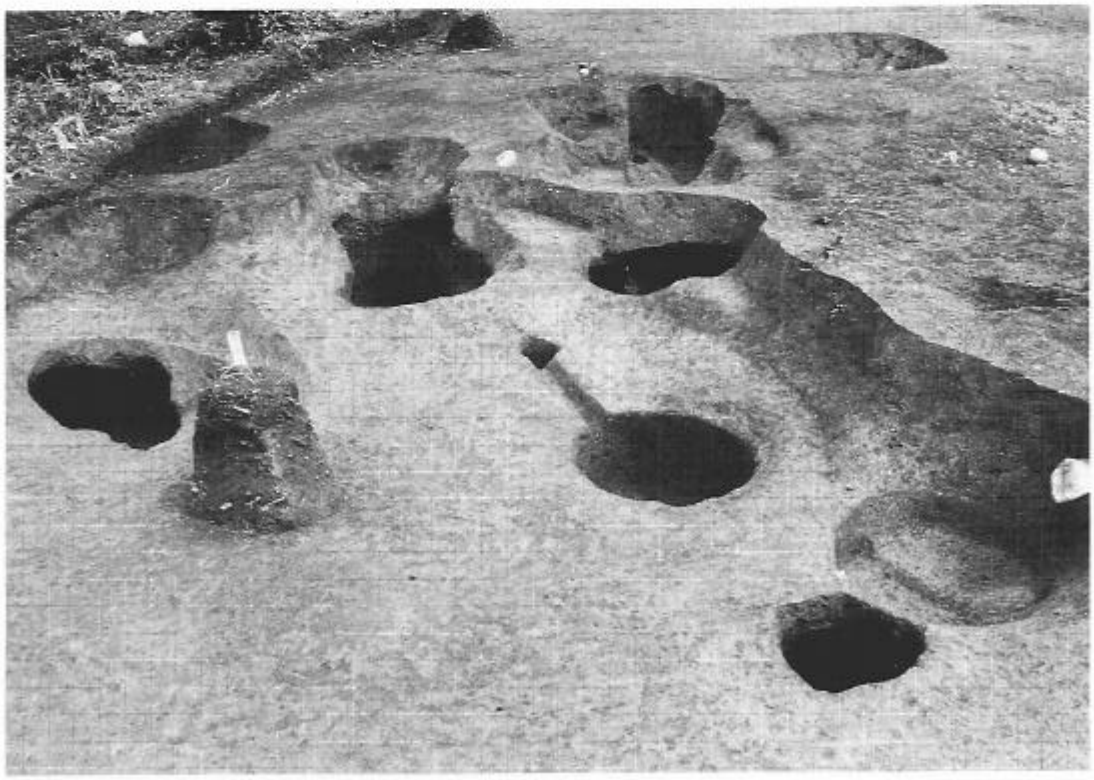
SI171・255　完掘状況　（北▷南）

図版6

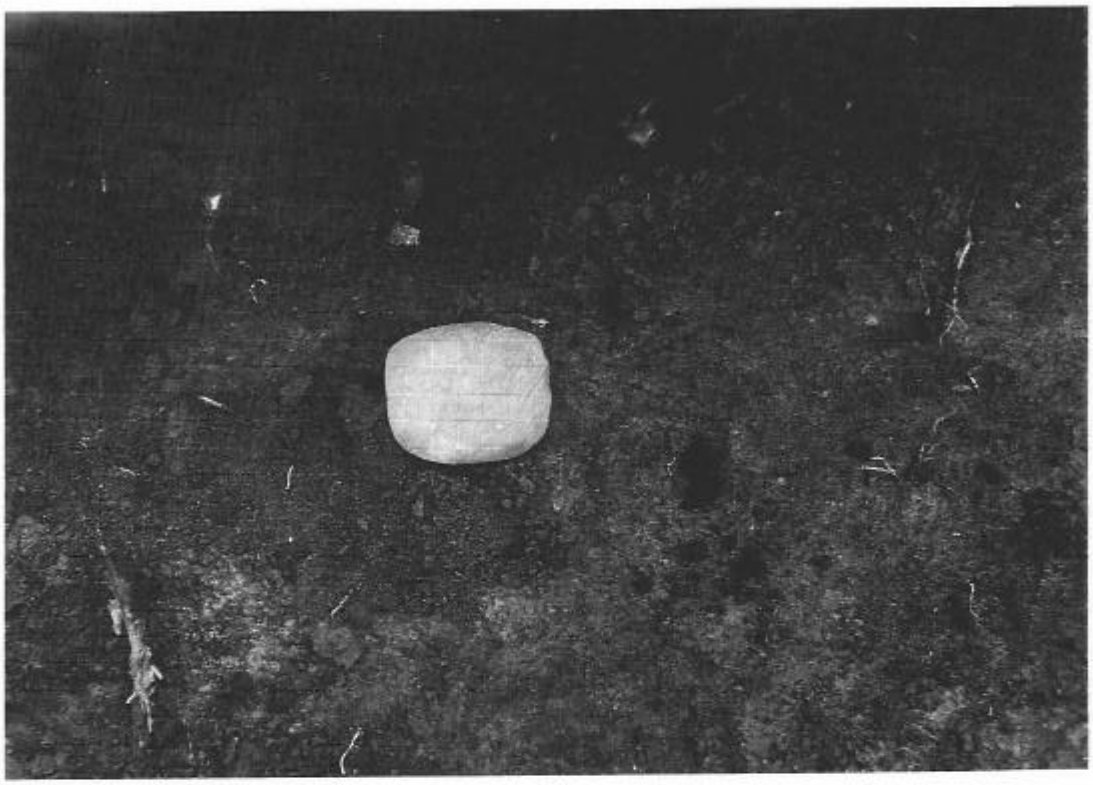
SI171・255　完掘状況　（南▷北）

SI171　完掘状況　（南▷北）

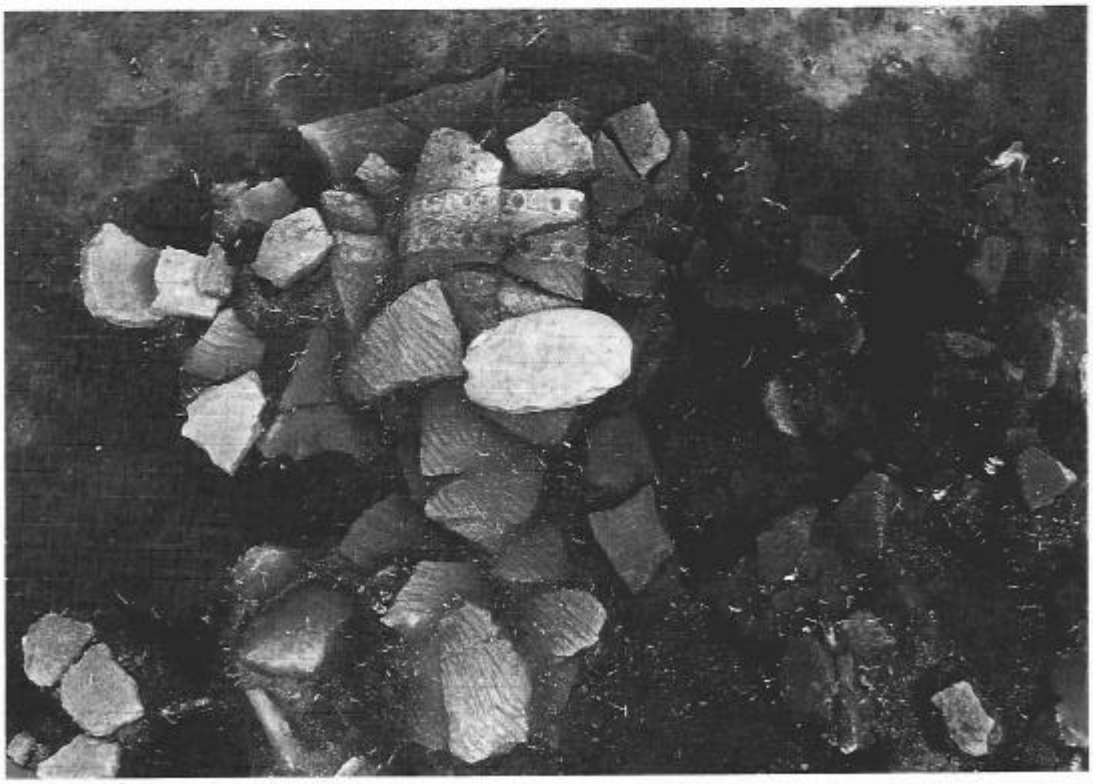
SI171　フラスコ状土坑との位置関係　（南▷北）



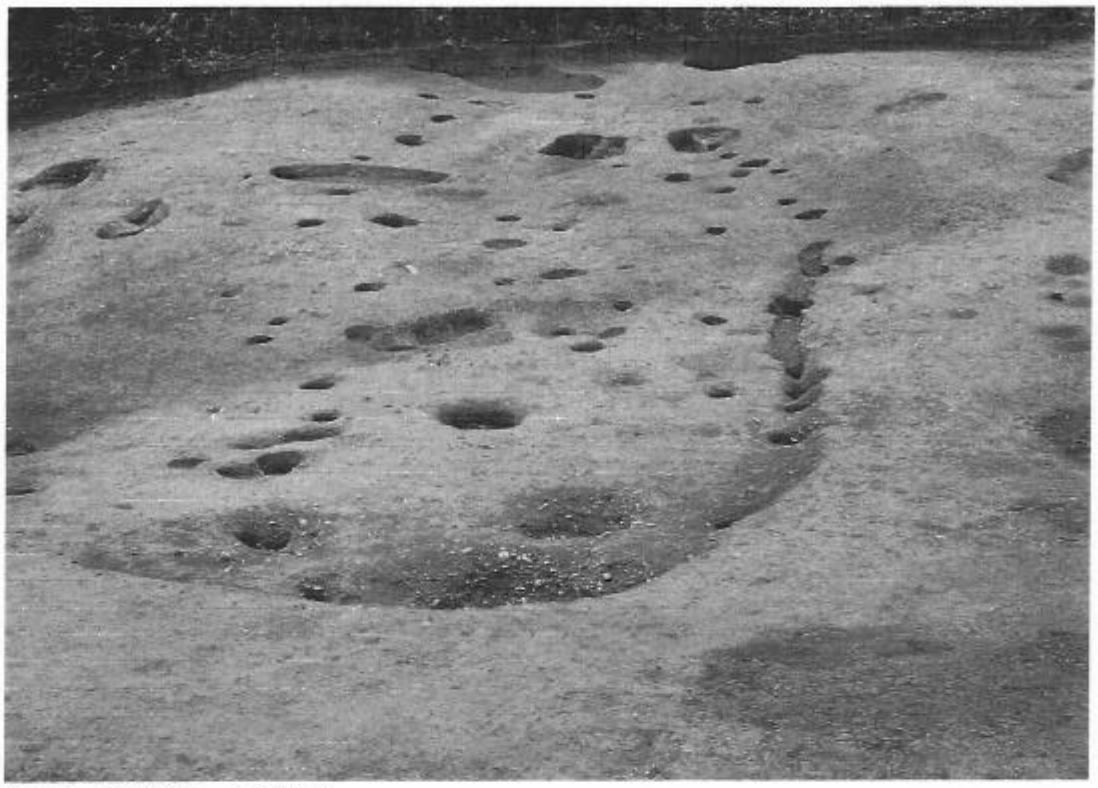
SI171　フラスコ状土坑との位置関係　（南▷北）



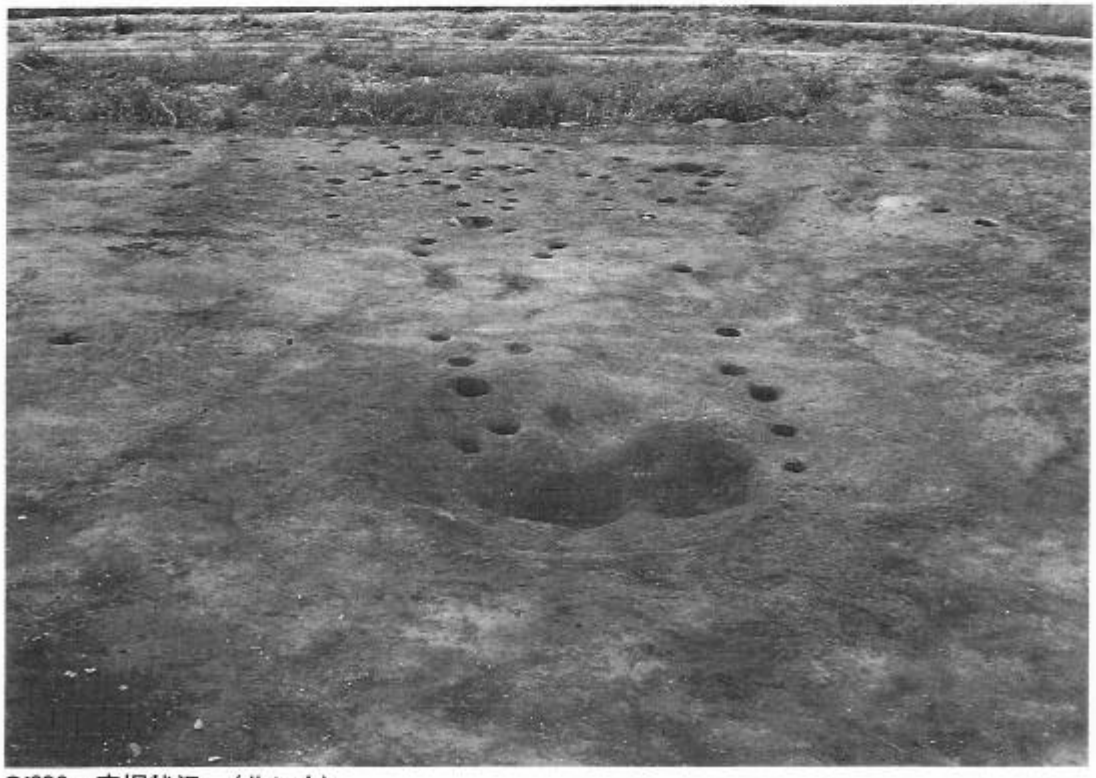
SI171　玦状耳飾出土状況



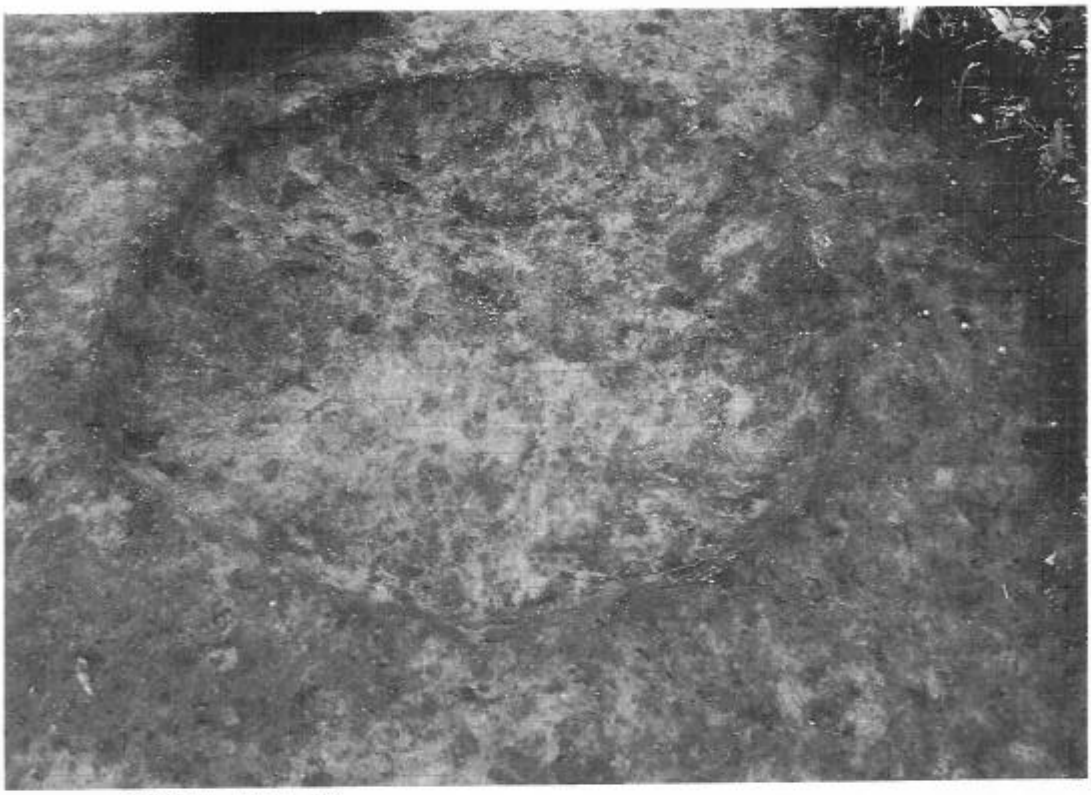
SI171　ブラン確認面遺物出土状況



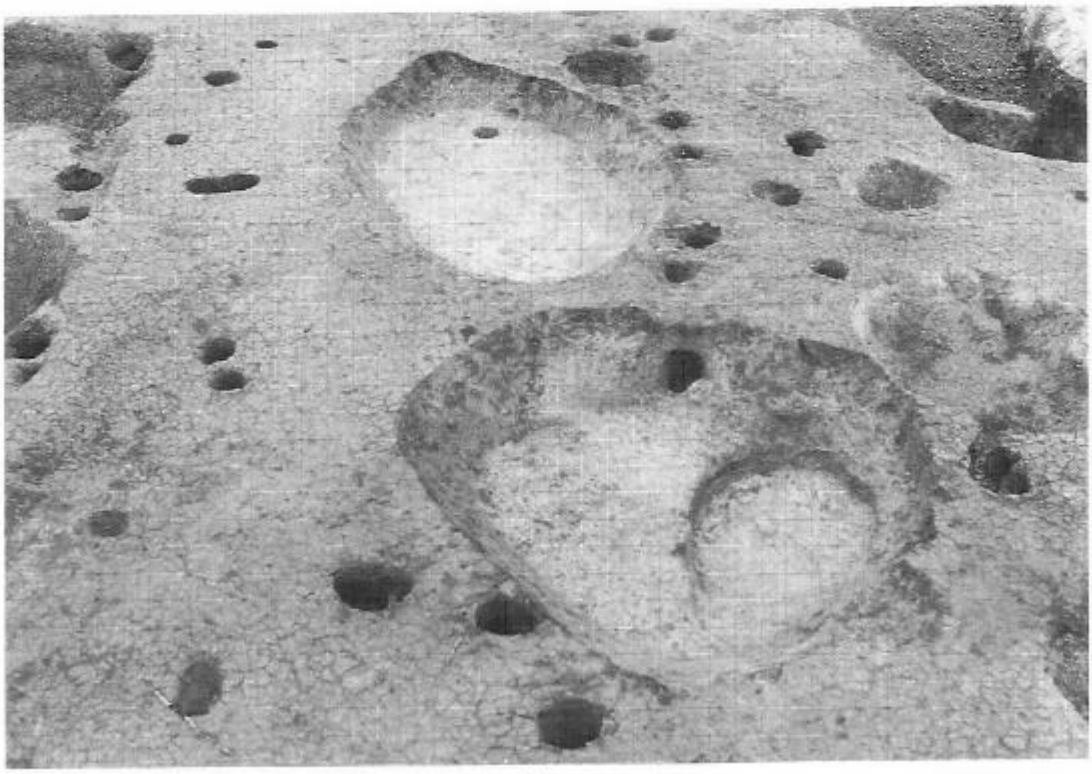
SI200　完掘状況　（東▷西）



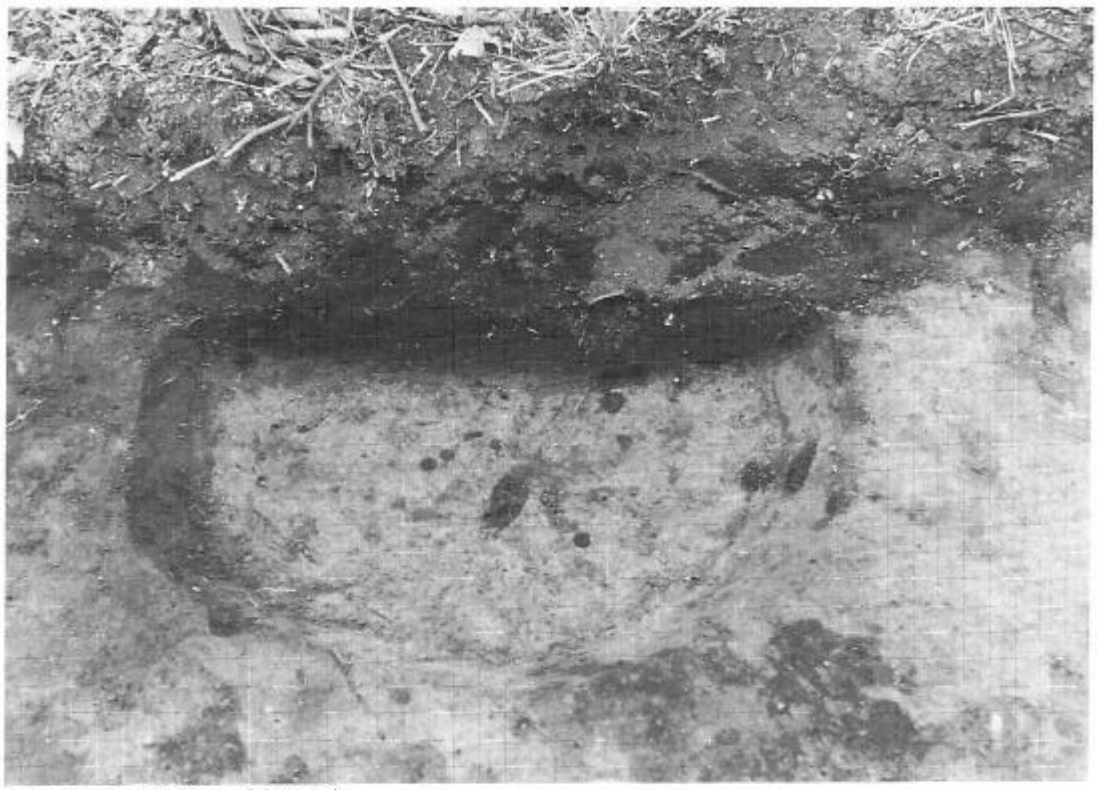
SI239　完掘状況　（北▷南）



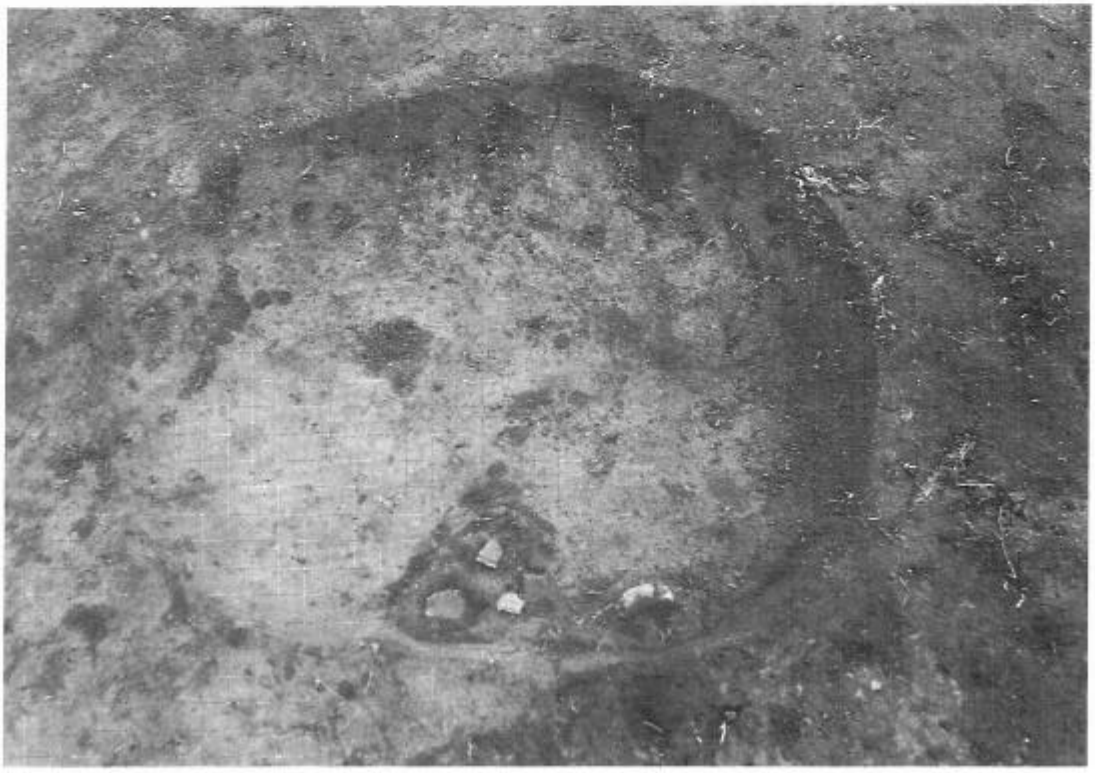
SK045　完掘状況　（北▷南）



SK049・050、SKF261　完掘状況　（北▷南）



SK051　完掘状況　（東▷西）

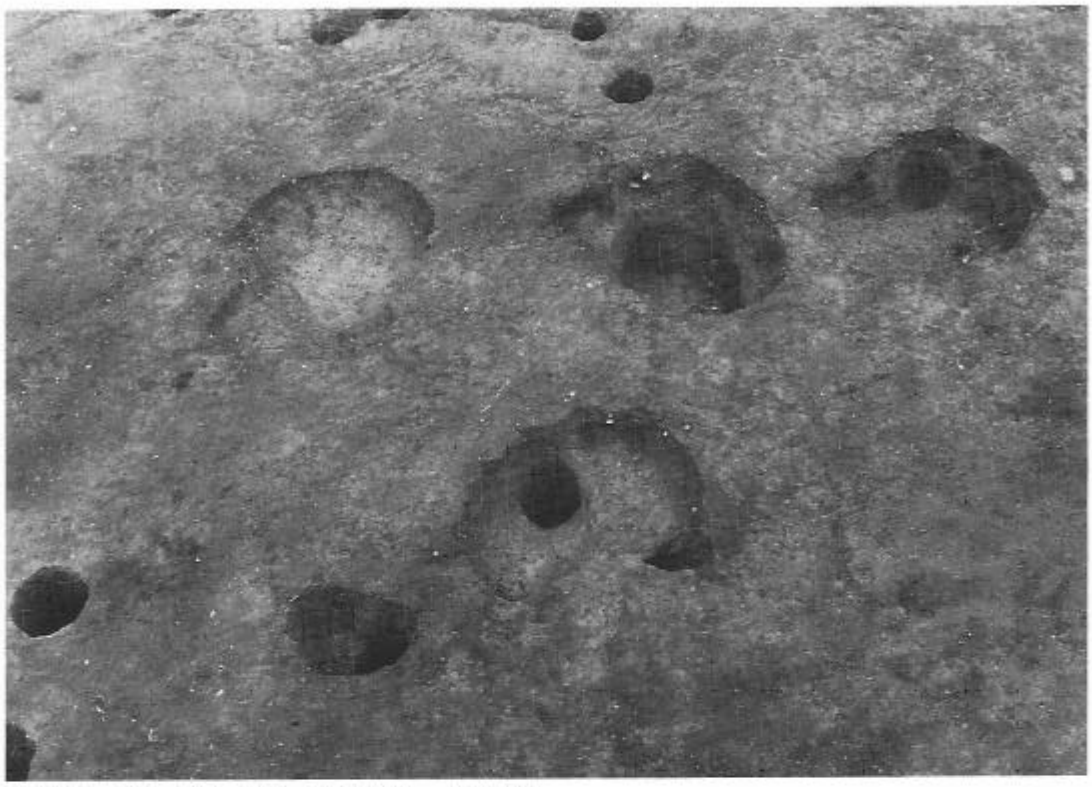


SK052　完掘状況　（南西▷北東）

図版12

SK061　完掘状況　（南▷北）

SK097・257　完掘状況　（東▷西）

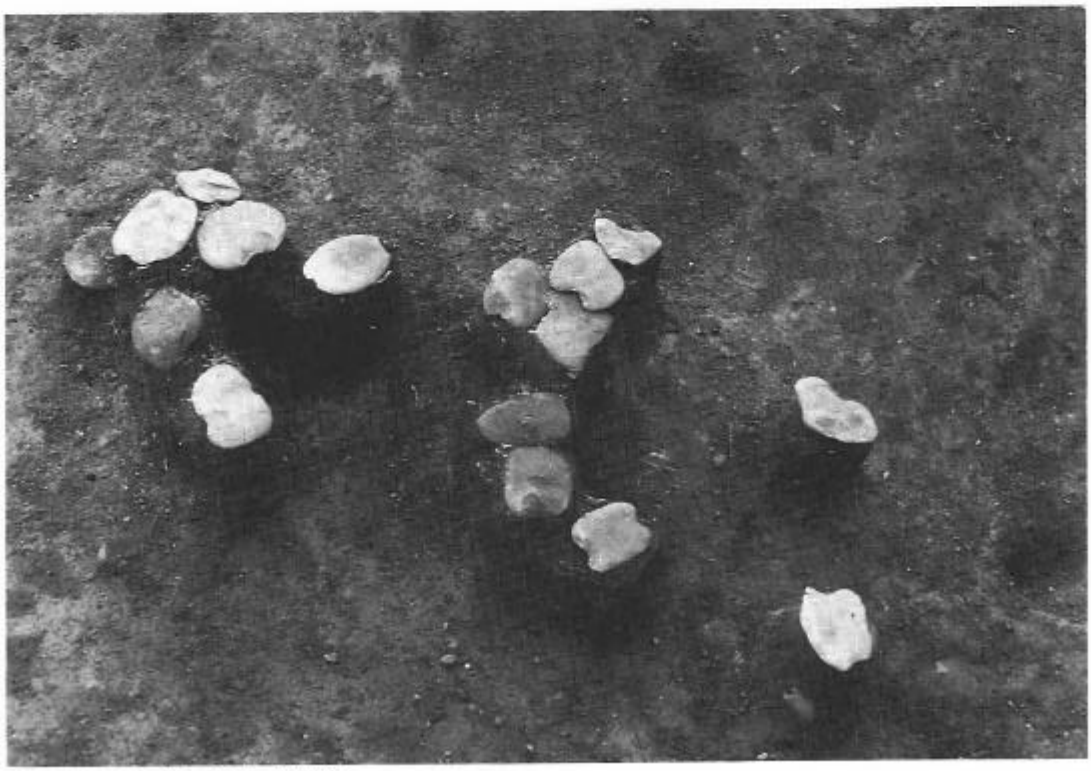


SK098・248・249・256　完掘状況　（南▷北）

SK258　完掘状況　（南▷北）

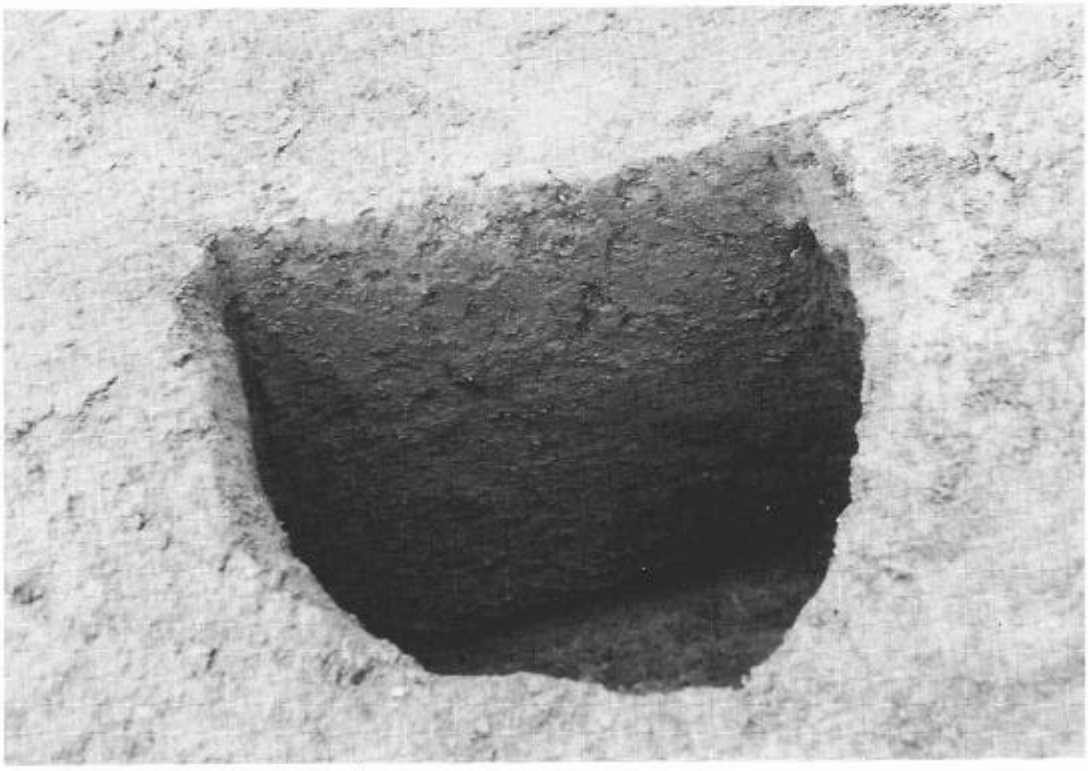
図版14

SKF047　完掘状況　（東▷西）



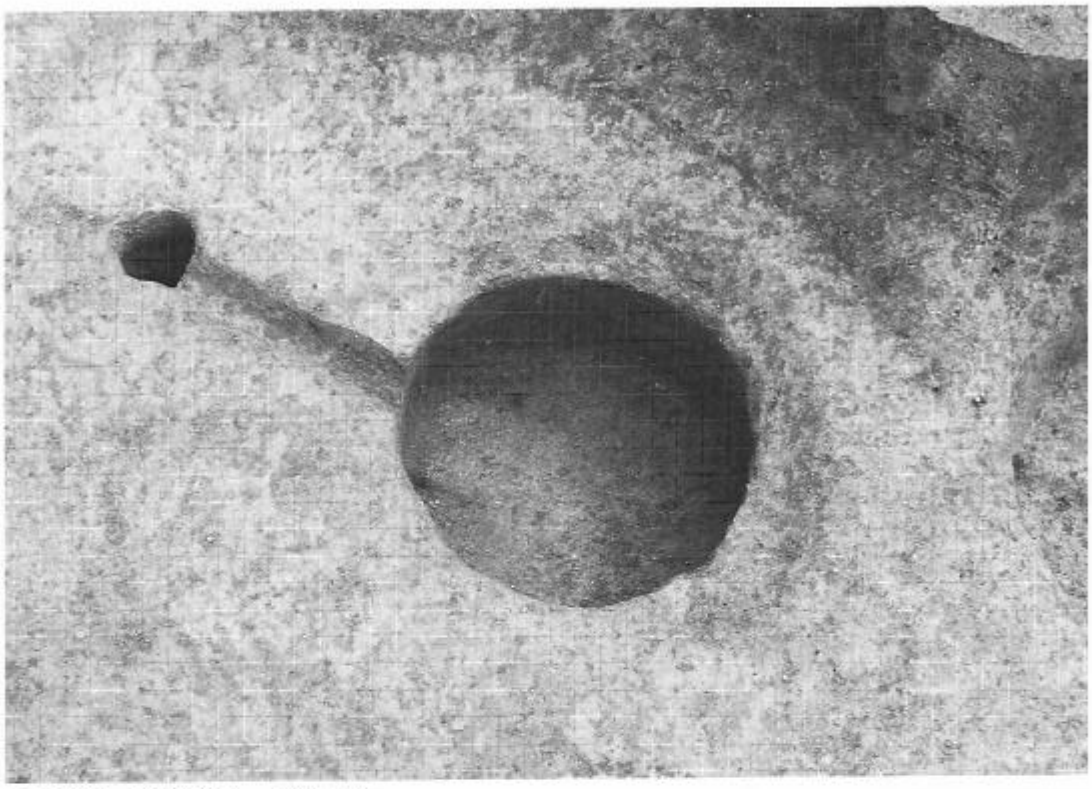
SKF047　石錘一括出土状況

SKF048　完掘状況　（東▷西）

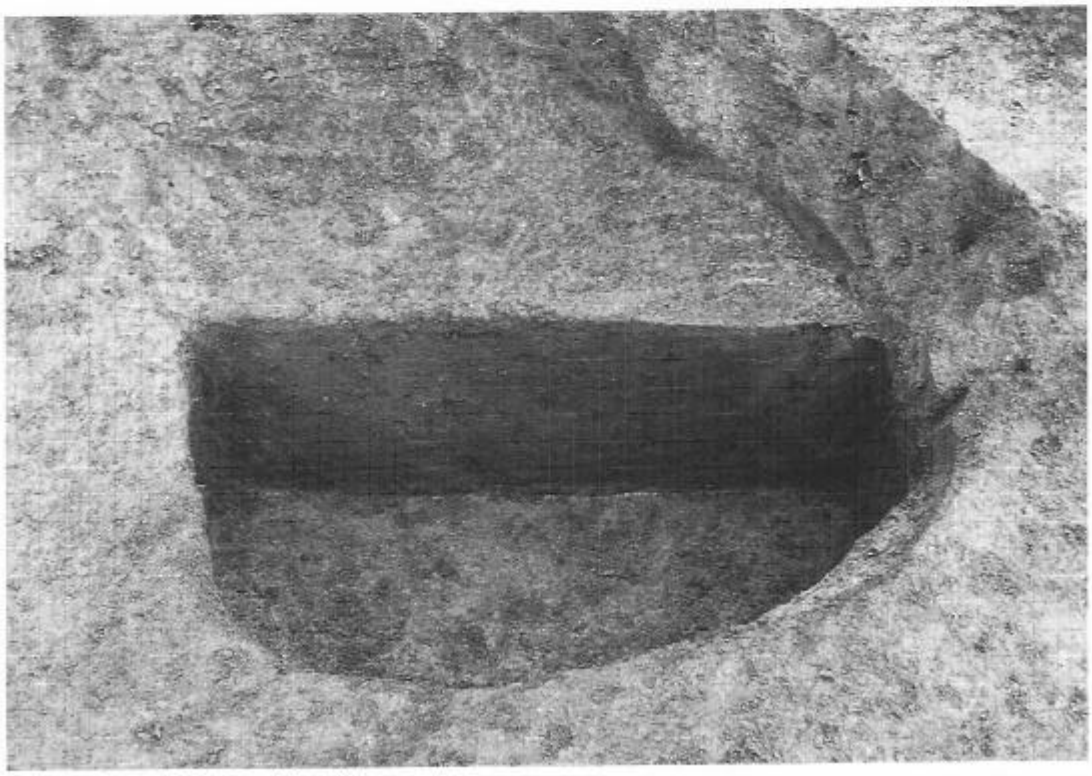


SKF057　調査状況　（南▷北）

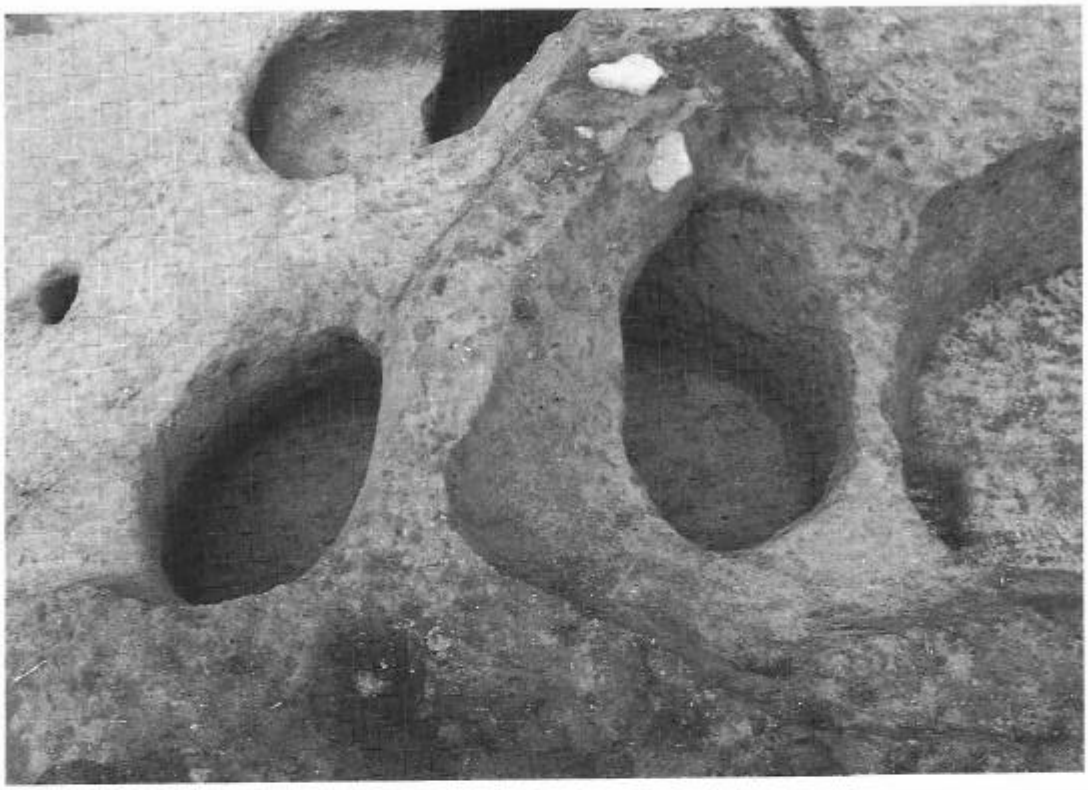
図版16



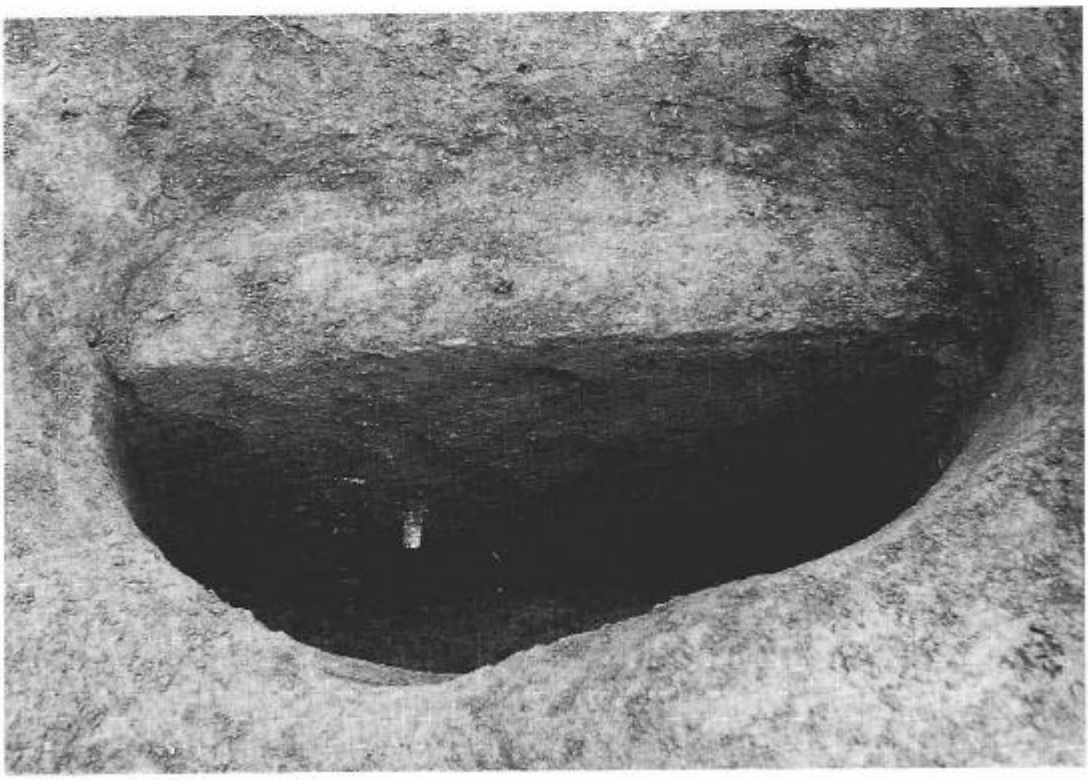
SKF059　完掘状況　（南▷北）



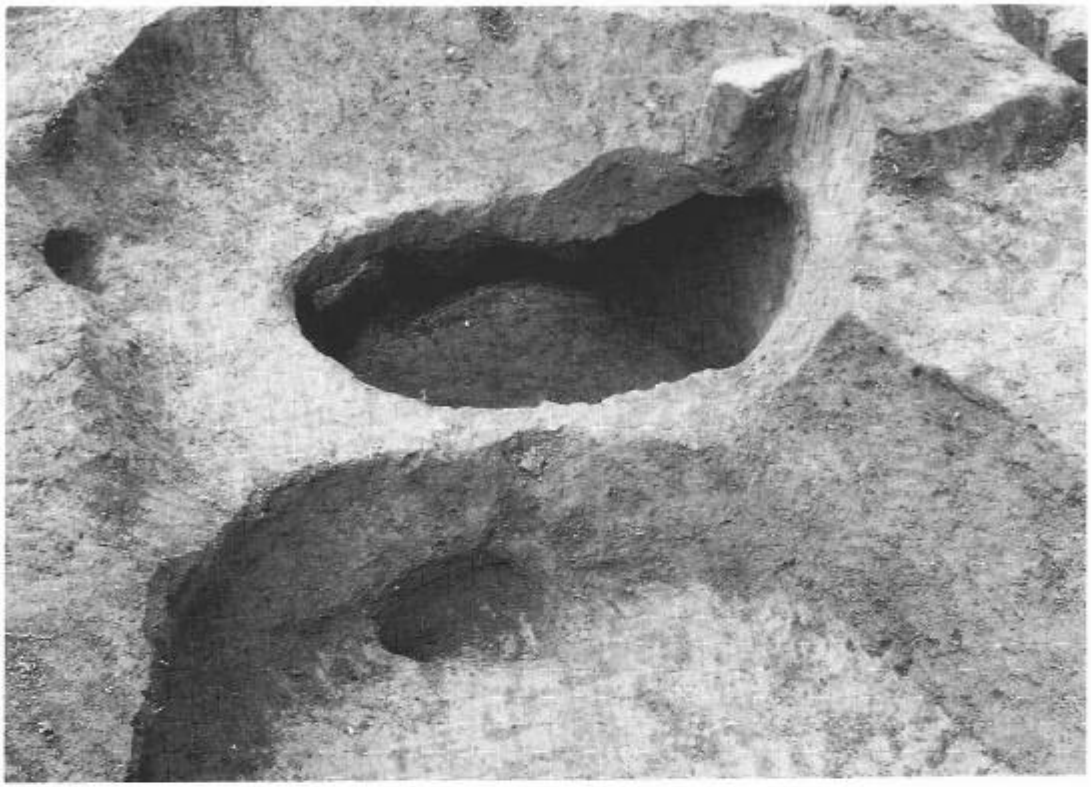
SKF060　調査状況　（南▷北）



SKF065・082　完掘状況　（東▷西）



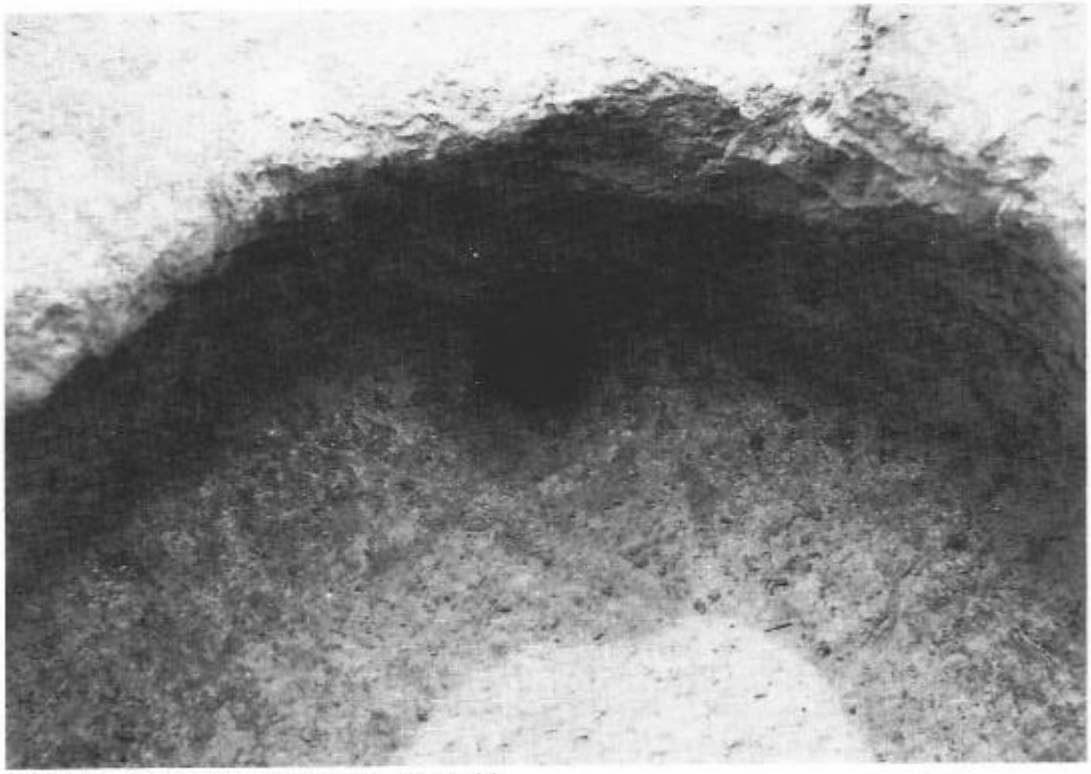
SKF065　調査状況　（南▷北）



SKF082　完掘状況　（北▷南）

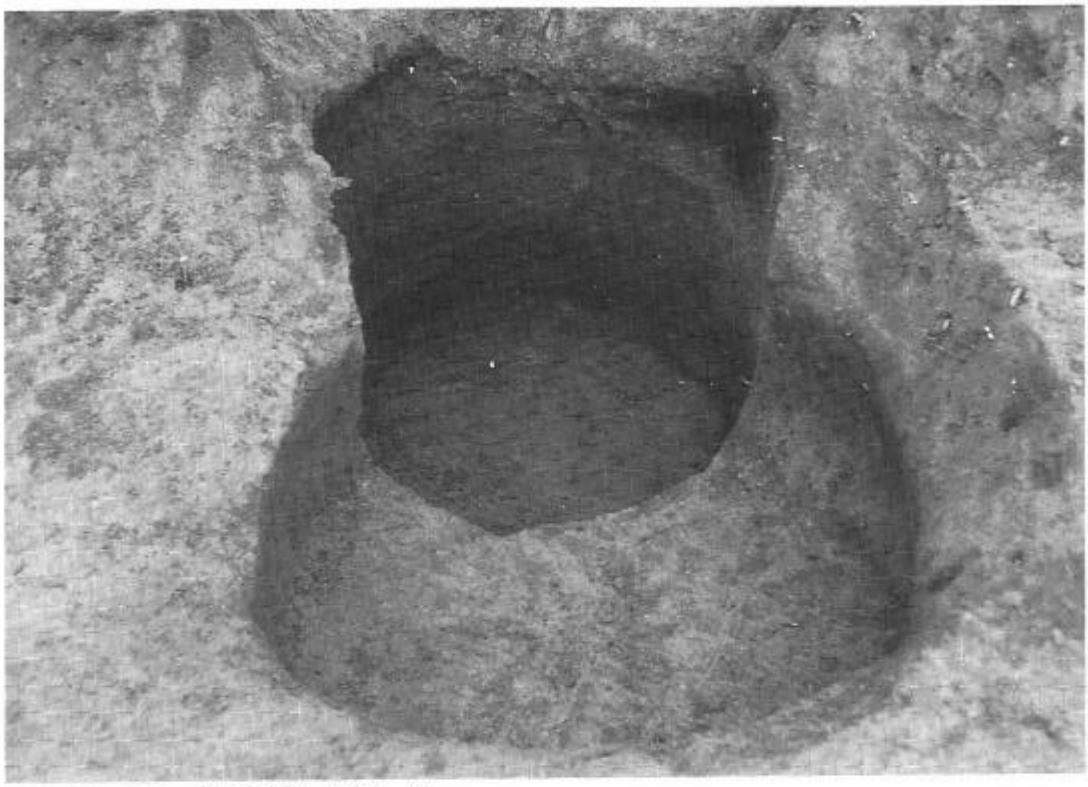
SKF060・065・071　完掘状況　（南▷北）

SKF060・069～071　完掘状況　（南▷北）

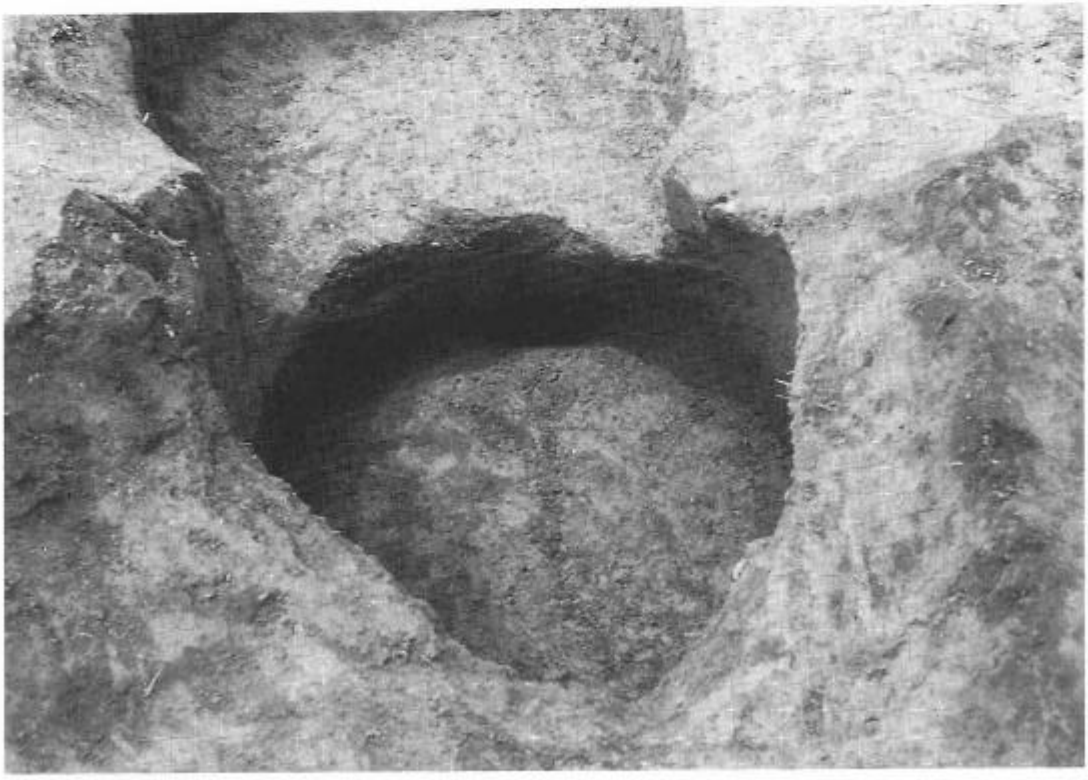


SKF070　底面ピット完掘状況　（西▷東）

図版20

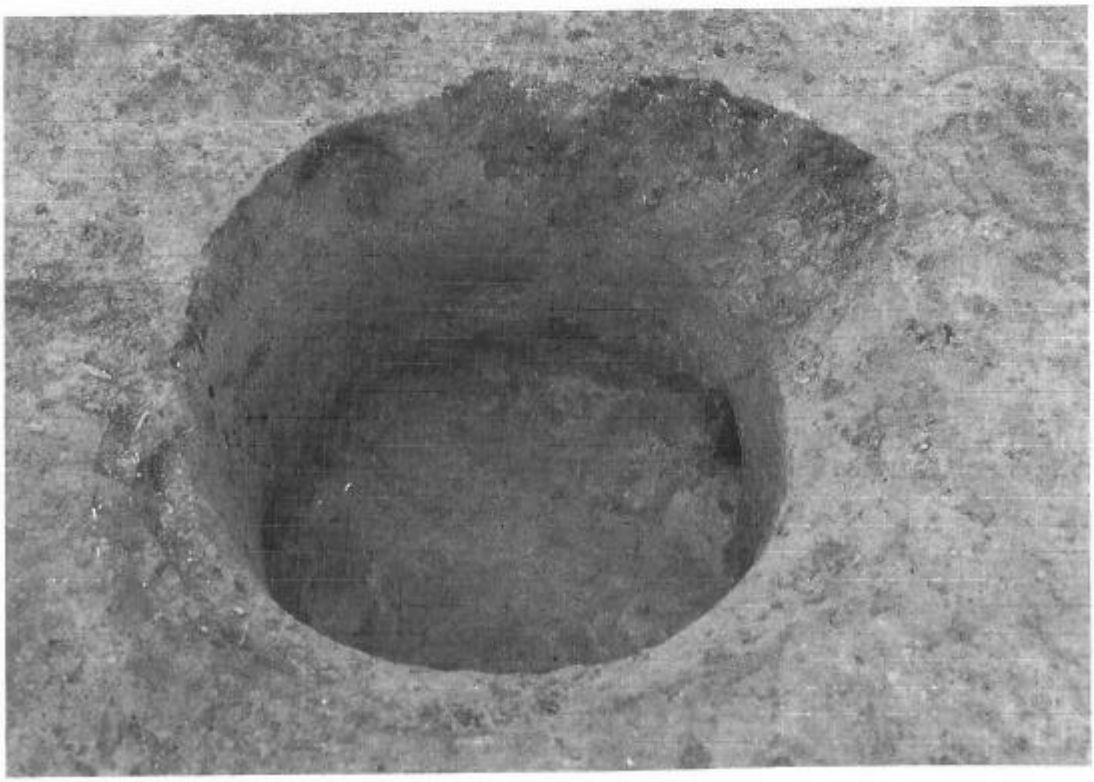


SKF060・071　完掘状況　（南▷北）



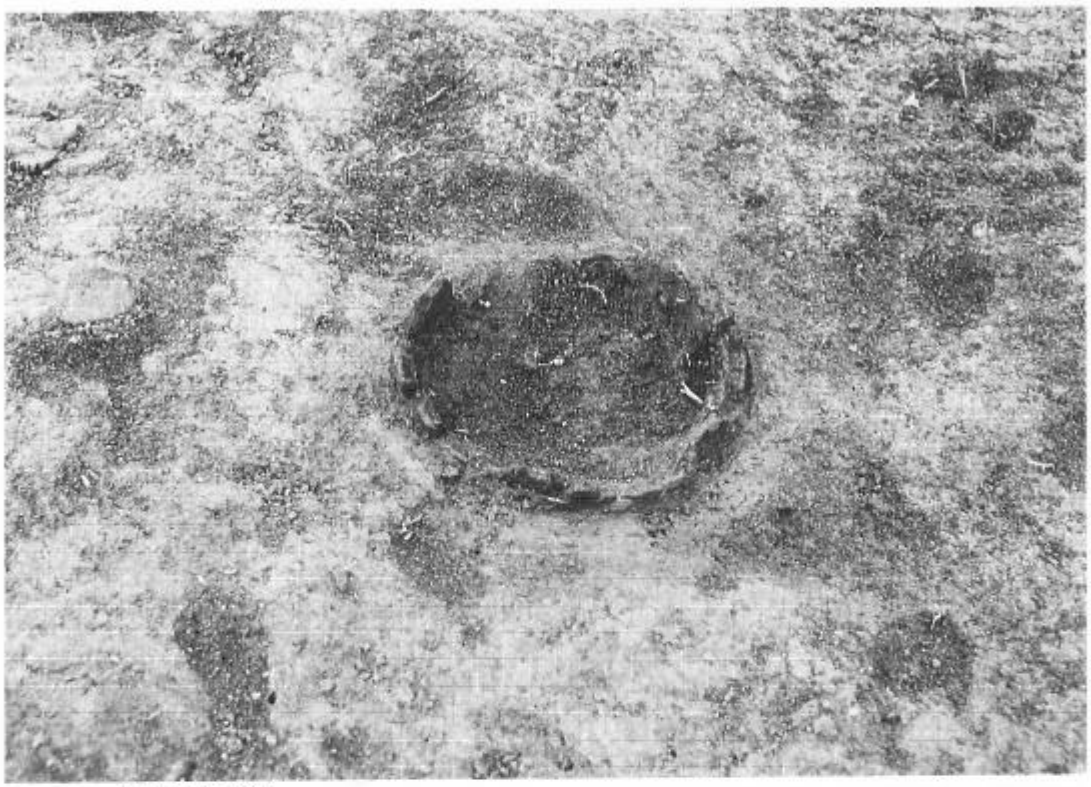
SKF071　完掘状況　（北▷南）

SKF076　完掘状況　（南▷北）

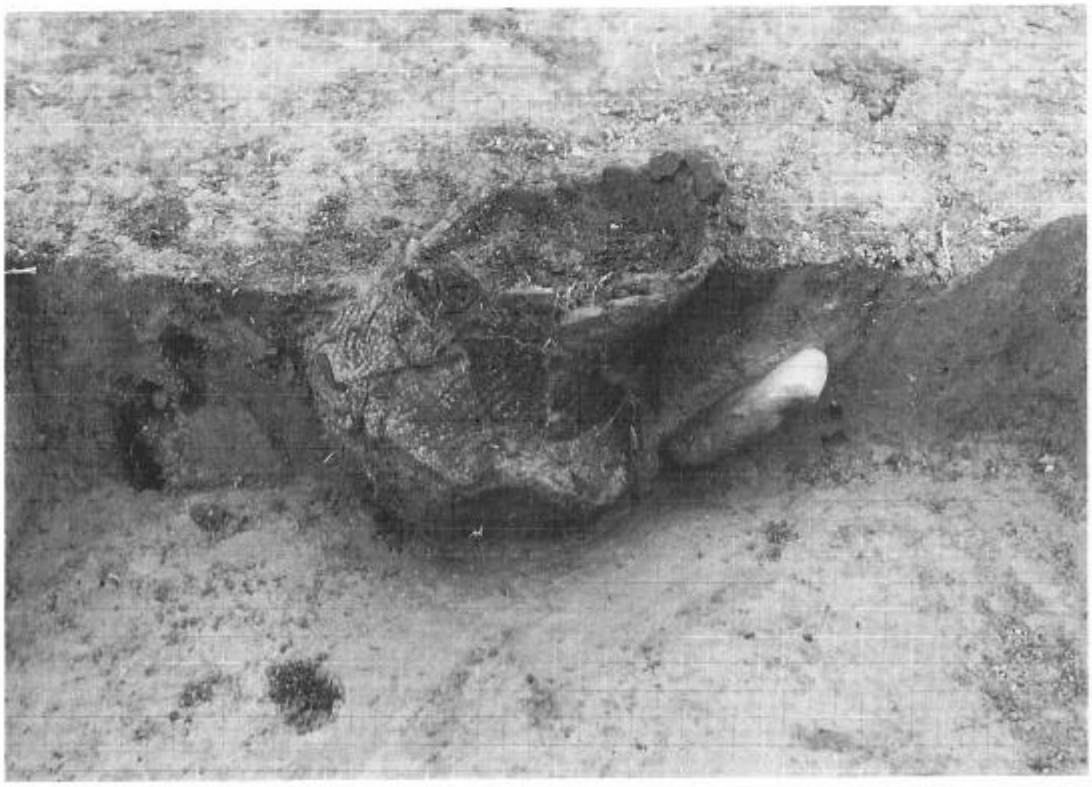


SKF094　完掘状況　（南▷北）

図版22

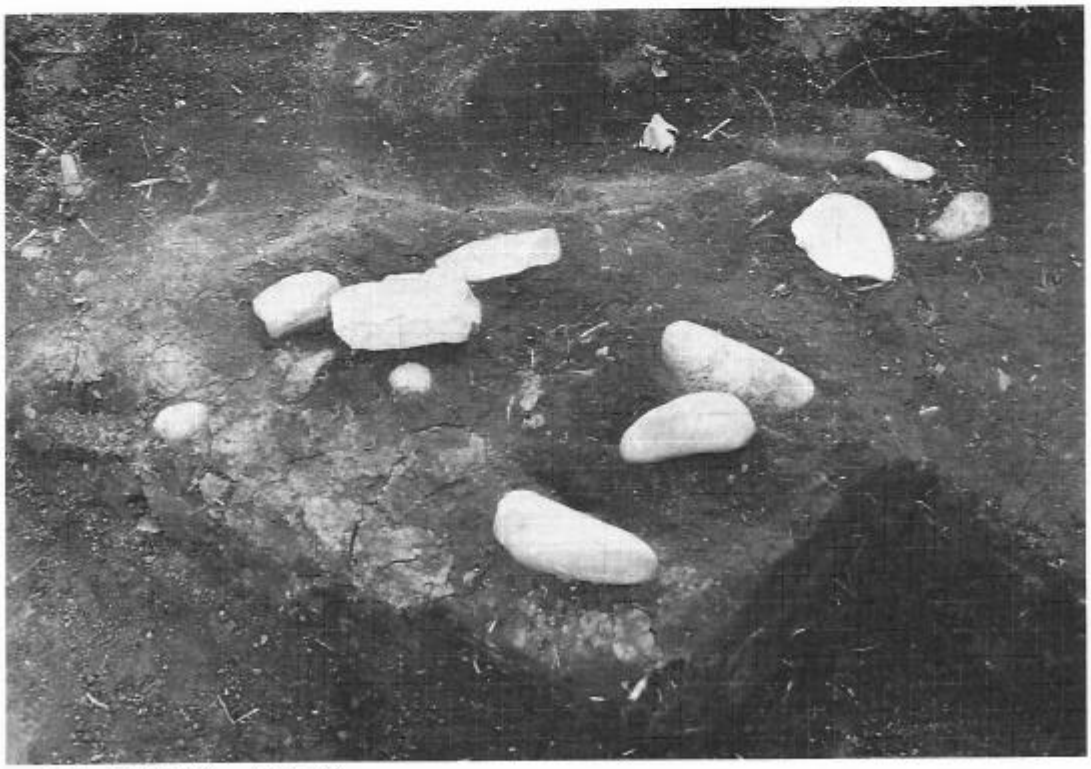


SR252　土器埋設遺構



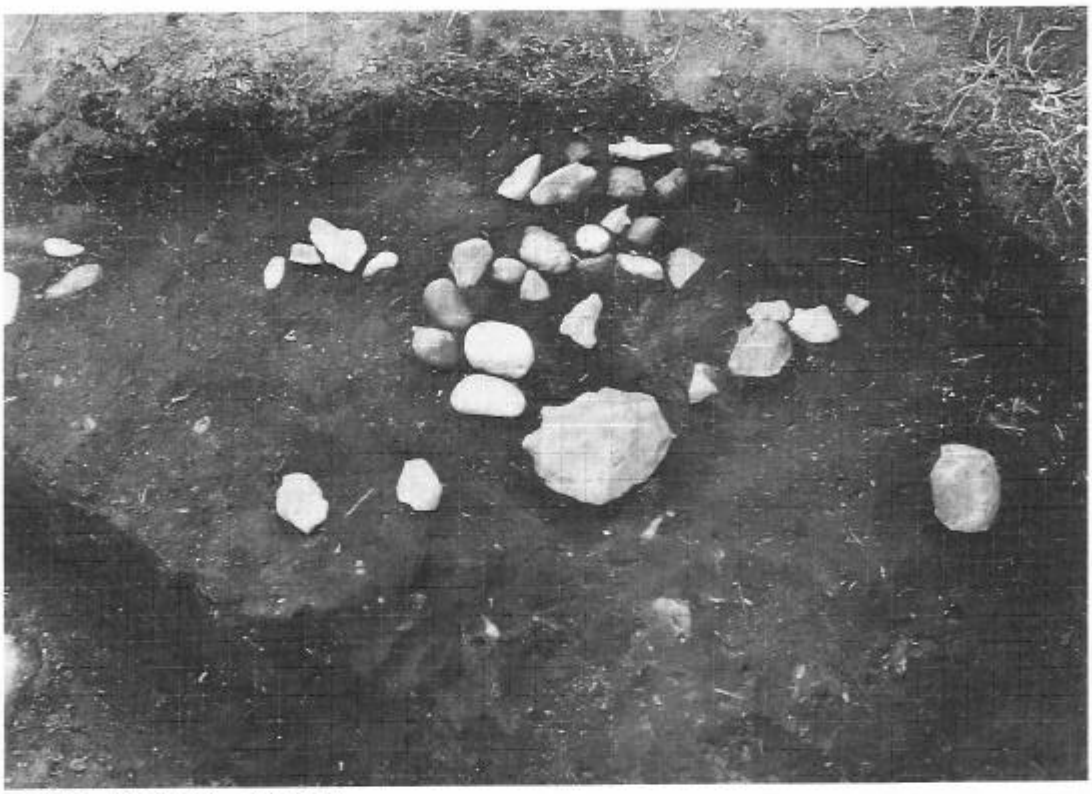
SR252　土器埋設遺構

SQ251　集石遺構　（北▷南）

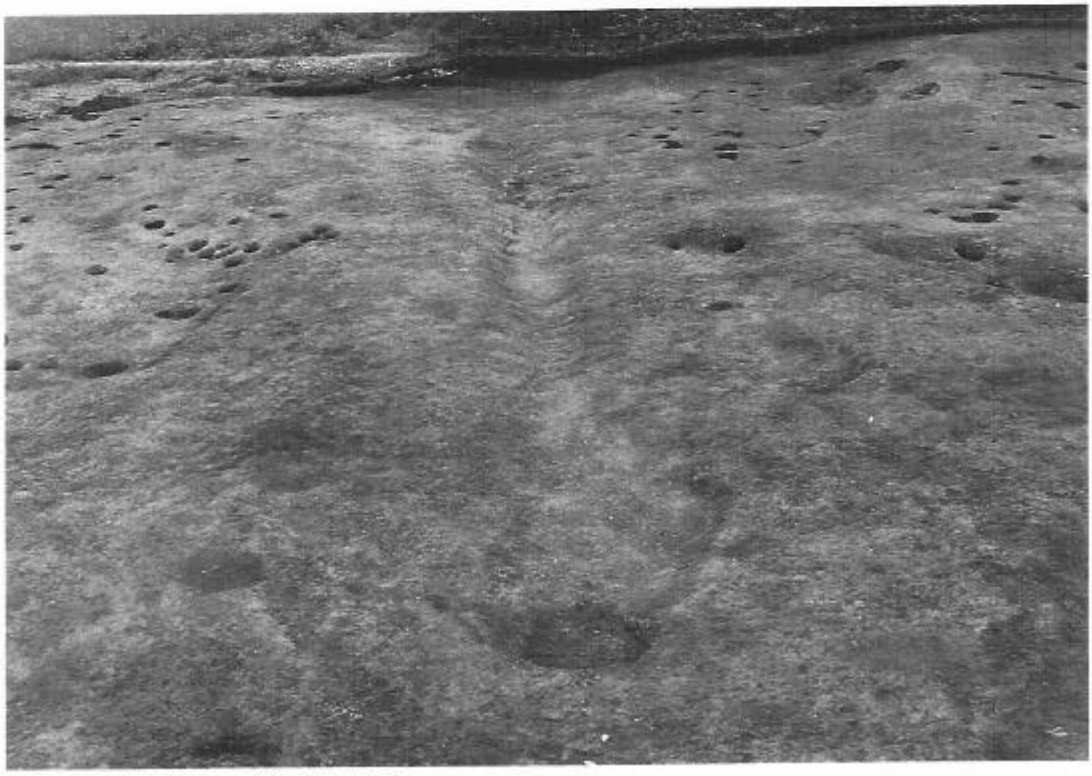


SQ251　集石遺構　（北▷南）

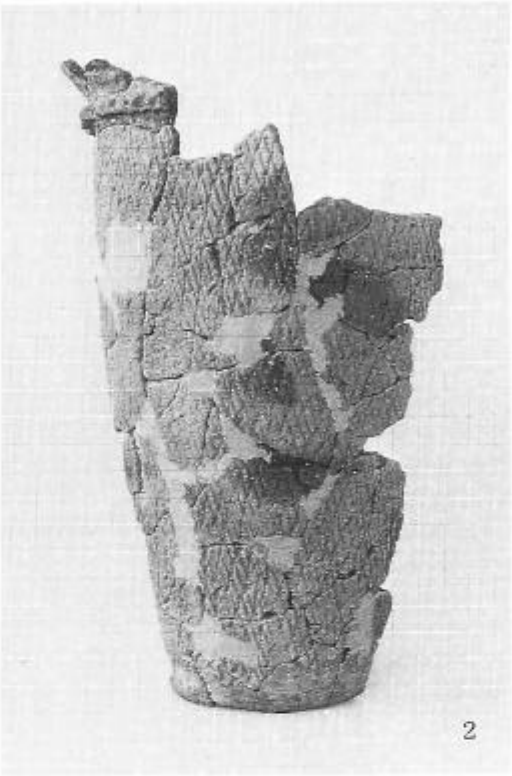
図版24



SQ251　集石遺構　（北▷南）



SD216　完掘状況　（北東▷南西）

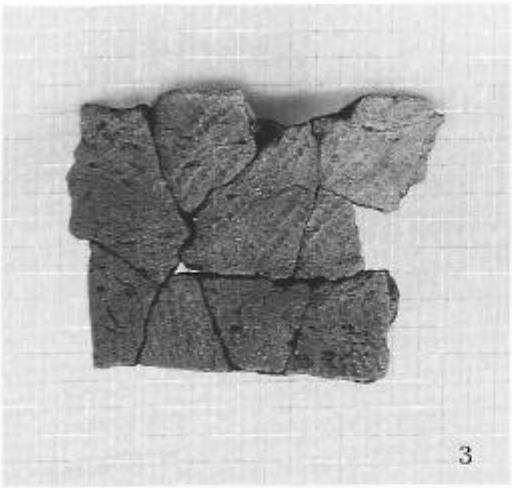


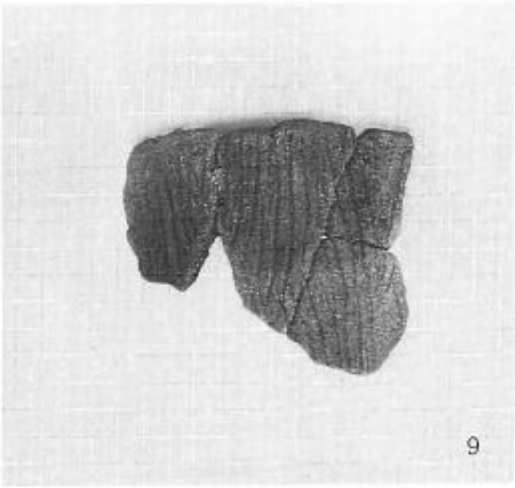
遺構内出土土器(1)　　1：SI044　2・6：SI171・255

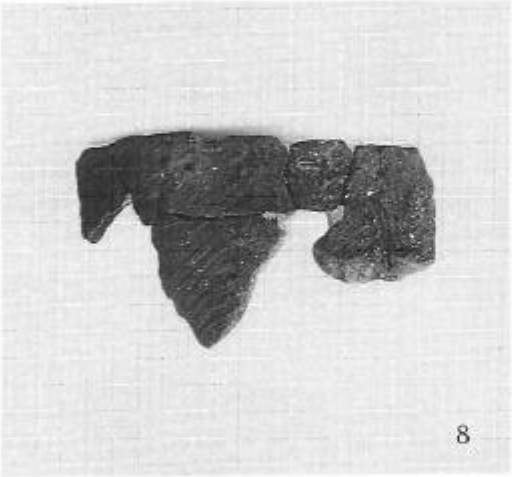
図版26

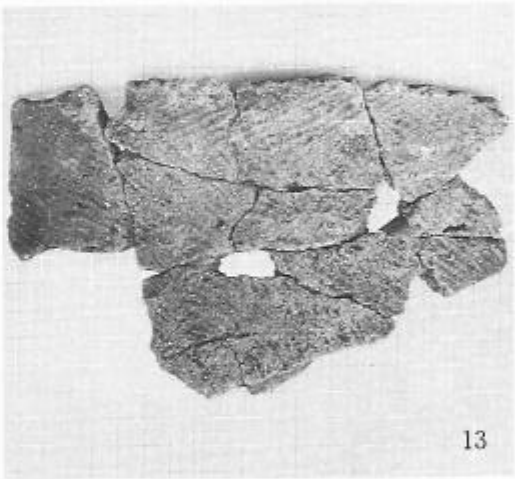
遺構内出土土器(2)

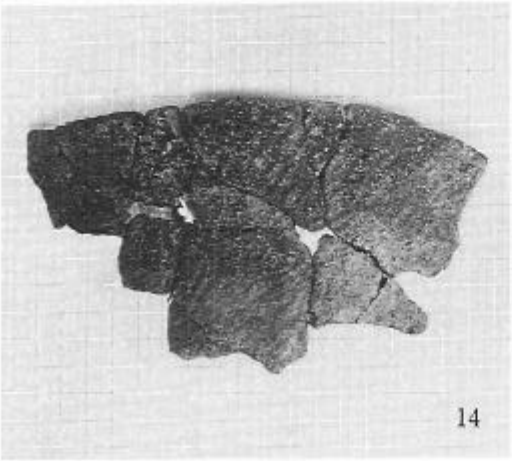
7：SK047　15・17：SK054

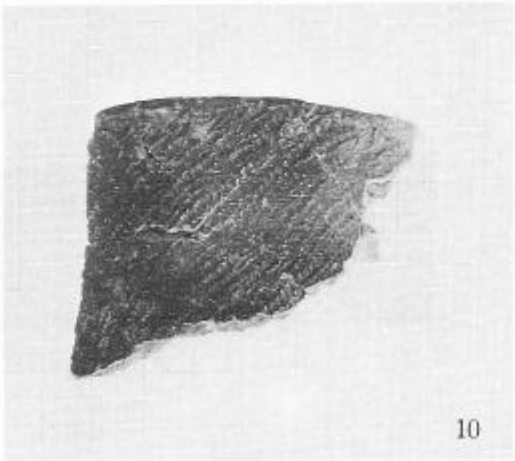








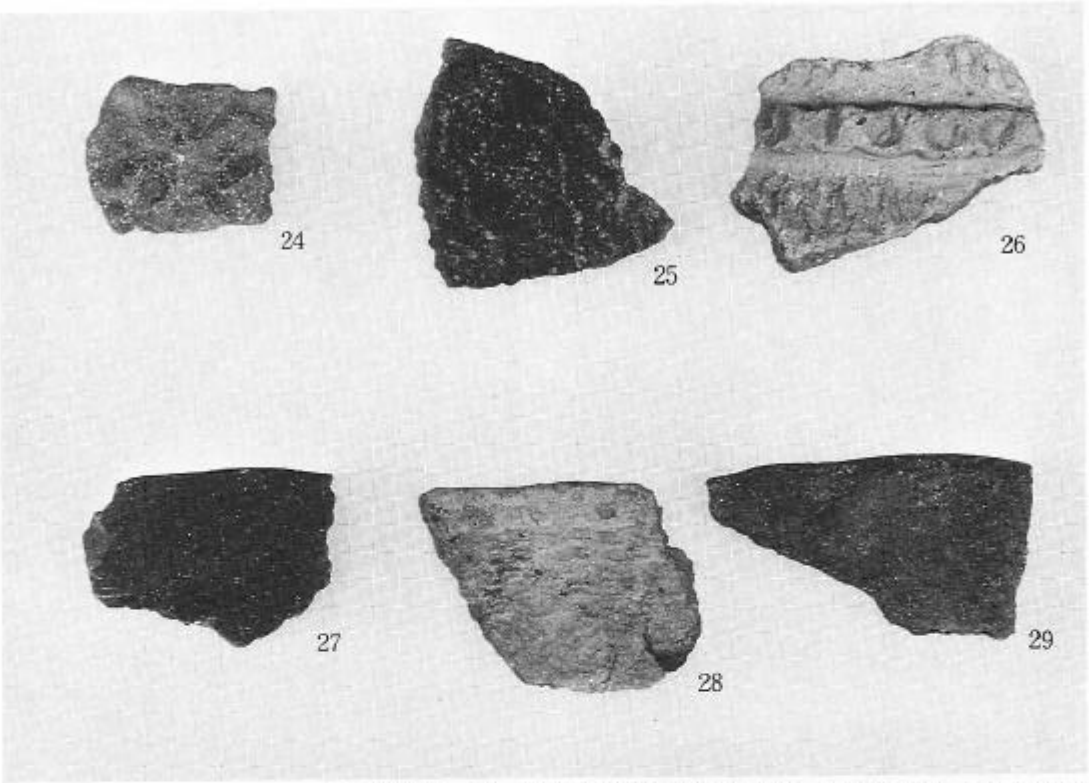




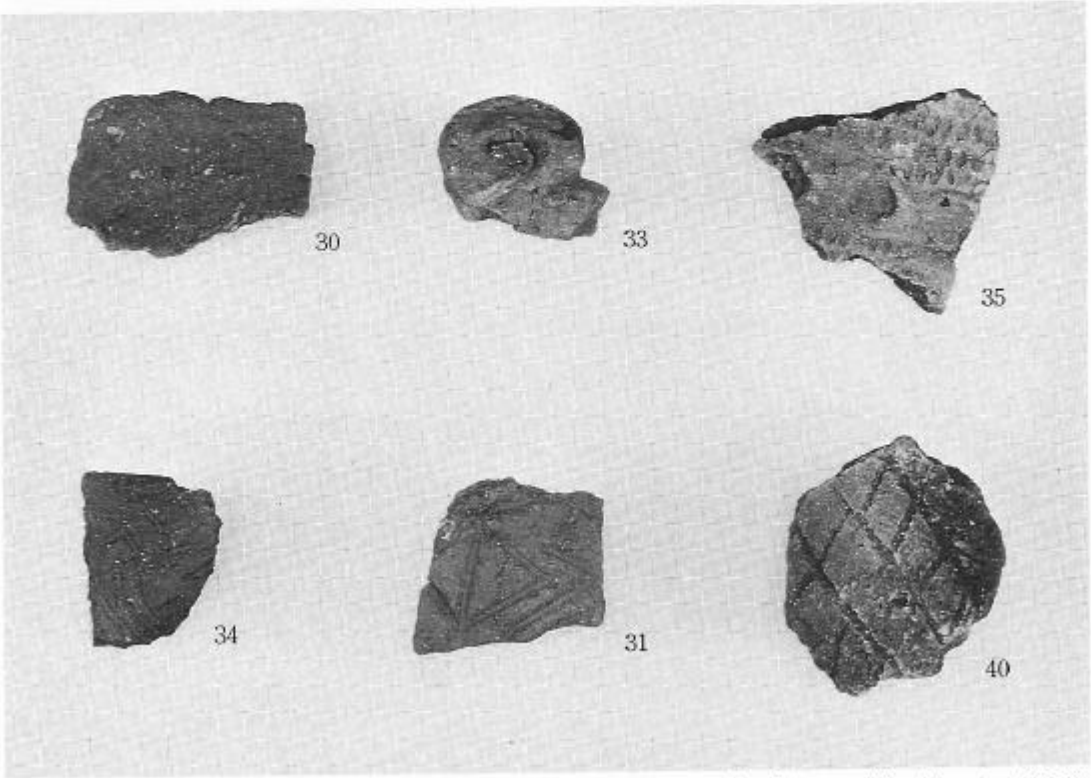
遺構内出土土器(3)

3：SI171・255　8～14：SK049

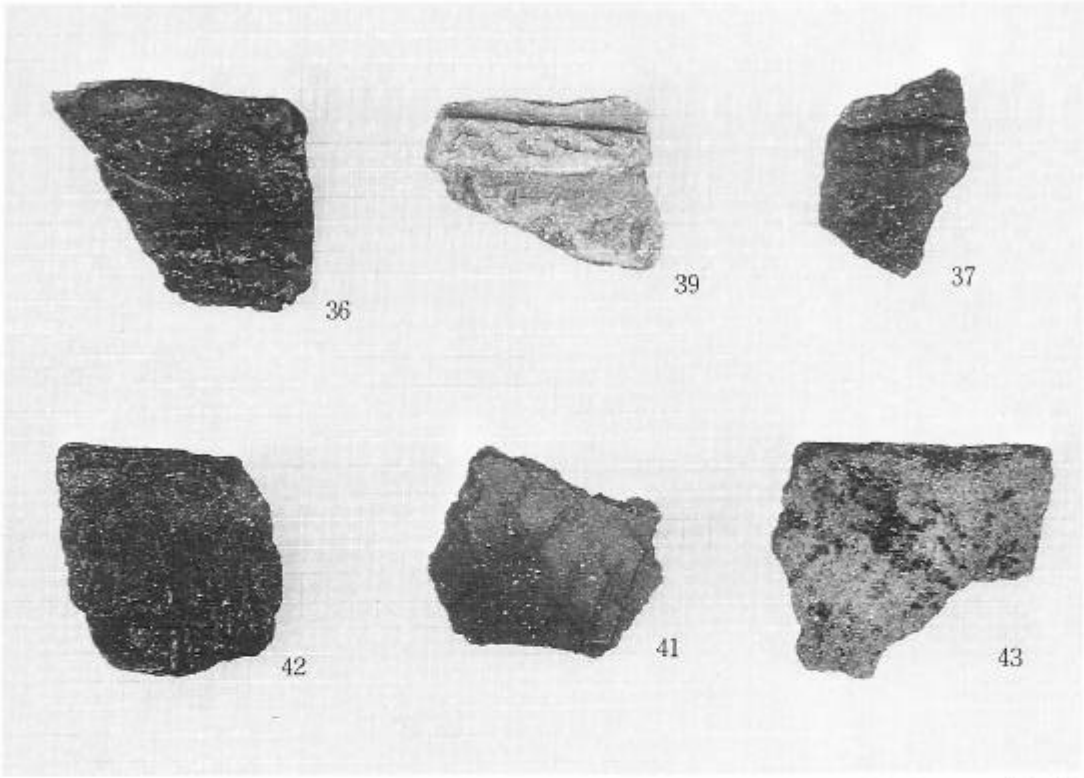
図版28



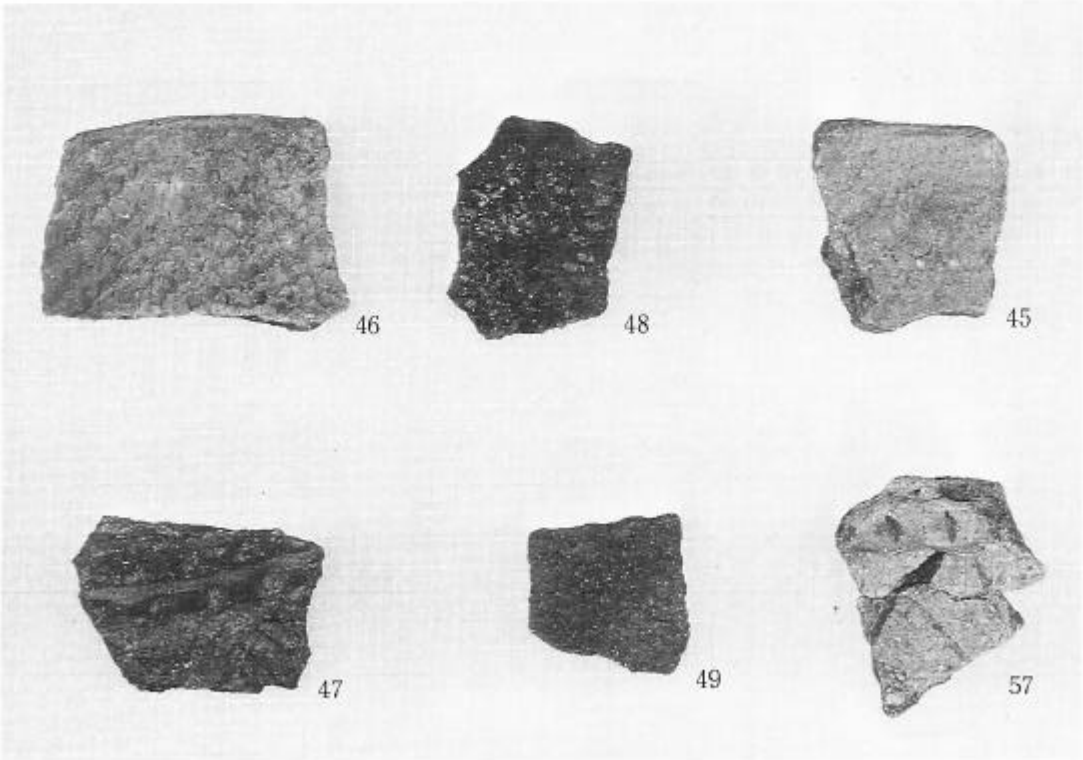
24：第14類　25・29：第18類　26：第23類　27：第31類　28：第16類



遺構内出土土器(4)　30：第31類　33：第２類　31・34：第13類　35：第23類　40：第21類



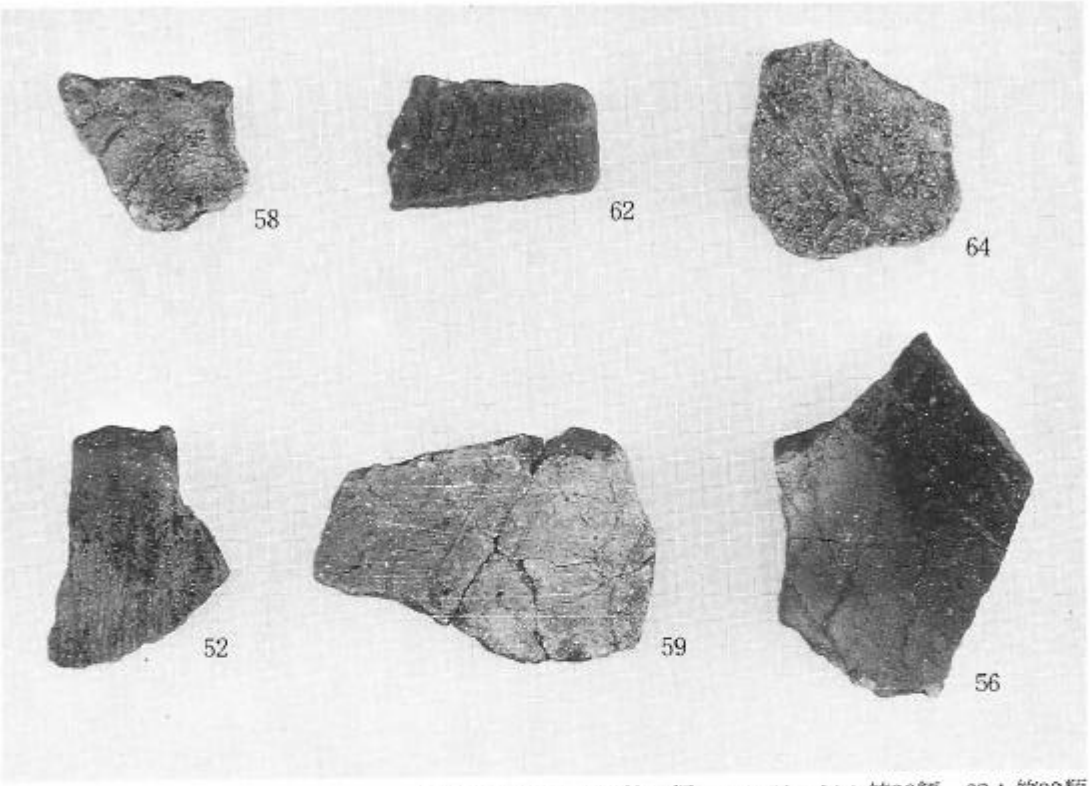
36：第4類　37・39：第6類　41：第21類　42：第20類　43：第8類



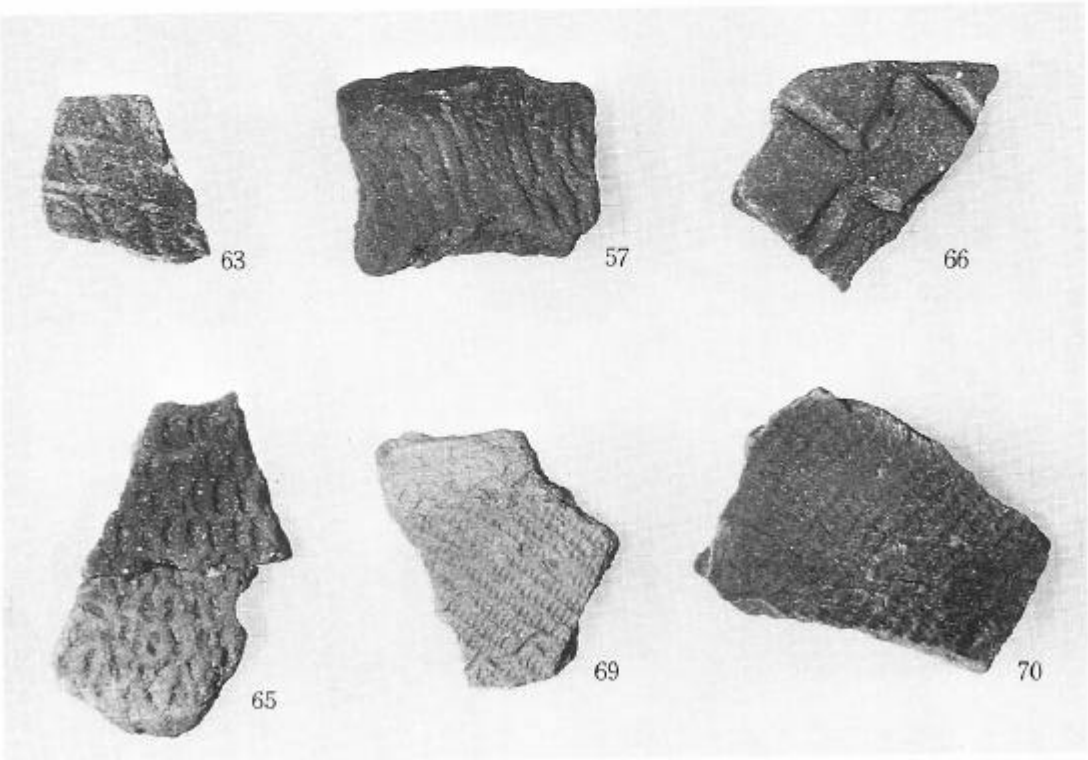
遺構内出土土器(5)

45・46・49：第31類　47・57：第23類　48：第19類

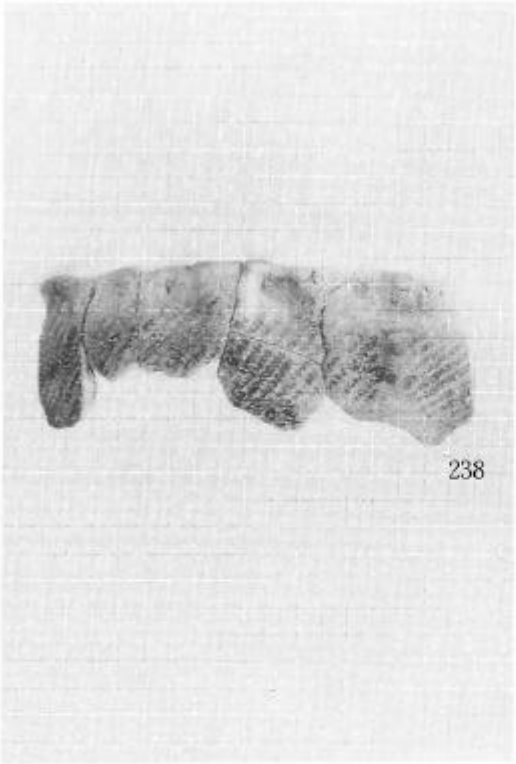
図版30

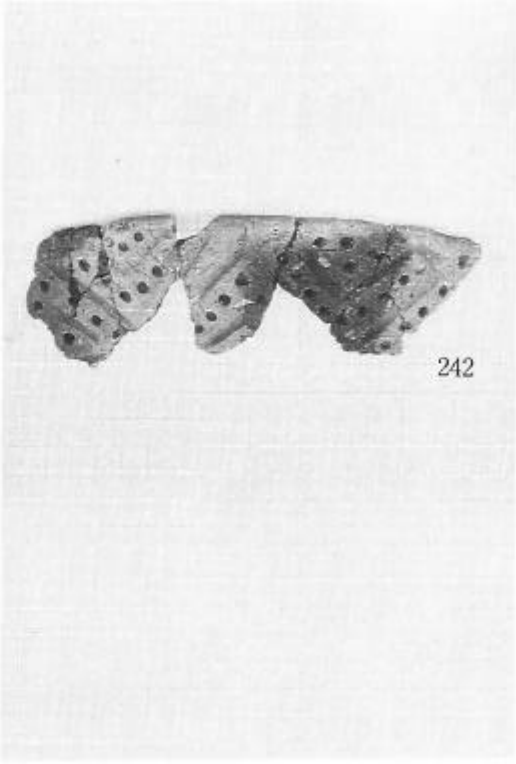


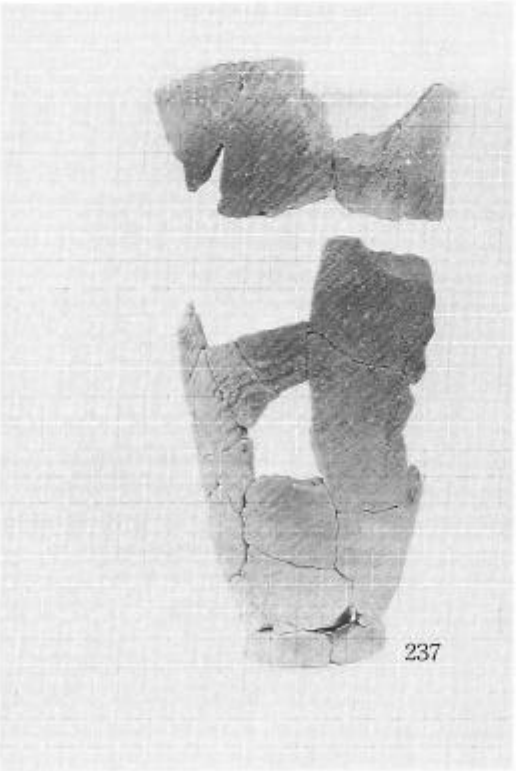
52：第20類　56：第21類　58・59・64：第26類　62：第33類



遺構内出土土器(6)　57：第23類　63：第21類　65：第33類　66：第7類　69・70：第18類

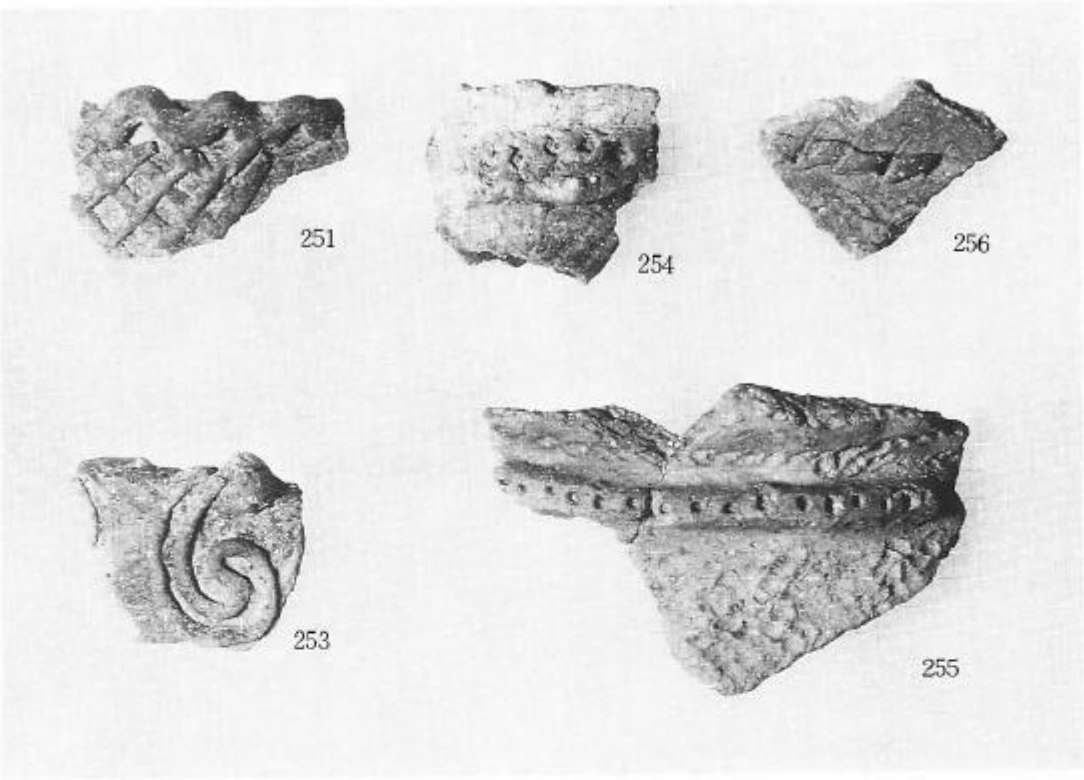




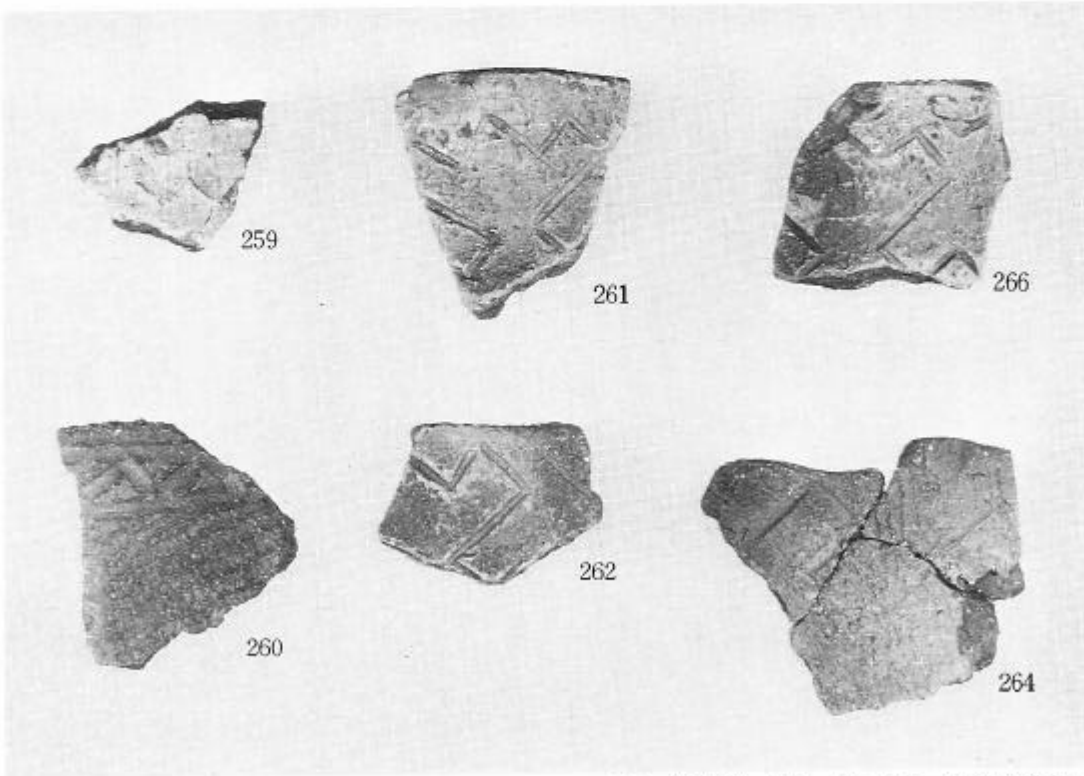


遺構外出土土器(1)

236：第15類　237・238：第31類　242：第14類

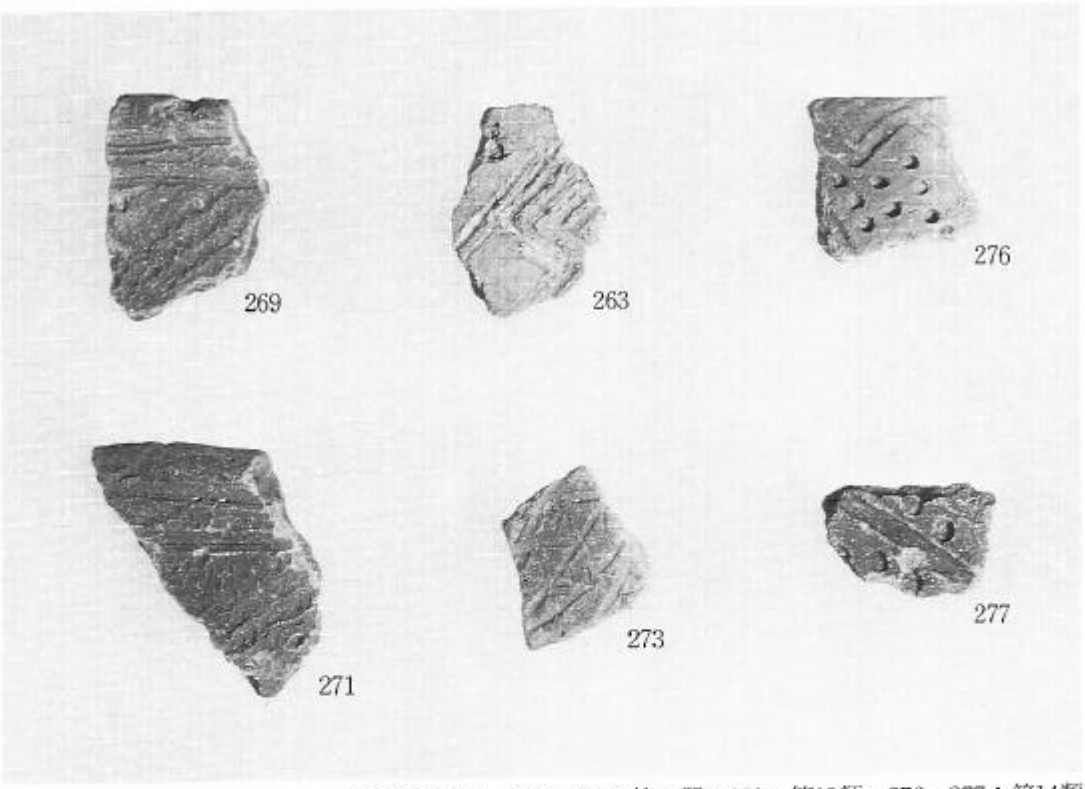


251：第1類　253：第3類　254～256：第6類

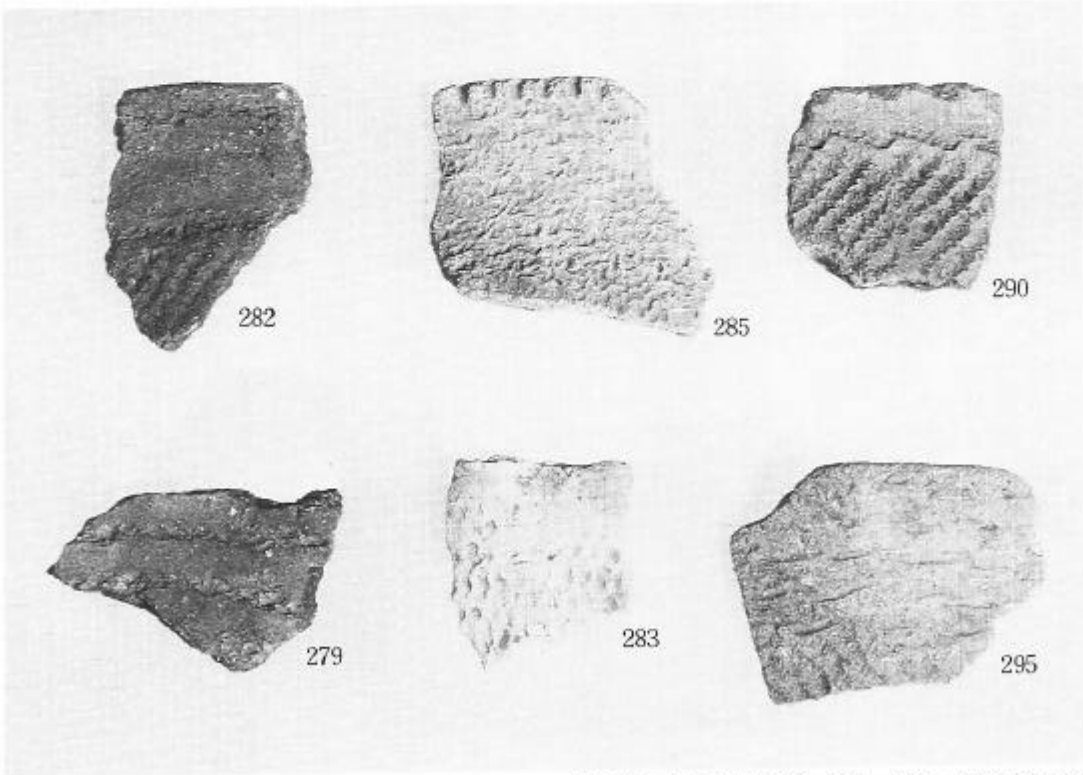


遺構外出土土器(2)

259～260：第7類　261・262・264・266：第8類



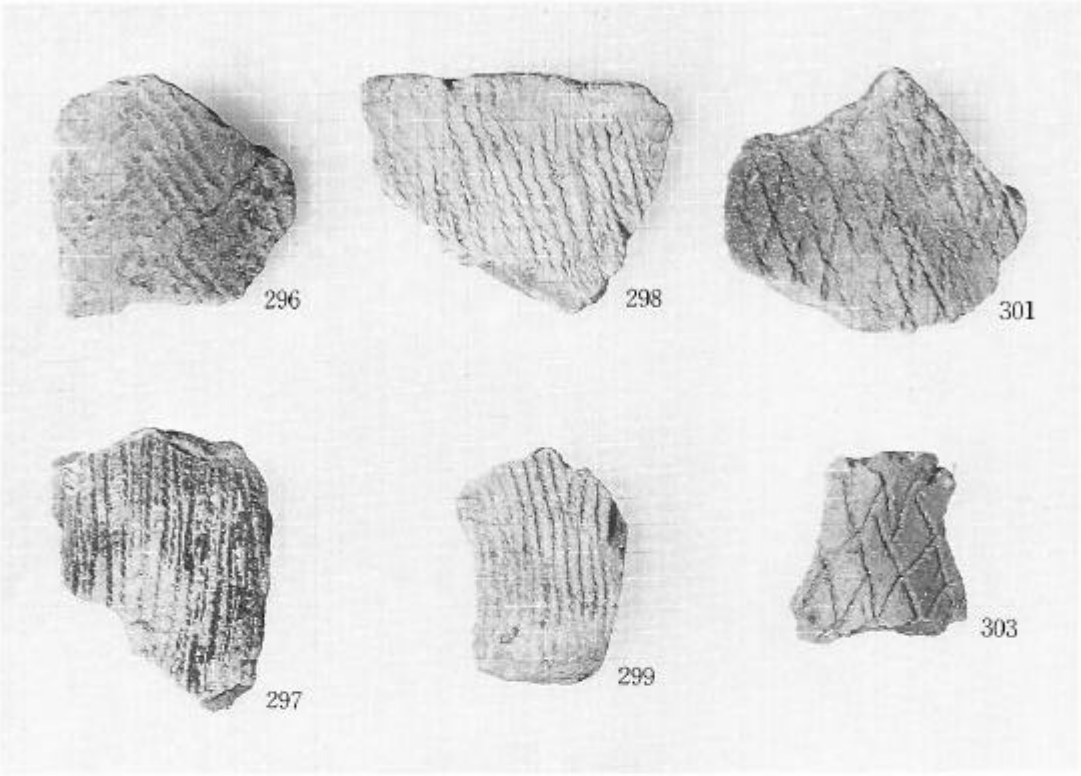
263：第8類　269・271：第11類　273：第13類　276・277：第14類



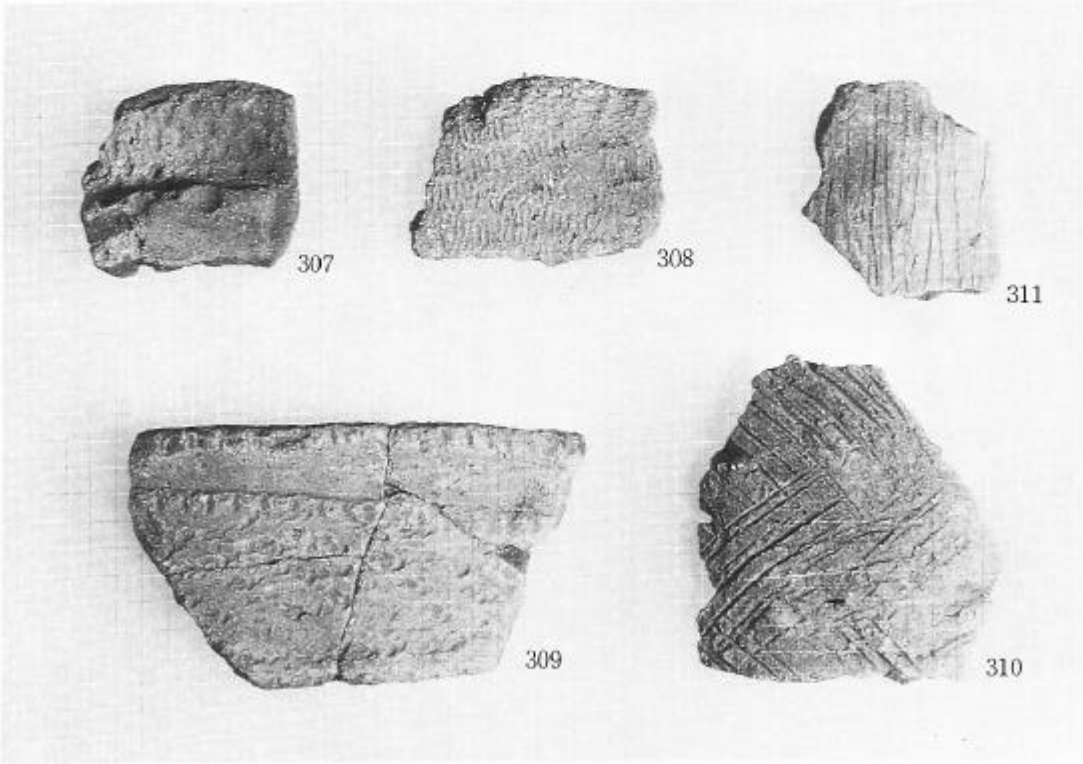
遺構外出土土器(3)

279・282：第15類　283：第33類　285・290・295：第18類

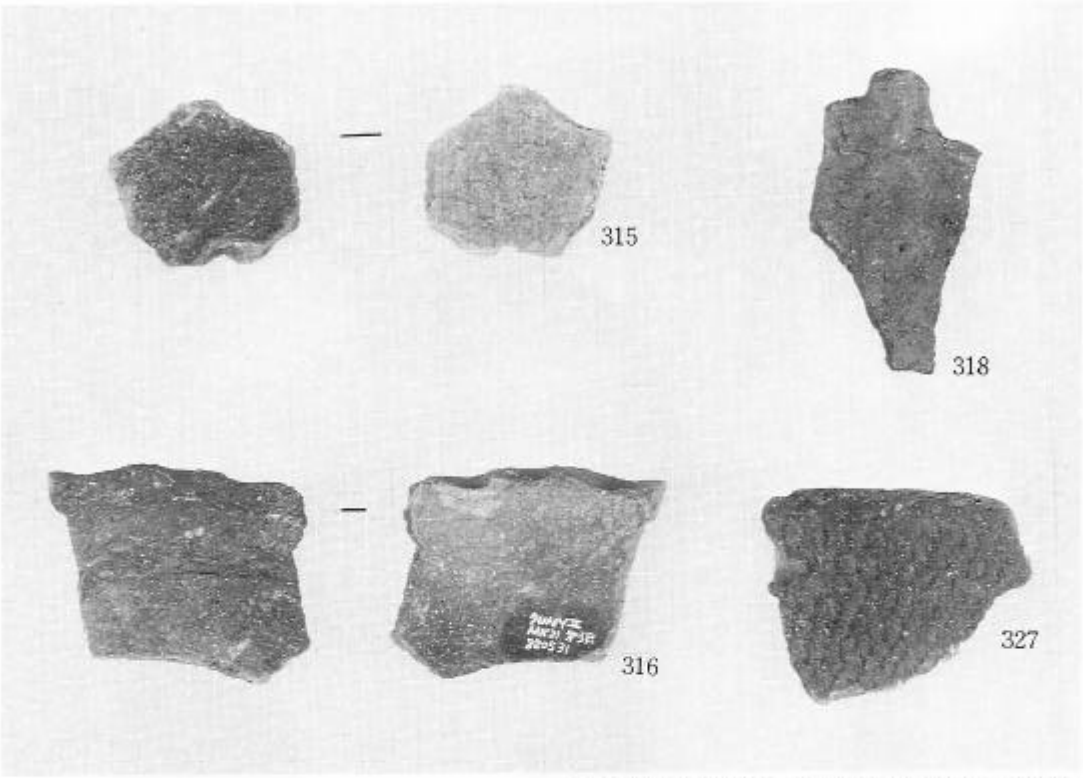
図版34



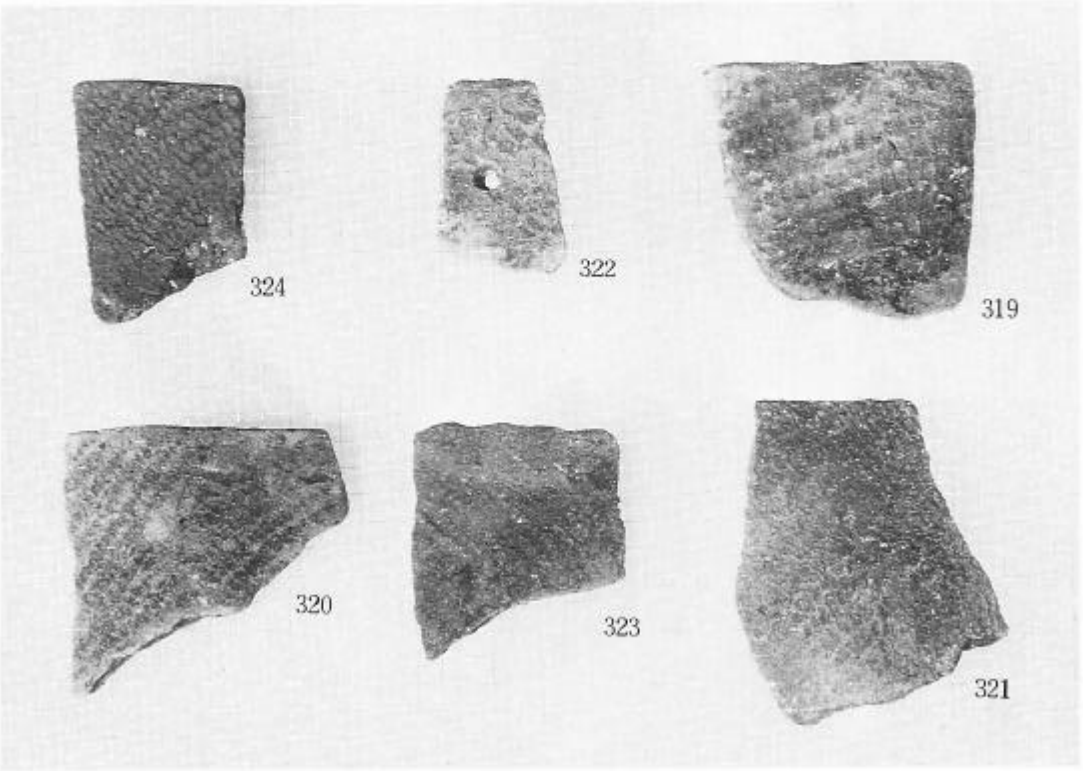
296：第19類　297～299：第20類　301・303：第21類



遺構外出土土器(4)　　307：第23類　308：第24類　309：第25類　310・311：第26類

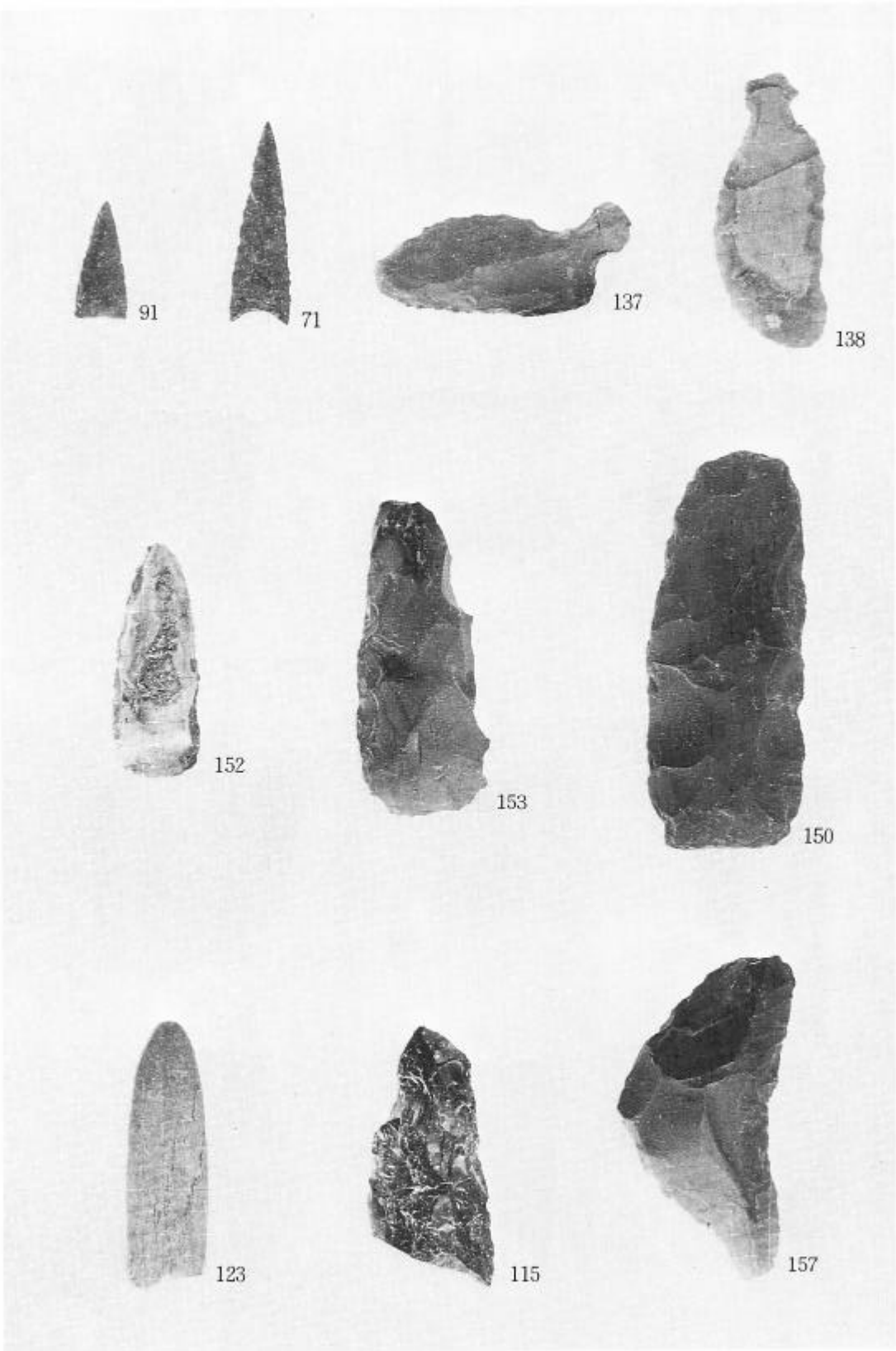


315・316：第27類　318：第30類　327：第33類

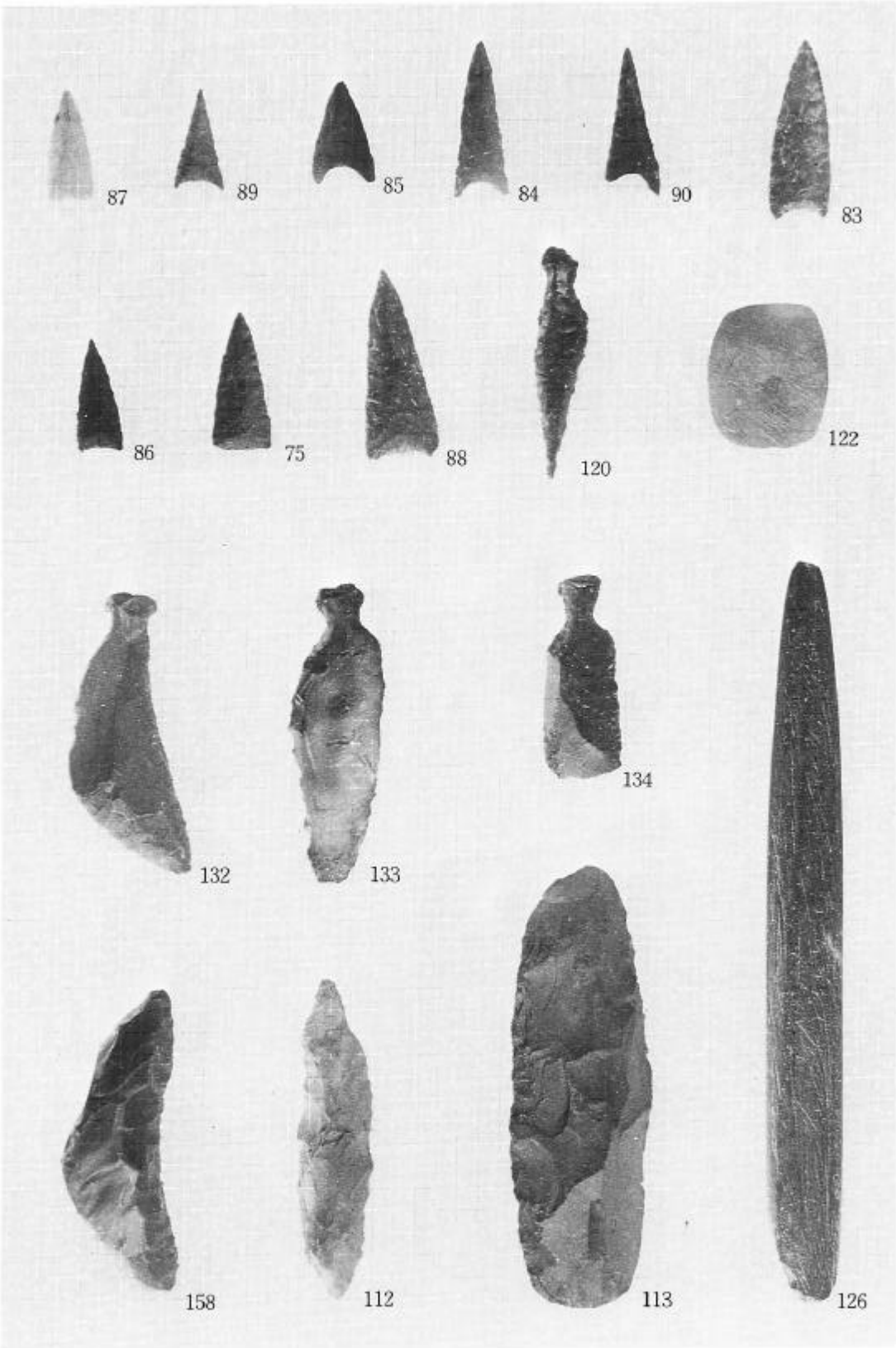


遺構外出土土器(5)

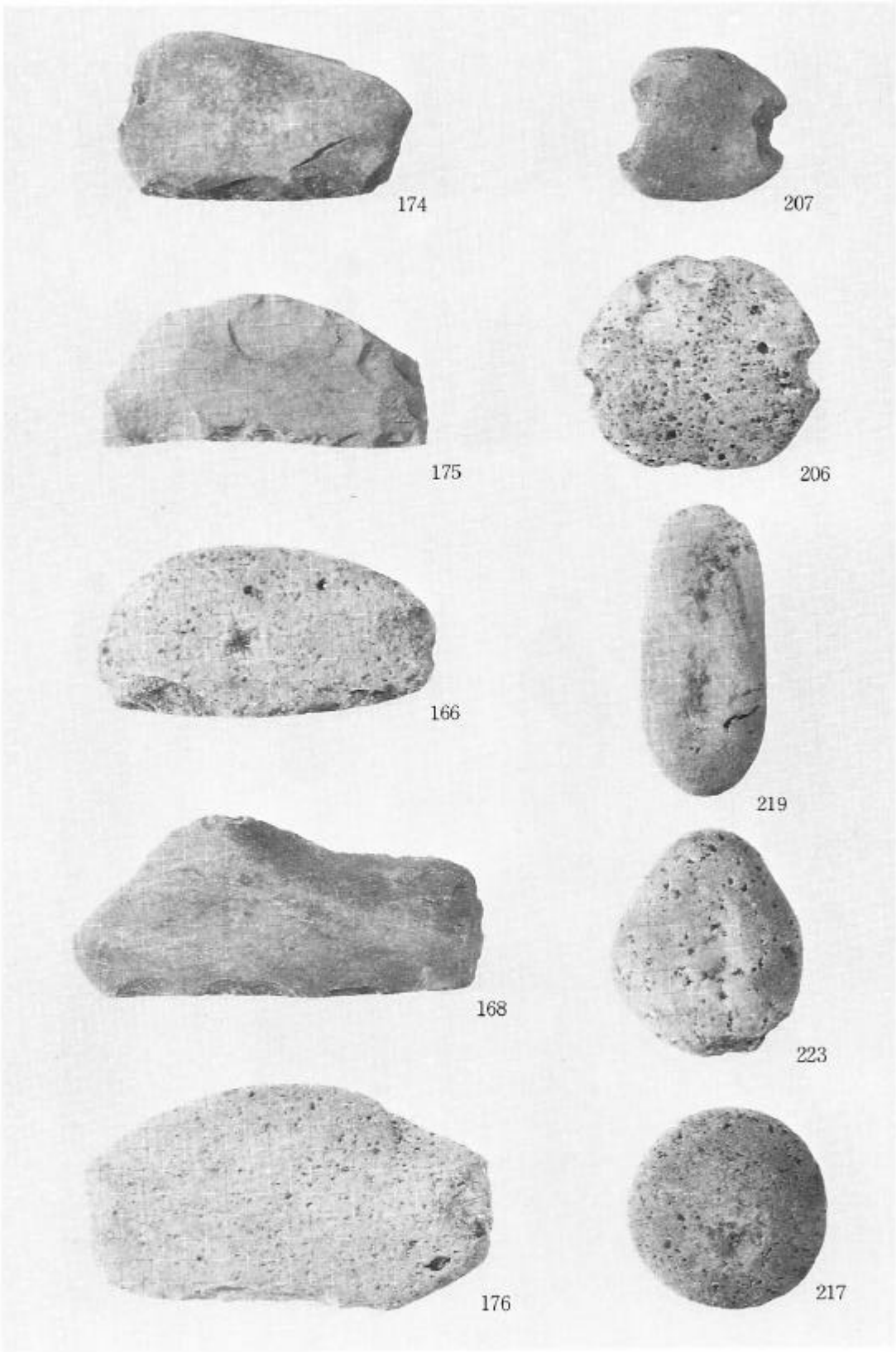
319～324：第31類



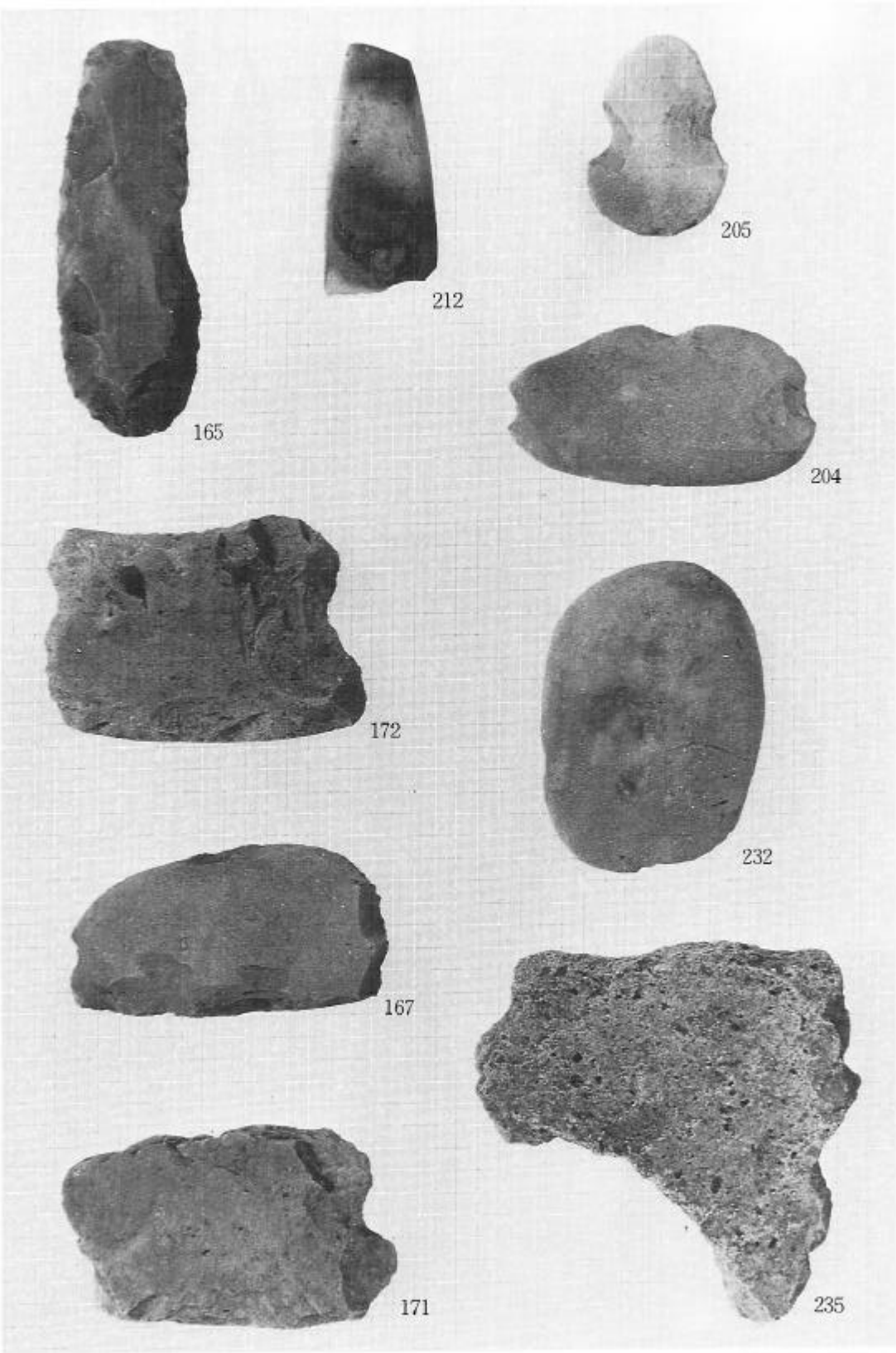
遺構内出土石器(1)



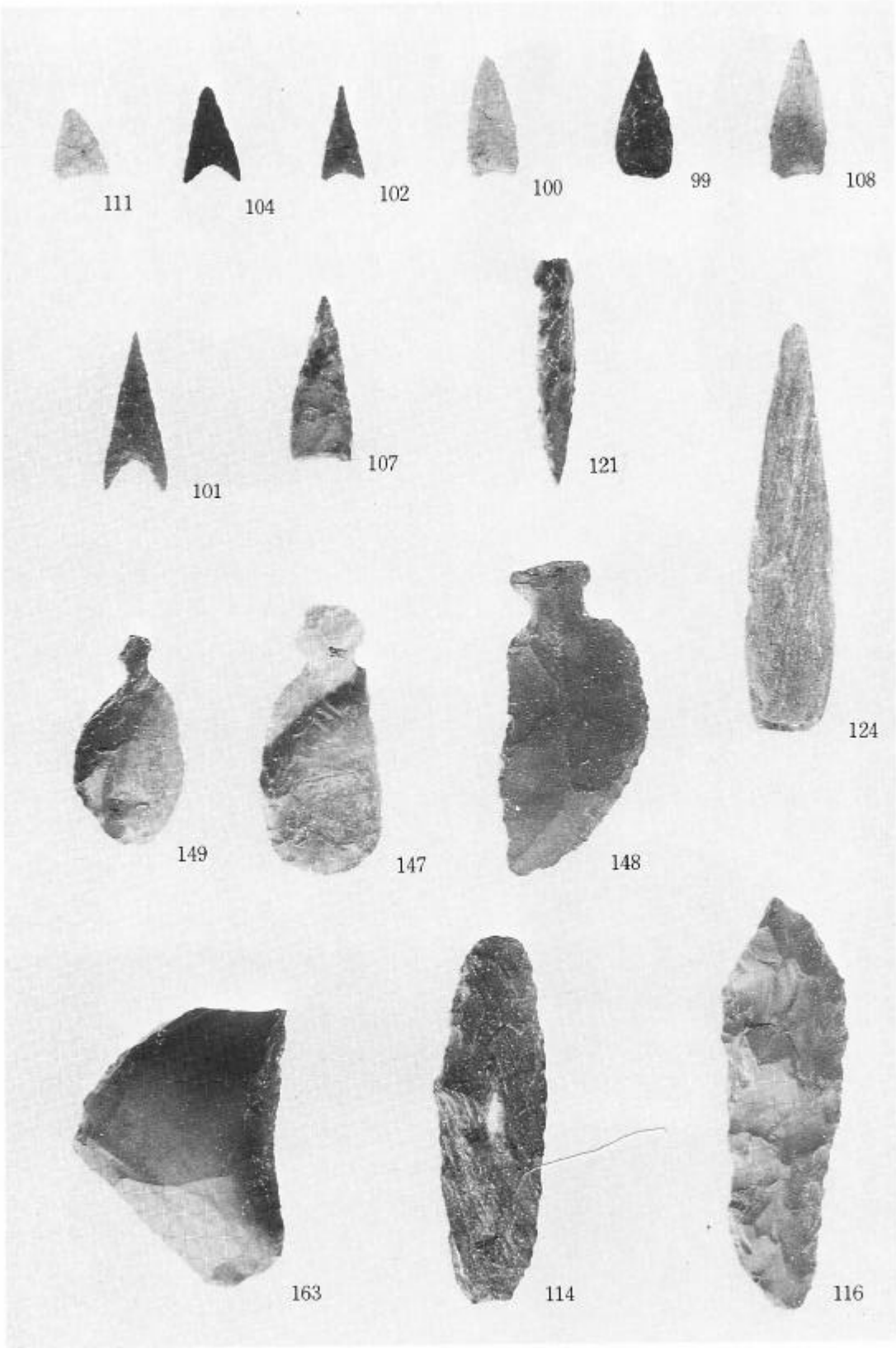
遺構内出土石器(2)



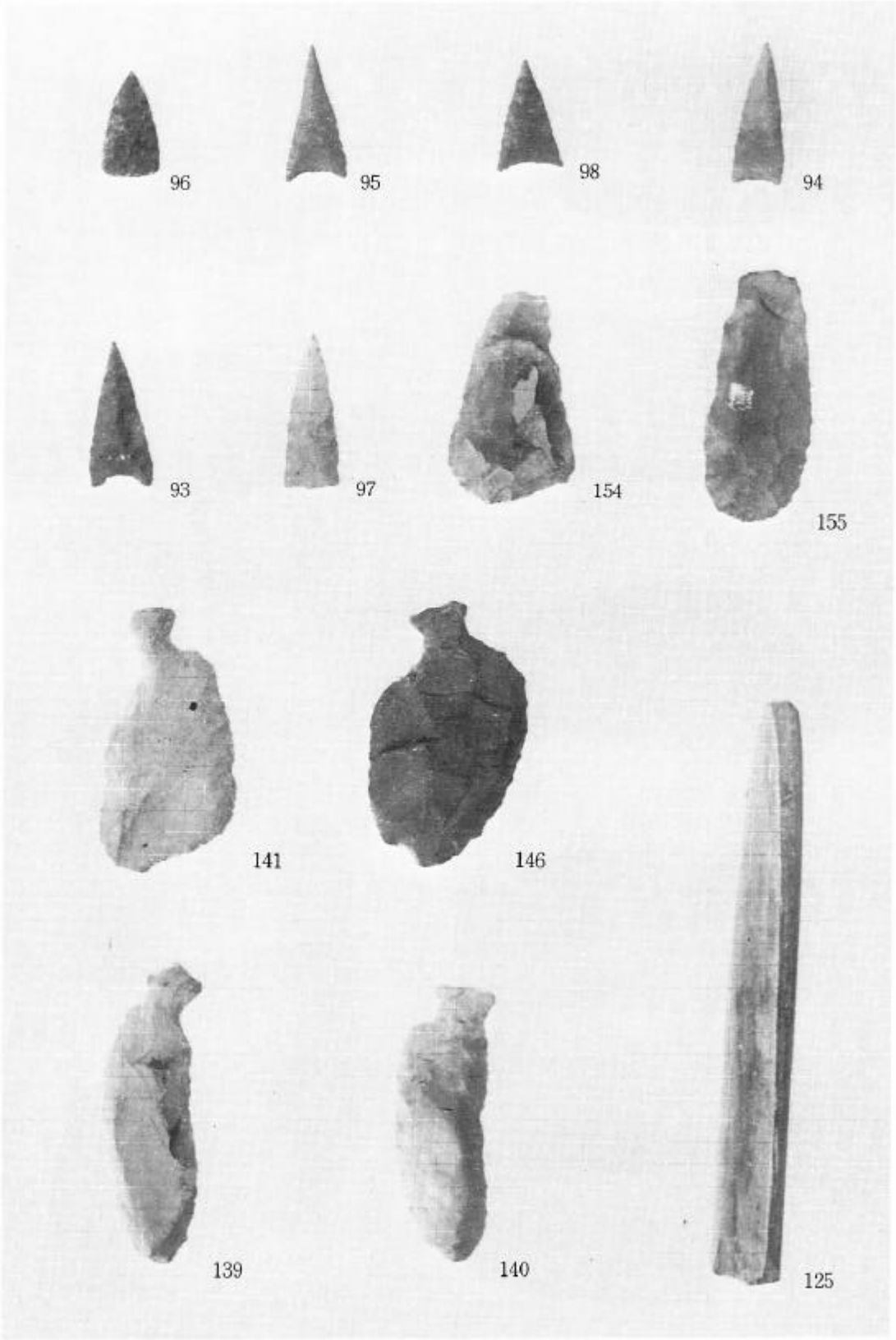
遺構内出土石器(3)



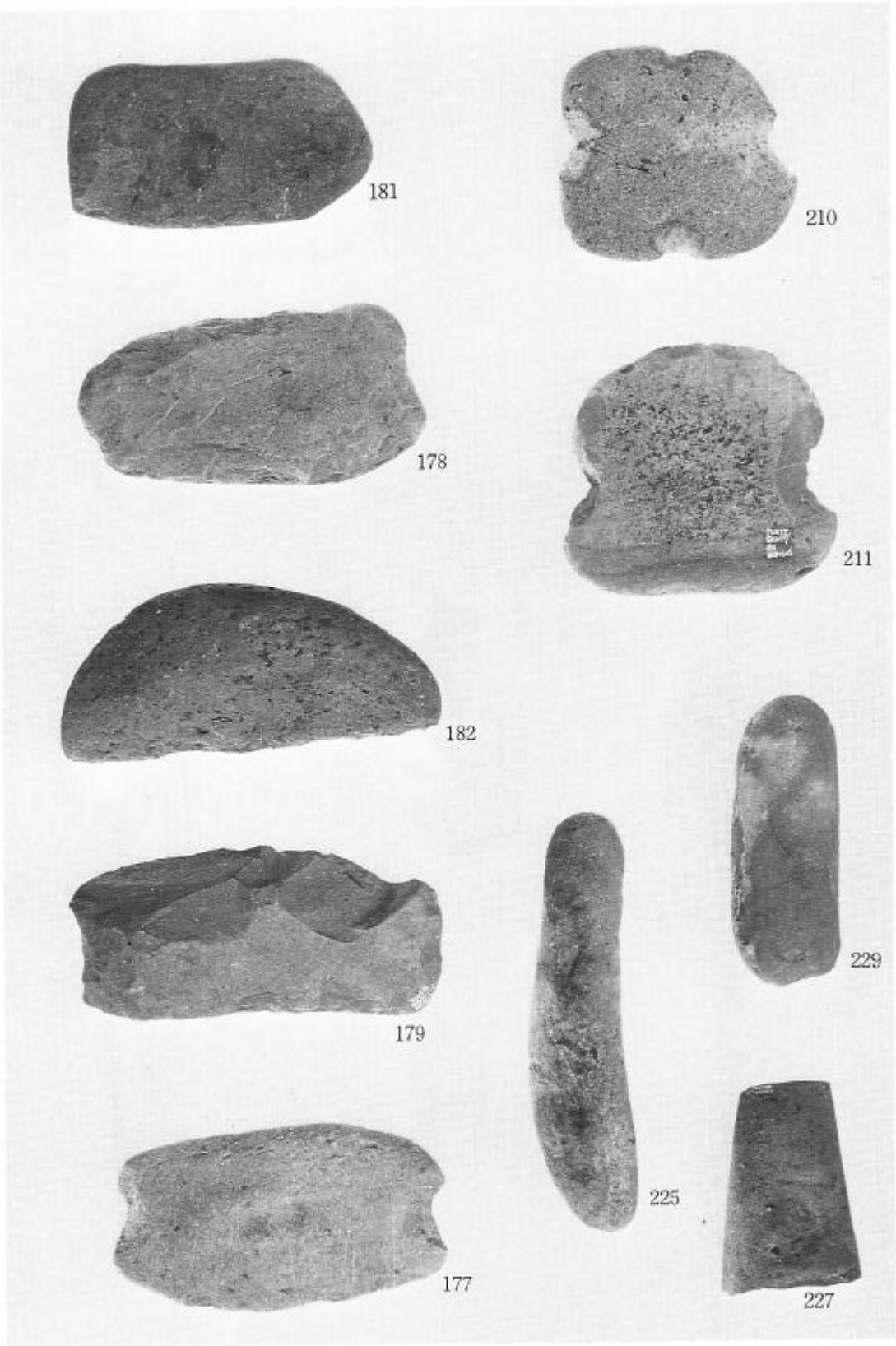
遺構内出土石器(4)



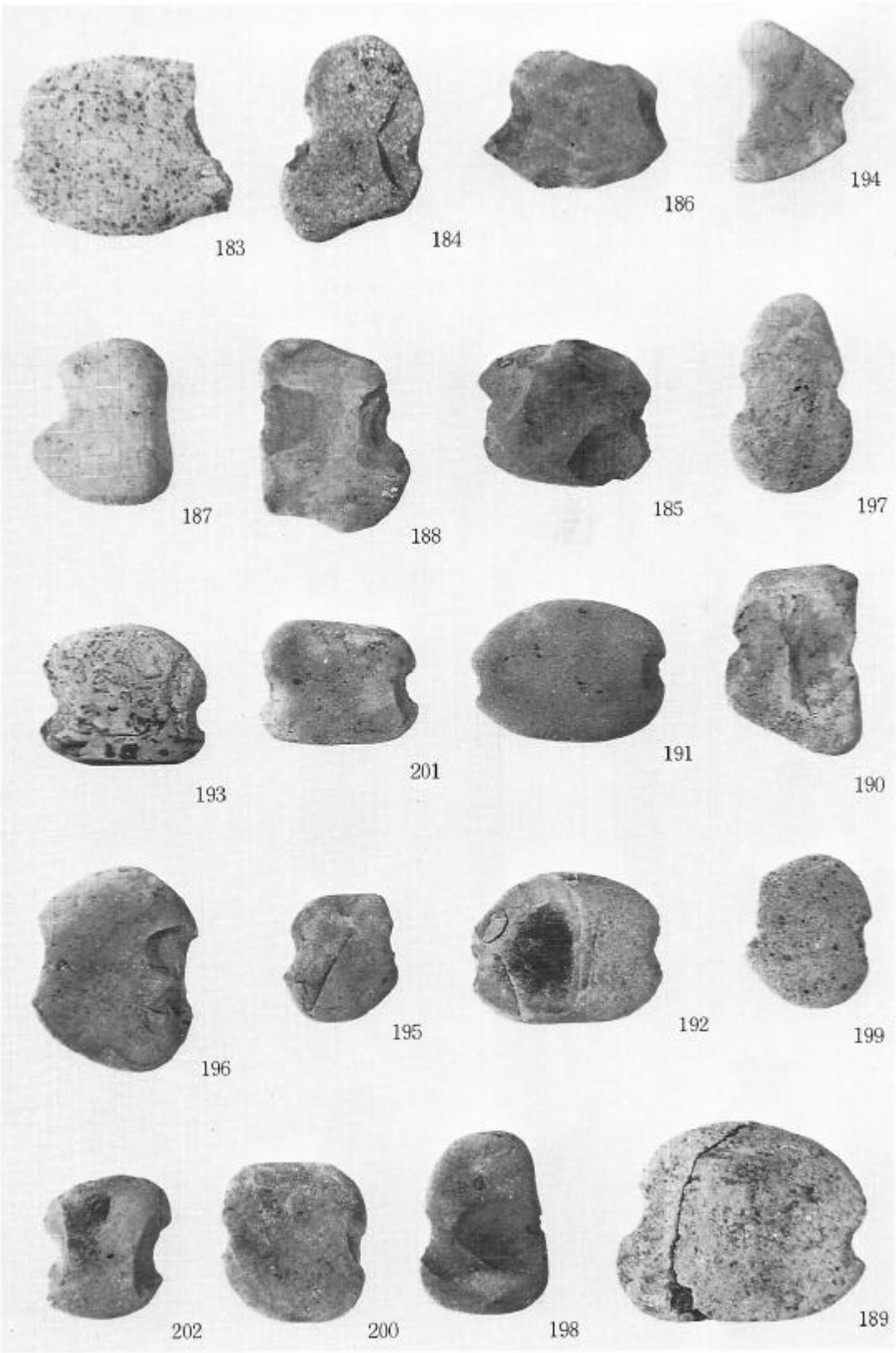
遺構内出土石器(5)



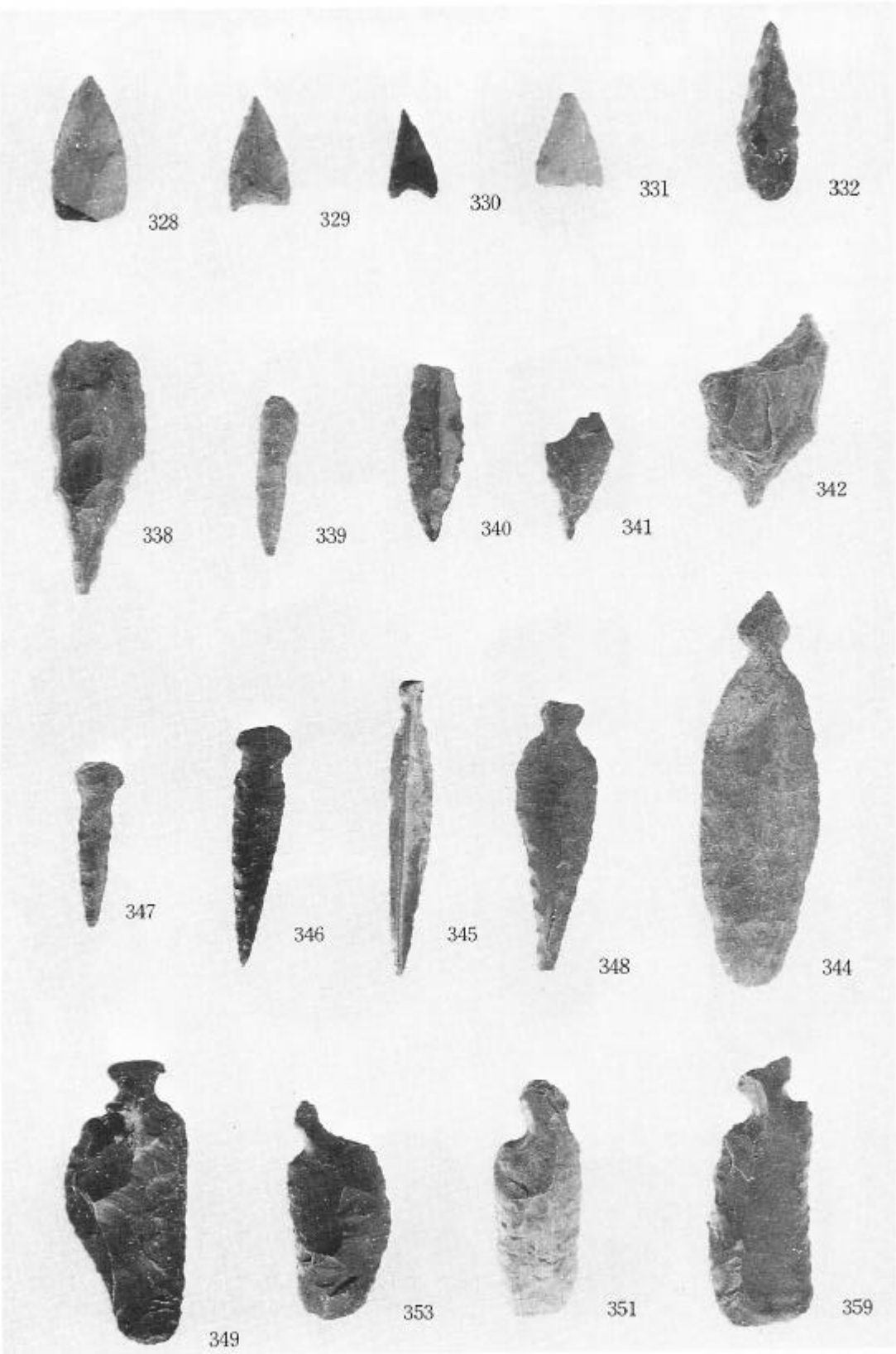
遺構内出土石器(6)



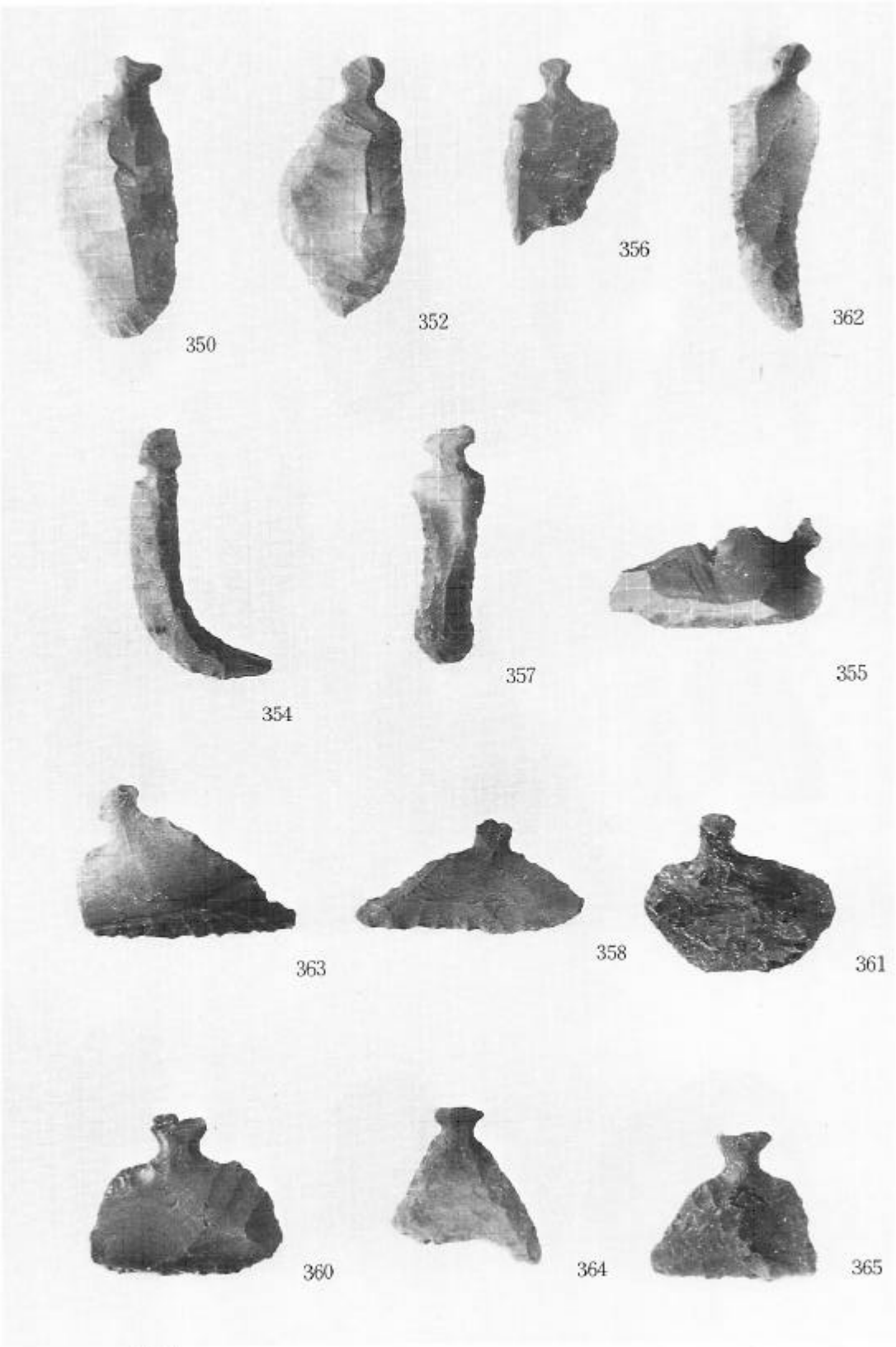
遺構内出土石器(7)


183
184
186
194
187
188
185
197
193
201
191
190
196
195
192
199
202
200
198
189

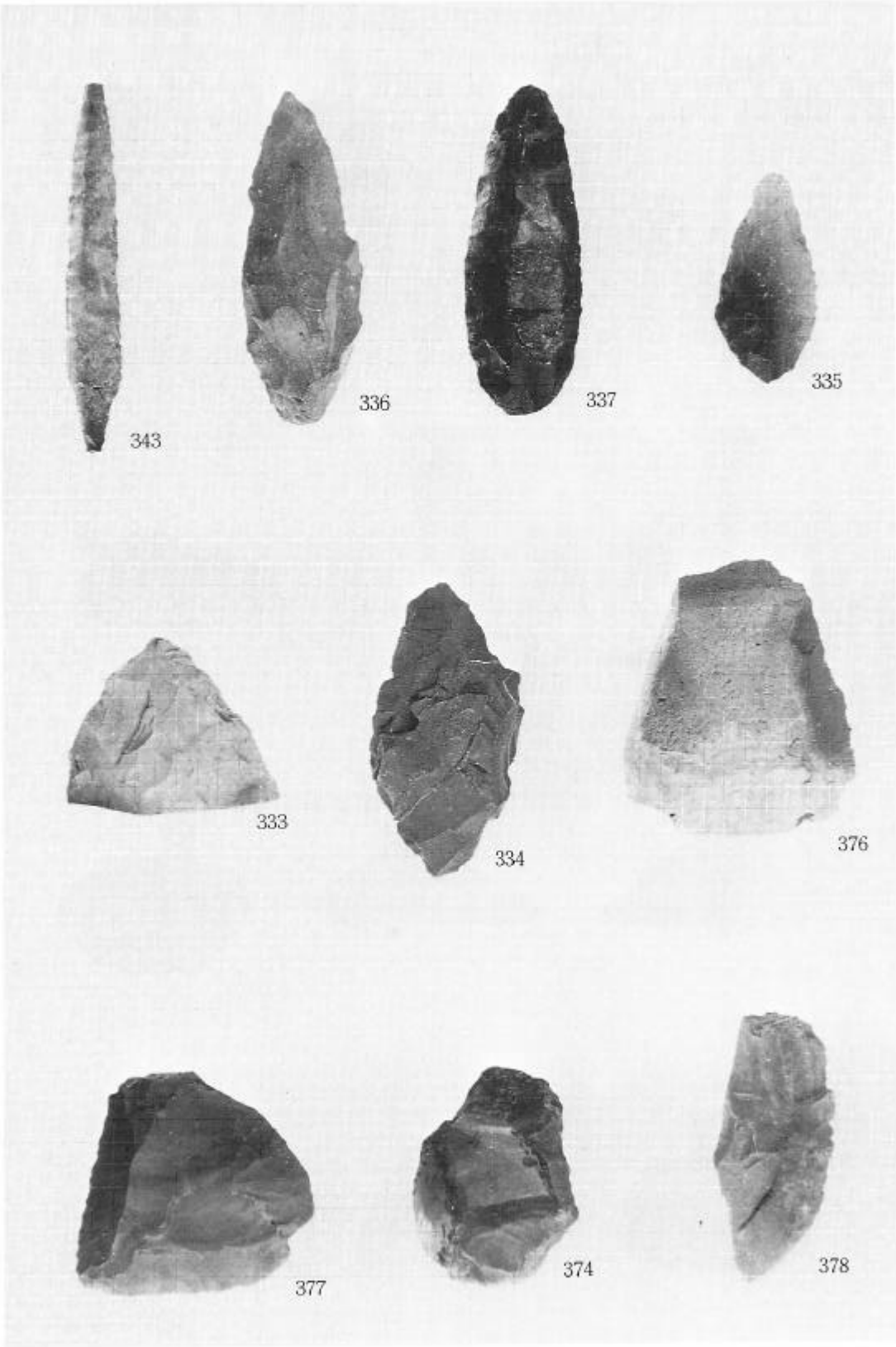
遺構内出土石器(8)


328
329
330
331
332
338
339
340
341
342
347
346
345
348
344
349
353
351
359

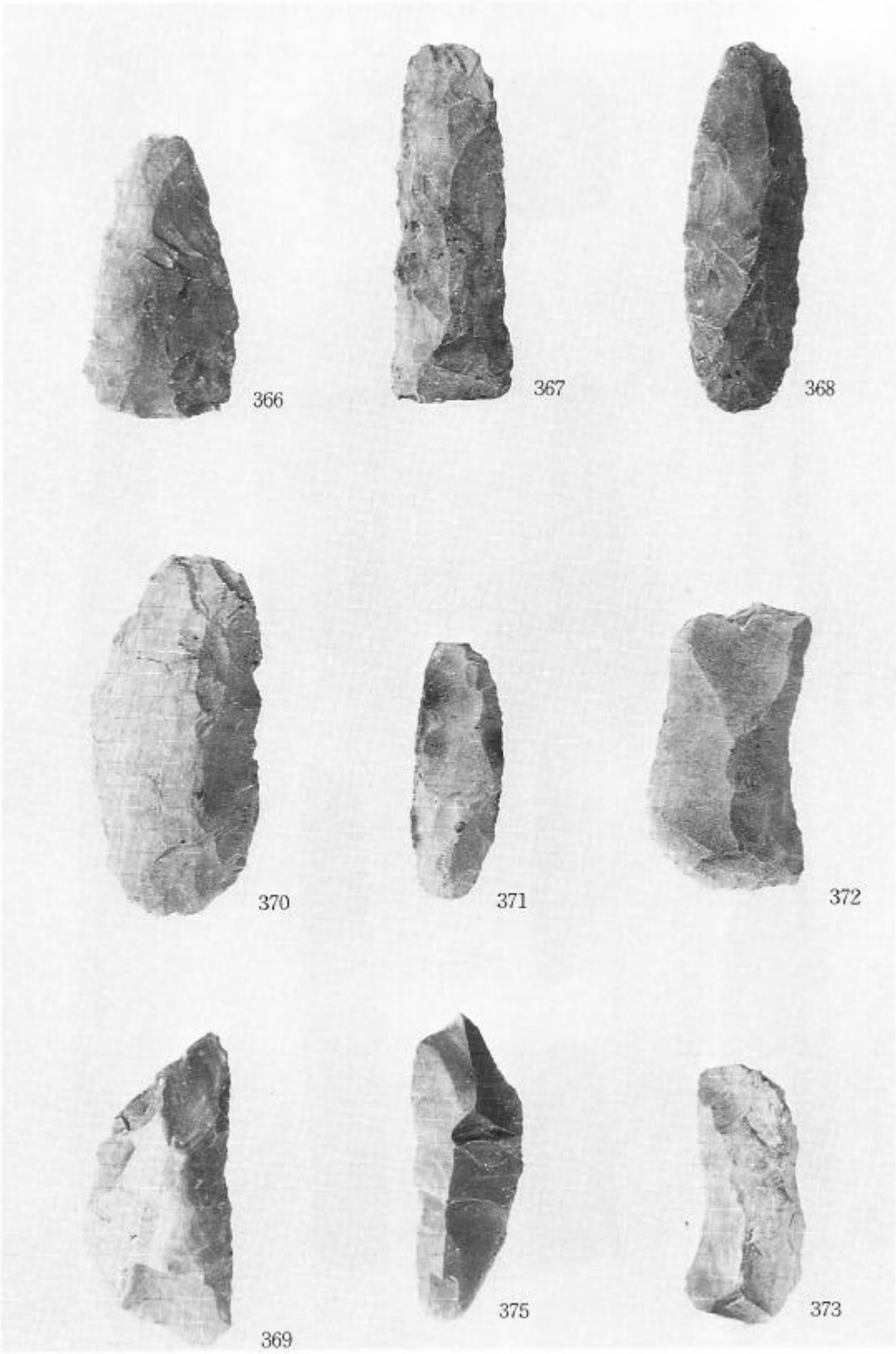
遺構外出土石器(1)



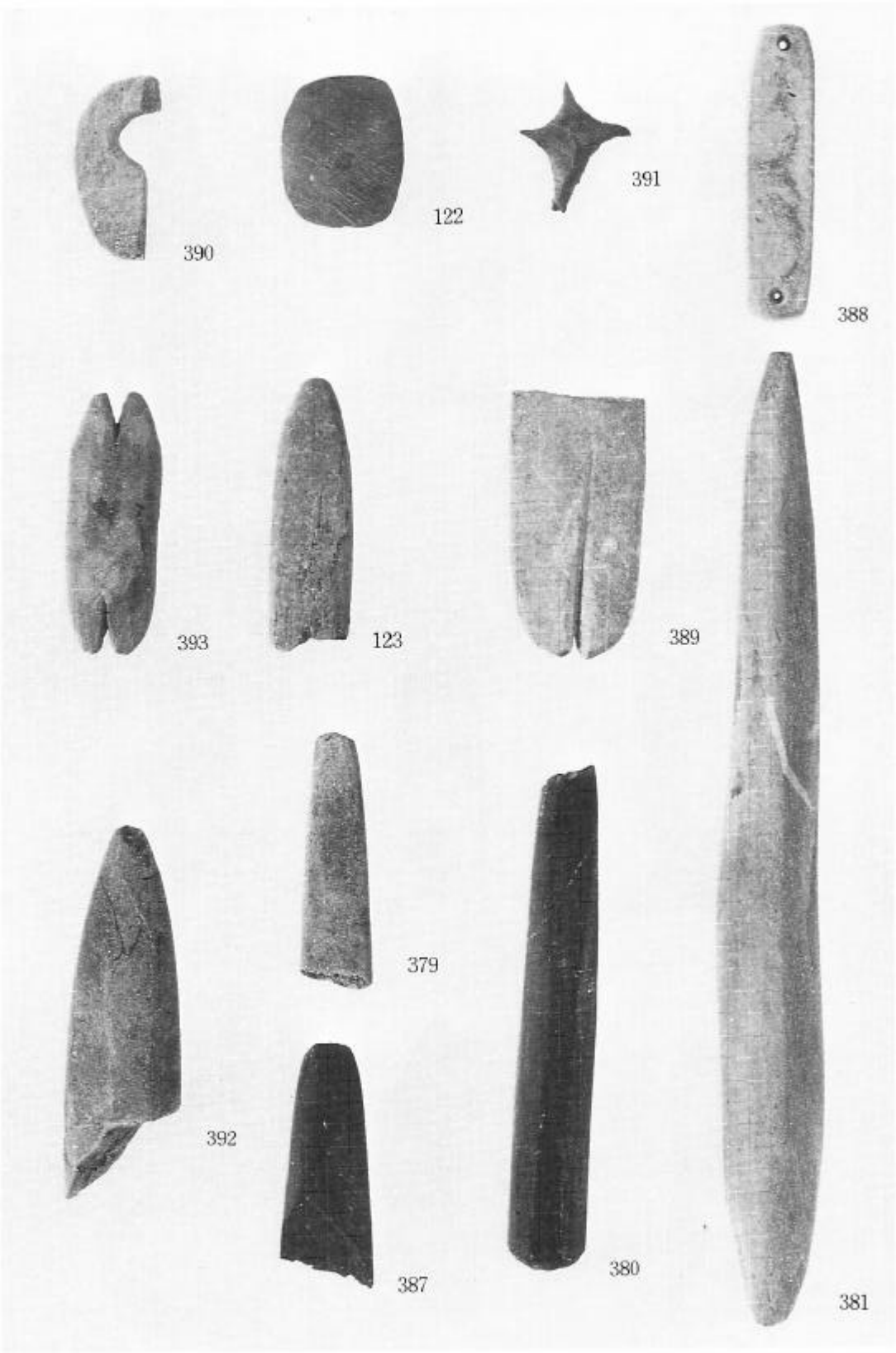
遺構外出土石器(2)



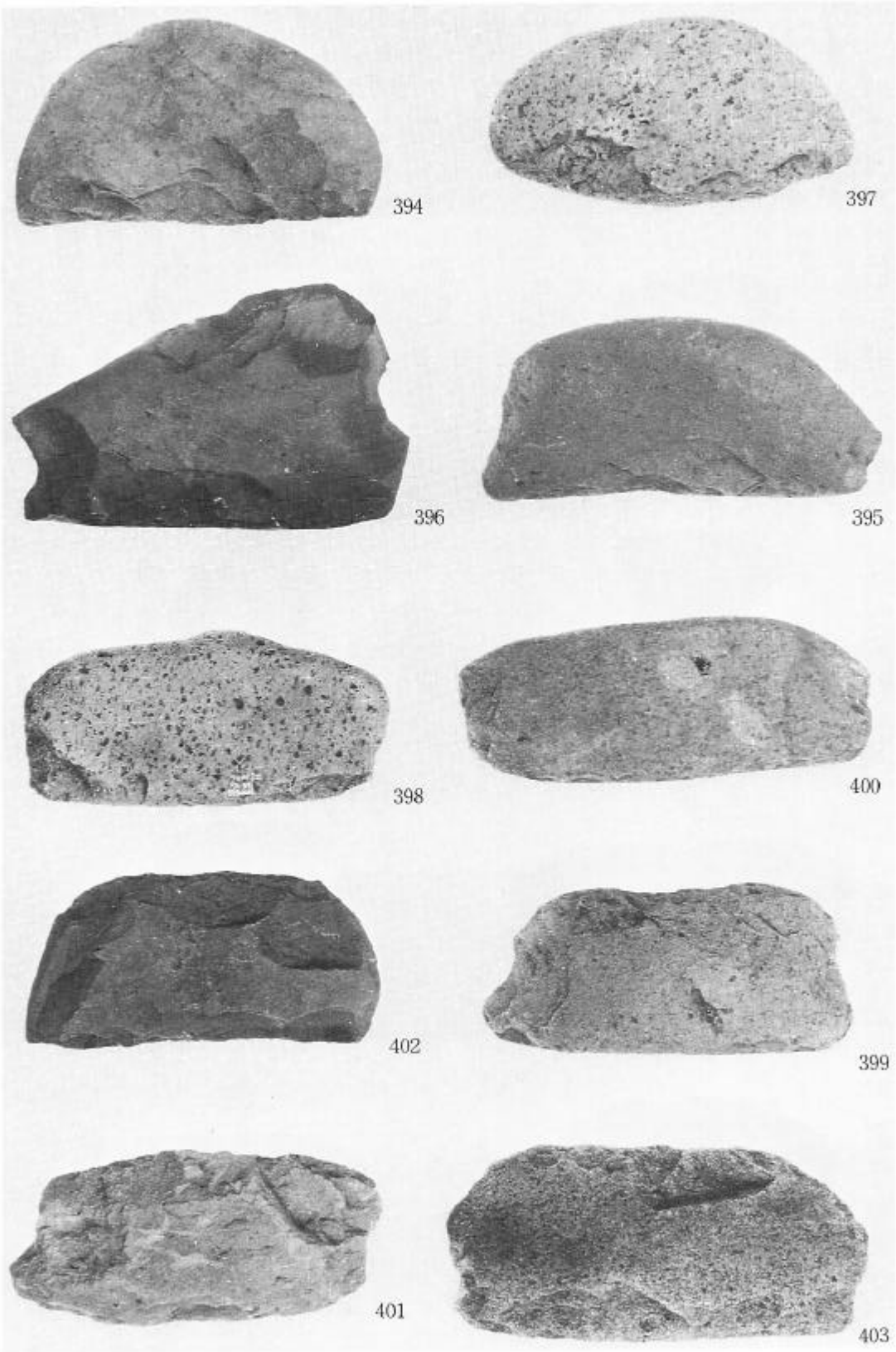
遺構外出土石器(3)



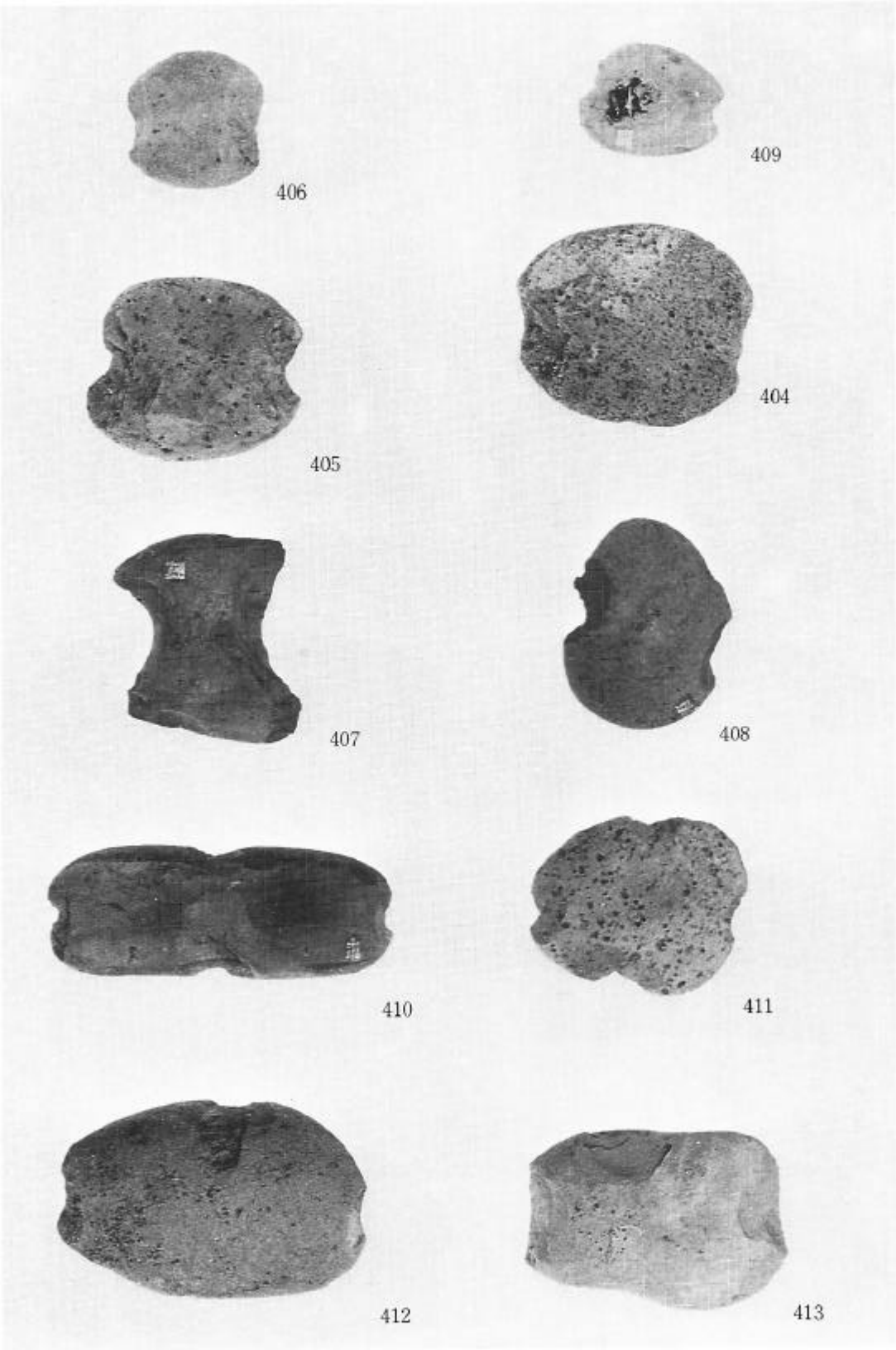
遺構外出土石器



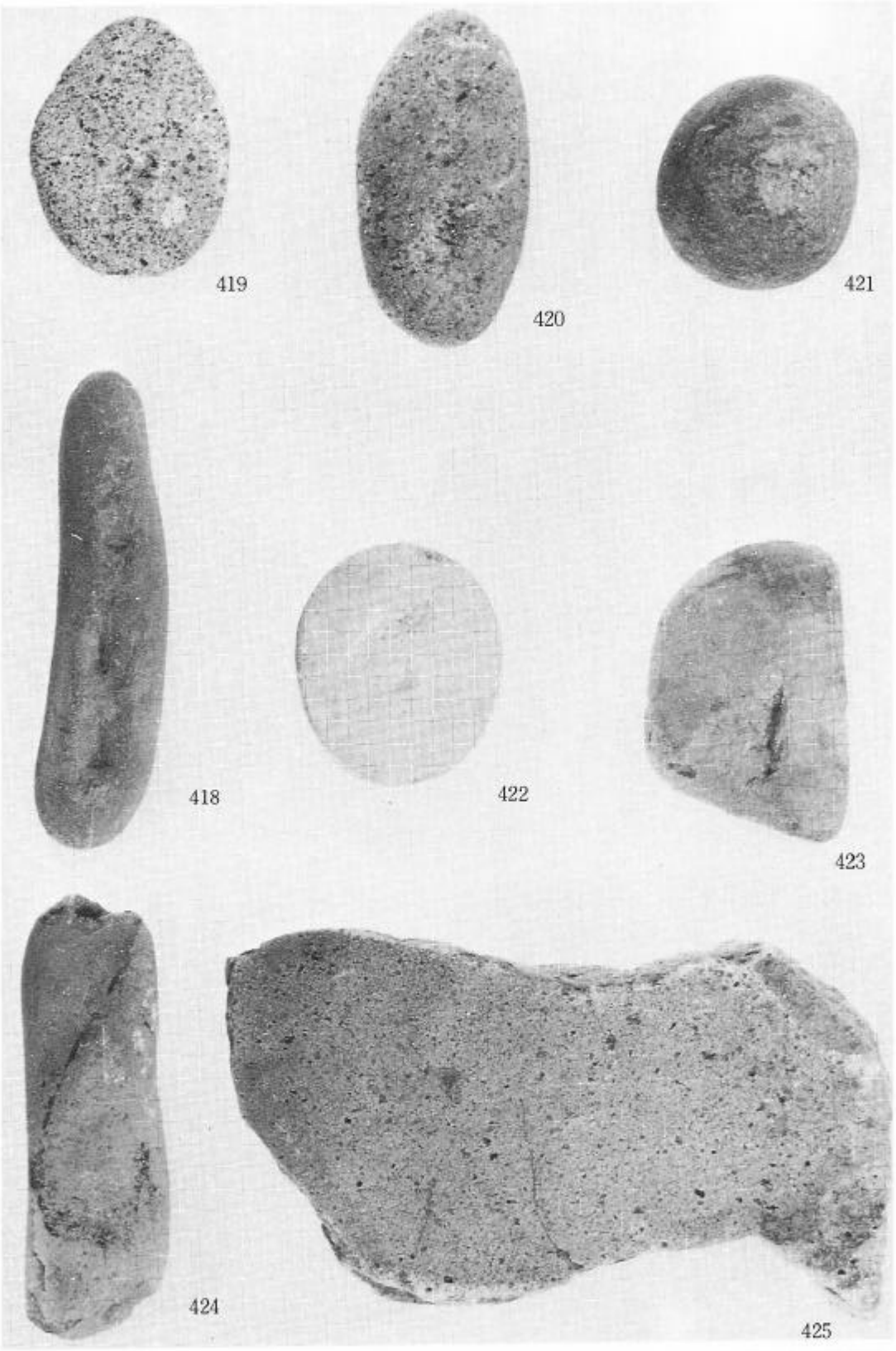
遺構外出土石器(5)



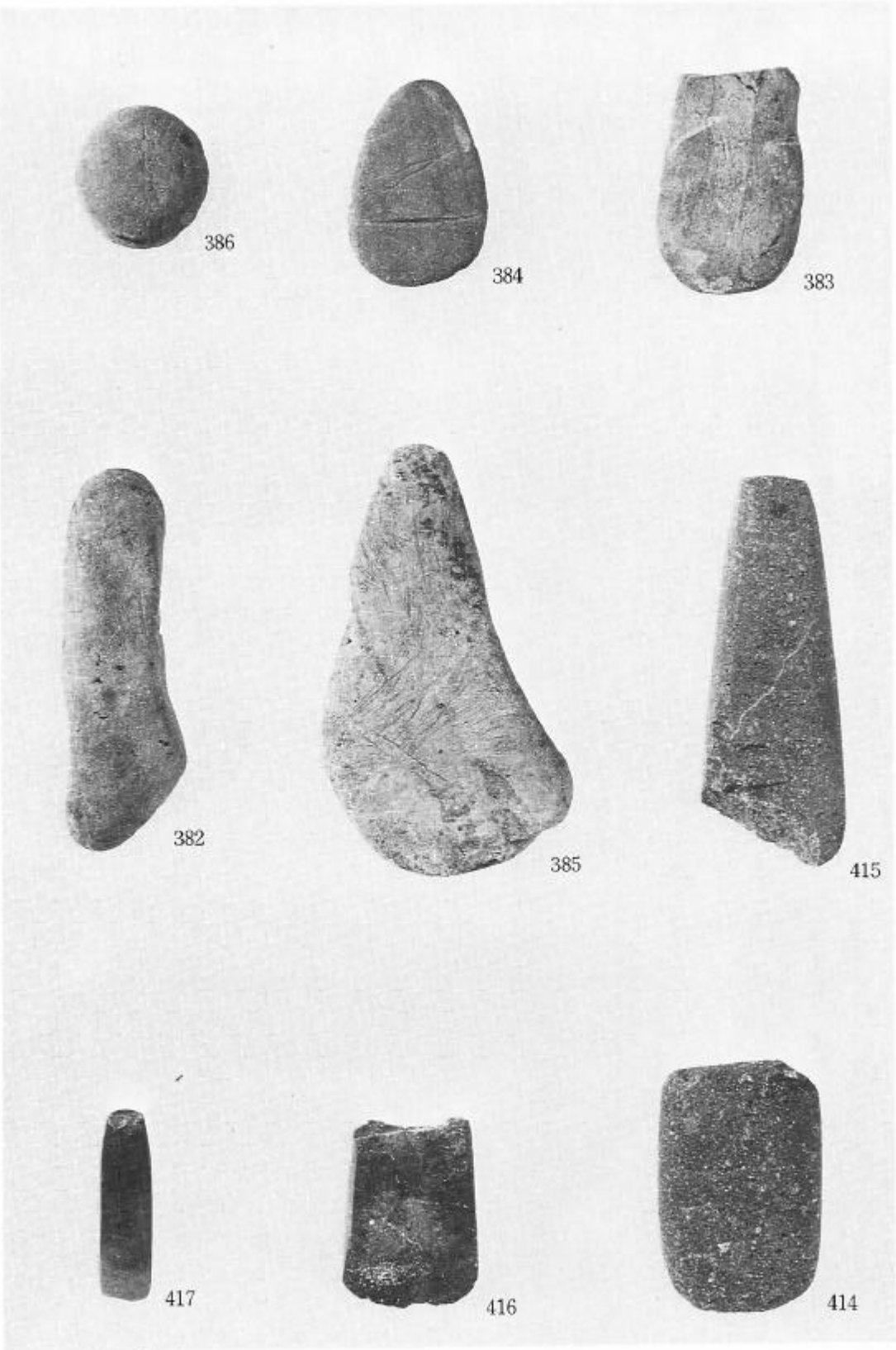
遺構外出土石器(6)



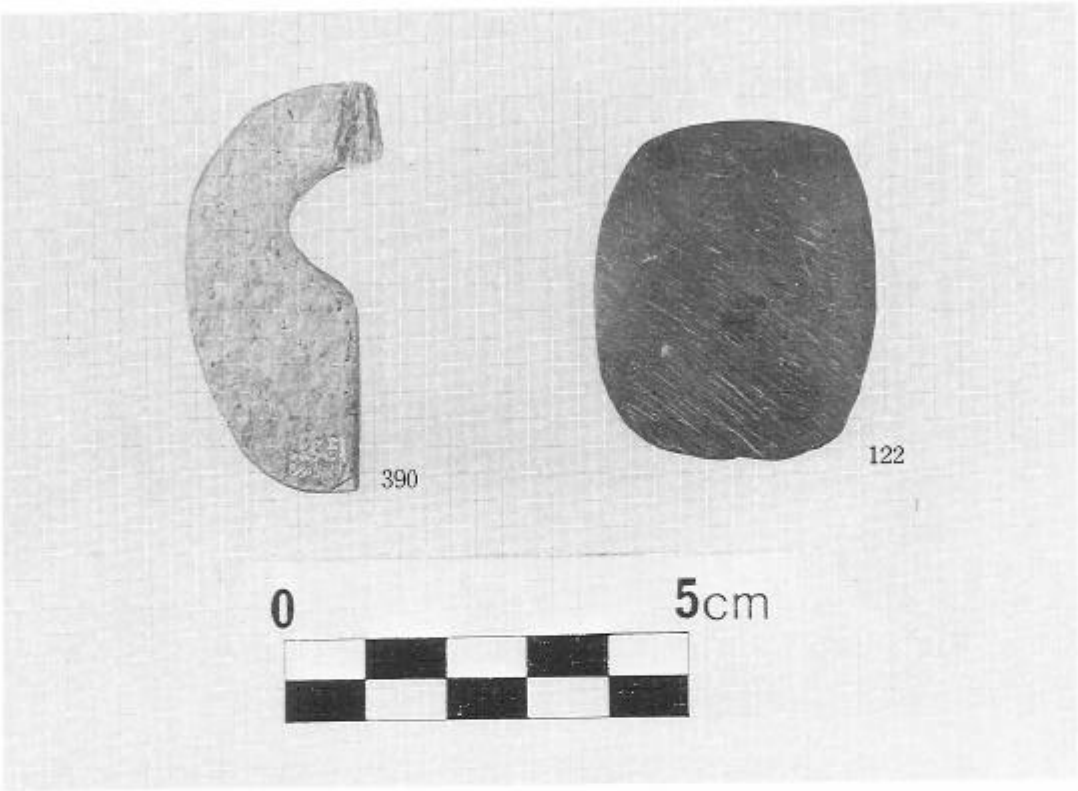
遺構外出土石器(7)



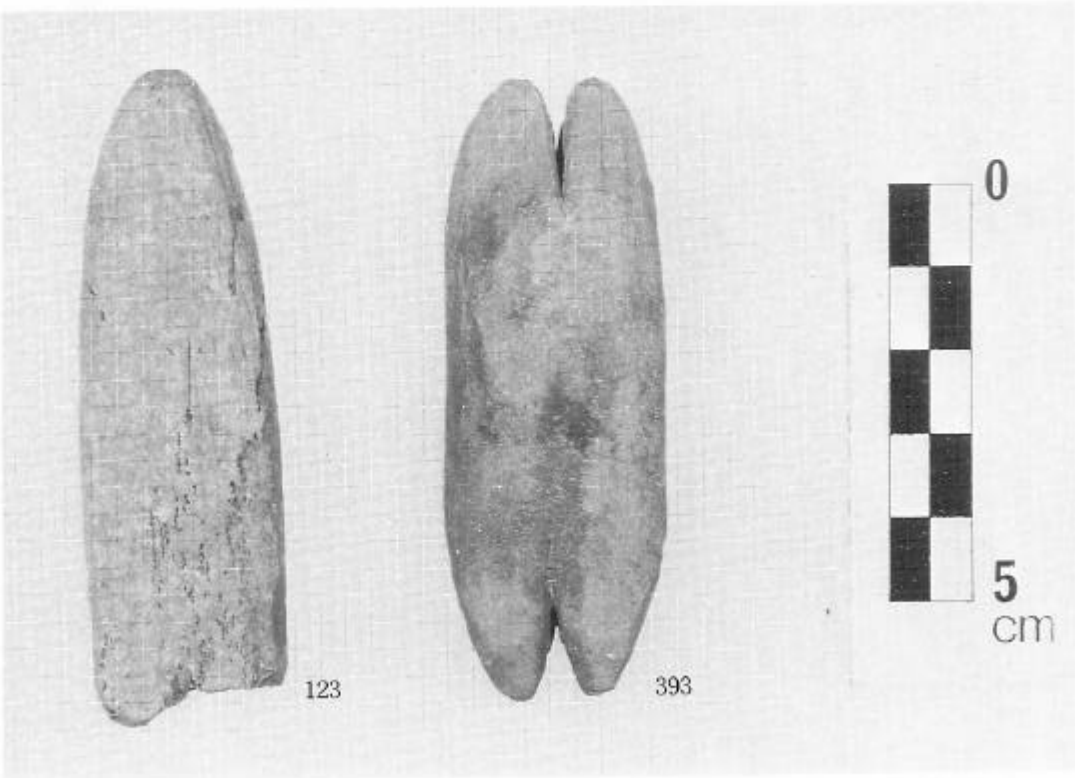
遺構外出土石器(8)



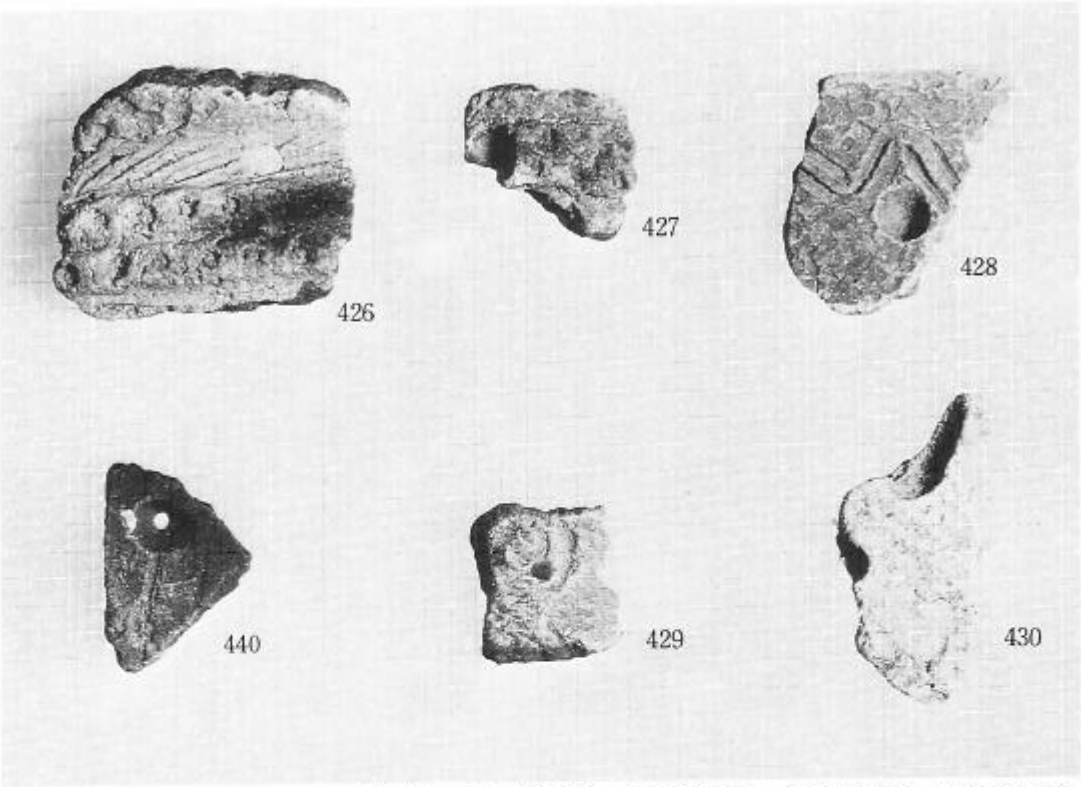
遺構外出土石器(9)



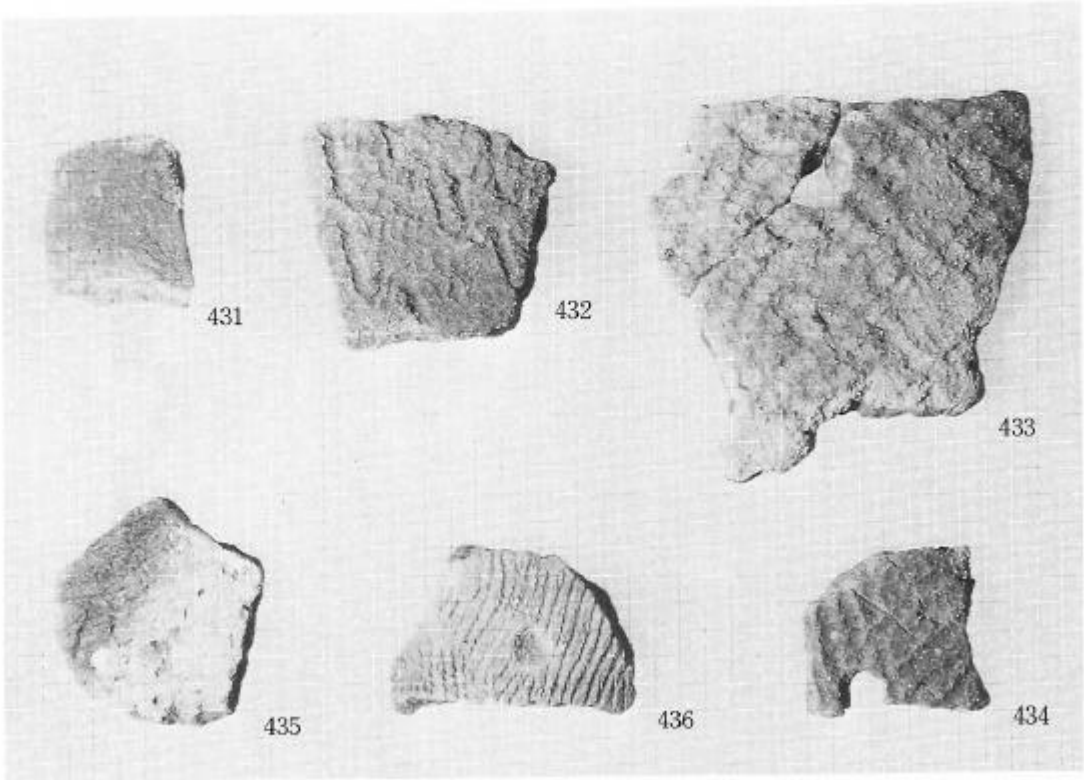
玦状耳飾



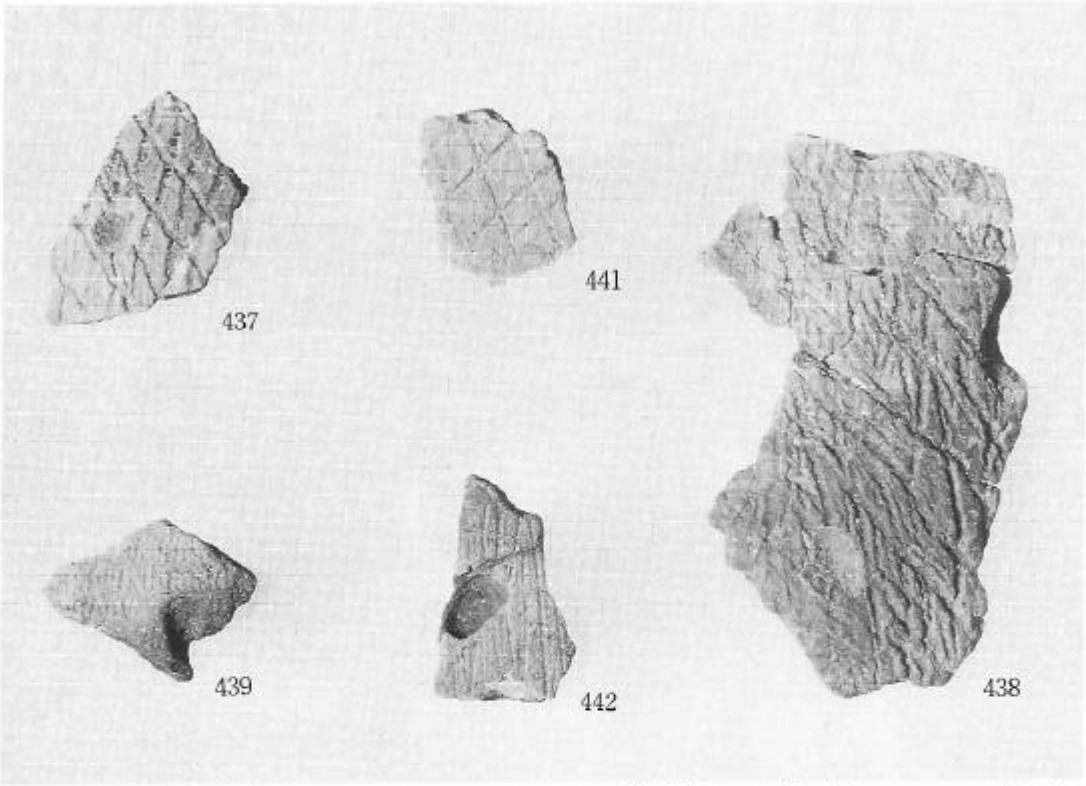
燕尾形石製品



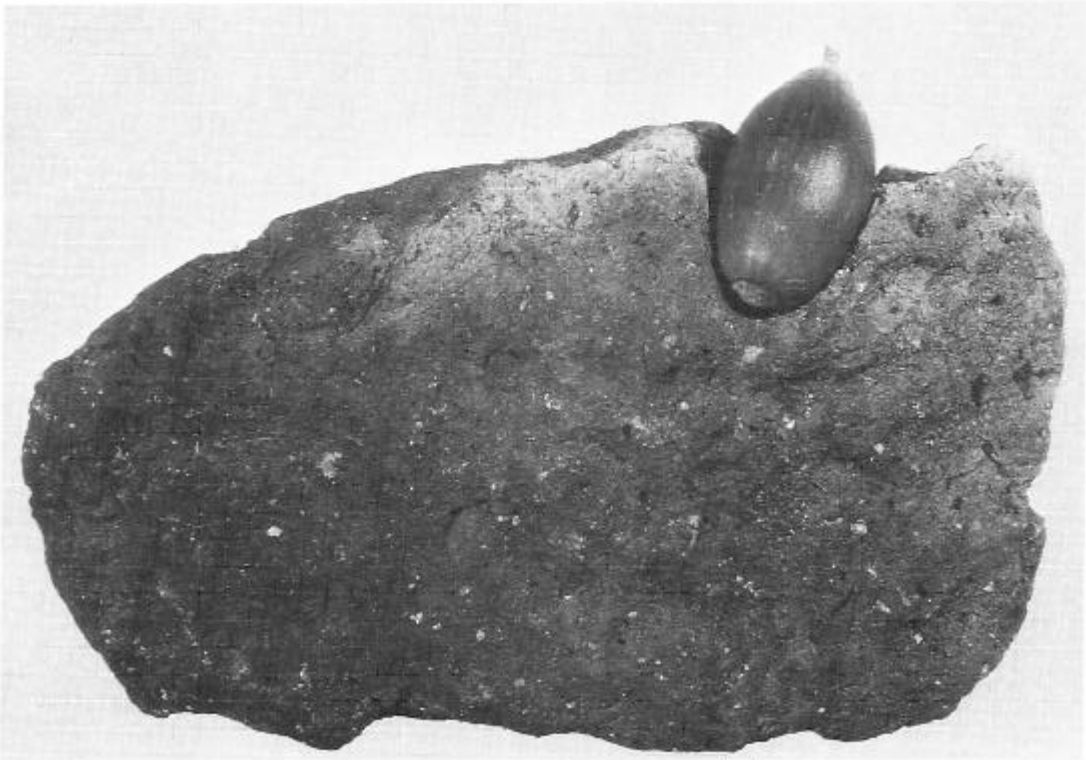
426・427：第6類　428：第7類　429：第9類　430：第10類　440：第26類



ドングリ圧痕土器(1)　431：第13類　432：第18類　433・434：第19類　435・436：第20類

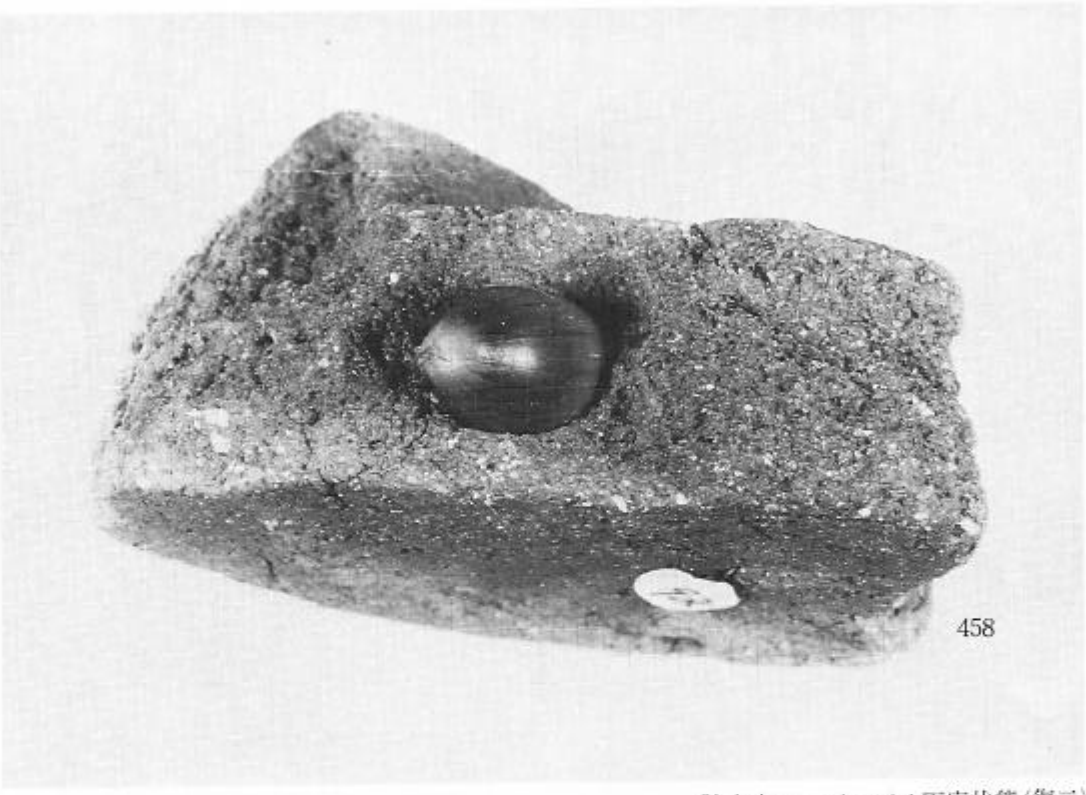


437・438：第21類　439：第24類　441・442：第26類

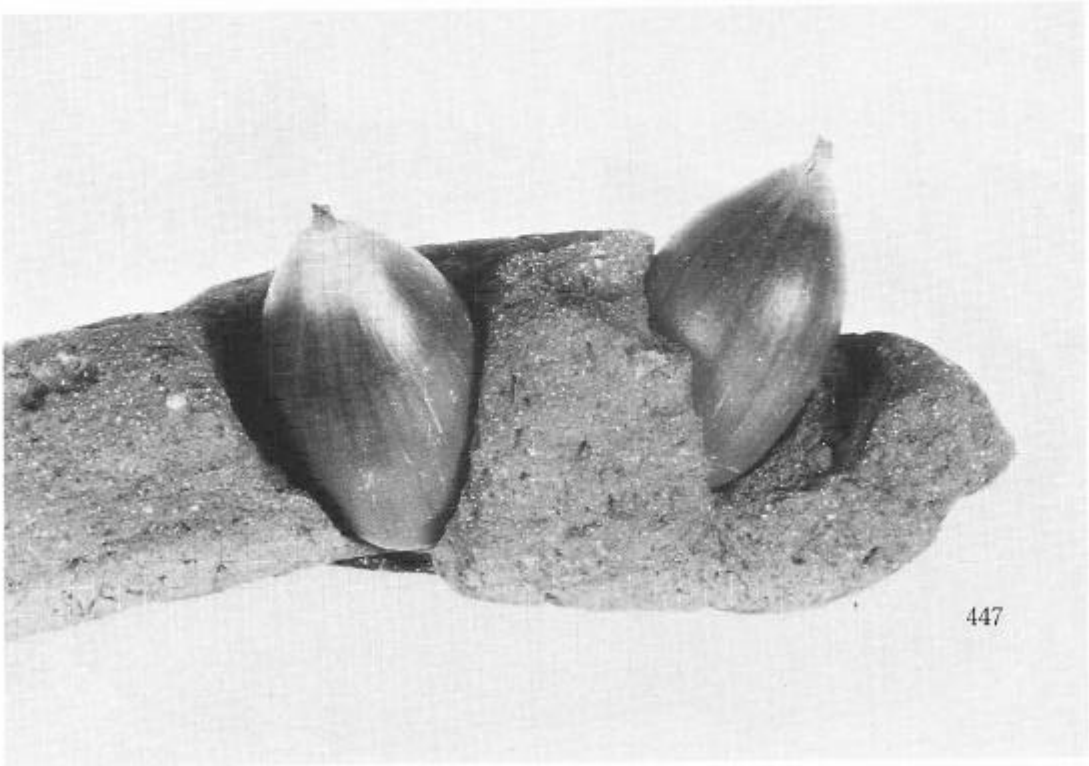


ドングリ圧痕土器(2)　　表面へのドングリ圧痕状態(復元)

図版56

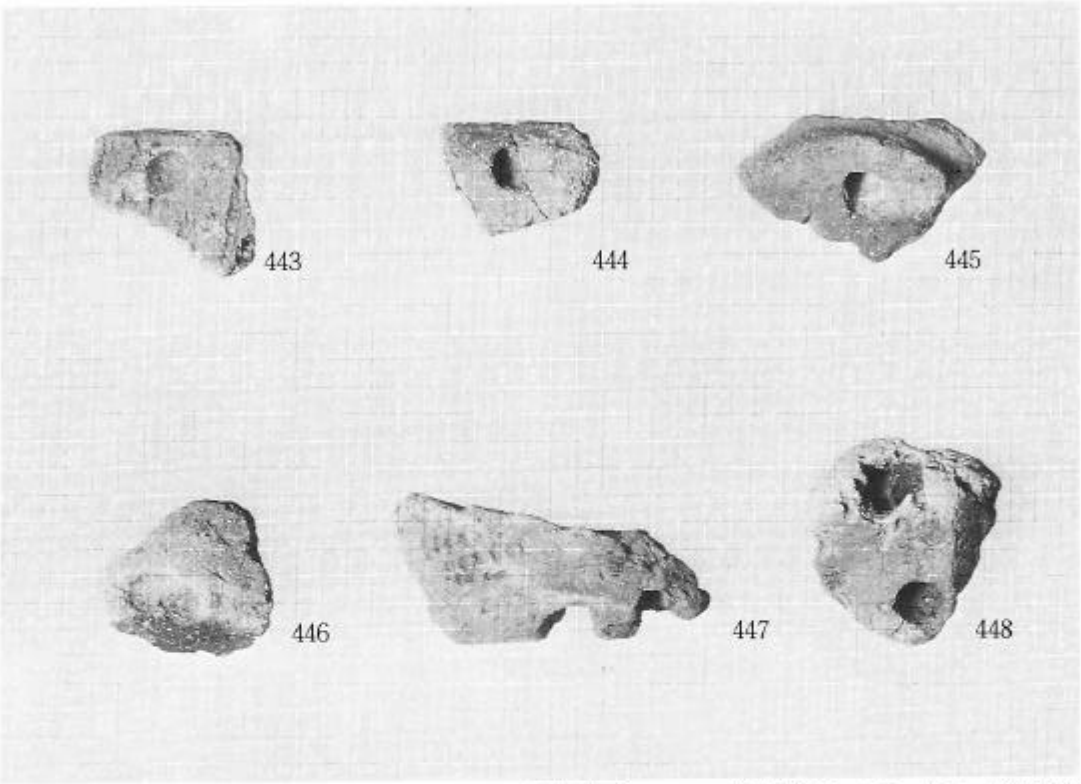


胎土中へのドングリ圧痕状態(復元)

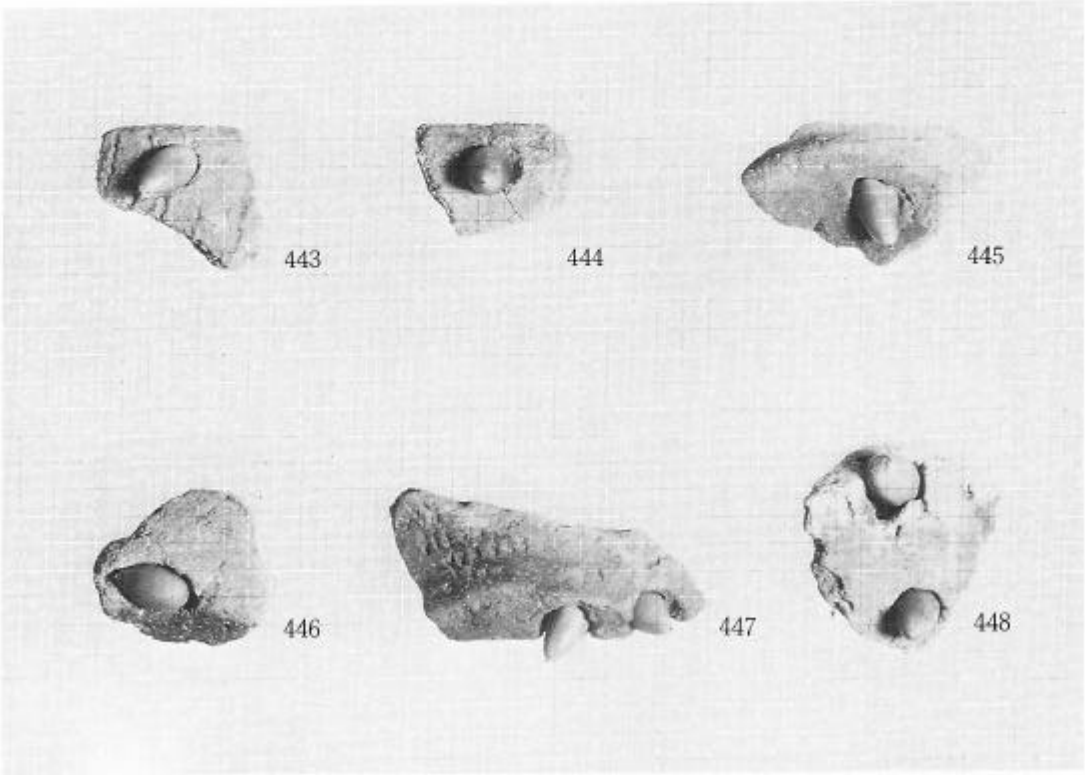


貫通するドングリ圧痕状態(復元)

ドングリ圧痕土器(3)

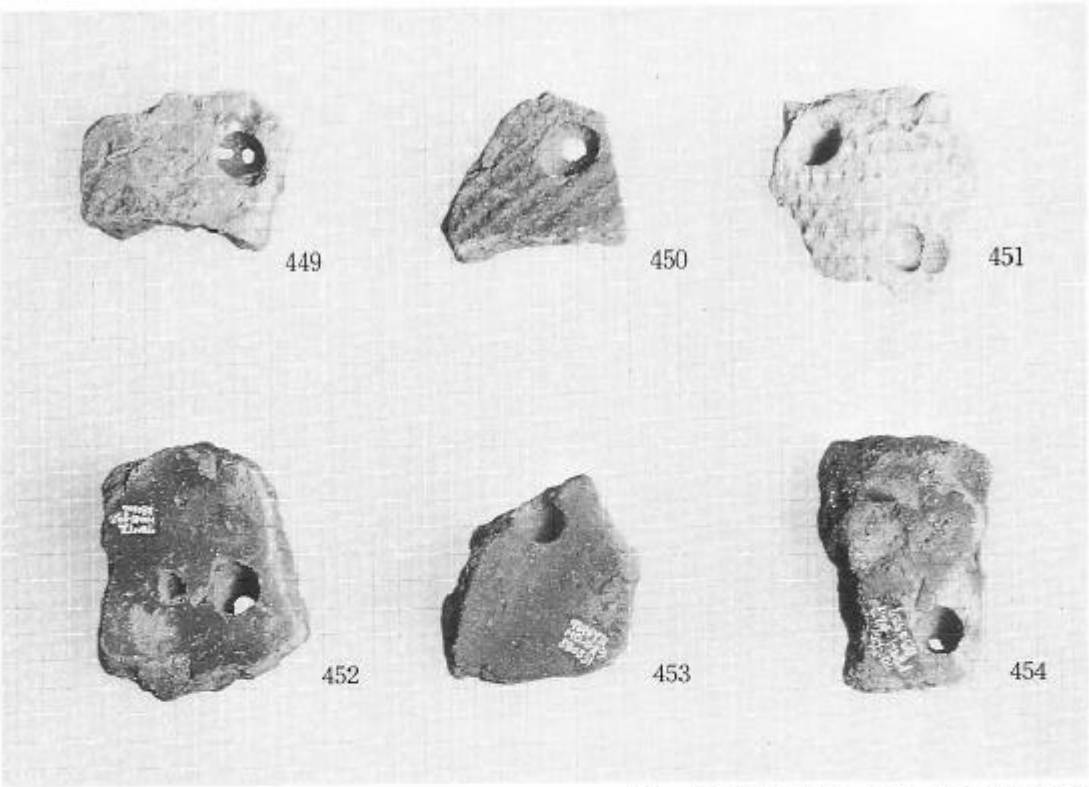


443：口縁部外面　444：口縁部内面　445～448：土器底部

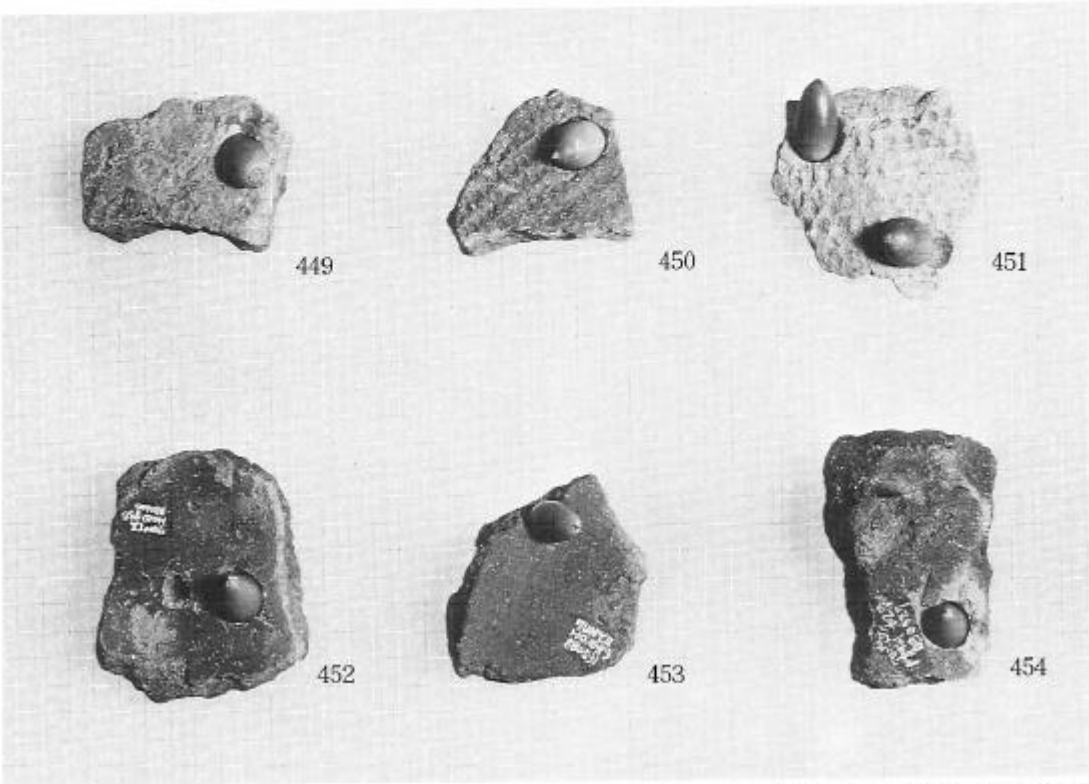


同上ドングリ圧痕状態（復元）

ドングリ圧痕土器(4)

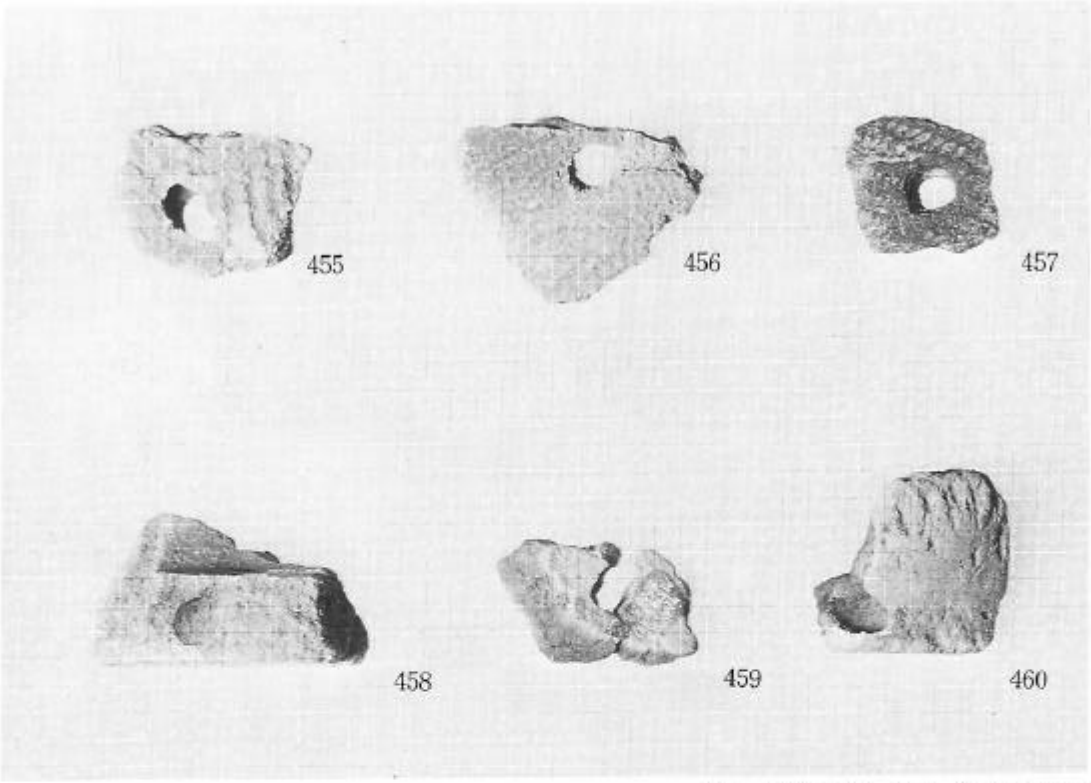


449～451：胴部外面　452～454：胴部内面

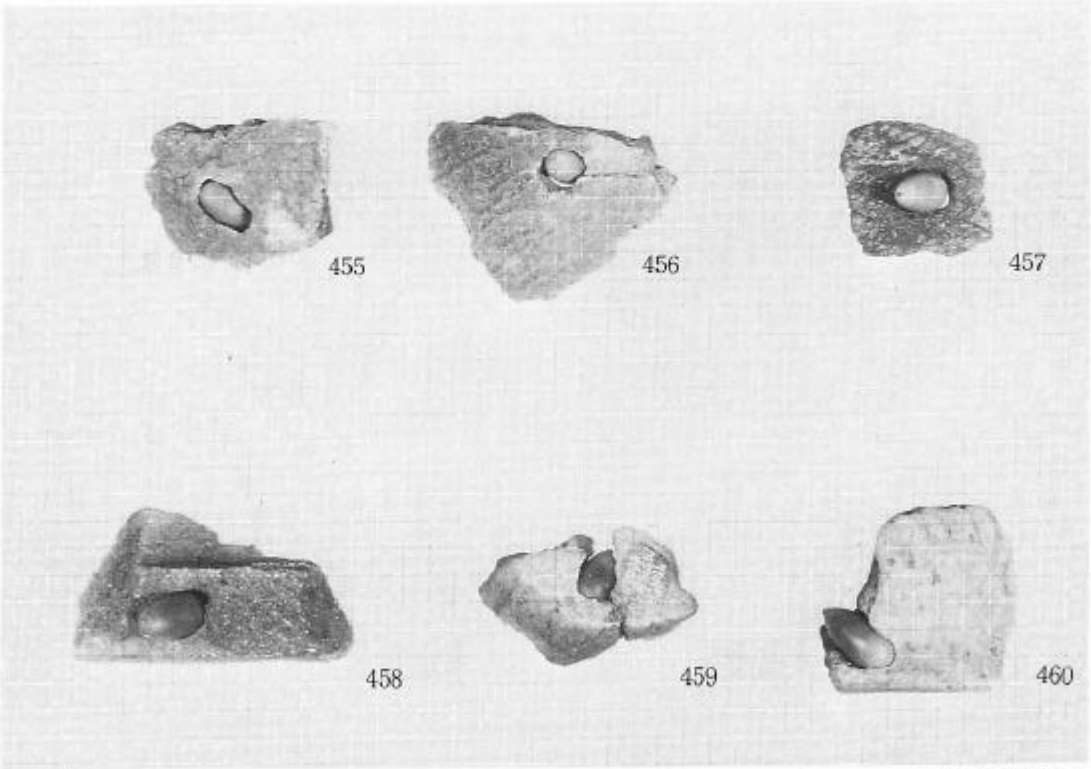


ドングリ圧痕土器(5)

同上ドングリ圧痕状態(復元)

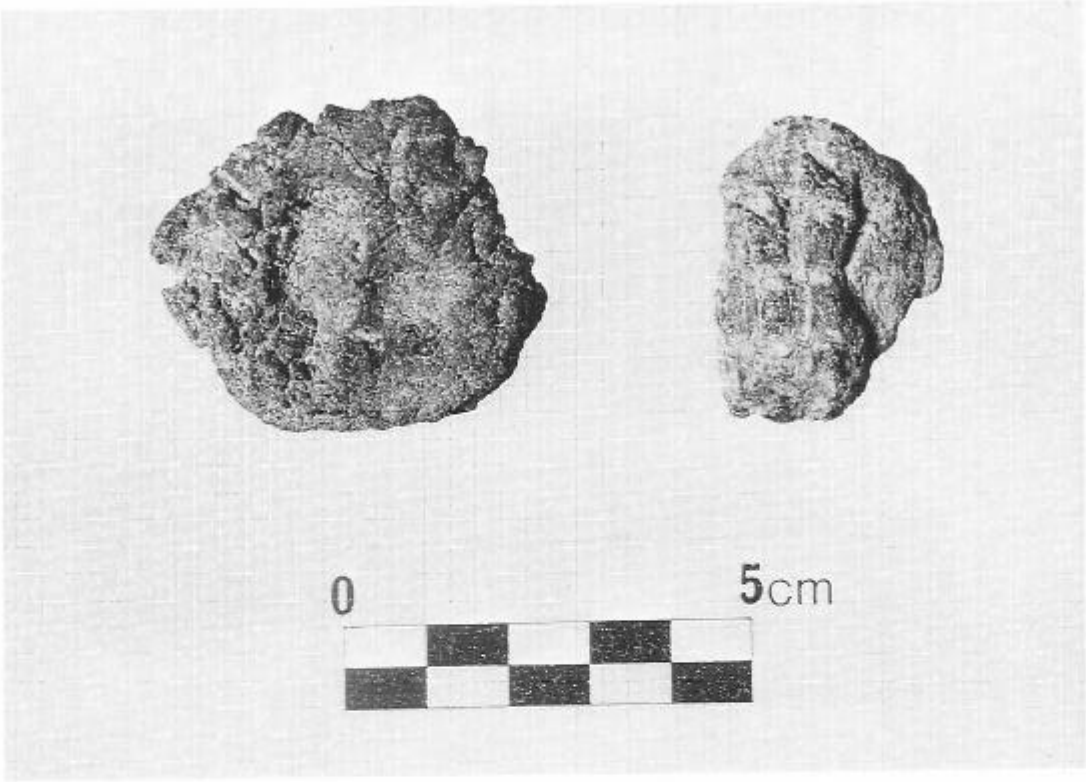


455～457：貫通　458～460：胎土中



ドングリ圧痕土器(6)　　同上ドングリ圧痕状態(復元)

図版60



炭化遺物(1)表

炭化遺物(2)裏

付図　　上ノ山II遺跡遺構配置図